
幼馴染との付き合い方

トマトクン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染との付き合い方

【Nコード】

N6299S

【作者名】

トマトクン

【あらすじ】

幼馴染で学年でも人気者の遠藤綾。しかし彼女には別の顔があった。僕以外は誰も知らない秘密を持っていた。そしてその秘密とは、人に露見しては絶対にいけないものであるから大変で。まったくり+ほのぼの風味の学園ラブコメディー。

1 - 1 春と直

「春、春」

それは優しくも低音な直の声。

さらには、揺り起こすような軽い振動。

何度かあった光景だと思いつつも、ゆるゆるとしたまどろみに浸る。

けど、その状況がとにかくおかしい。

「あっ」

僕は、ようやく今の状況に気がつく。

こんなところで、うたた寝をしている場合ではない。

「直」

「ん」

「ごめん」

「春、いい」

直は、心の底から謝る必要なんかないという表情。

ただ、直の場合は無表情。

だから、普通の人に見分けはつきにくい。
僕と後一人、幼馴染だけが判断できる。

「それよりも、春」

「ん？」

「気分は？」

「え？」

「気分」

「ああ、問題ないよ」

こんなときでも、こっちの心配をしてくれるのが直。

「うん、大丈夫だな」

頭の一番深いところを意識して、僕はもう一度つぶやく。

「大丈夫だ」

すると直は、僕の手を握ってくる。

「よかった」

しかし僕は、とにかく両手をのびし、さらに意識を覚醒させる。

もちろん、照れくささもある。

目前には、いつもよりとりすました表情の直。
あいかかわらず可愛いよりも美人に分類される顔立ち。

いつもと変わらない、世の中の曖昧な事象をすべて見通しているような瞳。それは目元ぱっちりではなく、一重の奥ゆかしいかんじの瞳。

黒目の中の僕が透けて見えている。

「春、それで」

「うん？」

「どうしたの？」

「あ、そうだね。なんて説明すればいいんだろう」

「なんか起こったの？」

「ああ。でも、言葉にすれば全然たいしたことないよ」

直が首を傾げる。

そのまっすぐな黒髪が糸を引くように流れていく。

「今さ、ちょっと眠ってたんだ。ただ、それだけ。……ほら、一瞬だけ意識を持ってかれることってない？」

「あるかな」

「うん、あるよ。きつとき。こう、なんでもない瞬間に持っていかれるような感じだし。自分でもああ、持っていていかれたなってかんのやつ。そんな会心のうたた寝に誘われたんだ。これ、直もあるでしょ」

「ん。あるかも」

「でもさ、そのときに直の声が、頭上から降ってきたんだよ。なんかのフラッシュをたかたみみたいだった。こう光が一点に収束するような感覚だし」

僕はそう言うが、直はいつものように無表情。

「どっと思っ？」

「わかんない」

やはり直の表情は変わらない。
そして、あいかわらずの口調。

でも直は、口数が少ないことで、息詰まることはない。
そんな不思議な雰囲気を用意していた。

「でもね、春」

「ん？」

「二二で寝てはいけない」

「あ、そうだよね」

それもそのはず。

今、僕達は屋上の一角にある給水タンクに身を隠している。

この大玉みたいな給水タンクのタラップを登ると、人二人分くらいのスペースがあつてそこにいる。

もつとも、人二人分といつてもぎりぎりのスペース。

直と僕は、互いに身を寄せ合つて隠れていた。

「ところでさ直、なんでこんなところに給水タンクがあるんだと思
う?。」

「春、それは真理」

「どづいう意味?。」

「水は高いところから低いところ」

「そっか」

僕は納得してうなづく。

直はまるで姉みたいだが、年子の妹である。

僕の生まれが四月、直が三月。

同じ学年という珍しい兄妹。

その割には、僕が直に付き従っている。

なぜなら、直は賢かったが、僕はそうでもないから。

直に心の偏差値というのがあれば、間違いなくその値は高い。相手を思いやる気持ちと、誰かを幸せにする能力。この二つは格段に

抜けている。

つまり何が言いたいのかと言いつつ、僕の自慢の妹だといつことだ。

1 - 1 春と直（後書き）

ご感想、ご指摘、評価、レビュー、お気に入り登録など、随時受け付けております。

作者の大きな励みとなりますので、ぜひ気軽にお願ひします。

1 - 2 幼馴染

話題は給水タンクから、直の屋上の平和を守る話にシフトしていったが取り止めになった。

屋上へと続く階段の音がかすかに聞こえてきて、いつものように悟る。

「もう少しで綾がきそうだ」

「ん」

「静かにするか」

ところで、僕たちがなぜこんなところにいるのか。それは幼馴染、綾の要請である。

遠藤綾は、世間を通ずるところのお嬢様で、クラスでも人気が高い。男子がクラスで好きな人を話すときも、決まって綾の名前が出てくる。

また綾のファンクラブもある。

なので綾はよく告白されるのだが、その場所を屋上に指定していて、僕達に見守ってくれるよう指示していた。

しかし、こうしていつも如才なくお嬢様として君臨している綾だけど、その実態はだいぶ異なる。

彼女は猫かぶりなのである。

僕に対しての態度は、もっと活発でわがまま。じゃじゃ馬であれこれ命令し、好き勝手に放題で怒りっぱい。

もちろん、それをクラスでは、出していない。だから誰も知らないし、知ることもない。

しかも知らないで言えば、僕と綾は重大な秘密を共有している。そしてそれは、もはや禁じられた遊戯に近い。

「春」

直の呼ぶ声で、僕は現実に引き戻された。

「なに？」

「私、いつも思っただけどね」

「うん」

「始まらないストーリーって無性に切なくなるんだ。どうしてわからないんだけど、そんな気持ちになってしまうの」

それは口数の少ない直にしては、珍しく長いセリフ。しかし、僕には意味がわからない。

「そうなの」

「そつだよ」

「僕にはわからないな」

「うづん。そんなことない」

「どづいうこと?」

僕がそう聞くと、直は僕を見つめてきた。

切れ長の視線がいつそう細められて、内心すべてを見透かされるような気持ちになる。

もっとも、僕に何の含みもないのだから、見透かされるも何もない。

「そのうちわかるよ」

「教えてくれないの?」

「自分でわかって」

「そっか」

「ん」

「でも、わかるようになるのかな」

結局、僕は納得できないでいた。

僕たちは双子に間違われるくらい外見が似ている。なのに、感じるところはまったく違っている。

「あ、もうくるね」

「ほんとだ」

直がそう言ったと同時に、屋上に繋がるドアが開く。
入ってきたのはもちろん綾。

それと名前は知らない同級生の男子。

いや、門松くんだ。

二人は、晴れている日には富士山が一望できる屋上のスポットまでやってきて、お互いに対峙した。

そう、これから行われるのは儀式だ。

定番の型となりつつある、いつも儀式が始まるのだ。

1・3 告白

「あ、綾さん」

「はい」

「あの、綾さん！」

緊張している門松くんは、何度も幼馴染の名前を繰り返す。
このやり取りで二、三分くらい費やすこととなる。
が、やがて整理ができたのか、彼は少しずつ落ち着いていく。

「俺」

「うん」

「綾さんが好きです」

門松くんは、気持ち良いぐらいのさわやかな笑顔で言い切った。

「ありがとう」

「はい」

「ありがとう。門松くん」

「俺、綾さんとお付き合ってきたらと思うぐらいに大好きです」

「ほんとにありがとう」

けれどその言葉とは裏腹に、ほんの少しだけ表情を曇らす綾。その変化に気がついたのか、門松くんがこう言う。

「あ、いいんです」

「門松くん？」

「いいんですよ。綾さん」

変わらずに笑顔でいる門松くんが、胸の前で手を振っている。それは綾に気遣わせたくないという想いが透けて見えてしまう。

「俺、そこまで望んでいませんから」

「ごめんなさい」

「いえ。綾さんに自分の想いを伝えられて幸せでした」

すべてを言い終えたらしい門松くんが、踵を返しはじめた。

「綾さん。さよなら」

「門松くん」

「そして、ありがとう」

こうして告白をした男子が去っていき、綾は一人残される。そんな中、僕は思う。

ほんとに、もう何人目だろうか。

この定番となった告白の儀式。綾が告白される光景を、給水タンクの小さなスペースで見つめているこの儀式。

山の稜線をなぞっているかのような綾の視線。

その印象的な瞳はどこを見ているのだろうか。

僕にはちっともわからない。

「……………」

風と共にたそがれている綾は、完全無欠の美少女で、足りないのは飛ぶための翼だというくらいだ。

今はそんな神秘的な感じすら受ける。

とにかく、僕達は綾のところへ行く。

「はあ」

綾がため息をついている。

憂いを含んだ表情でも、絵になる幼馴染。

「綾、見ていたから」

「ありがとう、春」

「いいよ、べつに」

やけに素直な幼馴染を前にして、僕はぶっきらぼうに返事をする。

「直もありがとう」

「ん」

「私はその人のためにも、好意が受け入れなかった場面を忘れるわけにはいかないから」

「そうだね」

「だから、直に覚えてもらってるの」

「綾はいつも同じことを言う」

直が綾を抱きしめて、綾がそれを受け入れる。

だけど僕は、その光景をどこか外れた視点で見っていた。

「綾」

「なに？」

「僕がさ、ここにいていいの？」

「え」

「なんだかここにるのが相応しくない気がするわ」

僕がこう言うと、綾は頬を膨らませた。

「春」

柳眉を逆立てた綾の表情に、僕は押し黙ってしまふ。

「たしかに春はいなくてもいいかもね」

幼馴染の顔が奇妙にゆがんだ。

「そっか」

内心で何も感じないと言えば嘘になるが、その通り。

完璧にお嬢様をこなしている幼馴染が僕に頼るのは、そうそうない。

このような場面に居合わせているのは、直のおまけみたいなもの。実際、僕が必要なのは、あの秘密の遊戯のときくらいだ。

「でも、春はばかすぎ」

「？」

「春はなにもわかっていない」

「どついついこと？」

「ふん」

明らかに機嫌の悪くなった綾に視線を合わせようとしたりけど、露骨に目をそらされる。

しかし、その子供っばいしぐさに、いつもの綾が戻ってきたと思
う。

だが、原因は僕である。

どうすればいいのかと悩んでいたのだが、その綾はというと、屋
上の手すりに身を乗り出し大声で叫んでいた。

「春のばかっ
」

「春のばか
」

直までやまびこの真似をする。

「春のばかっ
」

「春のばか
」

そしてこれがいつまでも続くのだった。

1 - 4 直と綾の関係

車の激しい往來を迎えて、落ちたイチョウの葉が舞い上がる。

ここは都心から離れた小さな市街だけど、綺麗なイチョウ並木がある通り。澄んだ青空とのコントラストは、とてもきれいで絶景だ。

特に直みたいなスケッチや写真好きの風流人は、ここをよく好んでいる。

この場所は空との距離が限りなく近く感じるといふ。

前を歩く二人はスカートのプリーツをなびかせている。

若干、肩を怒らせて歩いているのは怒りっぽい幼馴染。

二人は何事かを話している。

だが、ここまでは聞こえない。

とりあえず直と綾は、僕に反省を促すために、ほんの少しだけ距離を置いているらしい。これは、二人が結託するときによくやること。

だけど、今は距離が限りなく遠く感じる。

反省といっても、何が原因か。

僕にはわからない。

さつきは思ったことをそのまま言ってしまった。
それがいけないのだろうか。

もつとも、綾に告白する男子を屋上の給水タンクの一角で見ている場面で、僕が役に立ったことなんてあったのだろうか。

もちろん、答えはなし。

そして綾も、そう思っている。

ならば、なぜか。

やはりわからない。

ただ、こういう問題が起こったときの対処法として、同じ荘の住人の美咲さんはこう言っていた。

「なにはともあれ、男はまず謝ること」

そして彼女はこう続ける。

「そうすれば女は許さざるを得なくなるからさ」

僕はこの教訓を思い出し、交差点で信号待ちをしている二人に追いついて、綾に声をかけた。

「綾」

「なによ」

綾はまだ、その不機嫌さを隠さない。

ここまで怒んなくてもいいのでは、と思うが致し方がない。

原因はこつちにある。
とにかく謝ること。

「ごめん」

「……」

「僕が悪かった」

「春」

「正直に言えば、ほんとは何がわからないんだ。でも綾が不機嫌なのは、僕のせいだから」

僕は誠心誠意を込めて言いきる。
すると綾は、苦笑しはじめた。

「そんな言い方ずるい」

「でも、その通りだよ」

「ほんと、春はばかなんだから」

「また、そっちゃってさ」

僕はおもわず声を上げていた。

「うん。ごめん春」

「いや、こつちこそごめん」

「うん」

「……」

「……」

こうして二人して黙ってしまう。

お互いに顔を伏せ気味にして、次の言葉を待っている。

幼馴染で付き合いも長い。

なのに、最近こういう場面が多すぎる。

「べつにさ」

「ん？」

「私そこまで怒っていたわけじゃないからね」

照れ隠しなのか、その言葉を発した途端、綾はずいぶん先へと行ってしまう。

ばたばたと、あまりお嬢様らしくない走り方で横断歩道を渡り、そのタイミングで音楽が急ピッチに鳴りだす。

そして程なくして信号が赤に変わった。

「春のばーか」

車の往來を挟みつつも、機嫌良さそうに叫ぶ幼馴染。

両手で鞆を持ち、スカートの前を隠すという全力で女の子らしい姿にもかかわらず、べえと舌を出している。

「直、見てよアレ」

「ん」

「ひどいしぐさだよね」

「うん。でも、春はよく謝った」

「そうかな」

とは言いつつも、僕は直の変わらないように見えて変化のある表情にも満足。

ついでにと思い、直に一つ質問を投げかけた。

「直」

「なに？」

「直は綾に肩入れしてるよね」

「うん」

直が鷹揚に頷く。

「どっしって？」

「私、はじめられないストーリーを好ましく思っていないから」

「それ、屋上でも聞いたよ」

「うん、言った」

「ということは自分でわかるようにならないといけないってこと？」

「ん」

「ピントは？」

「ピント？」

「うん」

「綾には自覚がある」

「自覚？」

「そう。そして春には自覚がないんだ」

「……」

まるで禅門答。

しかし、わからないものはわからない。

ただ事実として、うちの妹は幼馴染に肩入れをしている。

例えば、いつからそうなったのだろう。記憶を探ってみるが、昔からそうだったというわけではない。

たとえば、四年前。

綾の姉の翠さんに、よく街外れの高台へ連れてってもらった頃。

あの頃、僕達は小学生だったけど、直と綾の関係は今ほど親しくはなかった。

活発な綾、おとなしめの直。

そんな感じで、案の定、直は綾を怖がり、今よりも兄らしかった僕は綾にいろいろと文句を言っていた。

そして二年前。

お互いに家庭環境が変わり、家がお隣同士でなくなった頃。

この頃も二人は、そこまで親しかったわけではない。

むしろその頃は、日常の日々に忙殺されて、交流自体が少なくなっていた。

こう考えてみれば、一年前ぐらいのような気がする。

兄思いの妹が、より幼馴染を優先して肩入れするようになったのは。

1 - 5 直の趣味

綾とは、月極駐車場と都立公園の入口があるいつもの交差点で別れる。

「じゃあね、春、直」

手を振って去っていた綾は、次の曲がり角のところですぐに見えなくなる。そして彼女は、そこから大通りに出てバスに乗る。

公立の中学生なのにバス通学をする綾。
彼女は二年前からずっとこうしている。

彼女の母親が再婚して、家の中で迷子になるような大きい豪邸に住みはじめてからは、この通学が習慣になっている。

話によると、車での送り迎えを断わっているとも聞く。

「春、買い物」

「あ、そうだった」

綾と別れた後、家の方角へ向かおうとする僕に直は言った。
なので、僕達は都立公園の入口へと向かう。

都立公園でショートカットして、スーパーに行くのがいつも通って行く道。ここの都立公園の、自然林を嗜むハイキングコースを利用する。

後、この都立公園は運動施設も数多くあり、今もテニスボールの行き交う音が響いている。

「ところで直」

「ん？」

「今日は何買うの？」

「しらたきとか」

「しらたき？」

「白菜とか」

「白菜」

「それと、ハウレンソウ」

「あ、ハウレンソウか」

それで、今日の夕飯が鍋だと確信した。

ちなみに我が家では鍋が多く、同じ荘の知り合いも二人だけで住む兄妹に気を使ってくれるのかよく鍋を食べにやってくる。

一人は飯のタネ、もう二人は話のタネを持ってきて。

「ということ、美咲さん達がくるんだね」

「ん。やってくる」

「じゃあ狭い部屋だから、少しちらかっているものを片付けないといけないな。みんな気にしないとと思うけどさ」
「うん」

「あ、それと今日は、僕に料理を任せて」

そう言つと直は、無表情ながらも恨めしそうな顔をした。

「春」

「そんな顔してもダメだよ」

「挑戦したい」

「それは僕が食べるときだけ」

「……」

やっぱりがっかりしている。
ほんとに、そんな直を見るのはしのびない。
でも、ダメなものはダメだ。

「どうしても？」

「もっと上手になつてから」

「うん」

そう、なんでも完璧な妹で家事も上手なんだけど、料理だけはあまり上手くないという不思議な属性がある。

たとえば、お米を研ぐときに洗剤を使ったり、隠し味に致命的な調味料を入れるというわけではないんだけど、直の手にかかればなんとなく味気ない料理ができてしまう。
もちろん原因は不明。

「じゃあ私、いつもみたいに片付けする」

「うん、お願い」

「春が散らかしたのにな」

「ごめん」

こうして今日の夕飯が決まった。
おかげで、俄然買い物にやる気が出てくる。

僕達は都立公園のハイキングゾーンを抜け、道路に出る。放置自転車置き場が置いてある空き地の角を曲がると、最寄のスーパーはすぐそこ。

「あ」

「直?」

「あの、春」

「どっしたの?」

「ネ」

「ほんとだ」

空き地の方に目を向ける。

すると、たしかに小さなネコがいた。

直が駆け寄っていくと、やけに人懐っこいしぐさで鳴いてくる。

「みゃー」

直が泣き真似をして、気を引こうとする。

「ほら、直行くよ」

「春。ちょっと待って」

「ん？　なんか珍しいことでもあった」

「うん」

「どっっ？」

「このまだら」

見ればこのネコは、グレーと黒が混ざったような変わったまだら
をしている。

形も珍しく、特徴が多い。

「ちょっと書かせて」

「しょうがないなあ」

「ありがとう」

珍しい何かを見ると、すぐにスケッチをしたくなる直の習慣。
ブレザー徽章付近の小さなポケットから、手持ちサイズのスケッチを取り出し、さらさらとデッサンを開始する。

こうしてデッサンをしているあいだ、手持ちぶさたになってしま
う僕。だから直の素早く書かれるネコの絵のずっと見ているが、や
はり上手。

とにかく直は、ありのままに描くのが上手い。
写实的、とでもいうのだろうか。

物体の割合とか配分が、とにかく正しい。

「できた」

直がつぶやくと同時に、タイミング良くネコが去っていく。

「どっ？」

と、僕に絵の出来を見せてくる。

どっやら、自分でも会心の出来らしい。

無表情ながらも少々誇らしげな感じの直。
僕は、そのままの感想を述べる。

「上手いね」

「ん」

「上手すぎる」

「ありがとう」

やっぱり直には、どんな事柄でも見透かしそんな視線とともに、
どんなものでも正確にとらえてしまつ瞳がある。

スーパーで真っ先に行われていたのはタイムバーゲン。入った瞬間にカランコロンと鐘の音がなり、主婦がお目当ての品物を目指してかけていく。

でも僕達は、それを横目で見やる。

そして、目的の品を忠実にカゴへ放り込んでいく。

「それにしても凄い人だね」

「ん。たしかに」

「ここまで迫力のあるタイムバーゲンなんて初めてみたよ」

「そうだね」

というのも、このスーパーは基本的にタイムバーゲンはやっていない。

普段の安さで勝負している店だったからだ。

「春」

「なに？ 直」

「お肉」

「え？」

「がとつても安い」

「ほんとだ」

直が指差す先を見て、僕は口をあんぐり開ける。
あの値段は通常の二分の一。つまり半額。

「よし、行ってくる」

「大丈夫？」

「大丈夫。任しといて直。ここで肉をゲットしなかったら男じゃない。だから期待してくれ。家に帰ったら、お腹いっぱい肉の入った鍋を食べよう」

「し、死亡フラグ？」

何やら、あまり良くない物騒な単語。

そんなのが聞こえてきたけど気にしない。

僕は死地に赴くような気持ちで、商品取りの激戦区となっている
紛争地帯に向かう。

ところが、

「す、凄い重圧だ」

人、人、人であふれている精肉売り場の一角。

とても足を踏み込める状態ではなく、僕はただ立ち尽くすしかない。

しかしそんな中、一人の少女が物凄い正確な動きでやすやすとここを突破しているのを見つけた。

そしてその少女は、知り合いの絵里ちゃん。

一つの下の後輩で、一緒にバレエをしている間柄である。

彼女は人懐っこくって、動物に例えるとそれこそネコみたいなキヤラクターだ。

「おーい、絵里ちゃん」

「あ、先輩」

サイドにくくった髪を揺らしながら、絵里ちゃんがかけよってきた。

「久しぶり」

「はい、久しぶりです」

「十日ぶりくらい？」

「そうですね」

「元気だった？」

「はい、元気ですよ。ていうか、私から元気を取ったら何も残らないじゃないですか。あ、ところで先輩は、来週にあるバレエの集ま

りに来ますか？」

きらきらとした瞳。

その瞳で、こっちを見つめてくる。

「ああ、いくよ」

「あ、良かったあ」

胸の前に手を合わせて喜ぶ絵里ちゃん。

その動作のせいで、カゴを取り落としそうになる。

「ところでさ、絵里ちゃん」

「はい？ どうしました？」

「君、すごいね」

「えっと、なにがですか？」

「あそこに割って入っていけて」

僕は激戦となっている紛争地帯を指差す。

「はっ、そういえば！ はずかしいです」

「って、そんな身をよじらせてまで、はずかしいがらなくてもいい
ってば。僕は純粹に凄いと思っっているんだから」

そう言うと、絵里ちゃんは頬をほころばせてくれた。

「先輩。じつは、タイムバーゲンは私の主戦場なんですよ」

「動きを見てればわかるよ」

「身長が低い私にとって有利ですし、バレーボールで培ったサイドステップの動きが行きますので。はずかしながら、実生活に活用しています」

「ということはず」

「はい？」

「僕でもここで戦えるかな」

「はい、大丈夫です。じゃあ戦いましょう。では行きましょう」

そう言い切る絵里ちゃんは、素早い動作で僕の手を引く。僕はその力に引っ張られたまんま、彼女についていく。そして、もう一度この場で戦うことを決心した。

「掛け声が大事ですよ」

「てやああああー」

「広い視野を持って」

「はい」

「ここでステップ」

「はい、師匠」

こうして絵里ちゃんの先導により、僕は肉をゲットすると言っ形で戦いに終止符。

この戦いには一種の達成感みたいのがあって、癖になりそうだった。

「やりましたね、先輩」

「やったよ、絵里ちゃん。てか、絵里ちゃん。さらに肉買うの?」

「そんなあー見ないでください」

「いやいやをする絵里ちゃん。」

「たしか都築家は大家族だよ。何人家族だっけ?」

「七人ですよ。弟が三人、妹が二人、後、父がいます。だから大事なごあいさつにくるときは、みんなの注目的ですね」

「注目的って……いや、その前に大事なごあいさつって何さ」

「いやですね、大事なごあいさつは大事なごあいさつです。もちろん私も、直先輩にごあいさつしますよ」

そう言い切る絵里ちゃんの瞳。

奥に怪しげが光が潜んでいる。

どうやら、僕をからかって遊んでいるようだ。

「ていうか、妹キャラのくせにね。そんなこと言っただ」

「そうですか？ じゃあわっかりましたあ。私、先輩の前だけでは、純真な妹キャラでいきまーす。なんて」

「じゃあ、僕は頼りになる兄貴キャラでいこうかな。実生活ではとんと頼りないからね」

「そんなことないですよ。先輩は頼りになりますし、私は頼りにしています」

「えっ？」

「だから、頼りにしていますっつてば」

と言って、絵里ちゃんは僕の背中をぽーんと軽く叩いた。

買ってきた荷物を持って、家へと繋がる坂をゆっくりと下っ
ていく。

帰りは都立公園を通らずに、この坂を利用するのが定番。

昔、玉葱やレモンを転がしたこともある意地の悪い坂だけど、
帰りはどうしてもここを通らないといけない気分になる。

「荷物重い？」

「重いけど大丈夫」

「そう」

「それにしても直、いっぱい買ったね」

「春が来ないから」

「そっか」

あの後、絵里ちゃんと僕の奮闘を遠目から見守っていた直が、
すべての材料をカゴの中に入れ終えて待っていた。

直は律儀に重いカゴを持ちながら、精肉売り場の少し手前でこっ
ちを見ていた。

「あのさ直」

「何？」

「一つ聞いていい？」

「うん」

直の返事を受けて、僕は言う。

「僕が直を忘れて会話に興じていたのがいけないんだけど、どうして待ってることを言ってくれなかったの？」

「二人が楽しそうだったから」

「それで？」

「それを見守っていたかった」

「どうして？」

「なんとなく」

「一応答えは予想できたが、その通り。」

しかし直は、ときどき僕には思いつきもしないようなことをする。

「まあ、そう思っなら直の好きなようにすればいいか」

「ん」

坂を下り終え、僕と直が住んでいる東風荘はもうすぐ。

東風荘はけっして贅沢な建物ではなく、築三十二年の鉄筋コンクリート。部屋の数は一号室から八号室。トイレは共同で、風呂は完備していない。

なので住人の多くは、近くの銭湯を利用している。
そんなボロアパートだ。

「ただいま」

「ただいま」

三号室。

表札の坂本をいつもどおりに確認し、僕達は部屋に入る。

買い物で買ってきた荷物を一旦床に置き、部屋のカーテンを開けようとしたその矢先。

ピンポンと古臭いチャイムがなった。

「二人が帰ってくるの、待ってたよ」

まだ玄関を開けてないのに声が聞こえてくる。

「どっただけ暇なんですか」

「そう、油断すると大学生はすぐ暇になるのね」

やはり、声の主は美咲さん。

通名は、上杉美咲。

彼女は隣の二号室の住人で、世話になっているんだかわからないぐらいこの部屋に入り浸る人である。

まあ、総じて交流が深い人。

「で、開けて」

「はいはい」

「お、その声は春坊だな」

「今さらですか」

「ていうか、直つちに開けてほしい」

「わがまま言わないでください」

そう言うとともに、僕は玄関のドアを開ける。

するとその瞬間、三和土の上にどさーっと大きな段ボールを下ろす美咲さん。

やけに凜々しい表情で、かいてもいない汗をぬぐうふりをする。

「はい、これじゃがいも」

「って、なんなんですかこの量は」

「あげるよ」

「じゃがいも？」

直も何事かとこっちにやってくる。
それだけで、この狭い玄関は許容オーバーになっていく。

「ん？　メイクインはだめなのかい？」

「いや、そういう問題じゃなくってですね。嬉しいですけど、量が半端ないというか多すぎるといっつか」

「いいじゃん」

「よくないですよ」

「ほら、中にはじゃがいも以外も入っているぞ」

がさごそと段ボールを開ける美咲さん。
どんとどんと中の物を取り出していく。

「お、こんなのが入っていたとは」

「はあ、ここに持ってくる前に確認してください」

ため息をつきつつも彼女を見やる。

今日も相変わらず、美咲さんは美咲さん。

これで彼氏持ちなのはよく見れば美人なのだからだろう。しかし、その素材を生かさないだけではなく、持って生まれたずばら気質が魅力を殺している。

髪もうねるように伸び放題。もっとも、本人は無造作でポリユーマイナヘアスタイルと公言している。

「春坊」

「なんですか」

「今、なんか失礼なこと考えたんじゃないの」

「い、いえ」

「それじゃあエロいことか」

つん、つんと鼻を突っついてくる。

そんな美咲さんは、やはりうっとおしい。

「そうそう、この前春坊が読みたいと言ってたアレどうなった？」

「なんですか？ それ」

「『親愛なる義妹』というタイトルの官能小説」

「って、何を言ってるんですか。違うでしょ。あれ、美咲さんが勝手に置いてったやつじゃないですか」

美咲さん相手には、普段温厚な僕もつつこみを入れてしまう。

「い・も・う・と」

「だからなんなんですか。だいたい『親愛なる義妹』なんてふざけたタイトルで じゃなくて！ とにかく、こっちはほとほと困っていたんですからね」

「そんなー、ほんとに熟読しているんじゃないの？」

「なわけないでしょ」

「またまたあー、ムキになるところ怪しいなあ」

「ムキになっていません」

「春」

直までかわいそうな目で見つめてくる。

「何さ、直」

「ほどほどにしないと悪影響だからね」

「違うーっ」

いくら直の方がしつかりしているからって、無表情でそんなことを言われたらたまったもんじゃない。

こっちのプライドがはずたことになる。

「まあ、うまく春坊も直っちも上手く付き合いなさいな」

「ん」

「だからそんなふうにまとめないで」

僕は必死になって主張するのだった。

1 - 8 鍋パーティー

ひと騒動あつた後、美咲さんを家の中に招き入れる。
そして僕達は、互いにやることを開始する。

僕は料理。直は部屋の片づけ。

予定では、美咲さん以外にあと二人やつてくる。

一人は、美咲さんの友達の竹内由貴さん。

あつさりとした色白の美人であり、茶髪のセミロングが良く似合う人。この人はいたってノーマルな常識人なので、なぜ美咲さんと友達なのか謎なくらい。

僕との関係は、彼女が主催するバレエボールの集まりに参加させてもらっていること。

そしてもう一人は、六号室に住む野々垣鳥子さん。

彼女は、言動が不思議な美咲さんと違って、行動が不思議な人。

趣味は手品、仕事はウィリアム・テルという自らが立ち上げたブランド名で林檎の剥製を作っている。

「直、今何時？」

「六時二十分」

「美咲さん、二人がくるのは？」

「半くらいかな」

どうやら二人は、あと十分ばかりでここにくるらしい。
もちろん鍋の支度の方は順調に進んでいる。

だから、問題ない。

獲得してきた戦利品と、イレギュラーに手に入れた贈呈品もふんだんに使った。おかげでいつもより具がたくさん鍋になりそうだ。

「美咲」

「ん？ どうした直っち」

すでにチューハイの缶を何本も開けている美咲さんに、直は問いかける。

「なんで美咲はいつも来てくれる？」

「え？ 私がここに来る理由？」

「ん」

「それはあたしの部屋は足の踏み場もないからな」

「へえ」

「まあ、あたし片付けられない女だからさ」

「どうせそんな理由だと思いましたよ」

僕も鍋をかき回しながら会話に参戦する。

鍋の方は細かなアクを取るだけで、ほぼ完成。
お米の方もすでに焚いてあって、食べたい人が各自で盛り付ける
だけだ。

「でもさ、春坊」

美咲さんが缶を掲げて続ける。

「一番は春坊と直っちの空気が居心地いい、ってことなんだよね。
これはなんでかわからないんだけどさ。なんとなく、入り浸りたく
なる何かが出てるんだよ」

「そうなの？」

「そうなんだよ。直っち」

嬉しそうに言う美咲さんは、直をがばっと抱きしめる。
直はされるがまだ。

「それにしても直っちは、おかし子よね」

「えっ？」

「家事は完璧なのに、料理がてんでダメ。料理だけで言えば、あた
しとどっこいどっこいじゃないの？」

「ん」

直は頷くが、こっちは納得がいかない。

「美咲さん、それはないですよ」

「そうかな」

「直だつて日々上達していますし。それに美咲さんが料理をしているところを見たことないんですが」

「そりゃしないからね」

「そうですか」

「でもそれなりにやれるさ」

「それ、まんまできない人の言い訳ですね」

「へいへい。でもそんな細かいと、春坊は女の子にもてないぞ。いや、もてそうなんだけど、そのチャンスをいちいちをふいにしそうだ」

テレビのチャンネルを変えながら、そう言う美咲さん。

「お、ここの場所、うちの街じゃない？」

「あ、ほんとだ」

と、僕もおもわず声を上げる。

美咲さんはそこでチャンネルを止め、くずしていた姿勢を正す。

やっていたのはありきたりなニュース。

しかし内容は、夜間に出没して女の子の髪を切る話。

すでに被害は、この街で十五人近く出ているという。

「まったく、あたしの髪ならいくらでもあげるのにね。こんもりあるからさ。まあ、そういう犯人は直うちみたいなのストリートに執着するのかもしれないけど」

「やめてくださいよ」

「おっとつとごめんごめん」

美咲さんが気を取り直して、チャンネルを変えていく。

「で、春坊、料理は終わったの？」

「あ、さっき終わりましたよ」

ついでとばかりに、鍋をテーブルの上に持って行く。さらには、美咲さんの前で鍋のふたを開いて見せる。

「おおー」

いつものように驚く美咲さん。

明らかにテンションが上がっているのを見て、僕はほくそ笑む。

「よし、じゃあ先に乾杯をしようじゃないか。春坊、さあオマエも飲め」

で、いつもこのパターン。

「またそれですか」

「悪いか」

僕は呆れて美咲さんを見やる。

「じゃあ、直つちか」

直は黙って首を振り、艶やかな黒髪が左右に揺れる。

「そんなー。いつになったらあたしと飲んでくれるんだい？」

「あのですね、美咲さん。何度も言いますが、僕達未成年なんですからね。僕は十五歳で、直は十四歳。直なんか四捨五入すれば十歳ですよ」

「春、それは変」

たしかに僕も変だと思った。

「まあ、ともかく、もう少しで二人がやってきますから。それまで我慢してくださいね」

そしてそう言ったと同時に、家のチャイムが鳴る。
これ幸いだ。

時間的に、竹内さんと鳥子さんだろう。

直が立ち上がり、玄関の方へかけていく。

1 - 9 野々垣 鳥子

宴もたけなわ。

というには少しばかりまだ早い。

せめて、鳥子さんの新作手品が終わってからだろう。

唇に薄いルージユを引く妖艶な鳥子さんは、特徴あるソンプレロという帽子を左手に、自作であろうつ林檎の剥製を右手に持ちこつた。

「さて。本日はお日柄もよく、と言ってももう夜になってしまったのだけど、とにかく私のためにお集まりくださつたみなさんこんにちは」

「こんばんは」

従順にあいさつを返す僕達。

「とは言いつつも、べつにこの手品のために集まったわけではないのだと思うわけですが、そんな雰囲気醸し出してくれるみなさんに感謝しつつ、ほんの少し驚きを提供してあげましょう」

「よっ、鳥子」

もつぐたぐたに酔っぱらっている美咲さん。
彼女が、いの一番に歓声を上げる。

鳥子さんはそれに右手を上げて応え、飄々とした表情をほころばせていく。

そして、そのまま林檎を持つ右手を掲げて言う。

「それではみなさん、私の右手には林檎がありますね」

林檎をこんこんと額で叩く鳥子さん。

「これは本物ではなく置物の林檎なんです、何か物足りないと思いませんか。と言うよりは、何かがあっぴったしくる感覚というのがありますでしょう」

なんだろうか？

などと考えるまでもない。

ここにいる誰もが、それをわかっている。

「もちろん、みなさんなら言わなくてもわかっていると思います。ウィリアム・テルというブランドを立ち上げている私にとって、矢の刺さっていない林檎というのはその価値が半減してしまうに等しい代物ってことを。ところで竹内さん」

「はい？」

「あなたの膝には何かありませんか？」

竹内さんが自分の膝を見る。

「あれ、なぜこんなところに」

「ありますね」

「矢があるの？」

来的时候に軽い打ち合わせをしたのだろう。

しかし、竹内さんのあまりの大根役者っぷりに笑いがこみあげてくる。

それくらい下手だった。

「竹内さん」

「はい」

「それを私に渡してください」

「びっぞ」

竹内さんが、慎重な動作で矢を渡す。

「ところでみなさん、この矢には一つの使命があるのを理解してください。それは私の機嫌を損ねないために、この林檎を貫通していなくてはいいけないことです」

「えー鳥子」

「なんでしょっ」

「その林檎って、置物だからムリなんじゃ……」

美咲さんは納得できないとばかりに、声を上げる。

「うん、絶対にムリだよ」

「それはごもつとも。しかし、この種も仕掛けもないこのソングレ口の中に林檎を入れると」

「えーマジで！もしかして！」

美咲さんがさらに声を荒げるのも無理はない。
なぜなら、今回の手品は大掛かりだ。

いつもやるカードマジックとは規模が違う。

もう誰もが予想はついていると思うのだけど、きっとこれはソングレ口の中に入れれば、矢が刺さっているという構図。

しかし、本当にそんなことがありえるのだろうか。
そして手順は、予想通りに進んでいく。

「それでは林檎の次に、矢を入れましょう」

だがそこで、僕は重大な欠陥に気がついた。

「鳥子さん」

「はい」

「その矢は帽子の中に入らないよね」

僕に指摘されても、顔色一つ変えない鳥子さん。
むしろそれどころか、よく気づいてくれたとばかりに見つめてくる。

「心配いらないですよ。ついぞと言ってはなんですが、この帽子には復元作用がそなわっているのです」

「復元作用？」

オウム返しをする美咲さん。

その言葉の意味がわかっていないのか不思議な顔をする。

「で、なんだい？」

うんうんと周りもつなずく。

結局、みんなの要望もあって、鳥子さんは説明をしはじめる。

「復元作用とは、簡単に言うと壊れたものを元通りにすることですよ」

「へえ、てかホントにそれ手品か」

「はい、手品ですよ」

笑顔を絶やさない鳥子さんが、余裕の表情で頷いた。

「それでせっかくだので坂本くん、この矢を細かく折ってください。一本なので簡単に折れると思いますよ」

僕に矢を渡す鳥子さん。

僕は鳥子さんに言われたとおり、矢を細かく折っていく。

「はい」

「ありがとうございます」

鳥子さんは、折れた矢を林檎が入っているソンプレロの中に入れ、黒い柄のハンカチをかぶせる。

そしてそのハンカチに手をあてがい、念を唱える。

これらの動きを、なんの不自然のない様子でこなす。

手品にタネが仕込まれているとしたら、僕達には見破ることのできない完璧な動作。

なにせ、タネがあるかどうかすら疑わしくなるくらいだ。

「さて、みなさん」

「はい」

「物事を為すには何事も時間というのが必要ですね。目を見開いてこの帽子を見つめるのはいいですが、少しばかり時間をください」

そう言いつつも、鳥子さんの表情は変わらない。

好奇心でいっぱい僕達は、いまかいまかとその帽子を見つめる。

「はい、そろそろ変化した場合いでしよう。それでは全員を代表して竹内さん、ハンカチを取って見てください」

指名された竹内さんがさっと素早くハンカチを取り、僕達はソンプレロの中を見れば、

「えっ？」

「おーすげえ」

もはや、感嘆の声しか上げられない。
なんなんだこれは。

「すごいですね」

「すごい」

直も声を上げている。

「すごい。すごい。これ、すごいな」

美咲さんにいたっては、すごいを連呼しちゃっている。

「どうやら成功したみたいですね」

成功もなにも、大成功に達しない。

なぜなら、ソンプレロに入っていた林檎には、さきほど折ったで
あろう矢が刺さっていた。

もちろん、帽子には何の欠陥もない。

少なくとも、確認できる範囲での違和感は何もない。

「それで、この手品は使えそうですか？」

「使えるに決まっているじゃないか」

おもわずみんなつっこんでいた。

1 - 10 竹内 由貴

すべての後片付けを終える。

そして、今日の一日をまた思い返す。

幼馴染の綾がまた告白されて、屋上の給水タンクでその様子を見守った。

綾の機嫌を損ね、イチヨウ並木で素直に謝って許しを得た。

買い物をしているとき、久しぶりに会った絵里ちゃんと共闘した。夜は荘の知り合いの美咲さん達と鍋パーティーをした。

「……………」

感慨やセンチメンタルに浸るわけではない。

でも、一日を思い返すことはよく行う。

なぜだかわからないんだけど、自分の中でそういう習慣ができあがっている。

「春、春」

気づけば、直に声をかけられていた。

直の顔が物凄く近くにある。

「あ、直」

「ん」

「それで？」

「春は寝てたの？」

きっと給水タンクのことを思い出したのだろう。
僕がまた寝ていると思ったらしい。

「いや、ぼつとしていたんだ」

「大丈夫？」

すべてを見通しそうな切れ長の瞳。
その瞳がこつちを見つめてくる。
照れくさくなった僕は、おもわず視線をそらした。

「うん、大丈夫」

「ん、よかった」

昼と同じように、両手を握ろうとした直。
しかし僕が、手で制した。
携帯電話がなっていたからだ。

「ごめん、直。ちょっと電話に出るね」

「ん」

僕は充電してあるコンセント付近にまで行って、電話を取る。
そして直に気を使いつつも、少し距離を開けた。

「もしもし」

『あ、もしもし』

急いで電話に出たせいで相手がわからなかったが、声を聞いてすぐわかる。

さきほどまで家にいた竹内さんだ。

竹内さんの声は風貌そのものといった感じで、あっさりとして聞きとりやすい。おもわず聞き惚れてしまつくらいである。

『春くん。今大丈夫？』

「あ、平気です」

『じゃあ、ちょっと話ししない？』

「なんででしょう。忘れ物ですか？」

『それなら、春くん家に戻っているよ』

「そうですね」

『まあ、忘れ物みたいなもんだけどね』

竹内さんがおちゃらけた調子で言った。

それでも声に美しさを持っている人だな、と僕は思う。

「竹内さん、将来オペレータになったらどうですか？」

『えっ？ 何？』

「いえ、なんでもありません。ところで何用でしょうか？」

『春くん。用がなければさ、私はかけてはいけないのかな』

「それは竹内さんのキャラじゃないですよ」

『そうだね。若干慣れないことをしたと私も思う。まあ、気にしないでよ』

うふふと笑う竹内さん。

『で、春くん。私が聞きたかったことなんだけどさ』

「はい」

『来週あるバレーボールの集まりこれる？ 来週はどうも人が集まらないみたいで困っているんだよね』

言葉通り困った調子の竹内さん。

ぜひとも僕に参加してほしいと述べている。

対して僕は、今日絵里ちゃんにも言ったように、来週の集まりには参加する予定で間違いない。

なので、参加する旨をつけることにする。

「行けますよ、来週」

『ほんと？　ありがとう』

「で、結局どれくらい人集まりそうなんですか？」

『それがなんだけど、あいにくタイミング悪くてか六人ぎりぎりくらい。もちろんこれは私や絵里ちゃん、そして直くんも入れてなんだけど』

「そうなんですか」

六人か。

規定人数ぎりぎりでほんとに少ない。

『それで相手のこともあるし、どうしても最低六人集めなくてはいけないんだ。ていうか、こんなにタイミングが悪いこと初めてでびつくりだよ』

たしかに竹内さんの言うことよくもわかる。

なぜなら竹内さんが主催する『ジモティーズ』というちょっと野暮ったいネーミングのバレーボール会は、下は中学生から上は大学生までの男女問わず、毎回十人以上は集まっているからだ。

なので、今回はよほど珍しい事態である。

「ところでですね、竹内さん」

『ん？　どうしたの？』

「美咲さんは来るんですか？」

『あの子はちょっとムリだって。彼氏とデート。でもそろそろ心配

なんだ。美咲が別れる予兆つてのが見え始めたから』

「ということは、僕、またからまれるんですね」

『あはは、そうだね』

「いやだなあ」

『まあ、がんばって』

心もとない応援も、竹内さんに声にかかれれば俄然気分が良くなるから不思議。

『そうそう、予兆で思い出したけどね』

「予兆？」

『近いうち大きな地震がくるらしいよ』

「えっ、それはなんですか？」

『あ、これは鳥子さんが別れ際に言っていたんだけど、彼女、ずっと耳鳴りがするらしくて。だから大きな地震がやってくる頃合いなんだってさ』

「へえ。鳥子さん、予知までできるんですか」

『そうだよな。謎めいて素敵なんだけど、得体の知れない存在だよ鳥子さんは』

地震を予知するあいかわらずな鳥子さん。

その存在に驚き、それから少し世間話をした後、竹内さんとの電話を切る。

「地震かあ」

地震は、しばらくお目にかかっていない。

けど僕の記憶では、直が極端に苦手だった。そういえば、怖いもの知らずの美咲さんも苦手を公言していた気がする。

にしても鳥さんは、手品だけでなく予知までしてしまうとは驚きだ。

なので、今までにそういう場面があったらどうかと思いついてみる。

するといくつか覚えがあった。

鳥さんは、経済の変化、外国で起こる紛争やデモ、運気の流れなどを予言していた気がする。

「と、鳥子さん……」

やはり、彼女は間違いなく凄い人。

なぜこの荘にいるのかわからなくなるくらいだ。

もうこうなったら、林檎の置物を水晶変わりにして、占い師でも始めた方がいいんじゃないだろうか。

そんなふうには物思いにふけていたところ、直に声をかけられた。

「春、電話終わった？」

「あ、うん」

「誰？ 綾？」

綾であってほしいとでもいうように、直が聞いてくる。

「違う？」

「うん、違う。竹内さんだった。『ジモティーズ』の集まりのことを言い忘れていたらしくて、その連絡」

「そうなんだ」

「そう。来週の集まりにはさ、規定人数ぎりぎりの六人集まれるかどうかわからなくて困っているらしいんだ。それで、たまには直も行く？」

運動があまり得意ではない直も、何度か『ジモティーズ』には参加している。もっとも僕だってそうなのだが、身体を動かすのは好きかどうかの違いはある。

「で、どうする？」

「ん。当日までに考えとく」

直がそう言い、僕は頷いた。

そして就寝までの間、ゆっくりとした時間が流れる。

テレビのニュースではまた地元の事件のことをやっていて、髪切りにあった女の子たちの被害状況を詳しく解析している。

ニュースによると、女の子達は通りすがりに刃物を突き付けられて、髪を切られたのこと。

手口は皆一緒で、夜道の一人歩きには気をつけてくださいとの喚起がなされていた。

「春」

「なに？」

「春も気をつけて」

そう言われて、僕はどきっとする。

「どっしって？」

「春と私は似ている」

「うん」

「だから、女の子と間違っ人がいる」

そう、直と僕はよく似ている。

わりと僕の髪が長めなのもあり、昔から女の子に間違えられることが多かった。

「でも、今は大丈夫だよ。間違えられることも少なくなったし」

「そう?」

「そうだよ。最近はそんなことないでしょ。それに髪質を見れば女の子だと思うこともないんじゃないかな」

「ここが矜持だとばかりに、一生懸命抗議する。」

「ん、そうだね」

「おかげでか、直も納得したように頷く。」

「むしろ直の方こそ気をつけてよね。ふらふらとスケッチしていつそのまま被害にあった、なんてことになったら大変だしさ。それに美咲さんじゃないけど、直が狙われる可能性はかなりあるんだよ。直の髪はきれいだから」

「えっ」

無表情で驚く直。

「いや、ほんとのことだからさ」

「ん。褒めてくれてありがとう」

「そうじゃないんだってば」

「とにかく気をつけようね」

「そうだね。って違うんだけどなあ」

1 - 1 2 直の甘え

いろいろあった一日を終え、就寝の時間が近づく。
今、僕達二人は一緒に布団を敷き終えたところ。

直は、もうすでにパジャマへと着替えはじめている。
直はこの年になっても、僕の前で着替えることに無頓着である。
流石に下着類の着替えはしないけど、服の場合は平気で着替えてく
る。

なので今も、パンツとブラの格好。

これは困ったものだ。

もう少し羞恥心を持ってほしい。

そして布団の距離も、この狭い部屋のせいなこともあってか、そ
れなりに近い。感覚としては一緒に寝ているようだ。

着替えを終え、僕と直はうつぶせになって寝ころぶ。

これも寝る前の軽い決まりごとみたいなもの。

こうして寝るまでの間、いくつか会話を交わす。

「そうそう、直」

「ん？」

「近いうち大きな地震が起こりそうなんだって」

「えっ」

「これ鳥子さんが言っていたんだけどさ、彼女手品だけではなく予知もできるのかと あれ、直？」

そのきれいな足でシーツのしわを伸ばしていたはずの直が、見れば固まっていた。

「地震怖い」

「直、そんなに地震苦手だったっけ？」

「うん苦手」

たしかにこの東風荘はぼろくて心配だ。
へたすれば全壊すらあり得る。

しかし、もしその可能性があれば、鳥子さんがちゃんと伝えてくれるのだろう。

だから、楽観的に考えてしまっただけ問題ない。

「直、きっと大丈夫だよ」

「ほんと？」

「うん。もし東風荘が危険だったら、鳥子さんがみんなに注意してくれるから」

「そっか」

直は落ち着いたのか、ほっと息を吐く。

「ていうか、不安がらせてごめん」

「ん」

もしかしたら余計なことを言ってしまったのではないかと反省する。でも、いきなり地震が来てもあれだしな、と思い悩む。そしてそんなことで悩んでいると、直にそっと手を握られた。

「春」

「どうしたの？」

「五センチだけ近くによつていい？」

直の遠慮したような声。

「えっ、いいけど」

僕がそう言葉をかける。

すると、直はいそいそと布団を近づけてくる。

まるできっかり定規で図っているかのような慎重さにあふれた動きだ。

「あの、もう五センチいい？」

「うん」

「もう五センチ」

「うん、いいけどさ。一気に寄せていけばいいんじゃない？」

「ううん。少しずつ寄せていった方が幸せ」

直が普通の人には幸せには見えなさそうな表情でそう言った。

「そっなんだ」

「ん」

「僕にはわからないけどなあ」

それから直は何度も五センチずつ寄せていき、結局布団はくっついた。
いた。

そして完璧にくっついたところで電気を消す。

「ねえ、春」

「なに？」

「たまにはね」

「うん」

「お兄ちゃんって呼んでもいい」

「えっ」

僕が驚いたせいか、直が小動物みたいにびくつと震えた。そして直のすべてを見透かしそうな瞳が、一瞬だけゆらいだ。

「やっぱりいい」

「いいのに」

「いいって」

直はぷいと横を向いて、布団のはしまで行ってしまふ。

それでは布団をくつつけた意味がないじゃん、と僕は心の中で思うに留まった。

1 - 1 3 朝の風景

直の朝はとにかく早い。

まだ僕が寝ているうちから起きているのは確実で、いつも朝食の準備をしているし、僕が寝坊しないように起きる時間を過ぎていくときは速やかに起こしてくれる。

実際、僕はそんな直に甘え切っている。

「春、春」

直が、僕のことを揺り動かす。

「……あと十分」

「だめ」

「お願い」

「しょうがないな」

「やったあ」

「じゃあ、後十分だけ」

そう言つて、直はキッチンの方に戻つていく。
キッチンからは、朝食の定番である目玉焼きのいいにおい。

直の場合、においは良くても、味が落ちるといふ不思議な料理の腕を持っている。だけど直の作ってくれた料理なので、こんなに嬉しいことはない。

今日も残さず食べようと、いるかどうかもわからない神様に誓つ。

「春、十分たつた」

「ほんとに?」

どうやら、いつのまにか時間になっていたらしい。

「ん。だから起きて」

「うん、わかった」

直をこれ以上困らせてはいけないと思い、僕はむりやり体を起す。

「おはよ」

「うん、おはよう」

制服にエプロン姿で直が、窓から入る斜光とあいまってまぶしく見える。

今日もその無表情さは変わりがなくて安心する。

「顔洗つてくるね」

「ん」

僕は一度ノビをしてから、洗面所へ向かう。

洗面所には直が用意してくれたのか、新しいタオルが置いてある。

僕は早速、そのタオルを使って顔を洗う。

ついでに歯も磨きながらつぶやく。

「……地震こなかったなあ」

でも、鳥子さんの予知は期間を示していなかったから、きっとこれから地震が起こるに違いない。

そして、これから地震が起きるまでの間、毎日布団をくつつけて寝るのも間違いない。

しかし、昨日の夜の直はなんだったんだろうか。

お兄ちゃんと呼んでいい、なんて言っていた。

「春」

向こうから直の呼ぶ声が聞こえて、僕は思考を中断させる。

「じはん、食べないと」

「うん、わかった」

呼ばれた僕は、部屋の真ん中に置いた小さなテーブルへと向かう。もちろんテーブルには、直が作った朝ご飯が並べられている。

さきほどいいにおいがした目玉焼きを筆頭に、こんがり焼けた食パンとポテトを中心としたサラダがある。

「さあ、食べよ」

すでに座っている直は、僕にも座るように促す。

「ちょっと待って。着替えてからにするよ」

「ん、わかった」

僕は急いで着替え、そして席に座る。

「じゃあ、いい？」

「うん。OK」

直が両手を揃えながら合図をし、僕もそれに応えた。

「いただきます」

「いただきます」

まずは目玉焼き。

メインからである。

「おいしい？」

無表情ながらも懸命に聞いてくる直。

これはいつものことだ。

「おいしいよ」

「ほんとに?」

「うん、おいしい」

「春、ほんとのこと言って」

「ごめん。おいしいんだけど、やっぱり味気ない気がするんだ。なんだか」

「そう」

表情には出ないけど、やっぱり残念そうにしている直。そして、このやり取りも残念ながらいつものこと。やがて、食パンもサラダも食べ終わった。

「ごちそうさま」

「ごちそうさま」

二人一緒に挨拶をして、後片付け。

「春、今日のお弁当」

「うん」

お揃いのトートバックを渡される。

「ありがとう」

お弁当は一日交代で互いに作っている。
直は朝に強いので朝作り、僕は朝に弱いので夜作り。

「なんだからいつもより軽いね」

「ん」

「どうして？」

「開けたらわかるよ」

1 - 14 小平 真由

結局、僕の寝坊のせいで、少し急ぎ足で学校に向かうこととなる。

「直、ごめん」

「ん、いい」

僕が謝ると、直は気にしないでというような無表情。いつも通りの表情だと思いはっとする。

「春、今日もいい天気」

「そうだね」

空を仰ぎみると、雲ひとつない快晴。

秋の空は、直がスケッチしたくなるぐらいに晴れ渡っている。

おもわずずっと見ていたくなるような空だったが、早く学校に行かなくてはならないと思い顔を戻す。

が、その瞬間。

交差点に差し掛かっていたせいか、誰かにぶつかってしまった。

しかも、相手に乗ってしまっている。

「さ、坂本」

「小平さん」

ぶつかった相手は小平真由。

彼女は綾の親友だ。

なのに、僕とは相性の悪い女の子で、誤解されている面が多々あったりする。

「そうやってぼーっとしてるから」

「ごめん」

「謝ればいってもんじゃない」

「そうだね」

そう返事すると、チョップが降ってきた。

「いたっ」

さすが空手を習っているだけあり、女の子にしてはダメージの残るチョップをする。これがスキンシップだとしたら、たまったもんじゃない。

「いたっ、じゃないって」

腕を組みながら小平さん。

ショートカットの髪が風になびく。

「まあ私も急いでいて走っていたんだから、半分くらいは悪いんだけどさ。でも、空見てるのは前方不注意すぎ」

と、小平さんは言う。

僕が何を言おうか考えていると、直が口を開いた。

「真由」

「あ、直。おはよ」

「ん、おはよ」

あいさつをする二人。

「で、どうしたの？」

「半分は私が悪いの」

「えっ、何が？」

「春のこと」

直が僕をかばおうとしている。

「なんで？」

「私がいい天気って言ったから」

「そうなの?」

「そう」

「でもね、直。ぼけーっと空見てぼんやりと歩いているのではないと思うわけよ。そう思わない?」

「そうかな?」

「そうだよ。こんな忙しいときに、あっ、そうだ。遅刻する」

「ほんとだ」

二人のやり取りをぼんやりと眺めていたが、たまらずに声を出していた。

「ほんとだ、じゃないって」

「でも、ほんとなんだけど、ね、直」

「ん」

直がゆっくりとかぶりを振り、すべてを見通してしまいそうなる重の奥ゆかしい瞳でこっちを見つめてくる。

「もう、坂本兄妹のんびりしすぎ。この脱力系兄妹」

「そんなことないよ」

「ん」

「だから、そんなこと言っていないで」

腕時計を見て、小平さんは直の手をひっぱる。

「さあ、急ぐよ」

「あ、真由」

直が声をあげた。

でも、小平さんは直をひっぱることを止めない。
瞬く間に、僕と二人とのあいだで距離ができる。

「ほら、坂本も早く」

毒にも薬にもならない数字の授業中。

四時間目で、みんな疲れが見えはじめている。

江藤、小倉、神楽と順番に当てられていく中、まだ順番が来ない僕は、隠れてメールを交わしていた。

『先輩、先輩。せつかくだから来週の土曜日にある《ジモティーズ》の集まり一緒に行きませんか？』

「方向が違うよ」

『それでも先輩、一緒に行きましょう』

「いや、いいって」

『そんなあ。あっさりと断らないでください』

「そんなつもりじゃなかったけど」

『じゃあ、いいじゃないですか。先輩は私のことが嫌いだったりします？』

「そんなことないよ」

『じゃあ、先輩は私のことが大好きなんですね』

「そんなこともないよ」

『うう、なんか先輩、ひどいです。そこはそうだよ、って言うところじゃないですか。ときに先輩って、私の好意を柳のようにあっさり受け流しますよね』

「そうかな」

『そうですよ。私なんか、こうやって先輩とメールできるだけでもうれびみんなのに』

「うれびみんな？」

『あ、それはうれしい時にできるドーパミンのことなんですよ』

以上がこれまで続いたメール。

これを一つ後輩の絵里ちゃんと交わし、今に至っている。

次にどんな返事をしようか。

あるいは、話の流れからしてもう返事をしなくていいのか。などと考えながら、数学の教科書をぼんやりと見ている。

問題を解く順番は、葛西、木内、近藤と当たっていき、やっぱり返事を止めようかと考えていたところでメールがやってきた。

僕は自分に当たる問題をチェックしながら、そのメールを開く。

『先輩。今返信をしようかな、と思ってやっぱり止めましたね』

「どうやらお見通しのようだ。」

彼女の書き出しはこんな感じではじまり、その後には長い文章が書かれている。

『それで先輩、結局、バレエの件はどうなりました？ やっぱ一緒に行かないんでしょうか？ 一緒に行けないのならそれでもいいですよ。でも、それならお願いを聞いてくれますね。代わりにデートとかはどうですか？』

デート。

その言葉にびっくりして、携帯を閉じてしまった。しかも、その音が大きく鳴り響く。

「どうした、坂本くん」

「あ、すみません。なんでもないです」

慌てて先生に謝る。

「ならいいが」

「はい」

「けど、授業中に大きな音を鳴らすのはよくないぞ」

「はい、すみません」

「それと次は、きみが問題を解く順番だからな」

「はい、わかりました」

そうして、先生が指定の場所に戻っていく。
先生が去った後、僕はおもわずつぶやいてしまう。

「デートか……」

絵里ちゃんの好意は嬉しい。

けど、美咲先輩のせいで、その単語には拒否反応が生まれていた。

1 - 16 お弁当(1)

数学の授業が終わって、昼休み。

昼休みを迎えると同時に、急いで教室を出ていく人がいる。

それは弁当を持参していない人が購買のパンを買うためであり、人気の銘柄を獲得するための熾烈な競争のはじまりでもある。

そう、この近辺の中学校では珍しく給食がない。

なので、弁当と購買ですませている。

そしてさらに珍しいのは、どこで食べても自由という校風。

高校などではそうしているところが多い。けれど、中学では班を作って机を並べるのが基本だと聞く。

たとえば《ジモティーズ》のメンバーでもあり、違う中学の山口さんなんかは、そんなことはありえないと否定する。

ともあれ、みんなそれぞれ、好きな場所で好きな相手とともに昼食。

そんな習慣が当たり前のようにはできあがっている。

僕は基本、同じクラスの小倉くんと一緒。

小倉くんは、すぐ脱ぐ癖がある以外はカードゲームが好きな普通

の人。それと、よくしゃべるから聞き役の僕と相性がいい。

直も女の子同士で「ご飯を食べることが多いけど、たまにはこっちにやってくる。」

それで僕達の弁当が一緒なのを見て、小倉くんは、やっぱり兄妹なんだなとしたり顔で言う。

あれはどういう意味なんだろうか。

「春、飯食うぞ」

「あ、うん」

ちょうど、激戦の購買から戦利品を確保してきた小倉くんが教室に帰ってきた。

調理パンを三つも抱えている。

彼と僕は机を並べ、昼食の準備を始める。

そこで、今日は直がやってきた。

「春」

「あ、直」

「私言い忘れていたことがあった」

「何？」

小倉くんとともに、きよんとした顔をする。
お弁当の包みを開きながら、直の言葉を待つ。

「今日のお弁当軽いでしょ」

「そういえば」

もう一度、お弁当を持ちなおして、その軽さを確認。

「たしかに軽いね」

「ご飯しか入っていない」

「なんだそりゃ」

と、小倉くん。

僕の代わりに、彼が声をあげてくれた。

「どういふこと？」

と、僕は聞く。

「綾がおかずを作ってきたの」

「んん？」

直の言っていることがよくわからない。
だから、どういふ事態なのか考えてみる。
すると、全容が見えてきた。

「直」

「何？ 春」

「言い忘れていたなんて言っているけど、お弁当の中身がご飯なのは確信犯じゃないの」

「ん」

射抜くような直の視線。

「だから、綾のところ」

「そっか」

「そうなんだな」

小倉くんが残念そうに言う。

「ということは、今日、春も直もここでは食べないってわけだ」

「ごめんなさい、小倉くん」

「うん、ごめん」

綾が頭を下げ、僕も謝った。

「あ、いいって」

けど、気のいい小倉くんは、直と僕の謝罪をあっさりと受け入れる。

「遠藤とは面識ないから、まあしょうがないな。それに遠藤のフア

ンクラブににらまれたら、たまったもんじゃない」

「それじゃあ」

そして、少し申し訳なく思いながらも席を立つ。

「だー、俺、鈴木達のとこで食うから気にすんなってば、春」

「うん。わかった」

喧騒に満ちた教室を抜け、人のいない廊下へと出る。

そしてその廊下を速足で歩き、上へ繋がる階段を足早に駆け上がっていく。

直と僕は、屋上へ。

僕は屋上に思い入れはない。

けど、この場所には縁がある。

というのも、直が屋上でのスケッチを好んでいるし、綾がのっぴきならない事情でよく使用しているからだ。

「あのだ、直」

「ん？」

「どつして綾のこと、もっと早くに言ってくれなかったの」

「……」

手に提げたお揃いのトートバック。

それが、階段を上るとともに揺れる。

直が次の言葉を探すあいだ、僕はその動きをじっと見ていた。

「なんとなくかな」

「そっか」

直がなんとなく言うのだから、本当にそうなんだろう。
深く追求はしない。

やがて屋上に到着し、直がドアノブをぐるりと回す。ドアノブは
屋上独特の音を響かせながら、ゆっくりと開く。

開けた瞬間、一面に解放感にあふれる秋の空。
心地よい気分させられる。

「着いたね」

「ん」

「綾はいるかな」

「いたよ」

直が綾のいる場所を指差す。

そこには青いベンチがあって、綾が所在なさげに座っている。

「綾」

直とともに、手を上げて呼びかけてみる。

すると綾は気がついたらしく、その場で立ちあがって手を振りか

えす。凄い勢いの振りなので、僕は犬のしっぽを連想してしまうほど。

直と僕は綾の所まで行き、同じベンチに座る。

「来た」

「うん」

直が無表情で一言。

綾は表情豊かにならずにいる。

「私、けっこう待っていたんだから」

「ん、待たせてみた」

「そうなの？ 直」

「……」

「どうしてそんなことするのよ」

「なんとなく」

今日の直も気まぐれだ。

でも、それが許されるような雰囲気は直にはある。

「まあ、こうして来てくれたからいいんだけどね」

綾が気を取り直す。

「それで、二人には昨日のお礼に手作りのおかずをつくってきたの。昨日は、その、見守ってくれてありがとう」

昨日とは違って変って、とっつきやすい綾。

何かいいことでもあったのだろうか、と思う。

綾はバツクから、おかずが入っているであろう何種類かのタツパ
ーを取り出す。

「みんな二人のために作ってきたんだからね」

そして一つ一つタツパーのふたを開け、かいがいしく説明をし始
める。

「これは生野菜のベーコンエッグ巻き、これは鮭のムニエル、これ
はほうれんそうのシーチキン和え。こっちはね、ちくわのきゅう
り詰めと春雨サラダ」

「これは、すごいな」

「ん」

直も無表情で驚いている。

もちろん、綾の料理の腕の良さは知っていた。

けど、正直ここまで成長してるとは思っていなかった。

他にも、お弁当のおかず定番な玉子焼き、ハンバーグなどが入
っていて、きれいに盛り付けがされている。

「まるで花見みたいに豪勢だ」

「そう、よくわかったわね、春。今は秋なんだけど花見をイメージしたの」

幼馴染は得意げな表情で言う。

「見てわかった？」

「うん。というか、早く食べたくて仕方ないんだけどさ」

「そうね、じゃあ取り分けるから」

綾が、ん、と手を差し出してくる。

「何？」

「お弁当箱」

「そうだった」

そして綾は、直と僕のお弁当箱におかずを取り分けてくれる。

「よし、ではいただきます」

「いただきます」

「じゃあ、私も食べようかな」

暖かなひだまりと緩やかな風が吹くなか、屋上での食事。しかも、綾が丹精込めて作った絶品のおかず。

「私も綾みたいに料理上手くなれる？」

「大丈夫よ、練習すればきっと」

「そうかな」

「そうだよ」

「で、春。一応、その、どう？」

「うん。かなりおいしい」

それにしても、小さいとき砂団子をむりやり食べさせられそうになったのは、もういい思い出である。

「って、あれは忘れてっていったでしょ、春」

「うん、ごめん。でも、食べないとぜつこーするって言われたから、どうやってごまかそうか必死に考えていたのは今でも覚えているよ」

「もう、春のいじわる」

ふん、とそつぽを向く。

とてもじゃないがお嬢様とはいえない綾。

そしてそのまま、膨らましたほっぺを両手で押さえる。
さらには空気を抜き、ため息までつく。

「どしたの？」

直が綾に聞く。

けど、綾はなかなか答えない。

「昨日のこと？」

「うーん」

綾の返答はまるで雲の流れのようにあいまい。
空を仰ぎ見る綾は、太陽に手をかざしながら言う。

「なんか昔は平和で良かったなあ、と思ってさ」

「今も平和だけど？」

「春、そういう意味じゃなくて」

「じゃあさ、どついう意味？」

おもわず聞き返す。

綾はこつちを見て、何か不満そうな顔をしたあと、小さな声でさ
さやく。

「付き合つとか付き合わないとか」

そしてさらに続ける。

「それと建前とか本音とか。女の子とか男の子とか。なんかいろん
なことが複雑になって、なんだかな、と思ってね」

綾の作ったおかずを三人で食べ終え、一息つく。

食べ終えてもなお、綾の作ってきた料理に感動を覚えるほどで、あんなにポリユームがあったのにすべてなくなっていることに驚きをかくせない。

綾の料理はお腹いっぱいになっても、どんどん入った。

「綾、おいしかったよ」

「うん、ありがとう春」

「なんかすごい上手くなっていたね」

「そりゃそうよ。人は日々成長していくものなんだから」

「そういつものかな」

「そういつものでしょ」

綾は得意げに胸を張る。

「それに気合い入れて作ったし」

「そっか」

「だから上手にできないわけがないじゃない」

「そうだね」

それから、たわいない会話を交わす綾と僕。

今日何があったとか、勉強の調子はどうかいろいろなことを話す。

そして僕達が話しているあいだ、直はいつのまにかスケッチをしている。

さらには、時々何か考えごとをしているようで、切れ長の視線をさらに細めて、フェンスの向こう先を見ていた。

「そいえば、綾」

直が口を開く。

「何？」

「あのととき、なんでいつも綾がお父さん役だったの？」

「えっ？」

直の質問を聞いた綾が不思議そうに首をかしげる。

「それで春がお母さん役」

「な、何の話？」

「泥団子作ってた頃の話」

「それって子どもの頃？」

「ん」

「そっか。子どもの頃の話ね」

綾が納得する。

「でも、そうだったっけ？」

「そう。それで私が子どもだった。どうして？」

「えっと……」

「なんとなく？」

「うん、なんとなくかな」

綾が戸惑ったように笑う。

でも、僕は綾が戸惑ったわけを知っていた。

それは二人の秘密の遊戯に関係あることだったからだ。

2 - 1 ジモティーズ(1)

鍋パーティーから三日が経ち、週末がやってきた。

今日は竹内さん主催のバレーボールの集まり、『ジモティーズ』の会に参加する日。

前日に直、それと綾も参加するという。

綾はバス通学なので、距離が遠く、あまり参加することがない。だから綾が参加するのは、とてもめずらしいことだった。

ともあれ、直と僕は、雨が降る中、徒歩三分の場所にある地元の小学校へと一緒に向かって坂を上っていく。

雨が降ったこともあり、結局、後輩の絵里ちゃんとは別々に行くこととなる。

彼女はいたく残念がっていたが、自転車も乗れない状況で遠回りさせるのはしのびない。かといって、こちらから迎えに行くのもナシセンスだ。

「直」

「ん？」

直がこっちを向く。

「バレーするの久しぶりだよね」

「えっと……」

「どうしたの？」

「まだ、やるかどうかわからない」

「そっなんだ」

「ん」

直はうなずく。

傘をくるくると回しながら、歩を進める。

「直、そんなに回していると髪に水がはねるよ」

「ん」

案の定、髪に水がはねる。

「はねたよ」

「ん」

返事をしたあと、直は手櫛で髪を整えていく。
ついた水滴も取り払った。

「これで大丈夫」

「そうだね。元通りになった」

そして改めて、直を見る。

この湿気の多さにも負けない直の髪は、あまり手入れをしなくてまっすぐに整っている。

これは、一重の奥ゆかしい瞳とともに直の魅力の一つだ。

「ところでね」

「ん？」

「どうして参加することにしたの」

話をさっきの続きに戻す。

「なんとなく」

「なんとなく？」

「ううん」

直は傘を傾げて、雨空を見る。

「雨だったから」

「そっか」

その論理性に納得はできない。

けど、まあ直ならあり得るだろうなと思う。

なにせ直は、僕の知らない賢さであふれている。

「春」

「何？」

「明日は晴れるといいね」

直がこっちを見て言う。

「そうだね」

「あさっても晴れるともっといいね」

「さっし」

2・2 ジモティーズ(2)

体育館に着くと、もうみんなが待っていた。

ポールやネットなどの準備も出来ていて、あとはこちらがスタンバイするだけ。

今日は、手合わせをする相手が十人。

こっちは直と僕、綾、竹内さん、絵里ちゃん、違う学校の山口さん、高二の岩崎さん、そして、竹内さんの知り合いでもあるイケメンの長谷川さんの八人。

「人数足りている？」

体育館の中に入って開口一番、直が言う。

「まあ、足りているね」

「だったら私、見ている」

「やらないの？」

「ん。スケッチする方がいい」

「うん、わかった」

早くも直が戦線離脱。

どうやら非常事態と聞いて来ただけらしい。

結局、七人になり、ギリギリの人数となった。

「春、こっち」

「先輩、早く来てください」

幼馴染の綾と、後輩の絵里ちゃん。

二人が競い合うようにして僕を呼ぶ。

二人とも運動しやすい格好だけど、細部には違いはある。

綾はいつも来ていないせいかわ、体育着という格好。絵里ちゃんはロンTと短パンという自前の格好。

どちらがよりバレーに適している格好かは定かではない。

でも、目の保養には確実になる姿。

「春、どう？」

「え？」

まさか体育着の格好について聞かれているのか。

そう邪推してしまったが、綾にはそんなつもりはないみたいだ。

「んー」

僕の目の前でわたふたとする綾。

僕が黙っていると、綾が口を開く。

「私、髪くくってきたんだけど」

たしかに綾は、ミディアムの髪をくくっている。

「そうだね」

だからそう言ったら、問答無用でつねられた。

人前で猫かぶっているせいか、誰にも気づかれなくらいこっそり。

「春、最低」

「え？」

「そうだねってさ」

「でも、そうだと思ったから」

「じゃあ、私の髪型なんかどうでもいいの？」

「そんなことないよ。綾はどんな髪型でも似合っているから、べつに言う必要ないと思ったんだ」

そう言うのと、綾は押し黙ってしまった。

「いきなりずるい」

「？」

そして変な雰囲気になっていく。
綾と僕がどうしようもなくなってきたところで、絵里ちゃんが割り込んできた。

「先輩達、なにいい雰囲気になっているんですか」

「いい雰囲気？」

「はい、そうです」

これをいい雰囲気と言うのだろうか。

「いい雰囲気になんかありません」

綾も絵里ちゃんを諭すように説得している。
しかも、お嬢様モード。

「そうですか」

「ん？」

「だったら私にもチャンスが」

なにやら絵里ちゃんがつぶやいていたが、こっちまで聞こえない。

「絵里ちゃん。なんか言った？」

「あ、いえ」

「そう」

「あ、それと私の髪型はどうですか？」

「絵里ちゃんも似合っているよ」

絵里ちゃんは、いつもと同じくサイドにくくっている髪型。活発な彼女らしい髪型で、やはりよく似合っている。

「わあーい。ありがとうございます、先輩」

喜ぶ絵里ちゃん。

けど、なぜだか綾の機嫌が悪くなったような気がする。

「それよりも春」

「ん？」

「私と練習しよ」

「あ、うん」

いつもより不気味なくらいとりすましている綾が、僕の手をやりわりとにぎってくる。

お嬢様モードもいまだに継続中だ。

「え、先輩。私と練習するんじゃないんですか？」

「えっ？」

「だって、一緒に来れなくなったから、てっきりそうだと思ったんですが」

「そうだったっけ？」

僕は首をかしげる。

「春、絵里ちゃんと一緒に来る予定だったの？」

「そうですよ」

「春、どうなの？」

「い、いや」

なんだか得体の知れない二人の勢いに、飲み込まれてしまいそうになる。

「春、とにかく私と一緒に練習しよ」

「あの、綾先輩。ここは譲ってくださいね」

バチバチと火花が散っている。

これでは、まるで僕を取り合っているみたいだ。

「どうしたのさ。二人とも」

「春は黙ってて」

「そうです。先輩は黙っててください」

なんだかにつちもさつちもいかない状況になってきた。
しかし、そんなときである。

「三人でやったらいいんじゃない？」

一斉にふりむく僕達。

「七人で奇数だしね」

その竹内さんの鶴の一声で、騒動はやっと収まった。

2 - 3 ジモティーズ(3)

準備運動をして、軽い練習を綾や絵里ちゃんとなす。

さっきの騒動は二人ともやりすぎたと思っっているみたいで、お互いに謝りあいつこをしてからはじめた。

バレーの腕前は、二人とも僕よりうまい。

綾は持ち前の運動センス。

絵里ちゃんは練習の成果。

今日も、それを存分に発揮していた。

けど、一通りの練習が終わって、今日来てくれた相手との試合。

その試合で『ジモティーズ』の大敗してしまった。

唯一、竹内さんだけが大車輪の活躍。

竹内さんは、中高と厳しい環境でバレーに打ち込んでいたため、かなりの上級者。しかしその反動として、楽しくバレーをする機会を設けたかったという。

だから竹内さんは、負けてもにこにこの笑顔だった。

「さあ、打ち上げ」

そして無事バレーを終えて、楽しみな打ち上げ。

近くのファミレスに入り、みなとおしゃべりを交わす。
今日は直もいるため、帰る時間を気にしなくてもいい。

「綾」

「ん？」

「ちょっとトイレに行きたいから立ってくれる」

「うん。わかった」

綾が席を開けてくれる。

僕はそこをすり抜けるようにして通っていき、トイレに行く。
そして帰り際、高校生の岩崎さんと一緒になる。

「今日のおたくさ、とんだハーレムだったな」

「僕がですか？」

おもわず立ち止って聞き返す。

「あの、綾って子と絵里がおたくを取り合いだったじゃないか」

「まさかそんなことは」

「まさかじゃないよ。私は結構遠巻きで見ていたけれど、なかなかの迫力があつたさ。あれが女同士の戦いってやつか」

「そうですね。でも、綾にかぎってそんなことはないと思いますよ」

そう、綾にかぎっては絶対ない。

「ふーん。そんなこと言うんだ」

「ふーんって」

「おたく、そのうち刺されるんじゃない」

「何を言っているんですか？」

「いや、いつそ刺されちまえばいい。なんてーな」

にやにやと笑いながら言う岩崎さんは、けっころな皮肉屋であることを知っている。

なのでこういった言動はよくしてくる。
もう慣れてしまったけど、最初のうちはとても苦手だった。

「ところでさ、おたく高校はどうすんの？」

「高校ですか？」

「そつだよ」

「そつですね。一応、直と僕は岩崎さんのいる学校を目指しています。あ、後、綾もです」

「そつかい」

「ほー」

「まあ、知っている後輩もできるし、私としてもそれはよいな。でも、おたくと直ちゃんには頭の出来に違いがあるんじゃないかかったかい?」

「直がレベルを下げるので」

「ふーん」

「それに学校は近い方がいいらしいですし」

僕がそう言うと、岩崎さんが満足げにうなずく。

「たしかに学校は近い方がいいな。私の友達には、電車などを使って通うことに慣れていた子がいた。けど、今ではラッシュの愚痴を聞かされるくらいだ」

「そうですか」

「まあ、それにうちの学校は面白いぞ。マンモス校特有の華やかさがあり、行事は豊富だ。それと、いろんな部活を自由に濫立できるのがいい」

「あ、それ前も言っていましたね」

「たしかにな」

「そして、岩崎さんは屋上部の話をしました」

「違う。屋上の平和を愛する会々」

屋上の平和を愛する会。

とにかく、直が好きそうな部活だ。

無事、高校へ入学できたなら、まっさきに興味を示しそうである。

「ともあれ」

「はい」

「おたくは勉強をがんばらないとな」

そしてぼん、と肩を叩く岩崎さん。

僕を気遣ってか、めったにない励ましをしてくれる。

が、岩崎さんの顔はだんだんと笑みの形に変わっていく。

「笑ってますね」

「あはは、心にもないことを言っちゃったからだ」

「それはまた酷いですよ」

「ま、気にすんな。さて、そろそろ戻らないと大の方だと思われる」

「……………」

「下ネタもOKな岩崎さんだった。」

2 - 4 ジモテーズ(4)

みんながいる場所へ戻ると、いつのまにか席がリフレッシュされていた。

綾の隣にはイケメンの長谷川さんがいる。

二人は何事かを熱心に話しこんでいて、お互いに笑顔だ。

僕はべつに綾のことをどうしたいか思っているわけではないんだけど、屋上で綾が告白されるような、なんとも言えない胸のもやもやを感じた。

この微妙な気持ちはなんだろうか。

嫉妬ともまた違う。

だけど、やり切れない気持ちで満たされる。

「先輩、先輩」

そんな中、絵里ちゃんが呼びかけてきた。

「なに？」

「ここに座ってください」

「あ、うん」

そこしか席が開いていないのもあってか、絵里ちゃんの言われたとおりに座った。

絵里ちゃんはピザを食べるのを止めて、僕に呼びかけてくる。

「先輩」

「ん？」

「先輩」

「えっと、何？」

何か期待したまなざしでいるけれど、僕にはさっぱりわからない。でも、絵里ちゃんのその笑顔は好きだ。

「あの一」

「うん」

「私との約束はどうなりましたか」

「約束？」

「そうです。約束です」

約束と言われても、思い当る節がない。

ということは、絵里ちゃんの早とちりだろうか。

しかし、絵里ちゃんの早とちりよりも、僕の忘れっぽさの方がもっとひどい。

「覚えてないんですか」

「うん。そうみたいなんだ」

「じゃあ、耳を貸してください」

「えっ?」

「耳ですよ、先輩」

「耳か」

言われたとおりになんか待たずに待つ。

絵里ちゃんは、ピザを食べた手をおしぼりで念入りにふいている。そして僕の耳に手を当ててきた。

「うんうんうんうんうん」

「……」

「うんうんうんうん」

「えーと」

絵里ちゃんは何を言っているんだろうか。

「うんうんうんうん」

「えっ?」

「……って、先輩！」

「えっと、それよりも何を言っているの？」

「おそいですよー。早くつっこんでください。私、つっこみ待ちだつたんですからあ」

そうなのか。

さっぱりそのペースに乗れていなかった。

けど、絵里ちゃんのテンションの高さもいつもよりおかしい。

「ところでさ、絵里ちゃん」

「はい？」

「約束の件はなんだったの？」

「えっと」

急に口ごもったようになる絵里ちゃん。

そしてこっそりとつぶやく。

「あの、デートです」

「え、デート？」

「しー。先輩。みんなに聞こえてしまいますよ」

「絵里ちゃん。聞こえたらまずいの？」

僕も絵里ちゃんと同じように小声で話す。

「はい。せっかくデートをするんですから、内緒のデートがいいんです」

「……」

「内緒のデートですよ。胸躍る感じがしませんか？」

「……」

「来週の日曜日なんかどうですか？」

「来週の日曜日」

オウム返しにつぶやいて、僕は押し黙る。

すると絵里ちゃんが、残念そうな顔をしながら言う。

「先輩。何を困った顔しているんですか。後輩の女の子にデートを誘われて、困った顔をする男の子なんていませんっば」

「そうだね」

たしかにそのとおり。

美咲さんのせいでいくらデートにトラウマがあるとしても、僕となんかデートに行きたいと言ってくれる絵里ちゃんの気持ちはとてもうれしい。

でも、来週の日曜日。

この言葉で脳裏に浮かんだのは、綾のこと。

もちろんこれは綾とデートをするという意味ではない。
僕達が周期的に行っている秘密の遊戯のことである。

「あー、先輩？」

「あ、ごめん」

「どうしました？」

「ちょっと考え込んでいて」

うわの空になっていた自分を軽く叱責する。
改めて、絵里ちゃんの方へ向き直った。

「それで、絵里ちゃん」

「はい」

「デートの件は約束なんだね」

「えっ、あ、はい。そうしちゃいます」

ちゃめっけいっぱい絵里ちゃんは、ウインクしながらうなずく。

「そっか。でも、来週の日曜日は都合が合わないんだ。だから、絵
里ちゃんの都合がいいなら土曜日でどう？」

「えっ、土曜日ならいいんですか？」

驚いたように目を丸くする絵里ちゃん。

「うん」

と、僕はうなづく。

「ほんとですね」

「ほんとだよ」

僕がそう言っても、絵里ちゃんは何度も聞き返してくる。

そんなやりとりが数回続いたあと、絵里ちゃんはやっと納得して喜んでくれた。

2・5 ジモテーズ(5)

結局、あれから二時間。

僕達はファミレスですごした。

注文はドリンクバーで繋ぎつつ、みんなとさっくばらんな会話を
楽しんだ。

気がつけば時間が経っていたというぐあい、時間の流れがこれ
以上ないくらい早く感じた。

皆、世代は違うけど、話題はたくさんあった気がする。

勉強のことは共通として、将来の夢や最新のエンタメ情報までい
ろいろと話し合った。

違う学校の山口さんやイケメンの長谷川さんとも思ったより話が
弾んでいて、あまり付き合いない人特有の違和感みたいなもの
がほとんどなかったくらいだ。

「じゃあ、綾」

「うん」

「また明日」

「春、また明日ね」

「絵里ちゃんもまたね」

「はい。さよならです先輩」

綾はファミレス近くのバス停へ。

絵里ちゃんは家の方向へ。

綾や絵里ちゃんと別れ、同じようにあいさつを交わしている直の方へと歩いていく。

「さて、直」

「何？」

「僕達も帰ろっか」

「ん」

そして僕達は、まだ道端で話し込んでいる他の人達に別れを告げようとする。

けど、そこで竹内さんに話しかけられた。

「今日はありがとね、春くん。おかげで助かった」

「あ、いえ」

「うっん、ほんとにありがとう」

やはり癒される声。

疲れが一気に吹き飛ぶ。

「直ちゃんもありがと」

「由貴」

「ん？」

「私はスケッチしてただけ」

「ううん。それでもうれしかった」

「そう」

「そうだから」

あっさりとした笑顔で竹内さんが言う。

「ともあれ、何とか人数が少ないのを乗り切れた」

「そうですね」

「ほんと、どうなることかと思ったけどね」

くすりと笑う竹内さん。

やっぱり彼女には、さっぱり美人という言葉がよく似合う。

「だから、二人には感謝」

「いえ、そんなたいしたことしていません。ね、直」

「ん」

「いや、感謝、感謝」

竹内さんは懲りずに何度もお礼を言ってくる。
おかげで、なんだか照れくさくなってきた。

「じゃあ、直と僕は帰りますので」

「うん、わかった。それじゃあ気をつけて」

「はい」

「あ、言い忘れてたけど、また今度美咲達と一緒に鍋をしよう」

「そうですね」

「ん」

と、直もうなずく。

「でも、きっと今度の鍋のときはは美咲がふられる頃合いで、大変かもしれないけどね」

「あ、それは困ります」

「そうだね。そのときは私も美咲を一生懸命励ますよ。じゃあ、そのときまでまたね」

「はい。さよなら竹内さん」

「さよなら、由貴」

そして僕達は家路へと向かう。

2 - 6 銭湯（1）

家に着いたときは、ちょうど夜の九時。

なので、急いで銭湯に行く準備をしなければならない。

「直、急がないと」

「ん」

自宅近くの銭湯は、たしか夜の十時までの営業。

直と僕は急いで風呂道具の準備をして、また家を出る。

銭湯の場所は、都立公園の近く。

だから、そう遠くない。

十分くらいで着くはずだ。

「直、今日楽しかった？」

「ん。スケッチいっぱいできたからよかった」

「じゃあ、帰ったらまた見せて」

「ん。わかった」

直が無表情で返事をして、そこで会話が途切れる。

しかし、直とは会話が続かなくても、問題はない。直の不思議な雰囲気もあるけれど、兄妹としての信頼関係がそうさせる。

直は僕よりも賢くて、自慢の妹。

直も僕のこととは、頼りないけど兄だと接してくれている。

この広い空の下、こういった繋がりを感じられるのはもう直だけ。そう考えたところで、幼馴染との綾が思い浮かぶ。しかし、綾とは昔ほど繋がりを感しない。

それは二年前に一度疎遠になってからか。あるいは、綾がお嬢様の猫かぶりをして、素の姿を人前では見せなくなっからか。

それとも綾の秘密を目撃してしまい、一緒にその遊戯をするようになってからだろうか。

僕にはわからない。

でも、そう感じる。

「春」

「？」

「春、春」

直の声が聞こえてきて、僕は我に返った。

「春、ぼーっとしてたよ」

「うん」

「何か誘われたの？」

「うん。そうだね」

「何に？」

「思考すること」

「そう」

直が無表情でうなずき、僕は少しずつ意識を周りに持っていく。どうやら、目的地に着いていたみたいだ。湯のマークが描かれている暖簾が目の前にある。

「いつのまにか着いたんだね」

「ん。いつのまにか着いていたよ」

直が神妙な面持ちで言い、さらに続ける。

「私も考え事をしていたから、危うく通りすぎるところだった」

「そっか」

「うん」

今度は深くうなずく直。

「私、春と綾のことについて考えていた」

「そうなんだ」

綾と僕のこと。

奇しくも、同じことを考えていた。

「そして、二人の始まらないストーリーについても」

「二人の？」

「そう」

「それって綾と僕？」

「ん」

直はまたもやうなずく。

「どうしてそう思ったの？」

「なんとなく」

切れ長の視線が僕をとらえてくるが、前にも言われたこの言葉の意味がわからない。

双子なのに、どうしてこうも感じるどころが違うのか。

僕はそう考えて、あることに気がついた。

直は日頃からスケッチしてるだけあって、人間観察にも優れている。だから、僕にアドバイスをしているのだろうと。

でも、わからない。
それがとても残念だ。

「直」

「ん？」

「やっぱり、二人の始まらないストーリーっていわれても、僕にはなになんだがわからないよ。それじゃあ、直と僕に特別なストーリーってものがあるみたいじゃないか」

僕がそう言うと、直は押し黙った。

さらには、しゅんとへこんだように見える。

「どうしたの？ 直」

「なんでもない」

「ほんと？」

「ん。ただ、春はわかってない」

「そっか」

直の機嫌は変わらない。

無表情でそのままだ。

ただ、暖簾をくぐっていく直は、ほんの少しだけ肩をいからせている。

銭湯からあがって待合室に行くと、すでに直がいた。いつもは直より僕の方が早くあがっていて待っていることが多いけど、今日はまさかの逆である。

直は両手で瓶を持って、こくこくと牛乳を飲んでいた。これも、あまり牛乳を飲まない直にしては珍しい。とにかく、僕は直に声をかける。

「直」

直が牛乳瓶を持ったまま、くるりと振り向く。その可愛らしいしぐさに微笑ましく思いながら言っつ。

「牛乳飲んでるんだ」

「ん」

「珍しいね」

「なんとなく飲もうと思った」

「じゃあ、僕も飲もうかな」

やっぱり風呂上がりの定番といったら牛乳。コーヒー牛乳もありだけど、牛乳の方がよりふさわしい。

「さて」

僕は自販機のそばまで行って、牛乳を探す。

売り切れになっていたら、どうしようかと思ったがちゃんと置いてある。

なので、それを買って直のところまで戻ると、直はすでに牛乳を飲み終えていた。

「春」

「なに？」

「お願いがあるんだけど」

直のお願いと聞いたら、もうピンとくるものがある。
スケットだ。

僕は直の言うであろう言葉を制して、牛乳を飲む姿勢を身体で表現してみる。

「どう？」

「さすが、春」

そして直は、ポケットからメモ用紙を取り出し、さらさらとグニッサンを開始する。

直の要望通り、一、三分だけその姿勢。

もう銭湯の営業も終わりに近いせいか、まわりには誰もいない。よくあることとして、直がデッサンしているあいだ僕がポーズをとっているのを不審がる人なんかがいるけど、今日はその心配もない。

「出来た」

「え、終わったの？」

「うん。あ、もうちょっと」

「わかった」

「よし、今度こそ出来た」

その直の言葉を聞いて、姿勢を崩す。そして一気に牛乳を飲みほし、一息つく。

「ふっ」

口をぬぐいつつ、直に言う。

「やっぱり直は描くの早いね」

「デッサンは早く書けるのが取り柄」

「そうだった」

僕は直の絵を見ながら納得する。

「さて、そろそろ閉まる時間だ」

「ほんとだ」

「出ようか」

「ん」

直と僕は、急いで帰る支度をする。

そして程なくして準備を終え、店頭の人にあいさつをして外に出た。

外に出ると、気温が下がっていて肌寒い。

「あ、星」

直が夜の空を見上げて言う。

空を仰ぎ見れば、星がたくさんある。

「やっぱり秋の空は澄んでいる」

「そうなの？」

と、僕は聞き返す。

「そつだよ」

「へえ」

僕にはその違いがわからない。

けど、直が言うのならそつかもしれない。

2・8 鳥子の話

結局、僕達は星のことを話しながら、東風荘の前までやってきていた。

しかしそこで足を止めたのは、東風荘で一番の不思議な人である鳥子さんが、空を見ながら微動だにしないで固まっていたからだ。

「おや、春くに直さん。こんな時間に帰ってきてどうしたのかな、と思えば銭湯にいつてらしゃったんですね。こんばんわ」

「こんばんわ」

直も僕と同じようにあいさつする。

今日の鳥子さんは、神秘的な雰囲気一拍車をかけるように全身黒づくめの格好だった。

「あの」

「どうしました？ 春くん」

「今、何をしているんですか？」

「それは私のことを聞いていらっしゃるのですか。ああ、きっと私のことでしょうね。このミサにでも行くような格好に気を取られているのでしょ」

「はい」

「ん」

僕達はうなずく。

すると鳥子さんが説明をはじめ。

「じつはですね。春くん、直さん。私の事情というのはたいしたことではありません。本日は私の師範だった人が亡くなった命日でしたので、哀悼の意を込めてこの格好をして、月を見ていたところなんです」

「そうですか、それは」

僕はなんとも言えずに、あいまいに言葉をにぎす。

「そうして、世界の中での自分の存在を確認していたところなんです」

「自分の存在を確認？　ですか？」

「そうですね。自らの存在は脆く儂く途端に崩れ去ってしまうもの。だから私は空を見て、星を見て、月を見て、そして自分を立ち止らせて固定していました」

「はあ、そうですか」

「はい」

「哲学的ですね」

「ん。哲学的」

直も言葉をはさむくらいだ。

「いいえ、そんなものでありませんよ。ただ、何秒か、自分を意識的に立ち止まらせて固定してあげればいいだけなんです。そうですね、貴方達も一緒にやってみましょうか」

「え」

おもわず声をあげてしまう。

「大丈夫です。そのお手伝いを私がしてあげましょう」

「あの、鳥子さん？」

「さあ、上を見てください」

その言葉と同時に、直と僕はマリオネットで操られたかのように上を向いてしまう。そしてさらに、身動きがとれなくなる。まるで金縛りにあつたみたいにならない。

時間にして、一分間。

しかし、世界の中での自分の存在を確認するには十分な時間だった。

「これも、私の師範だった人が教えてくれた人体のツボをつく技なんです。せつかくなので貴方達に教えてさしあげましょうか？」

「え、いいんですか」

もっとも習得できるかどうかは疑問である。

「はい、今日は師範の命日なのでいいでしょう」

「では、お願いします」

「じつはある一部分をつけば、誰にも実践できる技なんですよ。美咲さんにかまれたときにでも試してみたらいかがでしょうか」

それから鳥子さんの師範の話をたくさん聞いて、家に戻る。
家に着いた時はすでに十時半。

一日の終わりが刻々と迫ってきている。

僕達はいつもと同じように布団を並べ、寝る準備をはじめ。
前に鳥子さんが地震の予言をしていらい、直は布団をぴったりと
くっつけるようになっていく。

今日も、少しずつ少しずつ布団を近づけてくる。

「春」

「何？ 直」

僕は直にたずねる。

「私、春のことお兄ちゃんって言わないから」

「えっ？」

先日の発言を気にしての直のセリフだろうか。
しかし、こっちはもう気にしていない。

「お兄ちゃんって呼んでいいって言ったこともなしにする」

「それは無理なんじゃ」

「ううん。ノーカウント」

無表情だったが凄い剣幕であるのかのように錯覚させられる。
それくらい直は必死だった。

「わ、わかったよ」

結局、僕は直の勢いに押されてごうごうぶやいてしまう。

「ん」

直は満足したのか、いつもどおりうつぶせになった。
そして足でシーツのしわを伸ばすいつもの直のしぐさを見届けながら、僕はいつものように一日を思い返す。

155

やはり今日は『ジモティーズ』での活動について。
何よりも困っていた竹内さんの手助けができた。
試合には大敗してしまっただけ、楽しんでてきたことがとても良かった。

そう思い返しながら寝返りをうつたところで、僕の携帯が鳴る。
ディスプレイに表示されていたのは綾。

「直」

「ん？」

「今から電話する」

「わかった」

「相手は綾」

「ん」

一応、直に伝えてから、電話に出る。
そして電話を耳元に当てると、元気がない綾の声が聞こえてきた。

『春』

「どうしたのさ、綾」

『うん』

「家で何かあった？」

『べつに大丈夫』

とはいうが、事実、綾の家庭環境は二年前に大きく変わっている。
母が再婚して、普通では信じられないくらいに大きな家に住み始め、綾自身はお嬢様の真似ごとをするようになった。

『あのさ、春』

あいかかわらず元気がない綾。
僕はできるだけ明るい調子で言う。

「大丈夫だよ」

『え?』

「元気がないときは、またあれをやればいい」

『また、あれやってくれるの?』

「いいよ。いつでも」

と、僕は返事をする。

「問題ないから」

と、さらに付け加えもした。

『でも、そろそろやめないと』

「そんなことないよ。綾の欲するままにすればいい」

そう、僕達は悪いことをしているわけではない。

ただ、誰にも理解されないだけだ。

結局、綾は少し考えた後こう言った。

『じゃあ、今週の日曜日をお願いしていい?』

「うん、わかった」

『服はいつもどおり私が持って行くから』

「オッケー」

『私、わがままでごめんね』

「いいよ。わがままなのが綾だから」

『そうだけど。でも、そんなことないもん。春のばか』

「そっか。僕はばかだよ」

『ううん。ちょっといいすぎた』

「そっ」

『とにかく、ほんとにありがとう。春』

「うん。いいよ」

直も知らないこの秘密の遊戯。

それは互いに性別を交換しあい、夜の街へと繰り出すこと。

しかしそれこそが、唯一、幼馴染の綾に頼られているのだと僕は実感していた。

2 - 10 カラオケ (1)

鳥子さんが予言していた大きな地震。

それがやって来たのは、あの鍋の日から一週間後の夕方のことだった。

この日は、とうとう彼氏に振られてしまった美咲さんが家に来ていて、なぜか心を落ち着けるために直と僕とでジエンガをしていた。そして、そのジエンガが地震によって崩れていく。

「春、地震」

無表情で微動だにしない直がつぶやく。
けど、その声色は不安そうだ。

「うわー地震いやだー。あんな男なんてもつとやだー」

対する美咲さんは、心を静めていた効果もなく大騒ぎしている。
美咲さんも地震は極端に苦手だという。

もつとも、地震に強い人などいない。

地震はしばらくのあいだ揺れ続けて、僕達を不安にさせていく。
積み上げてあった本や、ちょっとした小物が落ちたりもする。

そうして、数分後。

ようやく地震が止まってくれた。

一息ついたあと、部屋の片付けをはじめ。

片付けの最中、直がいきなり声をあげた。

「どうしたのさ？」

美咲さんがびっくりしたように聞く。

「これ、地震で落ちてきた本のあいだに挟まっていた」

「本？」

直がなんかの券みたいなのを美咲さんに見せる。

だが美咲さんは、それより先に直が持っている本の方に注目。

「って、これ『親愛なる義妹』じゃん。やっぱりこの部屋にあったのか。ないない、と思ってたんだよな春坊」

「なんでそこで僕を呼ぶんですか」

美咲さんに対しては、どうもつつこみが先に来てしまう。

「しかも春坊ってやつは、こんな大事なバイブルを、あんなところにのさばらせていたのか」

「あんなところって、それよりもバイブルってなんですか」

「バイブルはバイブルでしょ」

「それじゃあ、僕が変態になってしまいますよ」

「いいじゃん」

美咲さんは僕の肩をぽんぽんと叩く。

果たしてそれはどういう意味なのだろうか。

「ところで、美咲」

「ん？」

「これ」

直が、本に挟まっていた券を美咲さんに渡す。
すると、美咲さんがつぶやいた。

「カラオケの半額券？」

「えっ、カラオケ？」

僕もつぶやく。

「しかも今日までじゃんこれ」

ここまで聞いて、なんだかすごく嫌な予感がした。

というのも、美咲さんが彼氏に振られる。僕がデートの相手としてあてがわれる。デートがカラオケになる。美咲さんがマイクを離さないで歌い続ける。

そんな方程式が出来上がっていたからだ。

「よしっ！　じゃあ行くか」

「えっ？　そんな」

がしつと、腕でヘッドロックされた僕。

抵抗する余裕も与えない。

そして、顔にその大きな胸が当たっているのも全く気にしない美咲さんがさらに言う。

「行くのか？　行かないのか？」

一瞬、鳥子さんに教わった相手の動きを止めるツボでも押そうかと思った。

けど、倍以上になるであろう報復が怖かったので、直前で躊躇してしまっ。

「さあ、どっちなんだ？」

さらに胸を押しつけてくる美咲さん。

これでは攻撃されているのか、恩恵を受けているのかわからない。

「はつきりしなさい、春坊」

「あ、えっと」

そう言いつつも、直の様子をちらつと確認してみる。

しかし、直は我関せず、といった様子で部屋の片づけ。

助けを求めても無駄だろう。

「で、どっちなんだい」

「い、行きます」

「もっと嬉しそうに」

「行かせてください。お願いします」

僕は心の底から正反対のことを一生懸命に叫んだ。

「よしっ！ さすが春坊」

美咲さんは納得したのか、ようやく僕を離してくれた。

「じゃあ、直っち。私と春坊はちよっくらストレス解消のデートしてくるから。お留守番を頼むぞ」

「ん。わかった」

直がうなずく。

「美咲。いつものデートだよね」

「そうそ」

「春」

そして僕を呼ぶ。

「何？」

「私、料理作っていい？」

「料理？」

「うん」

「材料はあるの？」

「いつものスーパーで買ってくる」

僕の真正面に直の無表情が広がっていた。

「いい？」

「うん」

「綾に負けてられないから」

ただ僕は、上手くいくように祈るしかない。

「それじゃあ、春坊。準備して」

「はい」

僕は美咲さんに言われたとおり準備をする。
財布と携帯、それと心の準備を忘れずに。

「さ、行くか」

「はいはい。あ。ちょっと待ってください」

もう玄関を飛び出している美咲さんを追いかけるために、僕も急いで靴を履く。

けんけんをして靴をしつかり履き、直に声をかける。

「じゃあ、直。行ってくるから」

「ん。じゃあね」

「うん」

「あ。春」

直がすべてを見透かしそんな視線でこっちを見る。

「えっと、何？」

「『親愛なる義妹』はどうするの？」

「えっ？」

「『親愛なる義妹』」

「す、捨てていいからね」

僕はそう言うしかない。

美咲さんと僕が東風荘を飛び出したのは、西日がオレンジに染まっている夕方。

市街へと繰り出すには遅い時間だったけど、カラオケ店はそこにあったので、僕達は急いで小学校前のバス亭に向かった。

幸い待っていた行き先のバスはすぐ来てくれた。

一時間に二、三本なので、タイミングがぴったしだと得した気分になる。

「ちょうど良くバスが来ましたね」

バスに乗り、二人して後ろから二番目の座席に座る。

美咲さんが窓側、僕が通路側。

美咲さんはこどもみたいに窓側を喜んでいて、あいかわらずだと僕は思った。

「座れました」

「そりゃそうさ。私がそうなるようにちゃんと計算していたからな」

「そんな甲斐性、美咲さんにはありませんよ」

「なんだと、生意気な春坊め」

「いてててて」

笑顔で頬をつねられる。

「やっぱり頬がこんなに伸びるから、春坊はエロイな」

そして僕の頬をさらに伸ばそうとした。

「そんな言いばかりやめてください」

「言いがかりじゃないぞ」

「言いがかりですよ」

僕は改めて主張する。

「だったらなんでヘッドロックしたとき、顔がにやけていたんだ？」

「そんなことは」

「いいや、にやけていたさ」

鬼の首を取ったようにしてやったりの美咲さん。

なんだかとても悔しい。

「まあ、にやけていいけどな。おかげで私の自尊心は見事に回復したから。やっぱり私も捨てたもんじゃないわけだ」

そりゃそうである。

なんとたつて美咲さんは華の女子大生。
ずばらなことを除いてよくよく見れば、かなりの美人さん。

「つまり、私いけないんじゃない、包容力がないアイツの方がいけないってことだ」

美咲さんは一人納得してそう言う。
けど、それはどうかはわからない。

美咲さんのいい加減な性格に呆れ果てているかもしれない。

「おい、春坊。またろくでもないこと考えているな」

「いいえ、滅相ありません」

「嘘付け」

美咲さんがぐにぐにと頬をいじりまわす。

「やめてくださいよ」

と、僕は言う。

しかしそうやってじゃれ合っているとき、僕の目の前にある人が立っていた。

「さ、坂本。あなたなにしてるの？」

立っていたのは、綾の親友の小平さん。

ショートカットで感情の起伏がけっこう激しい人だが、僕との相性はあまり良くない。

間の悪いタイミングで登場していつも誤解される。

前も、美咲さんにむりやりデートさせられたとき、腕を組まされたところで小平さんが現れた。最近も、僕と小平さんがぶつかって、小平さんの上に乗ってしまった。

そう、なぜかタイミングの悪いところでいつも鉢合わせ。

それが小平さんと僕の関係。

だから、きつと今も誤解される。

「坂本には綾がいるのに」

「えっ？」

「えっ、じゃないでしょ。このすけこまし」

言葉とともに、チョップが降ってくる。

空手を習っている小平さんの強烈な一撃だ。

「これでも手加減してんだから」

「いてて、ほんとに？」

「ほんとにじゃないでしょ」

小平さんが僕を見て怒る。

「で、この人とはどういう関係なの、坂本。返答しだいでは綾に言いつけるよ」

「綾に言いつけるって。それに美咲さんとの関係は話したような」

「うん、聞いた。けど納得がいかない」

さらに小平さんは、僕に向けてびしつと指をさす。

「そういえば坂本、前見たときは腕組んでいたよね」

「そうだけど」

仕方なくうなずく。

「そうだけどって坂本。そんなんじゃないでしょ」

あいかわらず小平さんは、すごい勢いでまくし立ててくる。

僕は不謹慎にも、めんどくさいなあ、と思ってしまった。

「あ、それとあなたも説明してください」

「え、私？」

自分を指差す美咲さん。

美咲さんは今までやけに静かだった。

けど明らかに、小平さんと僕のやりとりを楽しんでいる。

なぜなら、その表情には愉悦を隠しきれないでいるからだ。

「そうです。あなたです。あなたは中学生を誑かして何が楽しいんですか？」

まるで風紀委員のような小平さん。

それはまたいきすぎである。

しかし美咲さんは、そんな小平さんを相手に、煽るかのような発言をしてくれた。

「楽しい？ そんなのあたりまえじゃん。だって春坊は、私のデー
ト相手だもん」

「坂本、どういうこと？」

「そんなこと言われてもさ」

「説明しなさい」

「えー」

結局、このやり取りが目的地に着くまで続いた。

2 - 1 2 カラオケ (3)

「せっかくだから三人でカラオケ行かない？」

バスを降りてすぐ、美咲さんが小平さんに提案する。

「真由つちならいいよ」

しかも、下の名前で呼んでいる。

「どう？ 春坊」

「僕もいいですよ」

しかし小平さんは、どうしてこんな展開になったのかと腑に落ちないような顔をして言う。

「私は、買い物に來ただけです」

「え、いいじゃん」

「それに坂本なんかとデートしたくありません。こいつは顔がいいだけで女の子にちやほやされる優柔不断なんです」

「そうなんだよな。しかもアンニユイ系だし。顔がいいかは見方によるからわからないんだけど、意外ともてそうな感じで、でもそのチャンスをふいにする感じでもあるんだよね」

なぜか僕があて馬にされている。

おかげでとても居心地が悪い。

「まあ、それはおいといてさ。真由っちも行くこう」

「その呼び方やめてください」

「いいじゃん、真由っち。で、行くんでしょ」

「私は買い物」

「はい、それはまた今度」

「でも」

「いいの」

こうして、美咲さんのペースに乗せられた小平さん。

僕達と一緒にカラオケへ行くこととなる。

「坂本、勘違いしないでよね。私は二人がへんなことしないかどうか見守りに行くだけなんだから」

「なにそれ？」

美咲さんが豪快に笑ってる。

「坂本、聞いているの」

「うん、聞いている」

そして結局、こじやれたカラオケ店に三人で入った。

案内にされた部屋に入った瞬間、美咲さんは即座に店員を呼び付け注文。

カラオケの券を使ってしっかりと割引もおこない、注文したサイドメニューがどんどんとやってくる。

「なんで飲み物は全部オレンジジュースと生ビールなんですか」

「え、いいじゃん」

「それにサイドメニューは揚げ物やフライドポテトでバランス悪いし」

小平さんもショートカットをいじりながら文句を言っている。

「こら、文句を言うな中学生達」

「小平さん、この人はいい加減だから」

「ほんとにそうね」

そう言われても、やはり美咲さんには何の効果もない。もう既に、自分の歌いたい曲を入れていて、臨戦モードに入ってる。

こづいうのは楽しんだもん勝ちなんだろう。

小平さんと僕は、一緒になつてため息をつく。
ここに来て、初めてわかりあえた気がした。

「ほら、何してんの二人とも。私が三時間全部入れちゃうぞ」

振られたとは思えないくらいテンションの高い美咲さん。
リモコンをぶらぶらさせながらそんなことを言う。

「待ってください」

「ん？ 真由つちも歌うのかい」

「はい。私も入れます。で、坂本は？」

「一応、僕も歌うよ」

「ふーん。それは意外」

「こう見えて僕は歌う方」

歌は上手いとか下手とかはべつにして好きである。
歌うことにも特に抵抗はない。

「んー。じゃあ、しょうがないな。二人のぶんの時間も開けといて
やるっ」

とはいうが、最初の一時間半は美咲さんのメドレーが確定。
じつは、これがけっこうしんどい。

なぜなら美咲さんは、自分が気持ちよく歌うだけの歌い方をする

し、何より演歌が好きで、僕達は聞いていても中々乗れない。
つまり、退屈をもてあます。

しかも美咲さんは、自分の歌をしつかりと聞くのを強要してくる。
なので、体力まで消耗する。

「さ、坂本」

「何？ 小平さん」

「い、いつまで続くの？」

「もう少しだよ」

「……」

小平さんから声にならない叫びが聞こえた。

「もう疲れたよ、パトラッシュ」

「がんばろうって、小平さん」

こっちはこっそりと声援を送るしかない。

そんな中でも、美咲さんはあいかわらず気持ちよさそうに歌っている。

「しかも、なんだか眠いんだ」

「眠っちゃだめだ。小平さん」

「じゃあ坂本、私の話を聞いて」

「うん。なんでも聞くから」

「私生まれ変わったたら木になるの。木の一部になって、風や訪れる鳥達を感じるの」

とつとつ壊れてしまった小平さん。

僕は頭を抱える。

「ねえ、小平さん？」

「ん？」

「これがデートに思える？」

「ごめんなさい」

「思えないよね」

「私が悪かったです」

そうして美咲さんの一人メドレーが終わった頃には、小平さんは歌う元気がなくなっていた。結果、彼女は最後まで歌うことができなかった。

「終わったあ、坂本」

「うん」

「楽しかった？ 真由つち」

まだまだ元気な美咲さんが笑顔で問いかけてくる。

「は、はい」

これこそが、美咲さんのバイタリティーのすごさに恐怖の片鱗を感じた瞬間だ。

こうして今回の美咲さんとのカラオケは、小平さんにトラウマを植えつけただけになってしまった。

2 - 1 3 美咲の涙

疲れ果ててしまった小平さんとはバスの中で別れる。

そして小学校前のバス停で降りた僕達は、東風荘近くのいつもの坂を下っていく。

「美咲さん」

「ん？」

「あいかわらずのニューカマー殺しですね」

「ニューカマー殺し？ ああ、そういう意味ね。ホントは私、そんなつもりはまったくないんだけどさ」

「どこがですか」

今日、小平さんの身に起こった光景を思い浮かべて、僕は言う。

「どこがですかって言われてもな。どうしてもか私と一緒にいると相手は疲れるんだよね。じつは今回振られた理由もそれだし。春坊は疲れる？」

「疲れますよ」

「でも、そんなの関係ないや」

「そうですか」

僕はがっくりと肩を落とすが、美咲さんは気にしない。

「あーあ、どっかに包容力のある男はいないかな」

秋の夜風を受けながら、くるくる回る美咲さん。

バランスを崩して、電信柱へとぶつきりそうになっている。

「千鳥足ですよ、美咲さん」

「んー。これわざとやってんの」

「そうなんですか？」

「そうそ。なんか重力を感じたくてさ」

そう言って美咲さんは、さらにぶらんぶらんと手足を動かす。そこだけ見れば奇々怪々な動きで、イソギンチャクみあいである。

「じゅーりょーく」

美咲さんはまだ重力で騒いでいる。

と思っただが、それっきり黙ってしまった。

奇妙に動かしていた手足もだんだんとまともになっていき、そのまま歩みが止まる。

「どうしたんですか？」

僕は聞いてみるが、うつむいたまま顔を上げない美咲さん。それを見て、酔って気持ち悪くなったのかなと思う。

しかし路上にポタポタとしずくが落ちていき、これは涙なんだろうかと思って隣を見ると、やっぱり美咲さんの涙だった。

美咲さんの涙なんか見たことない僕は、心底驚いている。

「あれ、私泣いている？」

一人ごとのようにつぶやく美咲さん。

僕は黙っているしかない。

どうすればいいかわからないのだ。

「私、どうしたんだろう。春坊」

美咲さんはさらにほろほろと涙を流す。

「ほんとにどうしたんですか？」

「わからないよ。でもなぜだか悲しいんだ」

そして美咲さんは、とうとうと語りはじめる。

「なんか、今回のことはショックだったのかな。大学の友達と街に繰り出したときは、ぜんぜん悲しくなかったのに。どうしてだろう。今はとても悲しい」

そう言って涙をぬぐう。

「きつと春坊のせいだな」

こつ、と拳で額を殴られる。

しかしいつもの乱暴な美咲さんではなく、心の内側まで響く優しい拳。

僕には美咲さんとその男のあいだに何があったのかはわからない。でも、美咲さんと彼は繋がっていたのだと思う。だからその輪郭を失って、戸惑っている。

「美咲さん」

「ん？」

「大丈夫ですよ」

「何を言う」

「また朝が来るんですから」

なぜだかわからないけど、そんな言葉が飛び出す。言われた美咲さんは、ほづけたように僕を見る。けど、ふふふと笑いだした。

「春坊のくせに生意気な」

「いてて」

今度はきつい拳をお見舞いされる。

でも、表情はいつもの美咲さんに戻っていく。

「春坊のばーか。そんなこと言うな」

「すみません」

「でも、なんだが悲しくなくなった」

ノビをしながら言う美咲さん。

「そうですね。良かったです」

「ああ、良かったよ。でも良くないこともある」

「え、それはなんですか？」

「春坊にお礼を言わなくてはならないことさ」

「お礼？」

「そう、お礼だ。こんなこと言うのははずかしいから一度だけだぞ」

美咲さんが僕を見つめる。

「ありがとな」

そして美咲さんは、僕の頭をくしゃくしゃと撫でてきた。

美咲さんが直の料理を食べていくというので、家に寄ることになった。

美咲さんは一度家に戻り、それから十分後に改めてやってくる。

なのでそのあいだ、僕は直の料理の味見をする。

直の作った料理は、一汁一菜、それと豚肉とレンコンの炒め物というシンプルなもの。

しかし直の手にかかれば、なぜか味気なくなってしまう。

「春、どう?」

直が期待を込めたまなざしで聞く。

でも、その期待に応えてあげられないのが悲しい。

「やっぱり味気ないな」

「そうなんだ」

しゅんと落ち込む直。

「でもさ直、食べられるんだからオツケーだよ」

僕はそう言うが、直は納得しない。

「私上手になりたい」

「うん」

「それで春にもっと喜んでもらいたい」

そして直が、無表情でそんなことを言う。

「その気持ちだけでうれしいよ」

「ううん」

しかし直は首を振る。

「そんなんじゃないだめ」

「だめじゃないって。料理が少しくらい上手くないのも愛嬌があつていい」

「ううん」

「ううんってさ。それでいいのに」

「そんなんじゃないだめ」

結局、料理のことより、直をなだめる方が大変だった。

綾に触発されたのか、直は自分の料理の腕前に納得いかないようでとても悔しがっている。

それは美咲さんがやって来てまあいかわらずの姿勢で、彼女もびつくりしていた。

「どうしたの、直っち」

美咲さんはもつすつかり元に戻っていた。

いつものようにおちゃらけてさえいる。

さらには、カラオケ店でも生ビールを飲んだのに、ここでも缶を開けていた。

「どうも直は自分の料理に納得がいてないんです」

「そうなの？ 直っち」

「ん」

「どれどれ」

美咲さんは、直が作った料理を食べる。

もぐもぐと咀嚼して、味を確かめている。

「うーん」

そしていつも直の料理を食べるときのように、首をかしげて感想を述べる。

「正直言つとね、直っちの料理はおいしいんだかおいしくないんだかわからない微妙な線についてきてつっこみづらいんだよね」

「そうなの？」

直が無表情で聞く。

「そうぞ。なんていうか、なにかが抜けているような感じですか」

「それを味気ないというんじゃないですか？」

僕はすかさずつけ加える。

「そう。味気ないっていうんだな、これは」

レンコンの穴をのぞきこみながら美咲さんは言う。

やっぱりその結論になってしまっ直の料理。

直が料理を始めてから、ずっと僕が言っていること。

「美咲。私、どう料理すればいい？」

直が美咲さんに料理のことを尋ねる。

こんなことは初めてであったので、僕は驚く。

つまり、それだけ切実に上手くなるのを願っている。

「どう料理すればいいって、やっぱり練習するしかないんじゃない
？」

「直は練習してますよ」

「じゃあ、そうだな」

美咲さんは腕組みをして考える。

「よし、私が一肌脱いで手本を見せてあげることによろっ」

「ほんとに、美咲」

直が声を上げて喜ぶ。

だが、美咲さんの料理と聞いて、僕は逆に不安になっていく。

そしてその予感現実のものとなった。

まず、直のエプロンを借りて冷蔵庫をのぞきはじめて美咲さんは、
衝撃の一言を口にする。

「で、どうすればいいの？」

「美咲さん、大丈夫ですか？」

「ん？ 何が？」

平然とした調子でつぶやく美咲さん。

直も無表情ながら心配そうな顔をしている。

「それで何をすればいいんだろ？」

美咲さんは何も考えていないような顔でさらに言っ。

「そっだ。なにかリクエスト出してよ」

「リクエストですか？」

「うん。なんでもやってみせるぜ」

そんなことを言うが、もう美咲さんの料理には何も期待できない。第一よく考えてみれば、足の踏み場もない美咲さんの部屋で料理なんてできるはずもない。

だから僕は、初心者でも出来るだけ問題なさそうな玉子焼きを指定した。

「オツケー。任せとけ、春」

美咲さんは威勢よく返事をする、卵を冷蔵庫から取り出す。

しかし卵を取り出した段階で落としそうになっていて、料理なんてしたことないような感じのあたふたさを醸し出している。

「おっとっと」

「ちょっと美咲さん。本当に大丈夫ですか？」

おもわず声をかけてしまう。

「大丈夫だって。食べれないものなんてこの世にない」

もう不安で仕方ない発言だ。

「玉子焼きなんだから、焼けばいいのさ」

2 - 1 5 美咲の料理 (2)

結局、美咲さんの玉子焼きはさんざんな出来で終わった。

直の料理の腕なんて比じゃないくらいにひどくて、卵を割る段階からたくさん問題が発生した。

塩や砂糖の加減も何度も間違えて、しまいには卵本来を味を楽しむということになってしまっくらいだった。

おかげで、卵を何個もムダにしたかわからない。

「どうだい、直っち。努力すればいつかは成功するのさ」

やっとのことで成功した玉子焼きを抱えて、美咲さんが自慢げに叫んだ。

「どんなごまかし方ですか」

しかし直は感銘を受けたようで、うんうんと何度もつなずいている。

一応、失敗から成功の過程を見ているおかげか、説得力はあった。

「ほら、二人とも食べてみなよ」

「ん」

直がいち早くつなずき、玉子焼きを口にする。

「ん。おいしい」

「ほら見る、春坊。調味料なんかいらなかったんだ」

「いいや、原則としてそんなことはないですから」

「じゃあ、食べて見ればいい」

美咲さんは箸を僕の目の前にかざす。

「これ、なんの真似ですか？」

「口開けてっつてこと。あーん」

「しませんよ。自分で食べますから」

「だめだ。春坊、食べるふりして食べない可能性がある。だからあーんしなさい」

「断わります」

目の前に広がっている光景は、よくカップルなどがやる行為だが、けっしてそんな甘い雰囲気ではない。

これは自尊心をかけた意地と意地の張り合いだ。

「口を開けなさい」

「いやです」

「じゃあ、鳥のエサみたいに放り込んでやる」

その言葉を最後にして、瞬時に戦闘へと変わった。

箸をのどに突き刺しそうな勢いで、美咲さんが迫ってくる。

危なくてたまらない。

だから僕は、必死でそれを避け続けた。

「くそ、おぬしなかなかやるな」

美咲さんが一度箸を置いて、気合を注入する。

僕はまだやる気なのかとうんざりする。

そしてそのときだった。

「美咲ばかりずるい」

なんと敵が二人に増えた。

直まで、自分の作ったおかずを挟んで箸を差し向けてくる。

「春」

「何、直」

「あーん」

「……」

直が切れ長な瞳で見つめてくる。

この瞳はすべてを見透かしてしまいそうな瞳だ。

「あーん」

「待つて直」

「あーん」

全然話を聞いてくれない。

美咲さんは直の暴走を楽しんでにやにやしている。

いつのまにか自分が突撃するのを止めて、缶を片手にくつろぐ始末だ。

「春」

無表情の圧力をものすごく感じる。

「食べてくれないの？」

直が嘆願する。

「えっと」

僕はというと、これ以上ないくらい困惑。

目の前に向けられている箸の破壊力は、直に手を握られたときをも上回る。

「お兄……じゃなくて、春」

「はい」

「あーん」

やはりとっていいか、直の頑として譲らない姿勢は変わらない。なので僕はとうとう根負けして、直の箸のおかずの御相伴にあずかる。

すると、美咲さんが鬼の首でも取ったようにこっちを見てくる。

「やったね、春坊」

にやりと底意地の悪い笑い。

「直のあーんが食べられて、私のあーんが食べられないなんて言わせないぞ」

再び箸を持った美咲さんが、玉子焼きをつかんだ。

「さあ、行け。私の玉子焼き」

そして箸を目の前に出される。

「あーん、と」

「もうなんでもいいです」

「じゃあ、あーん」

「はい」

できるだけ意識しないように、美咲さんが出してくれた箸へとか

ぶりつく。

「おいしい?」

「おいしいです」

その言葉は本当で、卵本来の味がふわりと広がっておいしかった。

翌朝、今日も直に起こされた僕は、直のいきなりの宣言を聞かされた。

「春、これからは私が料理を作る」

「え？」

と、僕は驚く。

額に『努力』のはちまきをしている直。

なんだかとてもやる気に充ちあふれている。
なので、否定はできない雰囲気だ。

「春、私が料理する」

「でも」

「努力すればいつかは成功する」

力こぶしを込めるといふ似合わないしぐさで直が言う。
どうやら美咲さんの言葉を信じ込んだ直に死角はない。

「じゃあ、今までの当番制はどうするの？」

「私に全部任せて」

「弁当も？」

「ん」

今度も力強くうなづく。

テーブルの上を見てみると、トーストとサラダに目玉焼きといういつものメニュー。

この定番のメニューでも、直が作るとなぜか味気なくなる料理。原因はわからない。

ともあれ、起きぬけの僕は顔を洗いに洗面所に向かう。鏡を見て、これからどうすべきかを考える。

「春」

「ん？」

「早く朝ご飯を食べよ」

「うん」

言われた僕は、いそいで顔を洗いテーブルに向かう。

「いただきます」

「いただきます」

そしていつものように向かい合わせて食べはじめる。

直はまだはちまきを取っていない。「努力」の文字がなんだか僕に迫ってくるようで居心地が悪い。

なので僕は直に言う。

「直」

「何？」

「はちまき取らないの？」

「ん」

直はうなずく。

どうやら予想外にはちまきが気にいっているようだ。

「でも、学校へ行くときは外すよね」

「ん」

「そっか」

「でも、気にいっている」

直が無表情ながら嬉しそうにはちまきを触る。

努力、努力、努力。

文字が躍動する。

「そうだ」

「何、直」

「料理はどつ？」

「料理？」

「うーん」

言われて僕はしぶい顔になる。

直の料理は変わらない。

根本的に味気ないのだ。

「だめ」

「だめじゃないよ、うん」

「うそ」

「うそじゃないって」

「ほんと？」

「うん。あ、スケッチ見せて」

これ以上目を合わせてられない僕は、ごまかすために直のスケッチに手を伸ばす。

中を開けば、屋上の風景から始まりいろんな場面が描かれている。べらべらとめくっていくと明らかにネコの絵が多くなっていった。

「直、最近はネコばかり描いているね」

「ん。私のまなネコ」

直が目を細めて言う。

「どうやら上手く話題をそらせたようだ。」

「近所にいたあのネコだよね」

「そう。もふもふしてかわいいやつ」

前に都立公園近くで見つけたまだらのあるネコ。

あの後も、直との邂逅を果たしていたのだろうか。

「あのだ、直」

「ん？」

「直は動物に好かれるよね」

「そう？」

「そうだよ」

そう、直はわりと動物に好かれる。

直の雰囲気はそうさせているのかはわからない。

けど、僕と比べてその違いは明らかに顕著であった。

「そうそう」

直が口を開く。

「私、勝手に名前つけた」

「名前？」

「ん」

「で、どんな名前？」

気になったので、僕は聞いてみる。

「ナマネコ」

「え？」

「ナマネコってつけた」

「ナマネコ」。

それはどういう意味なのか。

「意味？」

「うん、どういう意味？」

と、僕は聞く。

「名前に意味なんて必要ないよ」

と、直は答える。

昼休み。

いつものように購買のパンを求めにいった小倉くんが帰ってくる。そして直と僕とが一緒に机を並べているのを見て、一言言っつ。

「今日は直がいるんだな」

「ん」

小倉くんは近くの席を借りて座り、指を折り数える。

「昼食のとき、兄妹が二週間ぶりくらいか」

「それくらいかな」

僕もつぶやく。

「そうだ、そうだ。前に直がいたときはスケッチを見せてもらったな」

「ん」

弁当を開け、昼食の準備を整える。

直と僕は中身が同じ。

今日の朝、直が料理をする宣言したため、直が作っている。

「やっぱり同じなんだな」

あはは、と笑いながら小倉くん。

「さて、じゃあ食べるか」

僕達二人はうなづく。

「いただきます」

「いただきます」

「いただきますっ」と

「ところで直。今日はどうしたの？」

食べてる途中、僕は直に聞く。

「ん。綾が来るから」

「ん？ 遠藤が来んのか。そしたら俺はここにいていいのだろうか」

パンをもそもそと口にしながら小倉くんが言う。

「いや、気を使いすぎだよ。小倉くん」

「でも、幼馴染のおまえはいいけど、俺なんかは遠藤みたいなお嬢

様がいると緊張してしまうんだよ」

確かに綾がうちのクラスに来るときは、小倉くんは一步引く。他のクラスメイトが騒ぎ立てるのを尻目に、彼は違った対応を取る。

「小平さんも来るよ」

「え、小平も来るのか？」

綾の親友である小平さんも来るといふ。

僕とのあいだに誤解があった小平さんとは、昨日関係がたいぶ改善された。もっとも、小平さんに新たなトラウマを植えつけてしまったけど。

「小平が来るのか。なら俺がいてもいいのかな」

というのは、小倉くんと小平さんが空手部で知り合いだからだろう。

僕とは違い、小倉くんと彼女の関係は良好だ。

「あ、来た」

直がつぶやき、僕達はそちらを見る。

ドアの前にいたのは綾と小平さん。

二人が満を持してうちのクラスに入ってくる。

そして二人の美少女がクラスに入ってきたことで、ざわざわとした空気ができあがっていく。

「春、直。来ちゃった」

目の前にはお嬢様のふりをした綾。

小平さんを引き連れて、ここの席までやってきた。

「今日は、真由が春を誤解していたとのごことでどうしても謝りたい
つて」

「綾。私そこまで言っていない」

綾にひじをつく小平さん。

綾は上品に身をよじり、その光景を見たクラスの男子達が騒ぎ立
てる。

やはり二人は注目を集めている。

綾だけでなく、小平さんも相当の美少女だけあって注目度が高
い。

「綾、座って」

直が言う。

「うん」

「真由も」

「わかった」

二人が座り、五人が班を作るような形になる。

並びは直が上座のような位置に座り、そこから左に綾と僕、右に

小平さんと小倉くん。

「私達もここで食べていい？」

「うん、いいよ」

綾が聞くので、僕は答える。

「もう先にご飯食べていたけどね」

こうして、五人で話をしながら昼ご飯を食べていく。

このとき、小平さんが僕に正式な詫びを入れたりして、へんに盛り上がったたりもする。

そして昼ご飯を食べ終えて一息ついた頃、小倉くんがウノを取り出して言う。

「よし、二人の誤解もなくなったことだし、仲直りの印としてこれでもしょうか」

「ん」

直がいち早くうなづく。

「私もやるのかな」

綾も賛同する。

一応、当事者である小平さんと僕。もちろん反対するわけではない。

「ルールは大丈夫だよな。じゃあ始めるぞ」

カードを配り終えた小倉くんが親役のように仕切り、ウノがはじまった。

クラスメイトの喧騒をよそに、僕達はウノをこなしていく。
クラスメイトは綾と小平さん、それと直の三人が並んでいること
で歓喜にわいている。

兄バカな表現だけど、直もクール系な美少女の範疇に入り人気がある。

なので三人がそろると、とても眼福な光景が広がる。

「あーあ、また負けちゃったよ」

小平さんがカードを机に放り投げ、四回目の対決が終了。
もう三度目となるびり対決を制した僕は、大人げないと思いつつも
控え目なガッツポーズをする。

「坂本、やっぱこいつはムカつく」

「真由、落ち着いて」

「いや。なんだか坂本の笑顔を見ているといらいらする」

「真由ったらもう」

綾が必死になってなだめるが、効果はなし。

一戦終わって最下位になっては感情をあらわにして負けを悔しがり、オーバークションを繰り返す。

でもそのオーバークションが大きなあだとなって、プレイ中に作戦を読まれてしまう小平さん。

それに対して、感情をあらわにしない直は四戦連続一位。完璧と言ってもいいほどの無敵の女王である。

「やっぱり直は強いな」

小倉くんが感心したように拍手する。

「それに比べて、小平は」

さらに肩をすくめて小倉くん。
相性がいいのだろうか。

二人は冗談を言い合える仲のようだ。

「なによ。私だって勝つときは勝てるわよ」

「いや、無理だな」

小倉くんが断言する。

「うん。真由には難しいかも」

「四回連続最下位だし」

綾も僕も言う。

すると小平さんが声を荒げる。

「もう一回。もう一回やる。今度こそ坂本に押しつけて最下位を脱出するから」

「でも、もう時間ない」

直が冷静に指摘する。

あまりにも冷静すぎて小平さんがあっけにとられてしまっくらいだ。

「そっだな。時間ないな」

と、小倉くんも言う。

結局、ウノはここでお開きとなった。

「春」

そして隣に座っている綾が僕を呼ぶ。

「これ」

机の下で渡されたのは小さなメモ用紙。

「後で見て」

昼休みを終えて、五時間目の授業中。

この数学の時間はいろんな意味で忙しかった。

まず最初に綾のメモを見て、今週の日曜日の予定を確認。

メモには都立公園で待ち合わせと書かれてあり、そこから互いに申し合わせた格好をして街に出る予定となっている。

そう、綾と僕はいつもこの場所から出発する。

ここで着替えをして、近くの街に繰り出す。

「坂本春」

綾と出かけることを考えていたら、先生に問題を当てられた。

問題は難しく、なかなか答えが導き出せない。

僕がうんうん唸って考えていると、隣の席の吉田さんの声が聞こえてきた。

「さ、坂本くん」

どうやら僕を呼んでいるようだ。

さらに小声で話しかけてくる。

「この問題はこうだよ」

そう言ってノートを指し示す。
字はきれいでとても読みやすく、適切に解説してある。

「ありがとう」

お礼を言つて、素早くその問題の答えをインプットする。
結果、この問題をなんとか乗り切ることができた。

「ふっ」

一息ついて席につき、吉田さんに目配せでお礼。
いつも控え目で大和撫子な吉田さん。彼女にしてみれば、誰かに
問題の答えを見せることは勇気のいる行為だったのだろう。

僕と目を合わせると、恥ずかしげに顔をふせてしまう。
おかげで僕も恥ずかしくなってくる。

だが、そんななかでも数学の授業は続いていく。
先生は、もう半年を切った高校受験についての説明を一生懸命し
ている。

なので僕は、遅ればせながらもその説明に耳を傾ける。
けど、そのときに携帯のバイブが振動した。
ディスプレイの表示を見れば、一つ年下の絵里ちゃん。
メールがきていた。

『先輩、今大丈夫ですか？』

「大丈夫」

と、返信する。

しかしそれにしても不思議なのは、絵里ちゃんからメールが来るときはいつも数学の時間。彼女もこのときは数学の授業なんだろうか。

メールはこの後も続いていく。

『ありがとうございます。でも、大丈夫だと思っていました』

「そうなの？」

『はい、だって先輩ですから。それで用件なんですけど、来週の土曜日のデートのことについてです。行く場所を遊園地に決めました』

「そっか」

『それでいいですか？』

「うん。いいよ」

遊園地といえば、幸いにもこの街の近くにある。

乗り継ぎを一回して六駅で着く場所で、小さい頃、綾のお姉さんの翠さんに連れられてよく行った。

直も綾もジェットコースターが苦手で、僕は翠さんとばかり乗っていた。

直はまだしも、当時おてんばだった綾が乗れなかったのは意外だ。

『先輩、後、もう一つ伝えたいことがあります』

「ん？ 何？」

『秘密のデートってことを忘れないでくださいってことですよ』

「うん、わかってる」

『ありがとうございます。では、詳細が決まったら後ほど連絡しますね』

以上で絵里ちゃんとのメールが終了した。

2 - 20 待ち伏せ

授業が終わり、無事放課後。

僕は直と一緒に帰ろうと思ったが、直には用事があって一人で帰ることとなる。

直の用事というのはクラスの美術部員の助っ人。絵の上手い直はしょっちゅう駆り出されている。

とはいうものの、直は夏まで美術部の一員。なので、そんな感覚はないのだろう。

「さて」

小倉くんとも別れ、廊下に出て一人つぶやく。

「帰ったら勉強でもしようか」

そう、受験も近い。

もしかしたら秘密の遊戯やデートなんてしている場合ではなくて、勉強しなくてはならないのかもしれない。

いや、絶対にしないといけない。

そんなことを考えながら、昇降口で靴を履き替えていると綾が立

っていた。

「春、待ってた」

「綾」

「待つてなくてもいいけど待つてあげたんだから」

近くに人がいないせいやお嬢様モードは封印している綾。
でも、いつもの綾らしさに僕は安心する。

「で、ぼーっとしていたみたいだけど何考えていたの？」

綾が僕の顔をのぞき込んで聞いてくる。

あどけない綾の顔が近くにあつて、僕は困惑しながら言う。

「勉強しなくてはいけないなあつて考えていたんだ」

「勉強？」

「うん」

「そんなの当たり前でしょ。受験生なんだし」

「そうなんだけど、最近どういうわけか全く頭になかったんだ」

「だめじゃない、春」

「うん」

「うんって。もう、ほんとに春はばかなんだから」

その言葉に僕はたくさん言い訳を言い募ろうとするが、綾の機嫌が思いのほか良さそうだったので言い止めた。

昨日電話をくれたときは、あまり元気がなかった綾。

どうしてここまで機嫌が悪くなったかはわからない。

けど、綾の機嫌が秋の天気のように変わりやすいことは知っている。

「春、今度家で勉強する？」

「え、綾の家？」

綾の家といえば、探検をしたら迷ってしまうくらい広い家。

「うん。直と一緒にどう？」

「いいと思うよ」

「直に聞いてみて」

「うん。わかった」

と、僕はうなずく。

「そういえば、春」

「ん？」

「今、直は一緒じゃないの？」

「うん。一緒じゃない。直は美術部の助っ人に貸し出された」

「へえ。そうなの」

直がない理由を綾が納得する。

しかしその後の綾は、なんだか様子がおかしい。

極端にまばたきの回数を増やし、手をわさわさとしはじめる。

「じ、じゃあさ、春。えっとこれからね」

「うん？」

「い、い、一緒に」

「綾、なんで急にどもりだすわけ？」

「うるさいな」

ぱしっと背中を叩かれた。

「なんて理不尽な」

うめきながら僕は言うが、綾は聞く耳持たず。

「ほら、春。帰るよ」

ずんずんと進んでいく綾の後ろ姿を見つめて、僕も歩を進める。

きれいなイチヨウ並木を通り、綾とはバス停の前で別れる。そして僕はいつもの坂を下っていき、東風荘にたどり着く。

「春坊」

「……」

「春坊ってば。無視しないでくれ」

それで家の中に入ろうとしたところで、美咲さんを発見。まだ夕方にもなっていないのに、酔っぱらっている。

「で、どうしたんですか？」

「私専用の超高級ミネラルウォーターが坂本家にあって、それが飲みたくて」

「いつのまに入れたんですか」

僕は文句を言うが、美咲さんはそれどころじゃない様子。

「そんなふりはいいから早く飲ませてくれ」

そんなことまで言うてくる。

しょうがないので、鍵を開けて家の中に美咲さんを招き入れる。

すると美咲さんはダッシュで冷蔵庫の前に行き、ミネラルウォーターを飲みだす。

「ごくごくごく、といい飲みっぷりで、ミネラルウォーターはみるみるうちに無くなっていく。」

「ふー生き返った」

美咲さんが一息ついて言う。

「それで春坊、直っちはどしたの?」

やはり酔っぱらっているのか、声のトーンがいつもより高い。

「直はまだですよ」

「へえ」

「美術部に駆り出されたから帰ってくるのは遅いと思います」

「そうなんだ」

ニヤツと笑う美咲さん。

確信ともいえるくらい嫌な予感が満ちてくる。

「それなら春坊」

言いつつも、つつーっと身体をなぞってくる。

「お姉さんといいいことしちゃう？」

生々しくしなだれかかってきて、目と目が合う。
へんな沈黙が生まれて、対応に困惑する。

「み、美咲さん。そんなキャラじゃないでしょう」

「だよなー。あはははは」

今度は豪快に笑う美咲さん。

僕は完璧にもて遊ばれているのに、本人にはあまり美人である自覚がないから困る。

「私に色気つてもんがあれば」

「十分ありましたって」

「ほんとか？ うそつけー」

しょうがないので、美咲さんが美人であることを必死に告げる。

「なに真顔でしょうもないこと言ってんだ？ 春坊」

「美咲さんが言わせたんでしょ」

「いいやそんなことはないな。オマエの負けだ」

何が負けだか知らないけど、美咲さんはそう言い放つ。
ほんと、何が何だかわからない。

要するに、酔っぱらいの思考回路を読むことなど、そんなじょそいらの凡人にはできやしないのだろう。

黙って返事をしていれば、それでいい。

「だから、罰として私が理想とする告白シーンを演じてもらう」

「はい。えっ？」

「あ、今はいつて言ったな」

「はい。って、えっ？」

なんだかへんなことになりつつあるのを自覚する。

なのでそれはそれで困る。

いや、プロレスの技なら鳥子さんに教えてもらった秘儀のツボで回避可能か。

僕は頭の中でどうすればいいのか算段する。

けど、美咲さんが目を輝かせているので、結局諦めてやることにした。

「夕日。公園。ブランコ。漕ぐ私。出来る二つの小さな影。オレオレ系な先輩が謝りながらの告白。恥ずかしさを突き放すような感じ。でも、本当に好きだと表現が言葉で入っているように」

「……」

突然で、僕は言葉が出ない。

「どつたの？ 春坊」

「そのお題はなんですか。わけわかりません」

そう言っても美咲さんはきよとんとした表情。わからないと言われても、全然懲りていない。

「まあ、いいからさ」

「そんな」

「とにかく、始めようぜ」

僕の肩をぽんぽんと叩く。

そして自分の設定した情景でも思い浮かべているのか、目をつむっている。

「さあ、始めっ！」

「え？」

「始めっ！」

しょうがないので、美咲さんがいた言葉を思い出しながら声色を変えて言ってみる。

「美咲、オレ、オマエのことが好きだせ」

ここまで言っていて困惑する僕。

言葉が出てこないし、あまりの似合わなさに自分で吹きそっにな

る。

でも、なんとかこらえて言葉を繋げる。

「オマエさあ、オレについてこいよ。なあ、美咲。ついてこないと言わせねえからな」

もう限界だ。

なんだかよくわからないリミッターが振りきれている。

「お、終わりです。美咲さん」

僕はせえせえと息をしながら告げ、美咲さんが目を開ける。

「いいかも、これ」

「そうですか?」

「うん、良かったよ」

あんなのが良かったなんて、到底そうは思えない。
けど、酔っぱらっている美咲さんが満足できたのならめでたしだ。

「よし、今のがテイク1ね」

「え?」

「だから、テイク1」

「そんな」

それは悪魔のささやきだった。

「やらないと暴れるぞー。この部屋を私の家並に汚してやるからな」
子どもみたいに騒ぐ美咲さん。

「あー現実世界に帰してください」
と、僕はこっそりとつぶやく。

夕刻、直がようやく帰ってきた。

鍵を開ける音とともに、僕は救いを求める。

「直、助けて」

「春？」

急いでドアの方に向かい、直がドアを開くのを今か今かと待ちわびる。

すであれから一時間。

すっかり美咲さんのおもちやとなっていた僕は、心身ともに疲労困憊。

何パターンものわけのわからない告白の場面をやらされていて、正直うんざりしていた。

だから、直の帰還は救いでもあった。

「直」

「春、どうしたの？」

直が焦っているのか、鍵がなかなか開かない。

ガチャガチャと金属音が鳴り響き、取っ手が激しく動く。

「直、落ち着いて」

「ん」

「でも急いで」

「うん」

背後からは千鳥足の美咲さんが迫ってくる。

美咲さんに捕まったら、プロレスの技をかけられるのだろうか。それはいろんな意味で対処の仕方に困る。

「開いた」

直がいつもより幾分大きな声で言い、ドアが開く。

そして直と目が合い、僕は愕然とする。

「直」

「何？」

「それどうしたの？」

「お礼にもらった」

僕が愕然としたのは、直がネコミミをつけていたこと。

ついさっきまで、ネコミミでの告白をやらされたせいで二重に入らなかったんだ。

「そうじゃなくってさ、なんで付けてるの?」

「なんとなく」

「なんとなくって」

「ううん。ネコの気持ちになりたくて」

またしても言葉が出ない。

しかし、ネコミミを装着している直は、なかなか魅力的だ。いつもの直の無表情さとマッチしていて、神秘的な雰囲気を出している。

「それですつと付けてきたの?」

「ん」

僕は頭を抱える。

そしてその最中に僕へと追いついた美咲さんが、直を見て騒ぎ立てる。

「なにそれー。かわいい」

直にくつつく美咲さん。

「直っち、直っち」

名前を連呼し凄いい勢いで抱き寄せる美咲さんに、直も少々居心地が悪そうだ。

「これ、やばいって春坊」

「なにがですか」

「かわいさの破壊力高すぎ」

たしかに美咲さんの言うことはもっともである。

一度離れた美咲さんは、改めて直のネコミミを眺めまわす。

「直つち」

さらに手を合わせて合掌。

「眼福、眼福だー」

なんだかとても親父くさい。

でも、結果として美咲さんの気をそらせたから良かった。

「あ、そうだ」

美咲さんがぽんつと手を叩く。

「直つち」

「ん？」

「一つお願いがあるんだけど」

「何？ 美咲」

「にゃーって言うてくれない？」

「え？」

無表情ながらも困惑する直。

それは少し見てみたい気もするが、さすがにやらないだろう。しかし美咲さんは、なおも要求を増やしていく。

「ごうさ、手を前にして。そう、要するにネコのポーズをしながらさ。どごうさ？」

直は手をあごに当てながら考え込んでいる。

「美咲」

「ん？ どしたの？」

「私、それやるとネコの気持ちになれる？」

「うんなれる。きつとなれるよ」

サムアップまでする美咲さん。

「ほんと？」

疑わしそうな目で聞いてくる直。

「ほんとだって。私もネコになりたいときはそうしてるから」

「そんなこと一度たりともないでしょ」

と、僕がすかさず言うが、美咲さんがにらみつけてくる。さらに美咲さんは、ポケットから携帯を取り出し言う。

「春坊。さっきのネコ語での告白、携帯に録音していたから。これ、とっておいてもいいんだよ」

「すみませんでした」

「じゃあ、直っち。やろうか」

「ん」

直はこくりとうなづく。

そして手をネコのポーズにする。

「にゃー」

さらにもう一回。

直がかわいらしく鳴く。

「にゃー?」

「きゃー鳴いた。直が鳴いたよ。かわいい」

歡喜にわく美咲さん。

やはりとてつもない破壊力だ。

けど、僕はいつ現実世界に帰してもらえるのかをもつずっと考えていた。

美咲さんが帰った後、直はネコミミを外し、『努力』のはちまきをつける。

そして宣言通り料理を作り、僕達はそれを夕飯にする。

直の料理はいつもの出来と変わりなく、これまたいつもと同じようなやりとりをして夕飯を終える。

それから直が入れてくれたお茶を飲み、テレビに目を移す。

テレビはちょうどニュースがやっていて、この都心から離れた小さな市街の髪切り事件を念入りに分析。被害者は三十人を超えたことで、くれぐれも気をつけてくださいと喚起がなされていた。

「直」

「ん？」

「そろそろ銭湯に行かない？」

「ん。でも春」

「何？」

「その前にやっておきたいことを思いついた」

直は雑貨が入っているタンスから、ハサミを取り出す。

「髪、切ろう」

「え？」

「髪」

伸びきっている僕の髪を見て、直がもう一度言う。

「まあ、切ってもいいけど。でも、そんなに僕のことを心配したって無駄だよ」

しかし、直は首を振る。

「うっん。そんなことない」

「そんなことなくないよ。だって、僕は男だし」

「だから、逆上して傷害行為に走るかも」

「そういう考え方もあるのか」

「ん」

僕は変に納得し、直はうなずく。

けど、僕だって直のことが心配だ。

その豊かな黒髪は直の魅力の一つで、もし切られでもしたらとて

も悲しい。

「春、準備」

「わかった」

直がハサミを持ってこっちにやってくる。

「後、必要なものは」

と、直が聞く。

「くし」

「霧吹き」

この二つを準備する。

「それと首に巻くやつ」

「ん」

直が洗面所に行って取ってくる。

「直、首に巻くやつは正式名称はなんていうんだと思う？」

「わかんない」

やがて直が首に巻くやつを持ってきて、準備が整う。

僕は適当なイスを準備して座り、直がハサミを入れてくれるのを

待つ。

「春、どう切る?」

「おまかせで」

「いつもそう」

「だって直は上手いから」

そう、直は料理以外ならなんでも器用にこなす。

髪を切るのだって、絵を描くための繊細な筆使いに比べたらたいしたことないに違いない。

「まずは、霧吹き」

シュ、シュと心地よい音。

髪が霧吹きによって濡れていく。

これから髪を切るであろう期待感が芽生えてくる。

「次、くし」

直の手櫛とともに、くしが髪に入る。

「直はくしでとくの上手いね」

「そう?」

「?」

「じゃあ、切るね」

「オッケー」

切れ長の瞳が髪の毛先を見つめ、じょきりとハサミが入る。ハサミは、肩まである僕の髪をバツサリと切っていく。

「切りすぎた？」

「ううん。そんなことないよ」

「そう。良かった」

「直、この調子で」

「ん」

やがて二十分が経過して、直の手が止まる。

「完成」

直が持ってきた手鏡にはさっぱりとした僕の姿がうつる。

「完璧だよ。直」

「ん」

「ありがとう」

僕がそう言つと、直は無表情ながらも若干笑みをこぼす。

「頭軽い？」

「うん」

僕はうなずく。

「でもさ、直。ほんとは順序逆だよね」

「どづいづいとっ」

「ほんとはお風呂に入った後切るもんじゃない？」

「あ、そうだね」

今日の天気は快晴。

傘いらずで洗濯物がよく乾く。

そんな予報を、綾の姉でもありお天気お姉さんでもある翠さんがテレビで言っている。

「直、翠さんが出ているよ」

「ん、翠」

改めてテレビに注目する僕達は、翠さんのさわやかさに元氣をも
らう。

翠さんは、アナウンサーとやりとりをしながら、天気の説明を
きばきとこなしていく。

「それよりも直」

「ん？」

市販のラスクをほおばりながら、直が首をかしげる。

「翠さんがお昼の枠から朝の枠になったの知ってた？」

「知ってた」

「いつから?」

「結構前」

「へえ、そうだったんだ」

「うん」

直の生返事を聞きながら、僕は翠さんのことを考える。

綾の姉の翠さんは二十二歳で、泣きぼくろが印象的な美人だ。

小さい頃、僕達はとんとお世話になった。

よく街外れの高台に連れて行ってもらい、わがママを言う子ども達の相手をしてくれた。

「そつえばさ、直」

「どつしたの?」

「綾と翠さんってあまり似てないよね」

「ん」

直も納得するとおり、綾と翠さんはあまり似てない。

もちろん、歳が離れているのも前提としてある。

けど、綾が成長したら翠さんのようになると言われればそうではない。

「春」

「ん？」

「綾は綾、翠は翠。人それぞれ皆違っはず」

直が真理を説く。

でも、そこで僕はあることを閃く。

「ただ、僕達の外見はかなり似ているよね」

「ん」

「どうしてだろう」

「神様がなんとなくそうしたんだよ」

優しいな声色で直が言う。

「ふーん」

「そう、ふーんって感じで」

「そっか」

そうして会話が途切れ、僕はまたテレビに目を移す。
すると今度は、週末の天気予報をやっている。

翠さんが言うには、週末も快晴で天気は崩れない模様。

しかし最後の締めくくりに、秋の空は女心のように変わりやすい

のでカサを持ち歩くようにしましょうとの喚起がなされた。

「あのだ、直」

「何？」

「僕、土日出かけるから」

「ん。わかった」

直は無表情でうなづく。
そこからは特別な感情が何もない。

「土曜は絵里ちゃんと。日曜は綾と」

「二つともデート？」

「え？」

その言葉を聞いて、僕はしまったと思う。
そういえば絵里ちゃんは、今回のことを秘密のデートだと言っていた。

「うっん。違うよ」

「そう」

「二つともデートとはまたちょっと違うもの」

なので、なんともつかない言い訳をしてしまう。

そんな僕を見て、直は言う。

「気をつけてね」

「うん」

と、僕は答える。

3 - 2 綾の苦悩

三時間目の数学の授業中。
綾から一通のメールが届く。

『春、大事なお願いがあるんだけど』

「何？ 綾」

と、僕はすかさず返信。

『今日の放課後、直と一緒に屋上の給水タンクに隠れて私を見守ってほしいの』

「わかった」

もちろん、この内容の意味は知っている。
これは綾が男子に告白されるということ。

前回から、まだ一週間くらいしか経っていない。
それなのに、またいつもの儀式が始まる。

「……………」

僕はなんだかな、と思って、教室中を見渡す。

すると、前に数学の問題をこつそり教えてくれた大和撫子な吉田さんと目が合う。

しかし吉田さんは、僕と目が合うと赤くなってうつむいてしまった。

どうしたのだろう。

僕にはわからない。

やがて、数学やその他の授業も終わり、放課後がやってくる。

綾の要請を受けた直と僕は、示し合せて屋上に向かう。そして、いつもの給水タンクに身を隠す。

十分ほどして、綾と知らない男子が屋上に到着する。

案の定、その男子は告白し、綾がその申し出を慎重に断る。そして男子がこの場を去り、僕達は綾のところに行く。

「綾、見ていたよ」

「うん。ありがとう、春」

「いいよ、綾」

「いや、いつもありがとう」

綾がもう一度礼を述べる。

この時ばかりは、いつも素直な感じになる幼馴染。さすがに僕も学習した。

「そして直もありがとう」

「ん」

「私はその人のためにも、好意が受け入れなかった場面を忘れるわけにはいかないから」

「綾、またそのセリフ」

直が綾を抱きしめる。

これも定番となった光景。

けど、僕はやっぱりどこか外れた視点で見ている。

「綾、元気だそう」

直が励ましの言葉を送る。

「うん」

それに綾はうなずくなか、僕は勝手に思う。

綾には早くお嬢様という猫かぶりを解いてほしい。

いつものように、活発でわがまま。じゃじゃ馬であれこれ命令してきても構わない。好き勝手に放題で怒りっぱくても構わない。

だから、綾。

君には君のままでもいい。

僕には綾との秘密の遊戯をする以外、何も手助けはできない。けど、こうやって苦しんでいる今の姿を見るのは忍びない。

「綾」

「何？ 直」

「雲の形でも見てれば元気が出るから」

「雲の形？」

直の言葉を聞いて、不思議そうに首を傾げる綾。

「ん。雲の形はどんどん変えていくから見ていて飽きない」

「そうみたい」

「心の形も同じ」

直が悟ったように言う。

「じゃあ、私の心の形もどんどん変えていくのかな」

「そうだよ、綾」

直が切れ長の瞳で綾を見つめ、深くうなづく。

「だから始まらないストーリーもね」

一呼吸置く直。

「きっと変わっていくはず」

3 - 3 寄り道(1)

屋上を出て、あいかわらず車の往来が多いイチヨウ並木を三人で進んでいく。

一週間前、同じように三人で歩いたときに比べると、イチヨウはだいぶ落葉している。きれいなイチヨウの葉も、足元になれば人に見向きもされない。

だから、若干感傷的になっている僕は、一つだけ鮮やかなイチヨウの葉を拾う。

その行為に理由はない。

ただ拾うだけ。

拾ってトートバックのポケットに入れる。

「だからね、直」

前方では直と綾がおしゃべりをしている。

綾は、一応元気を取り戻したみたいだ。

「春、何ぼーっとしているの？」

気がつくと、綾が後ろを振り向いていた。そして僕を見ている。

「あー、春つてば、また勉強のこと考えていたんだ」

「ううん。違うよ」

「じゃあ、何」

と、綾がつぶらな瞳をこっちに向けながら聞く。

「綾のことだよ」

「え？」

綾はなぜか頬を染めていく。

「あ、特別な意味じゃないけどさ」

「だったらどういう意味？」

今度は柳眉を逆立てる綾。

何だかあまりよくない気配がしたので、綾から目をそらす。

そうして結局、のらりくらりと綾の詰問をかわし、都立公園の入り口までやってくる。

今日は都立公園にある屋台で、クレープとたこ焼きを食べる予定だ。

「あ、クレープ屋あった」

直と綾がクレープ屋を見つけてかけていく。

「じゃあ、僕はたこやき買ってくるね」

「ん」

直の返事を聞いて、僕はたこやきが売っている屋台に行く。

「すみません」

「はいよ」

現れたのはいかにもな感じのおじさん。

坊主頭にはちまきをしている。

「たこやきを一パックください」

「よし、まかされた」

愛想のいいおじさんが出来たてのたこやきを作っていく。そしてそのたこやきをパックに詰め、僕に手渡しをする。

「じゃあ、三百円ね」

「はい、わかりました」

おじさんにお金を渡し、ベンチへと向かう。

直と綾は、まだクレープ屋の前で並んでいるようだ。

僕は辺りを見渡し、明日と明後日とのことについて考えてみる。

明日は絵里ちゃんと遊園地。

明後日は綾との秘密の遊戯。

ともすれば、いろいろと考えてしまいがちになる。
けど、物事は深刻に考えすぎないようにすることが大切だ。
そのことと自分とのあいだに、しかるべき距離を置くことも大切になる。

「春」

「あ、直」

まずは先に、直が戻ってきた。

「ピース」

「ピース」

直がVサインで言い、僕も同じように返す。

「綾は？」

「もう少し」

直の言つとおり、すぐに綾が来る。

「ピース」

「ピース」

そして直のときと同じようなやりとりをする。

「春はたこやき買って来た？」

「うん、買って来たよ綾」

「普通の？」

「普通の」

綾がたこやきのパックをのぞくので、僕も一緒になって見る。きれいに並んでいる姿を見て、なんだか授業中の僕達が教室にいるみたいだなあ、とへんな感想を抱いてしまう。

「で、綾。一個いる？」

「いいの？」

「だって欲しそうにしているから」

「私欲しそうにしてた？」

はずかしそうな綾。

「うん。だからあげるよ」

「ありがと。でも、先にクレープを食べるね」

綾がとろけるような笑みを浮かべる。

そしてその後、少し戸惑ったように口を開く。

「えっと、春」

「ん？ どうしたの？」

「わ、私のクレープも少し食べる？」

「あ、じゃあ少しもらおうよ」

僕がそう言うと、綾に得意げな顔になって言う。

「じゃあしょうがないなあ。特別にあげるんだからね」

3 - 4 寄り道(2)

小さい頃、僕達は綾の姉の翠さんにいろんなところへと連れてってもらった。

たとえば、この街の高台や六都科学館といった地元どころ。たとえば、海や山、行楽地といったちよつと遠いところ。

すべては良き思い出なのだが、その中の一つに地元の祭りもある。今でも毎年夏になると必ずそこへ行く。去年も三人で夏祭りを楽しんだ。

では、今なぜそのことを思い出したのか。それは綾が、たこやきを見てこんな発言をしたからだ。

「春、ふーふーして」

そのとき、僕は一度自分の耳を疑った。そして綾を見て言った。

「綾、それはないって」

「えっ？」

綾は自分が何を言っていたのかわからないという表情。

やがて、自分の無意識の発言に気がついたのか、顔をまっかにする。

「間違えたの」

そしてその後の反論の勢いがすごかった。

「小さいときに春が熱をさましてくれたでしょ。だから、そのなごりの口癖がふいにでちゃったの」

というのは、小さい頃、僕は直によく熱いものをさまさして食べさせてあげていた。

直は猫舌で、わがままなお姫様だったので、僕がしょっちゅう手伝っていた。

特にそれが顕著だったのが、夏祭りの時だった。

「なんか文句ある？」

「いや、ないけどね」

「ふとそういうことってあるでしょ。あるよね？」

「まあ、綾が言っただけあるかもね」

僕はおびなりに言う。

「ほら先生に向かって、お母さんっていうふうなもの」

「そうかな？」

「そうよ」

綾はそう言うが、話せば話すほどドッポにはまっている気がする。

「ほんつとにもう。さらりとながしてくれたっていいじゃない。春のばか」

「いや、それは無理だよ」

「じゃあ、今度からはさらっと流しなさい」

「はい」

綾が腰に手を当てて命令するので、僕は反射的に返事をする。

しかし、どうしてこうも綾のペースになるのか。原因は綾の方にあるというのに。

「春」

「何？」

「なんか不満そうだし」

「そんなことないよ」

けど、なんだかもやもやした気持ちだったので、不意を突いて綾のクレープにかぶりつく。

「あっ、春」

すると綾が驚いたように声をあげる。

「ん？ 食べ過ぎた？」

「そうじゃなくって」

「え？」

「そこ、私が」

「あ、ごめん。食べようとしていたところ？」

「だからそうじゃなくって、口つけたところ。か、間接キスだあ」

「え、聞こえないよ綾」

なぜか綾は、ごしょごしょと小声でしゃべっていて聞こえない。

その後、綾は僕が食べた部分を見てにらめっこしたり、顔赤くしたりと大忙し。

そんなに大事な部分だったのだろうか。

とりあえず、僕は謝ることにする。

「ごめん、綾」

「あ、うん」

いまだに顔が赤い幼馴染。

また、最近多くなつたあれがやってくる。

綾と僕とのあいだに微妙な空気が流れだすのだ。
しかし、その空気はすくなくなっていく。

「あ、ネ」

そう、あのまだらのネコのおかげ。

そして、それまでずっと黙ってぼんやりしていた直がぼつりとつぶやく。

「スケッチする」

「スケッチ？」

「ん」

直は徽章のある胸ポケットからメモ帳を取り出し、クレープを口にくわえながらスケッチを開始する。

「春、見て。直がすごい」

綾の言うとおり、直はものすごい集中力で描いていく。

スピードもさることながら、細部まで綿密にこだわっている。

直の特徴でもある写実的な技巧が存分に出ている。

「早い、早い」

綾がますます感心する。

「てか、危ないよ」

「ん？」

「クレープ落ちるって直」

「ん。大丈夫」

がぶつとくわえなおす直。

先に食べてしまえばいいのに、と僕は思う。

けど、そう考えているうちに直の手が止まった。

「完成」

「できた？」

「うん」

「じゃあクレープを食べる」

「ん、わかった春」

直がクレープを食べていく。

「やっぱりすごいな、直」

綾が感心したように褒め、直は無表情で誇らしげになる。

「私も絵、習おうかな」

「ほんと？」

「ほんとして何よ、春」

「いや、だってさ」

前に一度見たことがある。
綾の壊滅的だった絵を。

「でもね、春。私だって努力すればできるはずよ」

思い出したのは『努力』のはちまき。

「そう、努力」

直も思い出したようで何度も努力を繰り返す。

「それに私は仮にもお嬢様だし、絵くらい人並みに描けないといけないんだから」

3・5 遊園地(1)

土曜日。

予報どおり天気は快晴で、行楽日和である。

今日いつもより早く起きた僕は、遊園地に行く準備を整える。そして直の作った朝ご飯を食べ、八時半に家を出る。

「いってくるね、直」

「いってらっしゃい、春」

絵里ちゃんとの待ち合わせは駅のモニュメントの前で九時。なので、僕は十五分前にたどり着く。

けど、すでに絵里ちゃんがいる。

絵里ちゃんは雑踏に紛れることもなく、僕が見つけれられる場所に立っていた。

「先輩」

「あ、絵里ちゃん」

小走りで寄ってくる絵里ちゃん。

瞳がきらきらと輝いている。

「おはようございます」

「おはよう」

「もう先に来ちゃいました」

「うん、もういるとは思わなかったよ」

僕達は笑顔で言葉を交わす。

「ところで先輩」

「何？」

「今日の私の格好どうですか？」

言われて絵里ちゃんの格好を改めて見る。

「森にいそいな格好だね」

「はい。これ、私の一張羅です」

「似合っているよ、絵里ちゃん」

「あ、ありがとうございます」

人懐っこい笑みを浮かべて、満足気な表情を浮かべる。

「そういえば先輩、髪切ったんですね」

「あ、うん」

と、僕はうなずく。

「さっぱりしましたね」

「そうみたい」

「私はどっちも好きですけど、今の長さの方がもっと好きです」

「そっか」

「はい」

「ありがとう、絵里ちゃん」

「いえいえです」

絵里ちゃんがかむように言う。

「じゃあさ、そろそろ行く?」

僕は駅の方面を指差す。

「あ、ちょっと待ってください」

「ん? どうしたの」

「まず、ここで写真撮りたいんです」

「いいじゃ？」

疑問に思ったのでおもわず声をあげてしまう。

「はい」

絵里ちゃんは自分のウエストポーチからカメラを取り出す。
カメラは年季の入った代物で、どこか高級そうな感じがする。

「これ、おかあさんから借りてきたものなんです」

「そうなんだ」

「それでは、ために一枚いいですか？」

「いいよ」

すると絵里ちゃんが、いきなりカメラを構える。
しかし、ほんとにここでいいのだろうか。
バックに写っているのは駅前の『涙を集める人』のモニュメント。

「あ、絵里ちゃんは映らなくていいの」

「いいんです」

「そうなの？」

「はい。秘密のデートなんですから」

「え？ それ関係ないんじゃない？」

「いいんですよ、先輩。それではいきますね。はい、チーズ」

絵里ちゃんの掛け声とともに、僕は適当なポーズをとる。

けど、きつとその写真は必要以上にかしこまってうつっているはずだろう。

写真写りの悪さは幼い頃からずっとだ。

「先輩、ありがとうございました」

絵里ちゃんが頭を下げて礼を言う。

「あ、うん」

「じゃあ、行きましょうか」

「そうだね」

そして僕達は券売機のところへと向かう。

3 - 6 遊園地(2)

ホームの待合室のベンチに座って電車を待つ。

そのあいだ、僕達は今日の予定を話し、明るい展望に心を弾ませ
ていく。

「それで先輩、まずはジェットコースターに乗りましょうね」

「ジェットコースターから？」

「はい。あ、先輩。ジェットコースターは大丈夫ですか？」

「大丈夫だけどさ」

ジェットコースターには乗れないこともない。

けど、順序として間違っているのかもしれない。

「先輩先輩」

僕がそう考え込んでいると、絵里ちゃんが腕を引っ張ってくる。

「電車が来てますよ」

「ほんとだ」

「早くいかないと、閉まっちゃいます」

「急がないと」

僕達は、慌てて電車に飛び乗る。

電車はプシューと音を立てて、扉を閉めていく。
どうやら間一髪間に合ったみたいだ。

「危なかったですね」

絵里ちゃんがほっとしたように一息つく。

「そつだね」

と、僕も同じように一息。

顔を見合わせて笑い合う。

そしてお互いに同じようなことを言う。

「先輩がぼーっとしていたから」

「絵里ちゃんがおしゃべりに夢中だから」

思わぬ責任のなすりつけ合いに、また顔を見合わせて笑う。

「まあ、ともかく、乗れてよかったよ」

「そつですね」

「しかも座れたし」

「はい」

車両は、休日のせいなのか人が全然いない。
まばらだという表現がぴったしなくらい人数。

電車はガタンゴトンと心地良い音を鳴らしながら、小刻みに左右に揺れている。

その揺れは胎内にいた頃を回帰させるリズムだと言われるが、僕にはわからない。

「絵里ちゃん」

「なんですか？」

「この電車の音ってさ、母親のおなかの中にいたことを想起させていうけどどう思う？」

「え？」

絵里ちゃんが驚いてこっちを見る。

「先輩ってそんなことを考えたりもするんですか」

「考えたりもするよ」

「そうですね」

「それでどうじっ？」

僕はもう一度聞いてみる。

すると絵里ちゃんは、少し考えた後で「こう言う。

「私にはわかりません。でも」

「でも？」

「なんだか電車の中は安心しますね」

「そっか。僕もだよ」

「そうなんですか？　じゃあ同じですね」

絵里ちゃんが嬉しそうに笑う。

「あ、それよりも先輩」

「何？」

「外見てください」

「ん？　何かあったの？」

「いえ。景色がきれいです」

車窓に写る景色を見て、絵里ちゃんが喜ぶ。

もう何度も見ている景色だけど、絵里ちゃんは体をのけぞらして
まで見ている。

「なんか子どもみたいだよ」

「何言ってるんですか、先輩」

「え？」

そして絵里ちゃんは真顔で言う。

「私も先輩も子どもですよ」

3 - 7 遊園地 (3)

六駅はほんとにすぐだった。

十五分かそこらで目的の駅に着いた僕達は、電車から降りて改札を出る。

久しぶりにこの場所に来たのでお互いに道がわからなかったが、案内の看板や人の波などを利用しながら遊園地にたどり着く。

そしてフリーパスを買って、入口のゲートをくぐる。

そしたらもう、そこは別世界だ。

「わー」

と、楽しそうな絵里ちゃん。

「まさしく遊園地だね」

「はい。この感じ久しぶりです」

絵里ちゃんがその場で一回転して喜びを表す。すると、フレアのスカートがふんわりと揺れる。

「早く行きましようよ、先輩」

「はいはい」

絵里ちゃんは僕を先導するように引っ張っていく。

「それで先輩。どうします?」

「ん? 何が?」

「やっぱりしょっぱなからジェットコースターでいきますか?」

にやりと含み笑いをする絵里ちゃん。

「いや、その前に園内を隈なく歩き回ろうよ」

「歩き回る?」

「うん。どんなアトラクションがあるか確認したいからね」

「そっか。それ、いいですね」

納得顔の絵里ちゃんがうんうんとうなづく。

「先輩、頭いいです」

「そっ?」

「はい」

「でも、そんなことは言われたこともないけどさ」

「そんなことないですよ。先輩は地味に賢かったりもします」

「地味に賢いとは、またわかりにくい」

僕がそう言うと、絵里ちゃんはくすりと笑う。

「地味っていうところがキモなんですよ」

「そうなの？」

「はい、そうです」

結局、そんな話をしながらも僕達は適当に進んでいく。

道なりに沿って進んだり、好きなどころで右に左に曲がったりだ。

左右を見渡せば、いろんな種類の乗り物がある。乗り物だけではなく、おみやげ屋さんやゲームセンターなんかもあった。

「よし！ これで私、どこになにがあるかを大体覚えました」

「す、すごい記憶力だね」

「そんなことないですよ」

「いや、すごいよ」

僕は素直に感心する。

「これを勉強に生かせたら完璧かもね」

「そうですね。でも、そんなにうまくはいきませんって」

絵里ちゃんは笑いながら言う。

「それよりも先輩。先輩は受験なんですね」

「あ、うん」

「どこの高校受けるんですか？」

「あ、それはね」

僕は絵里ちゃんに自分の受ける地元の高校の説明をする。

現役女子高生で『ジモティーズ』の一員である岩崎さんの情報では、その高校はかなり自由な校風らしい。部活動はたくさんクラブが濫立するくらい盛んであり、行事も活発だという。

「じゃあ、私もそこを目指します」

「そんな簡単に決めていいの」

「はい、だって先輩が行くんですよね」

「うん。その予定だけど」

「だったら私も」

「いいの？」

「はい」

「ほんとに?」

「女に二言はありません」

絵里ちゃんは決意新たにそう言い切った。

例えば、ワインは色、香り、味という三種類を楽しむとよく聞く。ワインなんてもちろん飲んだことないけど、こういう考え方は一般的らしい。

それと同じように、ジェットコースターの楽しみ方は三種類あるという。

まずは視界、次に重力、最後に風圧。

この三種類を意識して楽しむ。

それがツウだと絵里ちゃんは力説する。

「わかったような」

「わかってくれましたか」

「でも、わからないような」

「わかりませんか」

肩を落とす絵里ちゃん。

「うーん。微妙」

結局、結論はこうなった。

今、僕達はジェットコースターの順番待ちをしている最中である。もう少しで順番が回ってくるみたいで、だんだんと気分が高揚していく。

「でも、そんなんではダメですよ。先輩」

「そうかな」

「はい。心構えをしておかないと」

絵里ちゃんの話はまだまだ続く。

どうやら相当のこだわりを持っているみたいで、その三つの他には不安定さが大切だと伝えてくる。

そうしてその話も一段落して、いよいよ順番が次となったときである。

絵里ちゃんがいきなり口を開く。

「あ、先輩」

「何？ 絵里ちゃん」

「あ、あの」

そして急にもじもじしはじめる。

僕は何事かと思案に暮れ、一つに可能性に思い当たってしまふ。

「まさか」

「え？」

「トイレ？」

「違いますよ、先輩」

真っ赤になって否定する絵里ちゃん。

「そうじゃなくってですね」

「うん」

「そのー」

そう言ったきり、今度は顔を両手で押さえてしまう。
歯切れの良い絵里ちゃんにしては珍しい光景。

「どっしたの？」

と、僕は聞く。

「あ、あの看板を見てください」

「看板？」

「はい」

言われたとおり、絵里ちゃんの指差す看板を見る。
するとそこにはカップル席へのご案内と書かれている。

カップル席とは、男女二組が係員の前で恋人であることを証明すると、より良い席へ案内されるといふ特別プランのことらしい。

「絵里ちゃんはカップル席にしたい？」

「は、はい」

なおも顔を真っ赤に染めている絵里ちゃん。
手うちわで自分をあおいだりもしている。

絵里ちゃんはジェットコースターにこだわりがあるくらいなのだから、より良い席で楽しみたいのだろう。

そのためにカップル席を所望したに違いない。

「でも、問題があるね」

「はい」

そう、僕達はカップルでない。

「いや、やっぱりそんなことないですよ、先輩。これ、秘密のデートなんですから」

「え？」

「恋人のふりをしましょう」

「恋人のふり？」

「はい、そうですっ」

握りこぶしをぐっと込めたまま僕に迫ってくる絵里ちゃん。勢い余ってキスしそうな距離にまでなる。

「す、すいません。先輩」

「あ、こっちこそごめん」

僕はなんとなく謝ってしまう。

「それですね、先輩。あの、恋人である証明として手、手を繋ぎませんか」

「うん、構わないよ」

そうして絵里ちゃんと手を繋ぐ。

絵里ちゃんの手は小さくて柔らかい。

「でも、それだけで大丈夫？」

「え？」

どこか放心したような絵里ちゃんが、慌ててこっちを見る。

「恋人だしたら名前呼び合わないといけないと思うんだけど」

「そ、そんなあ」

「先輩なんて呼ばないでさ、係員の前では僕の名前を呼ばないと。」

「とりあえず呼んでみて」

「は、春 先輩。ダメです。どうしても」

「大丈夫だつて」

「先輩、ドSすぎです」

「だから先輩じゃないよ」

「ほんとにドSです」

で、こんなことをしているうちに、本当に順番が回ってくる。

係員にカップル席であることを告げ、手を繋いでゲートを通過していく。

「絵里ちゃん」

「は、春くん」

僕はよく演技したと絵里ちゃんの頭をなでる。

そしてそれが決定打となったか、僕達はカップル席を認められた。

「では、お楽しみくださいね」

その言葉を最後に安全バーがゆっくりと降りていく。そして機体は少しずつゆっくりと上昇していき、僕達の緊張感を煽っていく。

視界、重力、風圧。

絵里ちゃんの言葉どおりその三つ。

それと、機体の不安定さ意識しながら楽しむ。

そう、この感じだ。

この胃がきりきりするような不思議な感覚。

隣の絵里ちゃんを見ると、僕と同じように楽しんでいる。不安と笑顔が同居したような表情だ。

「先輩」

「何？」

「来ますよ」

「うん」

僕が返事をするや否や、機体がすごい勢いで落ちていく。

「きゃああああああああああああああああ」

「うわああああああああああああああああ」

視界は良好。重力は最高。風圧は完璧。

猛スピードで決められたレールを駆け抜ける機体は、人々の絶叫を乗せて走っていく。

僕はその流れに身を任せ、存分にジェットコースターを堪能する。そうして、いつまでもこの感覚を味わっていたいと思いつつも、やがて終わりが近づいてくる。

機体は緩やかにスピードを落とし、最初の場所に止まった。

「ありがとうございました」

係員がそう言い、安全バーが上がっていく。

「またのご利用をお待ちしています」

僕達は機体から降り、出口のゲートをくぐる。

一息つき、絵里ちゃんと僕は笑い合う。

二人して笑いは止まらない。

どんどんと湧きだすように、笑いの連鎖が続いていく。

そしてようやく治まったところで、絵里ちゃんが僕を呼ぶ。

「先輩」

「何？」

「先輩」

「だから、どうしたの？」

「先輩」

何度も呼ぶ。

さらに目を輝かせてくる絵里ちゃん。

こっちを見つめてもいる。

しかしそれだけで、絵里ちゃんの間図することがこっちにも伝わってきた。

「どうする？　これから」

「わかっていますよね、先輩」

「また同じの乗る？」

「はい」

やっぱりそうだったか。

僕はほくそ笑んでいた。

それから僕達は、あのジェットコースターに三回乗った。
三回も乗れば満足するはずで、午前中の残りの時間は違うアトラ
クションを楽しんだ。

種類は、おなじみのメリーゴーランドに始まり、カーレース、そ
してモロッコみみたいなレーンのアドベンチャー。

ここまでは予定通りに進んでいる。
ジェットコースター以外は並ぶことなく、午前中だけで結構乗れ
た。

「先輩。お腹すきましたね」

「そつだね」

昼ご飯は園内に設置してある飲食店で済ませます。

絵里ちゃんはサンドイッチ。

僕は焼きそば。

飲み物は二人とも自販機でお茶を買った。

僕達は、近くに隣接しているベンチに座って昼食をとる。

「いただきます」

「いただきます」

出されたおしぼりで手を拭いて、焼きそばを口にすする。
焼きそばはこってりとした味付けた。

「うん。おいしい」

「こっちもおいしいですよ」

絵里ちゃんは、小動物みたいなしぐさでサンドイッチを食べている。

「こっついうのもたまにはいいですね」

「たしかに」

僕達は大いに納得する。

「絵里ちゃん」

「なんですか？」

「ちょっと焼きそば食べてみる？」

「いいんですか？」

「うん、いいよ」

「では、代わりに私のサンドイッチあげますね」

そう言つと絵里ちゃんはサンドイッチを取りわけてくれる。
僕も、絵里ちゃん用に焼きそばを残していく。

「じゃあ、わりばしもう一つもらつてくるね」

「あ」

頬をそめる絵里ちゃん。

「？」

どうしたのだろうか。

僕にはわからない。

「せ、先輩」

「ん？」

「わざわざ先輩のお手を煩わせなくても、不肖ながらこの都築絵里、
そのおはしで結構でございます」

なんだか日本語がへんになっている絵里ちゃん。

首をかしげながら僕は答える。

「いって」

「で、でも」

「絵里ちゃん、すぐだからちょっと待ってて」

絵里ちゃんに断わりを入れて席を立つ。
店まで行き、わりばしをもらってくる。

「はい、もらってきたよ」

僕はわりばしと一緒に焼きそばのパックを渡す。

「あ、ありがとうございます」

と言うわりには、あまりにありがたがっていない感じの様子。
僕があげるって言ったときにずいぶんと喜んでいただけど、何かあったのだろうか。

さらに絵里ちゃんは、危機迫った形相でこっちを見てくる。
そして口を開く。

「先輩」

その表情に蹴落とされそうになりながらも僕は聞く。

「何？」

「代わりに私のサンドイッチ食べますよね」

「あ、うん。くれるなら」

「で、今日は秘密のデートですよね」

「そうだね」

「だったら、私が先輩にあーんをします」

「え？ どういう理屈？ それにあーんって」

僕は美咲さんとの玉子焼き事件を思い出す。

いや、あれは事件でなくて戦争だ。

あのときは、美咲さんのはしさばきが恐ろしすぎて避けるのが大変だった。

「先輩、いきますよ」

絵里ちゃんにはらむようにして見てくる。

なんだが、大変な雰囲気だ。

「いいですね」

「う、うん」

「あーん」

そしてサンドイッチがすごい速さで迫ってくる。

「え？ いつき？」

僕が驚く間もなく、サンドイッチが口の中へ。

「じぶっ」

人間のどに詰まりそうになったときは、信じられない声が出るも

のである。

絵里ちゃんは、なぜか目を閉じてしまっているのだった。うちの様子を知らない。

なので僕は必死に咀嚼し、なんとか飲み込む。

「なんかへんな声しませんでしたか」

「き、気のせいだよ」

絵里ちゃんに殺されそうになった現実を直視したくないため、必死になってフオーローする。

「そうですか？」

しかし、絵里ちゃんは首をかしげながら不思議な顔をしていた。

昼ご飯を終えてすぐ、絵里ちゃんは家に電話をかけた。

なんでも、弟や妹達が作り置きしてあるご飯をすっかり食べたか。それが心配になったらしい。

絵里ちゃんによると、弟や妹達は、遊びに夢中になってご飯を忘れてしまうこともあるという。

「お昼、ちゃんと食べるんだよ。ね」

今もお姉さん然とした絵里ちゃんの声が聞こえる。

僕の前で見せる人懐っこいネコみたいな後輩の姿はそこにはない。

「じゃあね。お姉ちゃん、ちゃんと帰ってくるから」

そうして、電話を切る絵里ちゃん。

しかしその直前、子ども達の物凄いエールが聞こえてきた。

あれはなんだったのか。

「絵里ちゃん」

「はい。なんですか？ 先輩」

「なんか電話越しからものすごいエールがここまで聞こえてきたん

「だけど」

「え？ エールですか？」

「うん」

僕は神妙にうなづく。

「デートがんばれーってさ」

デートにがんばれも何も無い。

というより、秘密のデートなのに弟や妹達が知っているのが不思議だ。

僕は腑に落ちない表情でいると、絵里ちゃんが口を開く。

「な、なんでも無いです」

「そっ？？」

「そっですよ。気にしないでください」

絵里ちゃんがあせったように手を振る。

そこまで言うのなら、たいした理由ではないに違いない。

「それよりも先輩」

「何？」

「午後のアトラクションどころかいついつに回っていくか決めましょう」

「や」

「あ、そうだね」

「やっぱり私はジェットコースターがいいです」

その言葉で、午後もジェットコースターから始まっていく。今度のジェットコースターは、最初に乗ったのとは違うもの。より急角度で大きなスリルが味わえるやつだった。

で、僕達はこれを三回乗った。

二人ともへとへとなりながらも十分に満足する。ベンチで休憩しながらも、絵里ちゃんが言う。

「先輩、気が合いますね」

「たしかに」

「先輩がここまでジェットコースターに乗れるとは、私思いませんでした」

「僕もだよ」

「そうなんですか？」

「そうだよ。でも、おかげでずいぶん楽しめている」

どうやら、絵里ちゃんとはアトラクションの趣味が合うみたいだ。僕達はお互いに満足気な表情を浮かべて笑い合い、空を見る。

一つ心配な点があるとしたら天気。

さきほどから、どんよりとした曇り空になってきている。

「雲、多くなりましたね」

「うん。そうだね」

と、僕がつぶやいたときである。
ぽつ、と水滴が額に落ちてきた。

「あ、降ってきましたよ」

「ほんとだ」

「うわ、これは大降りです」

絵里ちゃんの言葉通り、瞬く間に雨は大粒になっていく。
僕は持ってきたトートバックから傘を取り出す。

「先輩」

隣には涙目になっている絵里ちゃんがいる。
どうやら傘を持ってきていないみたいだ。

「ほら、入っていいよ」

そんなに大きな傘でもないけど、隣に女の子が入るスペースくらいはある。

「ありがとうございます、先輩」

「うん」

「そんでもって、相合傘です」

「そんなことは言わないの」

いつまでもベンチに座っているのもあれなので、僕達は立ち上がる。

人の波がお土産コーナーに向かって行ったので、僕もそつちを指さす。

「絵里ちゃん」

「なんですか？」

「今のうちにおみやげでも見ておこうか」

僕がそう言つと、絵里ちゃんはポーンと手を打つ。

「先輩。それ、いい考えです。それにこの雨もきつとにわかですからちよつどいいですね」

「うん。秋の天気は変わりやすいしね」

後、女心もだつたなあ、と僕は思った。

「雨はすぐに止んだ。

おみやげを見て買った僕達は、気を取り直してアトラクションをこなしていく。

コーヒカップ、お化け屋敷、回転ブランコと順番に楽しんでいくうちに日が暮れていき、すっかりと夕方になった。

それで観覧車に乗り、今特別に開催されている花火を見て、最後はジェットコースターで締めようとの相談をしていた。

「先輩。やっぱり最後はジェットコースターですね」

「そうだね、絵里ちゃん」

「でも、その前に観覧車もありますよ」

そう言って、観覧車の列に並ぶ。

やがて観覧車の順番が来て、僕達は乗り込む。

観覧車は少しずつ上昇していき、景色がだんたんと開けていく。僕達の街も、とても小さくだけに見える。

「先輩」

しばらく景色を見ていたが、絵里ちゃんが僕を呼ぶ。

「何？」

「その、今日は先輩に話したいことがあったんです」

「話したいこと？」

「はい。それで、そ、その、恋の相談なんです」

「恋の相談？」

僕は素っ頓狂な声を上げてしまう。

「はあ、古典的ですよね、私」

「え？」

「な、なんでもないです」

「そう」

「それで恋の相談なんですけどいいですか？」

「うん、いいけど。でも、僕なんか何の参考にもならないと思うよ」

僕がそう言うと、絵里ちゃんは立ちあがってまで反論する。

「そんなことないです。先輩だからこそなんです!」

「あ、絵里ちゃん。落ち着いて」

絵里ちゃんが立ちあがったことで、機体が大きく揺れている。

「あ、すみません」

「いって」

しかし絵里ちゃんは、しゅんとなって顔を赤くする。

「それで話して」

僕がうながすと、絵里ちゃんがサイドにくくった髪をさわりながら口を開く。

「先輩」

「うん」

「相談とは、私の友達が男の子に手紙で告白されたことなんです」

「そうなの？」

「はい」

絵里ちゃんの相談の内容とはこうだった。

告白された友達には好きな人がいて、その好きな人はどうも自分のことが眼中にないようなかんじらしい。

しかもその人には、本当に微妙な関係の女の子がいる。さらに、友達は告白した男の子のことを悪くは思っていない。

「絵里ちゃんはどう思うの？」

とりあえず僕は聞いてみる。

「え？ 私ですか？」

「そうだよ」

絵里ちゃんは少し考えた後、言う。

「私にはわかりません」

「そっか」

「だから先輩に相談したんです」

「そっだね」

僕はもう一度考えるため、いつも告白されている綾を思い出す。綾はどうだったか。けど、あまり参考にはならない。

「えっと」

「先輩？」

「僕が言えたことじゃないけどさ、特別に好きじゃなかったら断わ

っているかも」

「そうなんですか？」

「うん」

根拠はなかった。

ただ、綾が悪くは思っていない程度の男の子と告白を了承する場面が思いつかなかったただけだ。

けど、絵里ちゃんはその曖昧な答えに納得してくれたようで、笑顔でつぶやく。

「先輩は、ずるいですね」

「ずるい？」

「はい。そしてブリーマーです」

「ブリーマー？」

「はい。そうです」

観覧車を降りてすぐ、僕の携帯が振動する。

ディスプレイの表示を見ると、そこには綾の名前。

この時間帯にかけてくるのは珍しいので、何かあったのかと勘繰る。

「先輩」

「あ、何？」

ディスプレイをずっと見つめている僕に、声をかけた絵里ちゃん。

「電話出ないんですか？」

「うん。出るよ」

「私、少し離れて待ってますね」

僕が気まずそうな表情していたせいか、絵里ちゃんが気を使ってくれる。

絵里ちゃんの少し寂しそうな笑顔を見た僕は、後ろ髪を引かれながらも電話に出る。

「もしもし」

『もしもし』

沈んだ綾の声。
覇気がない。

「どうしたの？ 綾」

『うん』

綾はそう言ったとき押し黙ってしまつ。
僕は綾がしゃべるまで、少し待つ。

「……………」

『……………』

流れるのは沈黙。
最近、綾と僕とのあいだに明らかに多くなってきている種類のも
のだ。

『春』

「何？」

『あのことでお願いがあるんだけど』

「あのことってあれ？」

『そつだよ』

綾が小さく返事をする。

『それでね。明日の夜になっていたけどね』

「うん」

『それを今日の夜にできない？』

「え、今日の夜？」

『うん。明日、急に家の用事ができちゃったの』

綾の家庭の事情などは詳しくはわからない。

だが、お嬢様としての責務を果たさなければならぬから忙しいに違いない。

「そっか」

今、僕はこうして絵里ちゃんと秘密のデートをしている。くしくも、綾の秘密の遊戯と同じ秘密事。

だけど、その重要性は大きく違う。

本当は天秤にかけるなんて行為はいけないんだろうけど、綾との秘密の遊戯を重視してしまう自分がいる。

だから、僕は誠意を持って絵里ちゃんに謝ろう。

なぜなら、今から綾の予定に合わせれば、絵里ちゃんと花火やパレードをみたりすることはできなくなる。

「いいよ。今日の夜」

『ほんとに?』

綾がびっくりしたような声をあげる。

「僕さ、前に綾から電話来たとき言ったよね」

『え?』

「大丈夫。綾がしたいときはさ、いつでもいいって」

『あ、言ってた。けど、春の予定もきつとあるから』

「うん。たしかに予定はあった」

『じゅめん』

「でも、何よりも綾に頼られるほうが大事。だから気にしないでほしい」

『あ、ありがとう』

綾が戸惑ったようにお礼を言う。

このように、いつも素直な幼馴染でいてほしい。

けど、もっとわがままであってほしいとも思ってしまう。

この二律背反は不思議でしょうがない。

「じゃあ、明日予定していた時間でいいんだね」

『うん。大丈夫』

「それじゃあ、切るから」

『うん。バイバイ』

「バイバイ」

そうして電話を切った。

絵里ちゃんは、僕から少しだけ離れたところで待っていた。

「ごめん、絵里ちゃん」

「いいですよ、先輩。電話くらいお構いなしです」

「そうじゃないんだ」

「えっと、どういうことですか？」

笑顔だった絵里ちゃんが、怪訝そうな顔になる。

「今からの用事が入ったんだ」

「そうなんですか？」

「うん、ごめん」

僕は誠意を持って謝る。

それから、懇切丁寧に秘密の遊戯以外のことについてを説明する。

「ということは、綾さんとの用事ができたということですね」

「そうだよ、絵里ちゃん」

「そっかぁー」

絵里ちゃんのはのびをして、軽い調子で言う。
けど、今にも泣きそうだ。
僕は申し訳なくなってきた、もう一度謝る。

「ごめん、絵里ちゃん」

「いいですよ、先輩」

絵里ちゃんがさらに続ける。

「私、なんとなくわかってましたから」

「え？」

「なんでもないです。それよりも先輩。私のほうこそ、先輩に謝ることがあるんです」

絵里ちゃんは涙をぬぐい、舌を出して笑う。

そのちやめつけたっぷりの表情が逆に痛々しく感じてしまう。

「今、ちよつとだけ泣いちゃってごめんなさい。それと、実は私、さっきの先輩と綾さんのお話、少しだけ聞いちゃってたのにしらを切ってごめんなさい」

絵里ちゃんが頭を下げてる。

「これでおあいこですね」

と、絵里ちゃんが言ったときだった。

パーンという音が聞こえて、花火が上がった。

赤、黄、橙、青、緑、紫。

色とりどりのきれいな花火。

「わあ〜」

絵里ちゃんの顔も色とりどりに輝く。

「先輩、私」

絵里ちゃんの顔が近づいてくる。

「好きなんです」

「え？」

「デートが好きなんです。だから、こうして長い時間一緒にデート
できただけでうればみんでした」

「うればみん？」

「うれしいときに出るドーパミンですよ」

「あ、そっか」

僕は、絵里ちゃんとデートの約束をしたときのメールの内容を思
い出す。

たった十日くらい前なのに、随分昔のことに思えてくる。

「先輩、忘れっぽいです」

「そうかな」

「そうですよ」

笑いながら言う絵里ちゃん。

涙の跡はすっかりなくなっている。

「今度、デートの穴埋めしてくださいね」

「うん」

「絶対ですよ」

絵里ちゃんが念を押す。

「わかった」

「なんたって私は聞きわけの良い妹キャラ。そこがうりですから。私ならこれくらいでオッケーです」

「そんなつもりじゃなかったんだ、ごめん」

「ほんとですよ」

と言って、僕の背中をポーンと叩く。

「でも、先輩なら許しちゃいますから」

「ありがとうございます」

「いえいえです」

絵里ちゃんが照れくさそうに笑う。

そして、何かを思い出したように手を叩く。

「先輩」

「何？」

「後、記念にこれください」

指差すのは僕の持っていたトートバック。

「これ？」

僕は不思議に思ってそれを掲げる。

「違いますよ、先輩」

絵里ちゃんは首を振る。

「その手前のポッケからはみだしているものです」

「え、なんか入ってた？」

「はい。入ってますよ」

絵里ちゃんは、僕の持っていたトートバッグのポケットの中に手を入れて取り出す。

「イチヨウの葉です」

絵里ちゃんが花火を見ていくというので、園内で別れることとなる。

別れる直前に見せた絵里ちゃんの悲しそうな表情に、僕は後ろめたさを感じながらも帰路を歩く。

花火を見る観客でこった返す人いきれ。

その中をかきわけるようにして戻っていく。

駅に着いて電車に乗ると、今日一日の出来事がビジョンとして浮かぶ。

ジェットコースターの連チャンから始まり、いろんなアトラクションを楽しんだこと。絵里ちゃんといろんな話をしたこと。

楽しいことばかりなのに、なぜか寂寥感がこみあげてくる。

それは今、隣に絵里ちゃんがないからだろうか。

僕にはその感情がわからない。

わからないけど、それでいいと思う。

やがて電車は僕達の街にたどり着く。

僕は電車を降りて、慣れ親しんだ道と下り坂を歩く。

歩きながら、これからの予定を綿密に考える。
なにせ、綾と僕にする秘密の遊戯はディテールにこだわらなければ成立しない。なので、する前にしっかりと準備をしなければならぬ。

家に着き、ドアを開けると直が出迎えてくれる。

「おかえり」

「ただいま」

エプロン姿の直。

そして『努力』のはちまき。

その格好だけで、料理に精を出していることだけはわかる。

「早かったね」

「うん。でも、これからまた綾と出かける」

「そう」

「それで明日は出かけなくなった」

「わかった」

しゃべりながらも、僕は靴を脱ぎ家の中に入る。

家の中は僕が出かけたときよりも片付いているようだ。

「直、掃除した？」

「ん」

「そっか」

狭い部屋を見渡して、僕は納得する。

「春」

「何？」

「これ」

目の前に一冊の本を掲げる。

「『義姉との関係』」

僕は棒読みでその本の名前を呼んだ。

「また美咲さんの代物が出てきたな」

「うん。これがほんとの姉妹本」

さらりとエスプリのきいたことを言っ直。
どうしようもない気分させられる。

「それはともかく、春」

「何？」

「なんか食べてく？」

「あ、うん。少しだけ」

まだ待ち合わせまでに時間がある。
それまでに腹ごしらえをしておくのもいい。

「あ、でもさ直」

「ん？」

「僕の分の用意してあるの？」

「少しだけ」

そうして、僕は直と一緒に早めの夕食となった。

直の腕はやはりあいかわらずで、いつもどおりの会話しながら夕食を食べ終える。

夕食を食べ終えると、ちょうど良い時間だったので行く準備をして家を出る。

外はすっかり日が暮れていて、星が見えるくらい。

月極駐車場近くの都立公園入り口まで行くと、すでに綾が待っていた。

「春」

控え目に手を振ってくる綾。

片手には、変装用のセットが入っているであろう大きなボストンバックを持っている。

「綾」

「何？」

「待った？」

僕は聞いてみる。

「待ってないよ」

「そう。それは良かった」

「うん。じゃあ、いこっか」

綾がくるりと前を向いて歩きだす。

いつも利用している都立公園のホールにある障害者用トイレを使
つて、着替えをする。

先に綾が男の子の格好になり、髪をくくって帽子の中に隠す作業
を行う。

「よし」

その声とともに、綾がトイレから出てくる。

「どうかな？」

そして、僕の前でポーズをとる。

自分でも鏡の前で何度も確認したであろう格好。

問題などあるはずがない。

なので、僕は核心を持って告げる。

「大丈夫」

「ほんと？」

「ほんと」

「完璧？」

「完璧」

お世辞ではなく、本当にそう思っている。

前に綾が説明してくれたが、胸にもさらしを巻くぐらいの本格的な変装。

今も胸部の膨らみがなくなっている。

「じゃあ、次は春」

「わかった」

綾はボストンバックから僕の着替えを取り出す。

「はい」

「どうも」

そう言っつて、僕はトイレの中に入っていく。

綾に渡された女の子の格好に着替え、エクステをつける。鏡の中の自分を何度も見て、大きな違和感がないかを確認する。

その作業をしながら、いつもあることを思う。

よく考えてみれば、とんでもないことをしているのかもしれないと。

けど、僕が綾の手助けとなれる唯一のこと。

そして何より、天衣無縫でわがままな幼馴染が見れるのだ。

「よし」

準備を整え、意を決してトイレから出る。
もちろんそこには綾が待っている。

「綾、どう？」

「うん、大丈夫」

「良かった」

僕はほっとする。

「春。直に似ている」

「あ、そうだね」

この格好をするとき、綾がいつも言うセリフ。
この秘密の遊戯で直に似ていることを強く実感する。

「春」

「何？」

「私、今から変わるよ」

「うん」

「いい？」

「オツケー」

その言葉を合図にキリッとした表情になる綾。女の子らしさをなくしたような表情に綾の変化を感じる。

そして綾は僕をエスコートするように手を伸ばす。
僕はその手をつかみ、綾の言葉を待つ。

「春、わかってるかい」

「大丈夫、わかってる」

綾は手をぎゅっと握りしめてくる。

「さあ、春。ボクと一緒に街へ行こうじゃないか」

ボクという一人称の変化。
綾が男子モードに変わったのだ。

バスに乗り、街へと繰り出す。

ここは小さな市街だけど、とりあえずいろいろと見て回れる。ウインドショッピングができるくらいにお店はあるし、遊ぼうと思えばいろんな遊戯施設はあったりする。

けど、秘密の遊戯をしているときの僕達は、とにかく街中を闊歩する。

何かを発散するように、とにかく歩いて歩いて歩きまわる。

煌めくネオンや雑踏の中、目的地も決めずに漫然と歩く。

それは縛られている常識に対しての反発なのかわからないが、まるでなにかデモをしているかのような気分だ。

「春。ボクはね、この格好をしているときが一番自由を満喫できる気がするんだよ」

綾が神妙な顔をして言う。

「そしてボクは、春がその格好で隣にいてくれると安心するのさ」

言われて、僕は自分の格好を見渡す。

どこから見ても女の子の格好。

けど、もつずいぶんと慣れたものだ。

「僕は綾が安心できるのならそれでいいよ」

「そうか」

「うん」

「ありがとな、春」

「いいよ」

「いや、ありがとう」

ウインクとともに、お嬢様でいるときとはまた違った朗らかな笑顔。
顔。

それだけで、この秘密の遊戯をしている意味がある。

「春」

「何？」

「いや、なんでもないな」

「あ、そう」

綾と僕は、手を繋ぎながら街を歩いていく。

夜の街の風景はいつもと変わりなく、それが僕達を安心させる。
雑多な雰囲気も世話しない様子も何もかもが馴染んでいる気がする。

そうして一時間以上経って、そろそろ帰ろうかと頃合いになってくる。

しかし、そのときだった。

「これ、そこのお嬢さん」

見知らぬ御老人が声をかけてきた。

なので、僕は慌てて振り向く。

い。
今、お嬢さんと呼ばれる格好をしているのは僕であって綾ではない。ただ、そのかくしゃくとした御老人は首をかしげてこんなことを言う。

「あなたではなく、隣のお嬢さん」

その一言に、綾が限界まで目を見開いて振り向く。

「ボ、ボク？」

「そうです」

「ボクか……」

御老人の言葉にもものすごいショックを受けたようで、綾はふらふらと倒れそうになる。

倒れるとまずいので、僕は綾を支えておく。

「ハンカチを落としましたよ」

御老人はわざわざハンカチを拾ってくれて、綾に手渡す。
綾はそれを、茫然自失といった表情でつかんだ。

「あ、ありがとうございます」

「いいえ、きれいなお嬢さん」

そしてその一言が決定打となる。

親切な御老人がその場を去っても、綾は表情は変わらない。

僕の隣にいるのに、どこか寂しそうに見える綾。
それは何かの世界と戦っているようにも思える。

「春」

「何？綾」

僕には聞かれるであろう質問がもうわかっている。
けど、できるだけ平静を装って答えようと考えていた。

「ボクは……ボクはもう男の子には見えないのか？」

「そんなことはないよ」

「でも、さっきのおじいさんはっ！」

立ち止ったままの綾の表情がだんだんと歪んでいき、やがて大粒の涙となってしまふ。

顔をくしゃくしゃにした綾が、僕をじっと見つめてくる。
けど、僕に綾をなぐさめる適切な言葉は見つけられない。

「ボクは、もう、男の子になれないんだ」

「綾」

「ボクの心の自由も消えてしまっんだ」

「綾！ 違っって」

周りの人が何事かと見てくるが、そんなの気にしてられない。

「春だっって、ほんとはボクのこと」

「綾っってば」

「春だっって、きつと」

「違っよ」

「うううー、春のばかっ」

混乱したままの綾は、子どもじみた叫びとともに走り出す。

冷静に突っ立っている場合ではない。

そう思ったけど、一歩も足は動かないでいた。

綾が駆けていった方角のだいたいの見当をつけ、僕は後を追う。勝手知ったるこの街。幼馴染の行きつく先。

この二つを考慮してある場所が思いつく。それは小さい頃、綾の姉の翠さんに連れてもらった高台。

ここから近いとは言えないが、遠くもない。なので、僕は急いでそこへ向かう。そして、走りながらも綾にかけるべき言葉を考える。

けど、どうすればいいか。僕にはわからない。

「どうすれば」

ついつぶやきが口をついて回る。

あの御老人には罪はないが、綾にとっては大切にしていた何かを破壊された気分だったに違いない。

実際、綾もあんなに嘆いていた。どうすれば綾の嘆きを取り除いてあげられるか。

「……」

そんなのはやはりわからない。
結局、誰かが手助けするのではなく、自分で解決していかなくてはならない問題なのかもしれない。

僕は走りながらもそんなことを考えて、暗澹とした気持ちになる。
やがて高台に着き、ある種の確信を持って綾を探していく。

けど、綾はいない。

可能性のありそうなところはすべて探したが、それでもいない。
もしかしてすれ違いにでもなったのかとも思い、余計な不安がもたげてきたときである。

「君の髪、きれいだね」

へんなことを言う人がいるもんだと思い、声のする方へと振り向く。

すると、男は大きなハサミを持っている。

その瞬間、この街で起きていたあの事件を思い出す。

「あ」

僕は金縛りにあったように身動きがとれない。
そんな中で、僕はこう思う。

今、僕は女の子の格好をしている。
つまり男が狙っている髪も偽物。
エクステがばれたら、いつかの終わりだと。

男はどんどん僕に近寄っていき、肩をつかもつとする。身動きの取れない僕は、あっさりと男に捕まってしまう。

「髪、切らせてよ」

「……」

「それだけでいいから」

男がエクステへと手を伸ばす。

僕は男の逆鱗に触れないようにだまってやり過ごすしかない。しかし、そのときだった。

「春！」

タイミング悪く、綾がやってくる。

「あ、綾」

「春、どうしたの！」

「こ、これ以上近づくな」

明らかに挙動不審になった男。

大きなはさみを綾に向けながら構えている。

僕は勝気な綾が危ないと思った。

そしてこの時、この状況を打破するアイデアが閃く。

前に鳥子さんから教わった人体の不思議をつくツボを押せばいい。

そうすれば十五秒間、相手は停止する。

このままでは、綾が心配だ。

いけるか。どうだろう。

いや、やるしかない。

後は、二人で逃げればいい。

十五秒もあれば相当遠くまでいける。

そして、街まで降りて助けを呼べばいい。

思い立ったが吉日だ。

僕は鳥子さんに教えてもらった箇所を押す。

すると、僕をつかんでいた男の力が一瞬だけ緩くなる。

僕はその瞬間を見逃さず、素早く綾のところまで行く。

「綾、早く!」

「うん」

僕は綾の手を取り、走り出す。

さっきまで僕をリードしていた綾は、大人しくリードされている。後ろを振り向く勇氣はなかったが、男は追ってきていないようだった。

一生懸命に走った僕達は、綾が駆けだしたところまでノンストップでやってきた。

もうお互いに、完璧だったはずの変装は乱れている。

「はあ、はあ」

綾も僕も荒い息を吐く。

周りは僕達の尋常じゃない雰囲気に着目しているけど、自分達のことですえいっばいだ。

「春、大丈夫だった？」

「うん」

「綾は？」

と、僕も聞く。

「大丈夫。だってあんなのたいしたことないから」

男の子の格好をしている綾は、女の子みたいに笑う。

「それよりも、春」

「何？」

「とりみだしちゃってごめん」

「うん、いいよ」

僕は構わないというふうには手を振る。

そして、綾にかける適切な言葉が思い浮かぶ。

「綾、さっきのことだけだよ」

「え？」

「ほんとに大切なのは周りからどう思われるじゃなくて、自分がどう思うんだよ」

男の子に見えるか、あるいはお嬢様でいるか。

本当は重要ではないのかもしれない。

自分の心の欲するままにすればいい。

「でも、春の思っていることは大事」

「なら、僕は綾がそれでいいと思えるならそれでいい」

僕がそう言つと、綾がきつとんとした表情で見つめてくる。

そして、何かを悟ったように微笑む。

「そっか」

「うん」

「そういうことだよ、春。やっぱり春は春だ」

「そうだよ」

「なんか視界が開けた気分」

綾が気持ちよさそうにのびをする。

「綾」

「何？」

「あのさ、こうやって何かの指針を見失いそうになったとき、心を落ち着ける方法が一つあるんだ」

「え？」

綾が困惑した顔でこっちを見る。

僕はそんな綾をしっかりと見て言う。

「空を見て、星を見て、月を見て、そして自分を意識的に立ち止らせて固定すること。それだけでいいんだ」

すべては鳥子さんの受け売り。

あのとき、鳥子さんに教えてもらったことは人体のツボだけではない。

これをする心身ともにすっきりできる。

「そうなの?」

不思議そうな顔をした綾が聞く。

「そうだよ」

と、僕は力強くうなづく。

「綾、やってみよう」

「うん」

「準備はいい?」

「いいよ」

そして、僕達は空を見上げる。

雑踏うごめく人いきれの中、しばし停止する。

それはまるで宇宙への交信をしているかのようだった。

あれから三日後、街を悩ませていた男は警察に捕まった。

事件にあった僕達から念入りに聞き込み、犯人の特徴をしっかりと描いた直の似顔絵を警察に渡したのが功を奏したのかはわからない。

ともあれ、ニュースでさんざん賑わせていたあの事件はあっけなく解決。

そして後日、僕は東風荘の前で佇んでいた鳥子さんに僕はお礼をしに行く。

すると鳥子さんはこんなことを言う。

「おかしいですね、春くん。あんなツボ押しは私にはしかできないことなんですよ」

「え、そうなんですか？」

「そうですよ。ついでに言うと師範なんて私にはいません。作り話ですね」

「え……」

魔性めいた微笑みでなげかけてくる鳥子さん。

でも、それだと不可解さが拭えない。

どうしてあの男は追ってこなかったのか。

「それは君が本気でどうにかしようと思えたからですよ」

「え？ どういう意味ですか？」

「俗にいう気合の差です」

「気合。そんな問題でしょうか？」

「はい、世の中とはそういうものなんです」

鳥子さんがそう言うのならそうかもしれない。

僕は鳥子さんの回想を思い浮かべながら、街の景色を見渡す。

今、僕達三人は屋上に来ていて、昼休みを満喫中。

直はいつもどおりスケッチ。

綾と僕は富士山の見えるスポットで会話をしている。

「春」

「ん？」

「私さ、思っの」

「何を？」

「私が私であることをわからせようと思っんだ」

「それってお嬢様じゃないってことを示すってこと？」

「そう。家族にもクラスにも」

自信を持って言う綾。

何が綾に変化をもたらしたかはわからない。

「春はどう思う?」

「いいんじゃない。綾の思うままにすれば」

「うん」

綾がこくりとうなずく。

「じゃあ、秘密の遊戯は?」

「そ、それはまだ言えない」

「そっか」

「つまり、春にいっぱい迷惑かけるつもり」

「なら、これからも大変だ」

「そう、大変。だから覚悟していてよね」

この空のように晴れ渡った笑顔で言う綾。

僕はなんとも言えない気持ちでそれを見守る。

いつまでこの秘密の遊戯が続くのか。

それはわからない。

けど、それでこそ僕にとっての幼馴染との付き合い方。
今ではこう思っているのだ。

3 - 20 決意（後書き）

一応話の区切りとしてここで完結しました。

そしてこの続きを書くかどうかは、実は迷っています。

続きを読みたいというコメント、あるいはメッセージなどがあれば、なんでも良いのでよろしくお願いします。

要望があれば、いきなり続編を始めるかもしれません。

まあ、あればですが（苦笑）

それでは、最後まで『幼馴染の付き合い方』に目を通してくださってありがとうございます。

あ、後、新しい小説でもある『僕と彼女は仮幼馴染』の方も機会があれば読んでやってください。

追記

作者のトマトくんです。

ここでは、前回は書きに書いたあの件についてご報告しようと思
います。

そうです。続きを書くかどうかの件についてですね。

作者はどうしようか悩んでいたのですが、感想欄とメッセージボ
ックスに続きを書いてほしいとの依頼があり、とりあえず書いてみ
ることにしました。

「始まらないストーリーって無性に切なくなるよね」という直の言
葉通り、まだ春と綾のストーリーは始まっていません。

そこを指摘されて、ああ、そうだな、と深く思いました。

なので、これからも「幼馴染との付き合い方」をよろしく願ひ
します。

なお、まだストーリーの道筋が見えていないので、投稿するまで
時間がかかるかもしれませんし、あるいは見切り発車して更新が止
まってしまいかもれません。

温かく見守ってくださいと幸いです。

それと今回は、この六十二話目を持って第一章の完結とします。
続きは第二章として、六十三話の人物紹介の後、六十四話目から
開始します。

人物紹介をしたら、第二章が始まる目安だと思ってください。

それではここまで目を通してくださった読者様に感謝を込めて、
追記を終わりと致します。

後、最後になりましたが、ご感想、ご指摘、評価、お気に入り登録などは作者のモチベーションにかなり深く関わってきます。

ということ、今もどしどし募集しております。

皆様、気が向きましたらどんな些細なことでも結構ですので、ぜひお願いしますね。

人物紹介

《メイン》

坂本 春

本作の主人公、語り部。歳は15。誕生日は4月12日。趣味はこれといったものが特にないが、寝る前に一日の終わりをよく振り返ることをする。

見た目は意外とかっこいいアンニュイ系。性格はやや脱力系。だけど意外とDS。

頭脳、運動神経はともに平凡。

だが、人にはない考え方や信念を持つ。

また、唯一の肉親である妹を尊敬している。

幼馴染の綾については、自覚的にその関係を保っている。

坂本 直

年子の妹。同じ学年。同じクラス。歳は14。誕生日は3月3日。趣味はスケッチをすること。特に学校での屋上スケッチは気に入っている。また、美術部の助っ人をよく頼まれる。

見た目はかわいいよりも美人に形容される顔立ち。髪は長くストレートで、すべてを見透かしてしまいそうな伶俐な視線が特徴的。性格は完ぺきな脱力系。素直クール。

頭脳明晰で真面目。感受性豊か。家事上手の料理下手。

口癖は「なんとなく」。

兄の春と幼馴染の綾との関係には少なからず思うところあり。

遠藤 綾

幼馴染。同じ学年。違うクラス。歳は15。誕生日は8月10日。学年でもファンクラブがあるくらいの人気者のお嬢様。

しかし、実態は猫かぶりで、わがままのじゃじゃ馬。若干ツンデシ。

自由を求めるためにしばしば男装をする。そしてそれが春との秘密の遊戯に關係している。

口癖は「春はほんとにばかなんだから」。

春のことは幼馴染としての関係とは違った形で意識している。

《サブ》

(学校関係)

都築 絵里

後輩。歳は14。主人公とは一学年下の関係。

キラキラした瞳とサイドにくくっている髪型が特徴的な女の子。

性格は活発、そして早とちり。元気っ娘。

家族は多く、長女として生活のやりくりを担当している。

春には明確に好意を示している。

小平 真由

綾の親友。同じ学年、違うクラス。歳は15。

ショートカットで空手部の女の子。

言葉よりも手の方が早い。

春との関係は、いつも間が悪いこともあってか、あまりよい感情を抱いていない。

小倉 隆 クラスメイト。春の友達。脱ぐ癖がある。空手部。
吉田 栞 クラスメイト。春の隣の席。大和撫子。恥ずかしがり屋。

(東風荘関係)

上杉 美咲

大学生。歳は21。東風荘の二号室住人。
見た目はよく見れば美人。もさつとした髪型とラフな格好が特徴的。

豪放磊落なお姉さん。賭け事好き、鍋好き。
春はからかいの対象にある。

野々垣 鳥子

年齢不詳。東風荘の六号室住人。

薄くルージユを引いた妖艶な女の人。不思議系。

趣味は手品。腕前は一級品。

それと予知能力を持っていて、春に時々助言をしてくれる。

(その他)

遠藤 翠 綾の姉。お天気お姉さん。

竹内 由貴 あっさり美人。ジモティーズの主催。

岩崎 明美 ジモティーズの知り合い。高二。皮肉屋。

「春、春」

それは優しくも低音な直の声。

さらには揺り起こすような軽い振動。

何度もあつた光景だと感じつつも、僕はゆっくりと体を起こす。

「よいしょ」

「起きた？」

「あ、うん」

目前には、いつも変わらない直の表情。

かわいいよりも美人に分類される顔立ち。世の中のすべてを見通してしまいそうな瞳が僕を見つめる。

「おはよ」

「うん」

僕は寝ぼけ眼をこすりながら、今の状況の把握に努めようとする。どうやら直が一度起こしてくれたのに、二度寝をってしまったみ

たいだ。

「春」

「何？」

「二度寝するなんてばかなんだから」

それを聞いて、僕は嘆息する。

最近、綾の口癖が直に移っている。

綾というのは直と僕の幼馴染。

わがままで活発、さらにはじゃじゃ馬で怒りっぽい女の子。

けど、学校では猫かぶりをしていたため、深窓のお嬢様としてファンクラブも存在するほどの人気を博している。

広く膾炙しているこの事実には僕は面食らいそうになるが、綾は綾であって変わりはない。

しかもあの事件以来、綾は地を出すようになってきた。

おかげで、別方面での人気も出ているという。

ちなみに綾と僕には誰も知らない秘密を有している。綾と僕は互いに性別を交換して、夜の街を繰り出すという秘密の遊戯だ。

「直」

「ん？」

「二回も起こさせてごめん」

話を戻して、直に謝る。

とにかく僕に非がある。

だから、頭を下げるに越したことはない。

「春。もういい」

「ほんと？」

「ん」

とは言いつつも、無表情でふくれる直。

この無表情というのがポイントで、今のところ直の表情の変化は僕と幼馴染にしか見分けがつかない。

直は感情の発露に乏しいように見えて、実はそんなことないのを他の人は知らない。

「あのさ、直」

「何？」

一度顔を戻しかけた直が、また振り向く。

「一つ聞いてほしいことがあるんだ」

「ん」

「いい？」

「はい」

直が了解して、僕はゆっくりと口を開く。

「さっきさ、夢を見たんだ」

「夢？」

「そう」

「でも、春は十分間くらいしか寝てないけど」

「それでも見たよ」

直が表情を変えないで驚く。

「懐かしい夢だったな」

時計の針を幼少の頃までに大きく巻き戻したような夢。
たしか小学生だった気がする。

まだ冒険とか探検とか魅力に見えてキラキラ輝いていた時で、綾の先導のもと秘密基地の探索に出かけた夢だ。

綾と直と僕がいて、もう一人おさげの女の子がいた。

「春、その女の子は誰？」

直が聞く。

「それがわからないんだ」

「そうなの？」

「うん。なんだか知らないけど頭の片隅にずっと引っかかっているさ。なんていうか霞がかつた感じで、輪郭も伴わずにずっと残っているんだ」

僕は言葉にしにくい表現を一生懸命に説明していく。

「ふーん」

「もしかして記憶の中の女の子が私を忘れないでって言っているのかも」

「そうなのかもしれないね」

直がおざなりに返事をする。

布団を畳んで押し入れにしまい、カーテンを開ける。

東風荘はけっして日当たり良好とはいえないけど、太陽の斜光はしつかりと入ってくる。

僕はその光を一心に浴びながら、大きく腕を曲げてのびをする。

「直」

「何？」

「今日行かないの？」

「ん。行かない」

直の返事は昨日から変わらない。

一応、念のためにもう一度聞いてみる。

「ほんとに綾の家行かないの？」

「ん。いい」

実は今日、前に約束した綾との勉強会が遂行される日だった。しかも、綾の家に招待されている。

ちなみに綾の家は、初めて行った人が迷ってしまうくらいの豪邸だ。

今まで、直と一緒に一度しか行ったことがない。

「でもさ、綾は直が来ることを期待しているんじゃない」

僕はなおも食い下がる。

「綾には行かないって断ったから」

「勉強はしなくてはいいいの？」

「ん」

「それは勉強出来る人の嫌味？」

これはあまりいい言葉ではないな、とか思いながらもつい言ってしまった。

「ううん。違うよ春」

「そつだよね」

直はそんな無粋な性格ではない。

相手を思いやる気持ちと、誰かを幸せにする能力は格段に高い傲慢の妹だ。

「私は始まらないストーリーよりもね」

「うん」

「始まりそんなストーリーの萌芽に期待しているの」

たしかにあの日以来、幼馴染である綾との距離は急速に縮まった気がする。

まだ妙な間があったりするけど、変に思うことはなくなった。

「始まりそんなストーリーか」

「そう」

「でもさ、直。僕にはその直の表現はわからないよ」

「そんなことない」

と、直は言う。

そして直は気分を変えたかったのか、リモコンをかちやかちやといじくる。

適当に朝のエンタメがやっている所でチャンネルを止め、それを見入る。

それから程なくして番組は占い情報になり、さらには最新の天気予報へと変わっていく。

「春、翠さん」

「ほんとだ」

画面に映っているのは綾の姉の翠さん。

泣きぼくろが印象的な美人で、直と僕はよくお世話になった。

「翠さん、休日もやってるんだ」

「ん。やってる」

「直は知ってた？」

「知ってた」

「そっか」

僕はうなずく。

「それよりも春。早く朝ご飯食べよ」

「うん、わかった」

僕は顔を洗い、パジャマから服に着替えた後、食卓に着く。

今日の朝ご飯のメニューは和風だ。

列挙するまでもないけど、ご飯、お味噌汁、ホウレンソウのおひたし、鮭の切り身などが並んでいる。

「いただきます」

「いただきます」

お互いに手を合わせてあいさつをする。

そして腕の変わらない直の料理を黙々と食べていく。

「あのさ、直」

「何？」

海苔のつくだにを取り分けながらも、直が先をつながす。

「この頃、『料理上手くなった？』って僕に聞かないよね」

「ん」

料理は、家事をそつなくこなす直の鬼門だ。

作った料理が食べられないことはないんだけど、なぜか味気ない料理になってしまうという不思議な特性を持っている。

しかし、それなのに直は少し前から交代制だった料理を全て担当しはじめた。

お弁当も直が作ってくれることになり、最近の僕は台所に触れていない。

男子厨房に入らず状態だ。

「で、どうして聞かなくなったの？」

「それはね、春。ある日突然、何の抵抗もなく『上手になったね』って言われるのを待っているの」

「そうなんだ」

「そう。私はきつといきなり上手くなる」

「そういうものかなあ」

僕は首をかしげる。

「見えない成長曲線というのがあるはず」

「へえ」

「そのためにはやっぱり努力は欠かせない」

直は冷蔵庫にかけてあったエプロンのポケットを見る。

そこには『努力』の刺繍が入ったはちまき。

前はフェルトペンの文字だったけど、いつのまにか刺繍に変わっていてびっくりする。

「これを毎日拝んでいる」

「え？ どういうこと？」

「じつやって」

直が拝む姿勢を見せてくる。

「方法じゃなくてさ。どうして拝むの？」

「ん。わかんない」

「わかんないってさ」

「んと、なんとなくかな」

朝食を食べ終えた後、しばらくくつろぐ。

直と日常の会話をしながら、招待された綾の家に行く準備をする。何にでも活用しているいつものトートバックに勉強道具を入れて、大方の準備を整える。

「春、電子辞書忘れてるよ」

「あ、ほんとだ。ありがとう」

直に電子辞書を渡されて、僕はそれをトートバックにしまう。

「そついえば、直」

「何？」

「今日の予定は？」

「今日の予定？」

と、直がオウム返しに聞く。

「うん」

「美術部の友達と都立公園でスケッチをする」

「そっか」

僕は直の予定を確認してから、玄関で靴を履く。

とんとんと靴のかかとを合わせていた時、直がこっちまでやって来て言う。

「春、服」

「えっ？」

「少しだけよれてる」

直がよれてた服を直してくれる。

「ありがとう」

「ん。じゃあいつてらっしやい」

「いってきます」

東風荘独特の古い玄関のドアを開けて、外に出る。

外は雨上がりのあのにおい。

先日降った大雨で、綺麗だったイチョウの葉は散ってしまったのだろうか。

「あ、鳥子さん」

「おや、春くんですね」

鳥子さんは東風荘の前にて日向ぼっこしている。
服装はいつもと変わらない黒一色だ。

「おはようございます」

「はい、おはようございます。でも、そう言うには微妙すぎるほど微妙と言える時間ではありませんね」

「たしかにそうですね」

僕は相槌を打つ。

鳥子さんはなぜこの東風荘に住んでいるのかが不思議な人で、仕事もウイリアム・テルという立派なブランド名を立ち上げている。

ちなみに趣味は手品。

これにはいつも驚かされてしまう。

「春くん。今日は小春日和でいい天気です。それにしても、私にとつて小春日和という単語はなぜか気になる言葉であります」

「はあ、小春日和ですか」

「はい」

唇に薄いルージユを引いた鳥子さんが妖艶に微笑む。
大人の魅力であふれたお人だ。

「で、鳥子さん」

「はい、なんですか？」

「今、何をしていたんですか？」

「ああ、それはハロウィンにむけて新しい手品の練習をしていたのですよ」

「あ、そういえばもうすぐですね」

十月三十一日。

ハロウィン。

日本では馴染みが薄いのかもしれないが、東風荘では一大イベント。

それに一年で唯一仮装をしても違和感がない日でもある。綾も僕もこの日だったら、問題ないのかもしれない。

「春くん。では、ちょっと私の手品を見ていきますか？」

「はい」

「いきますよ」

と、宣言した後すぐに、鳥子さんは林檎の剥製をいきなり手元に出す。

鮮やか過ぎる早業で、僕にあっけにとられた。

「あいかわらず凄いですね」

「いえ。これは基本中の基本でして、ここからさらに上積みしなくなりません」

「そんなことは断じてないですよ」

「そうですか？」

「はい。今でも十分にすごかったですから」

「ありがとうございます」

鳥子さんがお礼を言う。

「ところで、春くんはこれからお出かけになるのですか？」

「あ、はい」

僕は腕時計を見ながら、現在の時刻とバス時間を照らし合わせる。

「ちょっと幼馴染と勉強会の約束をしたもので」

「そうですか。バスを利用されるのなら、きっとバス停には美咲さんがいらっしやると思いますよ。さきほど元気良くあいさつを交わしましたから」

「あ、そうなんですか」

朝から美咲さんのテンションについていけないあと思い、僕は苦笑する。

小学校前のバス停につくと、案の定美咲さんが立っていた。美咲さんの他には誰もいない。どうやら今日のバスの利用者は少ないようだ。

「おはようございます、美咲さん」

「おー春坊。おはようさん、と」

あいさつ代わりにヘッドロックをかけられそうになり、僕は慌てて身をよじる。

なぜか知らないけど、美咲さんが涙した日以来、彼女とのスキンシップが多くなっている気がする。

中学生に絡む華の女子大生。

不思議に思いながらも、それを聞くことは自重している。

「春坊もバスに乗るのか？」

「はい。それよりも美咲さんがバスを利用するなんて珍しいですね」

「あー気分を変えたくてさ」

美咲さんがポリウーームのある髪の毛をいじりながら言う。

「春坊もそんなことってないか？」

「いえ、僕はルーチンワークの方が好きです」

「なんだと、この」

今度はつかまってしまい、ぐりぐりとこめかみをやられる。ツボをすっかり押さえているのか、かなりの痛さだ。

「美咲さん、痛いですよ」

「痛いじゃないぞ」

「いえ、痛いものは痛いです」

僕が涙目でそう告げると、やっとぐりぐりを止めてくれた。

「春坊なら、この私の繊細な気持ちをわかってくれと思ったのに
な」

「繊細という言葉はどこかに置き忘れてきた人が何を言いますか」

「なんだと」

繰り返されるぐりぐりの刑。

今度は後ろから密着されて、先ほどよりも強くやられる。

「いてて、美咲さん。今度こそギブです」

「この程度でギブだと？」

「……」

僕は我慢ごっこでもしているのだろうか。

さらに背中に柔らかなモノが当たっていて、意識がそっちに持っ
ていかれる。

「み、美咲さん。当たってますって」

「何が？」

「胸です」

美咲さんは自分の色気を自覚していない。

そんな僕の懊悩をよそに、美咲さんはこんなことを言う。

「まあたエロイこと考えていたんだな。春坊は」

「はあ。違いますって」

僕はため息をつく。

「あ、そういうえば春坊」

「今度はなんですか？」

「昨日、新刊が入ったんだよ」

「はい？」

「『義姉妹との関係』」

「こ、今度は姉と妹が合体してる」

「しかも、大学の生協で売ってた」

「大学は何を売っているんですか」

大学には官能小説が平然と売られているのか。
僕は頭を抱えそうになる。

「そんでもちろん学生割引で買ったね」

「やっぱり買ったのかいっ」

どうも美咲さんと一緒にいるとつつこみが入ってしまう。
けど、美咲さんにつつこみどころが多すぎるのがいけない。
第一、官能小説を買ったことを他人に報告するものなのか。

「心配すんな、春坊」

「何がですか？」

「読み終わったらちゃんと回してあげるから」

「いらないます」

「え？　じゃあ部屋に隠しておいてほしいのかい？」

「またそのパターンですか。止めてくださいね」

「宝探してみたいでわくわくするぞ」

「宝じゃないですから」

「何、あんなのでは満足しないと」

「そうじゃないですってば」

僕はげえげえと息を吐く。

けど、美咲さんはまったく懲りていない。

「あ、いいこと思いついた」

そう言うのにやりと笑う美咲さん。

まるで意地の悪いことで有名なチェシャ猫のようだ。

「あの時のネコ語での告白」

そしてぼつりとつぶやく。

「あ」

瞬時に思い出してしまう自分の痴態。

「す、すいませんでした」

「じゃあ春坊、今回はしっかり読むんだな」

「はい、読ませていただきます」

これってセクハラになるのだろうか。
僕はそんなことを考えていた。

1 - 5 モラトリアム

バスは話している間にいつのまにかやってきた。待っていた時間は五分くらい。

乗車整理券を受け取り、僕達はバスに乗り込む。バスの中は人が少なく、どこの席でも座り放題だ。

「私、窓側な。で、春坊は隣」

「はい、わかりました」

美咲さんの勧めで、後ろの二人席に腰を落ち着ける。座った瞬間、バスはガソリン音を響かせて出発した。

「春坊」

「何ですか？」

「ガムいるかい？」

美咲さんがポケットからガムを取り出す。

「ガムですか」

「そう、ガムだよ。昨日本屋で買っておいたのが余ってた」

「そうじゃなくてですね。美咲さんはガムあまり好きじゃなかったような気がしまして」

「だから春坊に買ってくれと言っているわけさ」

そう言ってガムを渡してくる美咲さん。

「でも、ガムを買うなんてほんとに珍しいですね。美咲さん」

「あーそうだな。でも男にふられた後はさ、普段しないことをしたくなるんだ」

「そうなんですか？」

僕は疑問を投げかけたが、そういえばそうだったと思います。

前に美咲さんがふられた時も同じようなことがあった。

「そう。たとえばガムを買ってみたり、インディカ米を食べてみたり、通学路を変更してみたり、ラッタッタを乗り回してみたり」

「ラッタッタ？」

僕は首はかしげる。

すると美咲さんは、目を丸くして言う。

「春坊はラッタッタも知らないのかい」

「はい」

「私の大学の友達が譲ってくれたスクーターのことだよ」

その言葉で僕は合点がいく。

「あの古いイエローのバイクのことですか」

「そうぞ」

「けど、美咲さんはバイクの免許持っていましたっけ」

「春坊、オマエは本当にバイクのことに關しては知らないんだな。私が乗っているのは自動車の免許だけで乗れるやつなんだ」

「へえ」

僕は驚く。

てつきり、自動車とバイクの免許は別物だと思っていたからだ。

「今度、後ろに乗るか？」

「え、乗せてくれるんですか？」

「まあ、交通違反になるけどな。原付だし」

「ダメじゃないですか」

それから美咲さんと僕は、不思議な語感であるラッタッタの由来について話した。ラッタッタとは、昔やっていたCMから派生してきたらしい。

「あ、僕、次で降ります」

「そうかい」

バスは都立公園前、イチヨウ並木、学校の前を通り、綾の家の近くへと来ている。

「春坊。私がボタン押すからな」

「いいですよ」

「ほんとだな？」

「はい」

僕は嘆息する。

「美咲さん。なんだか子どもみたいですな」

「何言ってるんだい。私も春坊もまだ子どもじゃないか」

「え、美咲さんは大人じゃないんですか？」

「そうか？」

美咲さんが不思議そうにかしげる。

「あ」

それよりも、つい最近どこかで聞いたセリフだなと思う。
けど、思いたせない。

「ていうか、モラトリウムなわけさ」

「モラトリウムですか」

「そう、モラトリウム」

そう言いつつも、美咲さんがボタンを押す。
バスは止まる旨のアナウンスをはじめ。

1 - 6 大人の事情

美咲さんに別れを告げ、僕は一足先にバスを降りる。
降りた場所は閑静な住宅街。

けど、ここら辺一带は軒並み大きな家が建っていて、通るだけで
圧迫感を感じてしまう場所だ。そしてその中でも綾の家は、瀟洒な
造りで一際目立っている。

特に、どこまでも続く赤レンガ造りの外壁が凄みを感じさせる。

「よし」

一息入れてからインターホンを押す。
すると、綾が出てくれた。

「春？」

「あ、そうだけど」

カメラのモニターに視線を合わせて返事をする。

「待って。今開けるから」

綾がそう言うと、門がゆっくりと自動で左右に開いていく。

「入って」

「わかった」

僕は恐る恐る足を踏み入れる。

玄関まで数十メートルある道を、庭師でも雇ってそうなガーデニングを堪能しながら進んでいく。そうしてしばらく歩くと、玄関先では綾が待っていた。

「春。ようこそ」

今日の綾はラフな私服姿。

それでも女の子らしい姿だ。

「中、入る」

「うん」

綾が玄関を開けて、僕達は中に入る。

邸宅に入ると、まず目につくのは物凄く広い玄関ホール。

西洋式のシャンデリアと敷き詰められたカーペット、さらにはたくさんの絵画が飾ってある。

「あいかわらず凄い家だね」

「そう？ でも、私は関係ないから」

「そんなことないと思っけど」

「そんなことあるよ」

綾が寂しげに言う。

「で、今はどこに向かっているの」

「ん？ もちろん私の部屋」

木目が艶やかな廊下を歩きつつ、左へ右へと曲がりながらも綾の部屋にたどり着く。

「着いた」

「どこ？」

「うん。入っていいから」

綾が僕を招き入れる。

前に直と来た時と、さほど変わっていない綾の部屋。
けた外れの広さと天蓋のベットがある以外は、普通の女の子の部屋だ。

「春、あんまり見ないでよ」

「あ、ごめん」

とは言いつつも、机の上に懐かしいものを見つける。

「あれ、結構前に夏祭りの景品で取ったイルカのぬいぐるみだよね」

「あ」

綾は顔を赤くして、慌てて隠そうとする。けど、そんなことをしても後の祭りだ。

「こ、これは昨日部屋の掃除をしていた時に、偶々出てきただけなんだからね。いつも飾っているわけじゃないんだから」

「そっか」

「そうに決まってるでしょ」

不自然に怒鳴られた僕だったけど、怒りっぱい綾なので納得する。

「えっと」

「ん？」

「あ、あのさ、春」

話題を逸らすように、綾が口を開く。

「直はやっぱり来れなかったの？」

「うん。都立公園で友達と絵を描くんだったさ。そういえば今日、両親はいないんだよね」

「そうだけど」

「という事は、僕」

「ふ、二人きりじゃないわよ。後で私専属メイドのマリアが来てくれるから」

なぜか綾が、僕の発言をさえぎって言う。
けど、それは綾の先走りだ。

「そうじゃなくてさ、綾」

「え？」

「綾の両親と顔を合わせなくてもいいんだな、と思ってさ」

というのも、直と僕がのっぴきならない事情で東風荘に二人暮らしをして以来、綾の親とはすっかり折り合いが悪くなってしまった。一時期、綾と疎遠になりかけたのも、遠回しに幼馴染関係を解消させられそうになったからだ。

「ごめんね、春。ばかな親達で」

「しょうがないよ。それが大人の事情だから」

「そっか」

「うん」

「大人の事情か」

僕は寂しそうな顔をした綾を見る。
もっとましな言い方はなかったかな、と思う。

1・7 マリア

綾の言う通り、マリアさんはすぐにやってきた。

綾と僕が勉強会のための机を準備していると、コンコンとドアを叩く音が聞こえて彼女が入ってくる。

「失礼します。マリアです」

マリアさんはいかにもって感じなメイドの格好。
けど、従順というよりは大人っぽく小悪魔な感じで、なによりも美人だ。

「マリア」

「はい。お嬢様。マリアですよ」

「今日は春と勉強会だから」

「あ、坂本春です。綾とは幼馴染の関係です」

僕は慌ててマリアさんにあいさつをする。

「はい。お嬢様から伺っています」

マリアさんが優雅に微笑むが、なにか含みがあるように思えてしまう。

「で、お嬢様」

「何？ マリア」

「勉強会とは大人の勉強会ですか？ そしたら私は席を外した方がいいと思いますか？」

「なっ?!」

綾の顔が真っ赤になる。

にしてもこの人、何を言い出すのだろうか。

「か、からかわないでよマリア。普通の勉強会だからね」

「そうですか。それは残念です」

心底残念そうな調子でマリアさんが言う。

けど、あの顔は心の底では絶対笑っている。

「それでマリアの役目は、私達がわからない所を逐一丁寧に解説するって」

「私、大人の勉強会がいいのですが」

「マリア。だからそこから離れなさいっ」

「普通の勉強会より楽しいですよ」

「いいのっ!」

綾が声を荒げて怒鳴るが、マリアさんには逆効果。年下がからかわれるこの光景は、美咲さんと僕の構図にどこか似ていた。

「ということ、マリアも早く準備して」

「はい、わかりました。お嬢様」

マリアさんが形式に乗っ取った一礼をする。見事な切り替えの速さに、僕は驚く。

「あ、そうそうお嬢様。一つ私から話したいことがあるのですが」「え?」

綾が戸惑っているあいだに、マリアさんは綾の耳元まで行く。そして僕をじっと凝視してから、何か一言、二言告げた。

「マ、マリア。そうなの?」

「はい。そうです」

「……」

綾が少しずつ困惑した顔になっていく。果たして、マリアさんは何を言ったのだろうか。

「は、春」

「何？ 綾」

「私、ちよつと席を外すから。春は勉強の準備をしていて。後、マリアも」

結局、綾は慌てて部屋を飛び出す。

というわけでこの部屋に残ったのは、必然的にマリアさんと僕。

しかもマリアさんは、パーソナルスペースの許容範囲を大幅に超える勢いで僕に迫ってくる。

「な、なんですか？」

「いえ、なんでもありませんよ」

そんなことを言うが、全身を舐めまわすように僕を見てくる。

「坂本様」

「はい」

「二つほどお聞きしてもよろしいですか？」

「いいですよ」

と、僕は返事をする。

「では、聞きます。坂本様はお嬢様のことを大切に思われていますか？ それと、最近お嬢様に変化の兆しが見えるのは坂本様の影響

ですか？」

ずっと顔をよせて聞いてくるマリアさん。

「どうですか？」

「答えは、その、両方ともはいだと思います」

「そうですか。それは良かったです」

マリアさんが笑顔を見せる。

「私、お嬢様が嬉々として語る坂本様とお話したかったんですよ」

「はあ、そうですね」

こっちにしてみれば、綾が僕のことを嬉々として話す姿は想像で
きない。

マリアさんは僕のことをからかっているのだろうか。

「ところで坂本様」

「なんででしょう」

「そちらからも何か聞きたいことがありますか？」

「聞きたいことですか？」

「はい」

「えっと、今は思いつかないのですが」

さしあたって聞きたいこともない。

後、余計なことをしゃべるとこっちの旗色が悪くなりそうという

のもある。

「そうなんですか？」

「そうです」

「それは残念ですね」

けど、マリアさんは含みを持たせる。

「ぶつちやけ、下着の色とか聞いてもいいんですよ。ちなみに両方とも黒ですけど」

「もう言っちゃってるじゃないですか」

「なら、好きな官能小説の種類とか聞くのはどうです？」

「僕は変態キャラですか」

くすくすと笑うマリアさん。

メイドさんというよりは、やはり小悪魔な感じの女の人だ。

「ちなみに私が好きなのは『義兄との関係』です」

「今度は女性目線?!」

ともあれ、巷の若い女性のあいだでは官能小説が流行っているの
だろうか。

しかし、本当に美咲さんと同じ香りがする。

もっともあつちは色気の自覚がなくて、「こっちは自覚がある。結論としては無自覚のほづが恐ろしい。だから、まだ救いはあると言えよう。」

「あ、マリアさん」

「なんですか？」

「今、思いつきました」

「？」

首をかしげるマリアさん。

「あの、聞きたいことです」

「そうですか」

「はい。そのマリアというのは本名なんですか？」

僕がそう聞くと、マリアさんはにやりと笑う。

「私を本名で呼んで口説きたいんですね」

「どうしてそうなるのでしょう」

「でも、教えて差し上げません」

僕の唇に手が添えられる。

その蠱惑的な表情に、僕は言葉が出ない。

「マリアはコードネームみたいなもので、本名をさらすのは禁則なんです」

「禁則？」

「はい。私が勝手にそう決めました」

おちやめなウインクとともに、マリアさんが告げる。

「わかりました。それじゃあしょうがないです」

「期待に伝えてあげられなくてごめんなさいね。でも、女の子はステリアスの方がいいんですよ」

「そうですか」

「はい。なので私は、坂本様の期待に応えたいと思います」

するとマリアさんは、僕のひざの上にちょこんと座ってくる。意味がわからない。

「いきなりどうしてそうなるんだか」

おもわず敬語が抜けてしまった。

本人に自覚がある方が扱いやすいなんてとんでもなかったのだ。

「あれ？ ひざに乗ってほしいというオーラをびんびんに感じたのですが」

「そんなオーラ一つも出していません」

マリアさんの柔らかな感触を追い払おうとしながらも、僕は言っ

「では、思っていたんですね」

「思ってもいません」

「なら、私の勘違いですか」

「はい、勘違いです」

マリアさんは上品に僕のひざから降りる。

女の子座りをして、今度は僕の隣に腰を下ろした。

「やっと降りてくれましたか」

「降りたのは坂本様が動揺しないからです」

「動揺してましたよ」

「それをおくびにも出さず？」

「そうですね」

「それよりも坂本様」

「はい、なんでしょう」

「貴方は年上の女の子の扱いに慣れていますね」

「そんなことないです」

「謙遜したって無駄ですよ。私にわかるんですから」

「……」

僕がどう反論しようか黙っていると、マリアさんがやにわに立ち上がった。

「さて、私も十分楽しめましたし、そろそろ準備の方に取り掛かりますか」

「楽しんでたんですか」

「はい」

マリアさんがいたずらっ子のような笑顔を見せてくる。

「では、行きますね」

「あ、今日はよろしくお願いします」

「はい。お願いされました。それでは待っていてくださいね」

マリアさんはその言葉を最後に部屋を出ていく。

結局、小悪魔なマリアさんに翻弄された僕は、深々とため息をつくのだった。

綾の部屋に一人残された僕は、黙々と簡易機の準備を進めていく。簡易機は脚を立てるだけでできる簡単な代物で、一人でもすぐに組み立てられる。

「よし、出来た」

簡易機を完成させた僕は、その上に教科書、ノート、参考書を並べていく。

持ってきた教科は英語と数学。

他と比べて、成績が極端に低いのがこの二教科である。

特に数学の時間は、頻繁に絵里ちゃんとメールをしていたせいもあって成績は散々だ。

「あ、そういえば絵里ちゃん」

ちなみに、あれから絵里ちゃんとは会っていない。

あの秘密のデートの日以来、連絡が来ていないのだ。

「春、ごめん。遅くなって」

「あ、うん」

絵里ちゃんのことを考えていたら、ちょうど綾が戻ってきた。
綾はなぜか着替えをしていて、僕の意識はそっちに向けられた。

「綾、どうしたの？」

「ちょっと汗かいちゃったから」

不可解な理由に、僕は首をかしげる。

「綾。今は秋なんだけど」

「いいの。べつに春のために着替えたってわけじゃないんだからね」

「そう」

僕はおざなりに返事をする。

「でも、どうかな？」

「え？」

「私の格好」

「うん。似合っているよ」

綾は、ラフな格好からAラインと呼ばれるワンピースに着替えていた。

まるで本物のお嬢様みたいだ。

馬子にも衣装といえればいいのか。

「それよりも春」

「何？」

「春こそどうしたの？」

「えっ？」

「さっき考えこんでいたみたいだけど」

「あ、うん」

綾のあどけない顔が思ったより近くにあって、僕は困惑する。
もっとも、考えこんでいた内容についてを告げるべきかも悩んでいる。

「たいしたことじゃないよ」

「そっなの？」

「うん」

結局、僕は告げないことにした。
これを告げると、綾との秘密の儀式のことをぶりかえさなくては
いけなくなるからだ。

「さて、私も準備しよ」

綾は自分のバックから教科書とかを取り出していく。

そして一通り簡易机の上に並べ終わると、綾がうんうんとうなずく。

「これでよし、と。ところで春は何からはじめるっ、」

「僕？」

「うん」

「数学かな」

うんざりするほど厚い問題集を片手にして、僕は言う。

「あー私も数学。やっぱり問題は数学なんだよなあ」

綾もぼやく。

僕よりも成績がいい綾でも数学は苦手なようだ。

「数学は難しいよね」

「ほんとだよ」

「昔は数字が好きだったんだけどな。算数の頃なんだけど」

「それ、僕もそうだった」

「きつと眠くなるような授業がいけないのよ」

「たしかに。それは言ってる」

それから綾と僕は、数学の教師の教え方を糾弾する。しまいには彼の人間性に発展してしまい、さすがに二人揃って反省した。

「いけない、春。こんな無駄話している場合じゃなかった。それじゃあ、マリアはまだ来ていないんだけど、勉強会をはじめよっか」

「オッケー」

こうして綾の宣言により、勉強会がスタートと相成った。

マリアさんがここに戻ってきたのは、綾が勉強会の開始を宣言してから数分後のこと。

自分の勉強道具を抱えたマリアさんは、僕達を一瞥して素直な感想を口にする。

「もう始めていらっしやっただのですね」

「そうだよ、マリア。こういうのは自主的に始めないと」

なんとも耳が痛い言葉だ。

けど、自主的にやれたら勉強会なんて開かなくてもよいのかもしれない。

「それでマリアの席はここ」

綾は僕達の真向かいの席を指定する。

「ここで私達がわからないことに直面したときに質問するから。わかった？」

「はい。わかりました」

優雅に一礼するマリアさん。

やっぱり彼女は小悪魔系だ。

僕は再度その認識を確認しつつ、手元の問題集に目を通す。すると、さっそくわからない問題に出会ってしまった。

「ところでお嬢様。今日あの机の上にあるぬいぐるみを抱えて勉強しないのですか？」

「ちょっとマリア。何言っているのよ」

綾が慌てたように取り繕う。

「春」

「え？」

綾が僕をにらみつける。

何かとばつちりでも飛んでくるのだろうか。

「わ、私。そんなこと稀にしかしていないからね。それと、春が夏祭りに取ってくれたやつでもないから」

「あ、うん。わかったよ」

けど、ぬいぐるみを抱えながら勉強する綾。

それを想像すると、おかしさがこみあげてくる。

「あ、春。今笑った」

「笑ってないよ」

「嘘だっ」

綾が僕のおでこをシャーペンの裏側で突っついてくる。
なので僕は、必死にそれを避けようと身をよじる。

「あの、お嬢様。坂本様」

マリアさんの声に、僕達ははっとする。

「仲がよろしいのは結構なのですが、私がいることを忘れていませんか？」

おもわず二人で顔を見合す。

「ううー」

そして綾が恥ずかしそうに伏せる。
ちなみに僕も同じ体勢だ。

「元はといえなさ」

綾がこっそりとつぶやく。

「なんででしょうか」

「マリアのせいじゃない」

「すみません、お嬢様。でも、私は事実を言ったままでですので」

マリアさんはにこりと微笑む。

「それにぬいぐるみを抱いて勉強をすることくらいはいたしたことないじゃないですか。それよりも、寂しいとの理由で私と一緒に寝てほしいなんて言うことの方が問題だと」

「マリア」

綾がマリアさんの口をふさごうとする。
けど、ほとんどは聞いてしまった。

綾はウサギのように寂しがり屋なのか。

というよりは、年上にかかわれる構図がまた出来上がっていた。
美咲さんと僕を連想させるこのやり取りに既視感を覚えつつも、
とりあえず綾をかばおうとする。

「あ、あの、マリアさん」

「はい。どうしましたか？」

マリアさんは物凄い切り替えの速さでこっちを向く。
僕はそれに戸惑いながらも、質問をする。

「この問題、教えてくれませんか」

「いいですよ」

「この代入した後、よくわからないんですが」

「あ、これですね」

「はい」

「これはこうなるんですよ」

マリアさんの心地よい解説が耳朶に響く。

しかも、家庭教師もかくやというくらい丁寧に教えてくれる。そんな中、綾がナイスフォローという目で僕を見てきた。

まずは、午前に一時間半数学の勉強をした。

この一時間半というのが大切で、人が最大限に集中できる時間だという。

そして軽い昼食を挟んで、午後は英語の勉強。

勉強をしている最中、僕はだんだんと無我の境地になっていく。自分でも信じられないほど集中していて、驚いてしまうくらいだ。

時計のカチコチとした音が響く中、僕は問題に目を凝らす。わからないところがあったら、マリアさんに聞けばいい。

そう考えながらも、僕は順調にノルマをこなしていく。やがて午後も一時間半が経過し、綾が先に根を上げる。

「春。私疲れたんだけど」

「え?」

「もう限界」

綾がシャーペンを放り投げ、床に行儀悪く寝ころぶ。ぐてーとなっていて、声をかけるのもはばかられるくらいだ。

「春」。なんでそんなに集中できてるのね」

綾の声が批難となって僕に届く。

「どっして?」

「僕にもなんだかわからないよ」

いや、もしかしたら環境の良さがそうさせるのかもしれない。

「環境?」

「うん。きつとそっだ。ここはうってつけの環境だからね」

「私にはわからないけど」

綾が寝ころびながらぼやく。

そして、うつぶせの体勢から仰向けになろうとして転がる。

「いつ」

腰の当たりに衝撃を感じたかと思えば、綾がぶつかっている。

転がった拍子のせいか、綾はワンピースの肩口の紐をずらしている。

その姿はとても無防備で、目のやり場に困るものだった。

「坂本様はいつも違う環境で勉強するのが功を奏しているのですね。図書館で勉強するとやけにはかどるといったことがあったりしますが、きつとそれなのでしょう」

マリアさんも似たようなことを言う。

「ということは春、勉強会大成功じゃない」

「そうだね」

「今度は春の家で勉強してみよっかな。そうしたら私だって、今よりもはかどるかもしれないし」

「そうだね。でも、ここよりもかなり狭いなあ」

「そんなの構わないわよ」

「そっか」

「まあ、とにかく今日は私に感謝してよね」

綾がすつくと起き上がる。

腕を組んで僕の隣に座り直す。

「ありがとう。綾」

「どういたしまして」

嬉しさでいっぱい綾は、こっちも見ていて気分がいい。

「でもさ、綾」

「何？ 春」

「後、もう少しだけ勉強しない？」

本当に自分でもどうしたのだろうか。

そう思いながらも、そんなセリフを口にする。

「えー」

「集中力切れてる？」

「うん」

そこで僕は、美咲さんから貰ったガムのことが思い浮かんだ。

このガムを綾にあげればいい。

そうすれば、きっと綾の集中力が高まるに違いない。

「綾」

僕はポケットからガムを取り出し、綾に渡す。

「ガム噛むと集中できるかもよ。だからがんばろう」

「ガム？」

言葉を覚えたての幼児のようにつぶやく綾。

さらには、渡されたガムをじっと見つめる。

意味深なことをしている綾を見て、マリアさんが口を開く。

「坂本様も粹なことですな」

「粹なこと？」

「はい」

マリアさんはにやりと笑って言う。

「だってレモン味のガムを渡すなんて、遠回しにキスしますよって宣言しているものじゃないですか。あれ？ 違いますか？」

「な、何を言っているんですか。マリアさん」

マリアさんの言葉を意識したせいか、おもわず綾の口元に目が吸い寄せられる。

綾は口をあわあわさせて動揺している。

「は、春」

「違うからさ、綾」

「わ、私だってそんな気はないからね」

「うん。わかってるって」

そしてあの気まずい空気がやってくる。
綾と僕は互いに目を合わせずにうつむく。

「まあ、とりあえずは坂本様」

「は、は、は」

この空気を救ったのは、原因のタネをまいたマリアさん。

「ここはお嬢様の顔を立てて休憩に致しましょう。私、二人にアイステイーを入れてきますので」

そう言いつつも、マリアさんは立ち上がる。

僕達を残して、部屋を出ていく。

1 - 1 2 オアシス

「す、すいません。坂本様」

「……」

「私、時々こうやってドジをやらかしてしまうんです」

マリアさんが僕の前で折り目正しい土下座をする。

というのも、マリアさんは持ってきたアイスティーをひじで倒してしまい、僕にそれがかかってしまったから。

特に被害が酷かったのはズボン。

品のない言い方をすれば、股間付近がオアシスだ。

後、Tシャツも若干透けている。

「マリアさん」

「はい」

沈んだ声が聞こえる。

「とにかく顔を上げてください」

「さ、坂本様」

マリアさんは演技ではなく、本当に申し訳なさそうな顔をしている。

「それで、えっと」

僕は先ほど言われたことを思い出す。

「待っている間にお風呂に入ればいいんですね」

「はい。そのあいだに坂本様の洋服をしっかりと洗濯して、その後、乾燥機で乾かしたいと思っていますので」

「そうですか」

「はい」

「でも、そんなに高速で出来るものなんですか？」

「そうですね」

考えこむマリアさん。

結論が出たのか、こんなことを言う。

「あの、少し長めにお願いします」

「わかりました」

「ありがとうございます」

マリアさんは僕から視線を逸らしつつ告げる。
視線を逸れているのは、今の僕が渡されたタオルをかぶっている
だけの状態のせい。

女の子二人の前で服を脱ぐのは羞恥の極みだったけど、そんなこ
とを考慮している場合ではない。

まあ、奇跡的にパンツが無事だったのを不幸中の幸いとしてとら
えるべきだ。

「綾」

「何？」

「あのさ」

「うん」

「お風呂借りるから」

「も、もちろんいいわよ」

綾はさきほど話題になったぬいぐるみを抱いて、ベッドの方には
ふつとうつぶせに倒れ込んでいる。

耳が赤くなっているのは、恥ずかしいからか。

けど、こっちの方が恥ずかしい。

なにせ、この格好だ。

「マリア」

「はい、お嬢様」

「貴女が連れてってあげてね」

「わかりました。でも、どこの浴場ですか？」

「私の部屋の近くのお風呂で」

「どうやら綾の部屋の近くにお風呂があるらしい。というよりも、お風呂がいくつもあるものなのか。ちなみに東風荘には一つもない。」

「あ」

「どうしました、お嬢様」

「ちょっと待って」

「お嬢様？」

「やにわに綾が立ちあがり、部屋を出ていく。そして、廊下を走っている音が聞こえる。おそらく浴場に向かっているに違いないだろう。」

綾の家のお風呂は浴場と呼べるくらい広かった。

イメージしている一般家庭のお風呂よりもはるかに大きくて、一人でこの浴場を使っているのを困惑してしまうくらいである。

「坂本様」

「はい、なんででしょう」

「湯加減はどうですか？」

ガラス越しからマリアさんが問いかけてくる。

「あ、ちょうどいいです」

「では、問題ないのですね？」

「はい」

と、僕は答える。

「それで坂本様。今現在の状況なんですが、ちょうど洗濯の方が終わったところです。後は乾燥機にかけるだけです。なのでもう少

しだけ我慢していただけないでしょうか」

「はい、わかりました」

「そのあいだ、私も暇ですのでお背中でも流しますか？」

「いえ、結構です」

僕は思い切りよく否定する。

「心配しなくても裸ではしませんよ。水着ですから」

「そんなこと微塵も考えてもいませんので」

「あら。では、裸の方がいいんですか？」

「違います」

「それならヴィクトリア朝のメイド服ですか。またマニアックですね」

「なんで背中を流させてもらうことが前提なんですか。こっちはそこから否定してるんですよ」

僕は息をせいせい切らせながら告げる。

「そうなんですか」

「はい。そうです」

「それは残念ですね」

マリアさんは落ち込んだような声色で言う。
しかし、マリアさんもいくらか調子が戻ってきたみたいだ。
いつまでも落ち込まれていては困るから、これくらいのでいいの
かもしれない。

「あ、お嬢様」

「マリア」

突然シルエットが二つになったと思えば、綾まで来ていた。
何の用だろうか。

ガラス越しで二人のやり取りが聞こえる。

「お嬢様も坂本様のお背中を流しにきたのですね」

「な、何言ってるのマリアっ」

綾が慌てているのが手に取るようにわかる。

「違うからね、春」

「うん」

「それでお嬢様は何用ですか？」

「なんとなく来たのよ」

「なんとなく？」

と、僕は聞く。

「そう、なんとなく」

それを聞いて、僕は苦笑いのようなものこみあげてくる。
どうやら、綾は綾で直の口癖が移ってしまったらしい。

「後、春がさ、もう長いことお風呂に入っていて暇だと思ったから」

「うん。たしかにそれもあるけどさ」

僕はさらに言葉を重ねる。

「でも、綾も暇だった？」

「うん。それもある」

珍しく素直な幼馴染。

そして僕は、ふいに懐かしい想いに囚われる。

昔、暇になるとよくやりたがった遊びの一つに、『ん』のつくしりとりというのがあった。

しりとりをするとき、いつも省かれてしまうのが『ん』のつく単語。

それを幼心にかわいそうだと思った綾が、後ろから二番目の文字でしりとりをすることを発見したのだ。

たいしたことではないかもしれないが、幼かった僕達には物凄い発見に思えた。

「綾」

「何？ 春」

「久しぶりにさ、あの遊びやらない？」

「あの遊び？」

綾が聞いてくる。

やはり、あの遊びだけでは通じないと思っていた。けど、昔は通じていたのだから、そこに時の流れを感じてしまう。

「あのさ、『ん』がつくしりとりだよ」

「あー」

綾も思い出したみたいだ。

「やろつか、綾」

「うん。でも、久しぶりだなあ」

綾も懐かしそうに言う。

そこでマリアさんが口を割って入ってくる。

「えっと、お嬢様と坂本様。いい雰囲気なのは結構ですが、私の存在を忘れていませんか？」

「あ」

「あ」

二人して声を上げる。
なんせおっしやる通りだったからだ。

お風呂から上がって、綾の部屋でほっこりとくつろぐ。

入れ直しのアイステイーを飲み干し、これからの予定を綾と立てる。

予定とはもちろんこれからの勉強会のことだ。

「で、春はどうしたい？」

「どうしたいってさ」

「私はもう一回集中できそうだけど」

「僕はもう集中できなさそうだけど」

綾と僕の意見が食い違う。

「でも勉強会だし、もう少し頑張ろうよ」

綾に諭される。

「そうだよね」

「何、その返事」

「うん。自分でもそう思う」

さつきとは立場が逆転している。

けど、あんなことがあった後だから、集中力が切れても仕方がない。

なにせ、お風呂にまで入ってしまったのだ。

「春」

「ん？」

「さつき貰ったガム返すからさ」

「あ、今度はお嬢様から遠回しの愛情表現ですか」

「マリアはちょっと黙ってて」

「はい」

マリアさんは、ちゃめつけたっぷりに舌を出す。

そしてしゅんとへこむふりをする。

「それで勉強しようよ」

「うーん」

僕は、さつき自分が難しいことを要求していたんだと思い知る。

一度集中力が切れたら、立て直すのがなかなか難しい。

集中力とは勝手気ままなものである。

「これで終わったら、お嬢様はきつと寂しいんだと思います。だから坂本様、もう少し勉強会を続けませんか？」

「マ、マリアっ。余計なことを」

「すみません」

マリアさんがにやりと笑う。
その笑みはやはり小悪魔だ。

けど、マリアさんの一言で、僕はもう少しやってみようと思った。
なぜだか理由はわからないが。

「綾。あのさ」

「何？」

「僕、もう少しやってみるよ」

「ほんとに？」

「うん、ほんと。だからさ、ガムちょうだい」

「あ、わかった」

綾からガムを渡される。

再度、手元に来たガムの奇妙な変遷を考えながらも、結局は僕のところ収まるのかと感慨深げになってしまう。

「さて」

僕は紙包みを開け、ガムを放り込む。
レモン味特有の酸味が口の中に広がり、やる気が芽生えてきた。

「春、いけそう?」

綾があどけない顔を近づけて聞く。
なので僕は、顔を逸らしながら答える。

「大丈夫」

「うん」

「な気がする」

「気がするってさ」

「気がするだけかもしれないけど、なんとなくいけそうだよ」

「そっか」

「うん」

「じゃあがんばろっか」

綾が腕まくりして言う。

「そっだね」

と、僕は返す。

こうして、僕達はもうひと頑張りすることとなった。
勉強会はまだ続いていく。

1 - 15 条件

時計の針が午後五時を回り、僕の集中力はすでに限界を迎えていた。

アイステイーを浴びる前まではあんなに集中できていたのに、あれ以来パツタリとダメになってしまっている。

集中力の不思議さに思考を巡らしながらも、僕は隣を覗き見る。

綾はときおり髪をかき上げつつも、熱心にシャーペンを走らせている。

一心不乱に勉強していて、隙がないくらいだ。

僕はそのあどけない横顔に視線が吸い寄せられそうになりはつと
する。

何かを一生懸命にこなす姿は美しい。

けど、幼馴染に見とれる要素はない。

「はあ」

深くため息をつきながらも、手持ちぶさたになった感のある数学の問題集をペラペラとめくる。

そしてマリアさんに小声で告げる。

「マリアさん」

「なんでしょうか？」

マリアさんも小声で応対する。

「もう限界みたいです」

「限界ですか」

「はい」

ノートには適当に書いた落書きが散らばっている。
直の書く絵とは違ったレベルの低い落書きだ。

「綾は凄いですよ」

「坂本様も、私がアイステーをこぼす前ではたいした集中力でしただけ」

「という事は、マリアさんのせいになりますね」

僕はあっさりと人のせいにする。

「すみません」

にこりと笑うマリアさん。

「おわびに抱きついてきてもいいですよ」

「何を言ってるんですか」

小悪魔な笑みを浮かべて、とんでもないことを言う。
なので、僕はおもわず大声を上げてしまった。

「春？ どうしたの？」

「あ、なんでもないよ。綾」

「そうっ？」

「うん」

「そっか」

綾はまた勉強に戻っていく。
ほんとにもものすごい集中力だ。

「……」

やっぱり暇になった僕は、マリアさんに聞きたかったことを聞いてみる。

もちろん、本当の名前以外のことについてだ。

「あの、マリアさん」

「はい」

「マリアさんは字がきれいですね」

「私の字がきれいですか？」

「そうです。何度か問題の質問をしたときに、ノートに書いてくれましたよ。そこで感心しました」

そう、マリアさんの字はとてもきれいだ。ペン字でも習得しているのだろうか。

「コツとかはあるんですか？」

「そうですね。コツはありますよ」

「そうなんですか。それでコツとは？」

「それは……あ」

幼子がいたずらを思いついたような顔。

けど、マリアさんにかかれば、それも小悪魔っぽくなる。

「教えて差し上げてもいいですけど、条件があります」

「条件？」

「そうです。それで条件なんですが、お嬢様とスキンシップをしてください」

「はい？」

おもわず変な声が出てしまう。

「マリアさん」

「どうしました？ 坂本様？」

怪訝な表情をしている僕を見て、マリアさんが疑問を口にする。僕もマリアさんの表情を見て、率直な感想を口にする。

「貴女、またおかしなことを企んでいますね」

「いいえ、純粹にそうするべきだと思っただけからです」

「綾と僕はスキンシップをする関係ではありません。ただの幼馴染ですから」

「そうですか。でも、スキンシップ気持ちいいですよ」

そもそもマリアさんが言うと、あまりいい意味には聞こえない。いい意味どころか、悪い意味に聞こえてくる。

「で、どうでしょう？」

「いいえ、結構です」

「残念ですね」

「マリアさんが残念がることじゃないでしょう」

結局、僕は一刀両断にして断わった。

けど、マリアさんは親切で、字を上手に書くコツを手取り足取り教えてくれた。

そうして時間は過ぎていき、勉強会はお開きとなった。

「春、また明日」

「うん。じゃあね。綾」

無事勉強会が終了して、僕は綾の家を出る。

綾が広い玄関の前で手を振ってくるので、僕も同じように振り返す。

なんだか昔遊んだ時のようで、少しだけ和んだ。

「あ、春」

「何？」

「今日成果はあったよね」

「もちろん十分にあったよ」

僕がそう答えると、綾は満面の笑みを浮かべて言う。

「良かった」

「こっちも良かったよ。マリアさんにアイスティーをかけられて、自分の服を脱ぐことになる以外はね」

「そうだね。それにしてもあれは酷かった」

綾がくすつと笑う。

「綾、笑わないでくれよ。こっちは恥ずかしかったんだから」

「わ、私も恥ずかしかったし」

「そっか」

「うん」

一瞬だけ会話が途切れ、綾がむりやり言葉を繋げる。

「あ、えっと、それで今後も勉強会は続けよっか」

「うん。それがいい」

「今度は春の家。直も一緒に出来るかな？」

「きつと大丈夫さ」

僕は希望的観測を口にする。

「それでき、綾」

「ん？」

「今度いつにする？」

僕は聞いてみるが、綾の顔はみるみる曇っていく。

「あ、ごめん」

そうだったと思いだす。

綾は家の事情で忙しい。

そもそも今日みたいに丸一日開いている日が珍しいのだ。

「春」

「え？」

「春っ」

綾が僕の名前を呼んで抱きついてくる。

けど、僕は綾の突飛な行動についていけない。

なすがままにされてしまう。

「私、戦っから」

「戦っ？」

「自分らしさとか、自由とか」

「自分らしさ？ 自由？」

「っつ」

たしかに髪切り事件があつて以来、綾は変わった。

何がきっかけになったかは知らないけど、お嬢様でいることを控え、自分らしさを全面に出すようになった。

けど、自由の方はどういう意味だろうか。それは秘密の遊戯と関係してくるのか。しかし、そんなことを考えている憂慮はなかった。

「綾」

なぜなら、僕達は軽く抱き合っている。情けないことに、僕には対抗するすべがない。

どうやら、綾も自分が何をしているか気がついたようだ。みるみるうちに頬が赤くなっていく。

「春」

ぱつとすごい勢いで離れる綾。これはもう脱兎の勢이었다。

「……」

「……」

お互いに顔を伏せ、次の言葉を探す。やがて、綾が慌てたように口を開く。

「こ、これは感極まって抱きついてしまっただけ。他意はなくてただのスキンシップなんだからね」

「ス、スキンシップ？」

「何よ」

「なんでもない」

「そう、ならいいけど」

しかし皮肉にも、僕はマリアさんの言ったことが思い浮かんでしまった。

バスに揺られることに二十五分。

その間、僕はついさっき起こった出来事が脳裏に焼きついて離れないでいる。

帰り間際、綾に抱きつかれて、自分らしさや自由などと戦う宣言されたこと。

綾にはどういう意図があったのか。

僕にはわからない。

けど、物事は深刻に考えすぎないようにするのが大切で、そのことと自分との間に適切な関係を築けるかがポイントだ。

とにかくシンプルが一番。

僕が綾の手助けになるのならそれでいい。

そうに違いない。

「うん、やっぱりそうだ」

やがてバスはいつもの小学校前で止まり、僕はそこで降りる。自分の影を見つめながら、東風荘までの短い道のりを歩く。

「三号室、と」

表札の坂本を確認し、ドアの鍵を開ける。
そして部屋に入ると、直が机に突っ伏していた。
しかも、なんだか様子がおかしい。

「直」

慌てて近くまで行き、直の様子を窺う。

額には、あまり良くない種類の汗をかいている。

直のおでこに手を当ててみると、やっぱり熱があった。

「あ、春」

直が僕に気がつく。

しゃべるのも億劫そうだ。

「直、大丈夫？」

「くしゅ」

小さなくしゃみ。

ティッシュを直の近くに持っていく。

「大丈夫じゃないね」

「ん」

さて、どうしたものか。

まずは直を布団に寝かせるべきか。

「直、布団敷くからちよつと待ってて」

「うん」

僕は押し入れから布団を取り出して、いつも二人で寝る場所に敷く。

とはいっても寝室ではないから、この部屋の生活空間を見事に浸食した。

「春」

布団に体を休めた直が、僕を呼ぶ。

「直、どうしたの？ それと無理にしゃべらなくていいから」

「ううん。いいの」

「良くないよ」

「ううん」

直が喘ぎながらも、言葉を漏らす。
本当に辛そうだ。

「でも、これだけは言いたくて」

「え？」

「ありがとう」

「ありがとう、だなんて」

直は僕にとって大事な妹。

この広い空の下、大切な繋がりを感じられる唯一の存在。

「当たり前のことだから」

「私、春がそう言ってくれて嬉しい」

そう言った後、直が咳をする。

「安静にしてないと」

「ん」

それにしても、直が風邪をひくことなどあったのだろうか。

最近ではとんと記憶にない。

特に、この東風荘に来た二年前からは一度もなかったと思う。

「直、これからおかゆを作るね」

けど、直は首を振る。

「台所は男子禁制」

「解禁しなさい」

「努力で私が」

「翻意しなさい」

「春」

「だめだよ」

涙目で見つめてくる直。

けど、だめなもののはだめなのでしっかり言い聞かせる。
すると、直はようやく納得してくれた。

直を料理の件で説得した後、僕は体温計を持ってきて熱を計らせる。

直は最初、ぐずる子どもみたいに嫌がったけど、やがて観念したらしい。

大人しく体温を測り始め、その数値を報告してくれた。

「三十八度二分」

「すごい微熱」

「じゃないからね、直」

こんなときにボケはいらない。

直の言葉を軽く聞き流しつつも、僕は冷蔵庫から冷えピタを持ってくる。

坂本家では、水枕の代わりにこの冷えピタを使う。

「直」

「あ」

どうやら僕が持ってきたものに気がついたらしい。

「これ使って」

冷えピタを直の額にくっつける。

「んー」

「冷たすぎる？」

「ん、冷たい」

「そっか。タオル持ってくるよ」

順序が逆だったな、と僕はひそかに反省する。

そして、タンスからタオルを取ってきて直に渡す。

「はい、タオル」

「ありがとう」

「じゃあ、僕はおかゆを作るから」

「わかった」

直の言葉を聞いて、僕は久しぶりに台所に立つ。
料理をしていない期間は二週間。

なので、久しぶりすぎて手順を忘れてる。

「とりあえずセリ、と」

冷蔵庫からセリを取り出す。

なぜセリかといえは、坂本家ではおかゆを作る時に使うという不文律の決まりがあるからだ。他にも、鍋にホウレンソウ、ハンバーグに豆腐といったように、必ず使う組み合わせがあったりする。

ともあれ、僕はおかゆ作りを順調にこなしていく。

最後に卵を落とし、セリをまぶして完成。

ガスの火を消して、小鍋から器におかゆを移す。

「直。できたよ」

「ん」

「一回起きて」

僕は直をゆつくりと起こす。

やはり直の体は熱っぽい。

後でタオルが何かで拭かなくてはいけないなと思う。

「春」

「何？」

「もしかしてさ」

「うん」

「食べさせてくれる？」

何やら期待を込めた目で見つめてくる直。

今日ばかりはしょうがないと観念する。

「わかったよ」

僕がそう言つと、直は無表情で喜ぶ。

そして、小さな雛鳥みたいに待っている。

「はい、口開けて」

「ん」

直の口元まで、おかゆを持っていく。

「あつっ」

「あ、ごめん」

「熱いよ、春」

うつかりしていた。

覚ますのを忘れていた出来たてのおかゆは、熱すぎるほどに熱い。直は少しだけ膨れて言う。

「春、冷まして」

「うん、わかった」

今度は慎重に冷ましていく。

「ふーふー。これでいい？」

「ん」

「はい」

ぱくつとレンゲをくわえる直。

今度は何の問題もなく、直はゆっくりと咀嚼する。

「おいしい」

「そっか。それで直、味わかる？」

「大丈夫」

「食欲は？」

「ある」

「それは良かった。じゃあ全部食べれるね」

「ん。春が冷ましてくれらなら」

直の食事が終わった後、自分も同じようにおかゆにする。
そして早々と夕食を切り上げて、直の看病をこなす。

「くしゅ」

「はい。チーして」

「チー」

食べている最中はそうでもなかったのだが、直は徐々に風邪の症状が出始めている。

特にくしゃみが止まらない。

くずかごはティッシュでいっぱいだ。

「くしゅ」

「はい。チーして」

「チー」

これを何回か繰り返す。

「そうだ、薬」

「ここに至ってというべきか、一番先に思いつかなければならないことを今思いつく。」

僕は救急箱を取り出し、市販の風邪薬を探す。

「あつた。直、薬」

水を入れたコップと一緒に薬を渡す。

「薬、嫌だな」

「わがまま言わない」

「だって粉薬。錠剤は？」

「なかったよ」

それを聞いて、直は無表情で残念がる。

「とにかく我慢して」

「ん。でも」

「でも？」

「飲ませて」

「え？」

「お願い。お兄ちゃん」

必死すぎて、お兄ちゃんって呼んでいる。

「しょうがないな」

要求通り、僕は直に薬を飲ませる。

自分で飲んだ方がタイミングとか図りやすくもいいと思うのだが、それは言わない。

「直。後、汗ふかないと」

「ん」

直の体は汗でぐっしょりになっている。

かといって、銭湯に行ける状態ではない。

なので、僕は汗拭き用のタオルを持ってきて直に渡す。

「はい」

「？」

しかし、直は首をかしげる。

どうして渡されたのかわからないといった感じだ。

「春、やってくれないの？」

「それはさすがに無理だよ」

僕はやんわりと断る。

「でも、背中とか届かない」

「背中？」

「うん」

直が見つめてくる。

結局、僕はその圧力に負けた。

「わかったよ」

「じゃあ、服脱ぐ」

「あ」

僕が止める間もなく、直はばいばいと服を脱いでいく。

羞恥心のない直は、僕の前でも平気で着替えをしてくる。

「拭いて」

パンツとブラの格好でうつぶせになる直。

妹とはいっても、さすがに平常心ではいられない。

手早くすませ、直にタオルを渡す。

「後はさ、自分でやって」

「ん」

直が恥ずかしげもなく、自分の体を拭いていく。

僕はその無頓着さに危機感を覚えつつも、いたたまれなくなっ

目を逸らす。

「春」

「何？」

「パジャマ着せて」

「え？」

確実に甘えたさんになっている直。

僕は困惑しながらも言う通りにする。

四苦八苦しながらも、パジャマを着せてあげる。

「ありがとう」

「うん。でも、今日だけだからね」

「ん。後、手を繋いで」

ここまですると微笑ましくなってくる。

「繋ぐよ」

「ん」

直が無表情で満足そうな顔をする。

そしてそのまま、直はすぐに眠りについた。

翌朝、月曜日。

いつもは直に起こしてもらった僕も、今日はさすがに自分で起きる。やろうと思えば簡単に出来るもので、ずいぶんあっさり目覚めることに成功する。

隣を見ると、直はまだ眠っている。

息苦しそうに寝返りをうっていて、額には汗をかいている。

まだ、風邪は完治していないのかもしれない。

僕はカーテンを開けることを自重して、洗面所に向かう。顔を洗

い、着替えをして、朝ご飯作りを開始する。

そして、お味噌汁を作っている最中に直が起きてきた。

「春」

パジャマのそでで目をこすりながら、僕を名前を呼ぶ。

「直、おはよ」

「うん、おはよ」

「まずは体温を測って」

僕は直に体温計を渡す。

直は大人しく、体温を測り始める。
しばらくして、ピピッと音が鳴る。

「何度？」

「三十七度五分」

「まだあるね」

「ん」

直がかしこまっとうなずく。

「今日、学校はどうしよう」

「その熱なら無理かな」

「でも、行きたい」

「だめなものはだめだよ」

僕は即座に答える。

「じゃあ、春は？」

「僕？」

「うん」

「もちろん行くもんか。直の看病と暇つぶしの相手になるぞ」

「いいの？」

直が身を乗り出して聞いてくる。

「いいんだ。当たり前だよ」

「学校の勉強は？」

「昨日、勉強の貯金をたくさんしてきたから」

「けど、しすぎてもしすぎることはないよ」

「じゃあ、しなくてもしなさすぎることはないね」

「今の意味不明」

直が無表情で笑みを浮かべながら言う。

「とにかく、僕は直の看病をするって決めたんだ」

これは昨日からずっと考えていたことだ。

病気をしている時、一人でいるのは心細い。

心細いのはさびしくて、気分まで鬱々してくる。

「それとさ、もし酷くなったら、誰も直を病院に連れて行けないじゃないか。そうなったら困るよね」

「ん。でも、これ以上酷くはならないと思う」

「ほんと?」

「うん。回復に向かっている」

「それは良かった」

直がそう言うのだからきつとそうだろう。
けど、今日一日は学校を休むことに決めていた。
安静という言葉がある。

「ところで直」

「ん?」

「朝ご飯は食べれるよね」

「あ」

直がすつとんきょうな声をあげる。

「何? どうしたの?」

「料理しないと」

「まだだめだよ、直」

直は無言で不満を表す。

「うつかり包丁でも落としたら大変じゃないか」

「でも」

「だめなものだめ」

「じゃあ、せめて私の代わりにこれ」

「え？」

「私の分身」

「直、そこまではちまきに思い入れないで」

これは美咲さんに責任を取ってもらう必要がある。
直をはちまき好きにした責任を。

学校に連絡して、直と僕は休みを取る。

中学に入ってから学校を休んだのは、家のごたごたがあった一年生の時以来。病気で休むのは小学生の頃までさかのぼる。

朝食を食べた後、直は布団に横になる。

僕は直の様子を見ながらも、近くで勉強を開始。

昨日の勉強会でマリアさんに教えてもらったところを復習して、約一時間が経過した。

「春」

「何？」

「暇かも」

「病人だから寝ていないと」

「絵描いていい？」

「絵？」

「うん」

直がこくりとうなずく。

「具合大丈夫なの？」

「昨日よりはずっといいみたい。だからいい？」

「そっか。じゃあしょうがないな。いいよ」

結局、僕は許可してしまう。

要するに、直の熱意に負けてしまったのだ。

「やったあ」

直は起き上がり、ハンガーに掛けてある制服の徽章近くのポケットからメモ用紙を取り出す。

そして、ペンも一緒に取り出して準備万端。

「春、それでお願いがあるんだけど」

「うん」

直のお願いときたら、それが何かはもう決まっている。スケッチに関する事に違いない。

「これでいい？」

僕は背筋を伸ばして、勉強する姿勢を保つ。これはポーズをとっているのだ。

「ん。オツケー」

そして直はデッサンを開始。

全てを見透かしてしまいそうな切れ長の瞳が僕を見つめる。いつもと変わらない直の視線だ。

「出来た？」

「もう少し」

二、三分置いてまた聞く。

「そろそろ？」

「もうちょっと」

いつもより長い直のデッサン。

なぜかわからないけど、気合が入っているのかもしれない。さらさらとペンを走らせる音がよく聞こえる。

「よし、出来た」

その直の言葉を聞いて、僕は肩の力を落とす。

時間が長かったせいか、いつも違った感覚がある。

「今日は時間かかったね」

「うん。デッサンは早く書くのがとりえなんだけど、なんか時間をかけたくなった」

「そうなの？」

「そう。なぜだかわからないんだけど」

「そっか。まあ、とりあえず見せてよ」

「ん」

直の書いたメモ帳を渡されて見ると、確かにいつもより時間がかかるのもわかるほどの出来栄だ。直の特徴でもある、写実的な面も良く出ている。

「やっぱり上手いな」

「ありがとう」

若干、得意そうな直。

「でも、ちょっと疲れた」

「まだ治ってないからね」

「ん。それに集中力も使うから」

「たしかに集中力は使いそうだ」

デッサンをかき終えた直は、また布団に横になる。

「そっいえば、熱測った？」

「測った」

「いくつ？」

「三十七度三分」

「下がったね」

「微熱？」

「そつだよ」

と、僕は言う。

今度こそ真正正銘の微熱だった。

スケッチを終えた後、直は昼まで睡眠を取る。どうやら順調に回復しているようで、昼ご飯も何の問題なく食べてくれた。

午後は家事や雑務などをこなしながらも、二人でまったりと過ごす。

話題は迫りつつある東風荘主催のハロウィンパーティーのこと。直も僕もその日が来るのを楽しみにしている。

そうして時刻は三時を回り、一息ついたところで携帯を見る。

「あ

「どうしたの？ 春

すっかり調子が良くなった直は、布団を畳んで服に着替えている。

「結構メールが来てたからさ」

小倉くん、鈴木くん、綾、そして絵里ちゃん。

小倉くんからは二人が休みだと聞いて思わず脱ぎそうになったとの報告。意味がわからないが、つつこまないようにしておく。

鈴木くと綾からは普通のメール。

この二人には無難なメールを返す。

「で、絵里ちゃんか」

絵里ちゃんとは、あの日に僕が失礼なことをして以来のメールのやり取りだ。

文面は過剰すぎるほどこっちを気遣ってくれている内容で、ずる休みの僕は申し訳なくなってくる。

結局、直が風邪であることを伝え、心配はいらないと絵里ちゃんにメールを返す。

「あのだ、直」

「ん？」

「直も携帯見てみたら？」

「携帯？」

直が切れ長の瞳で僕を見つめる。

「うん」

「わかった」

直も携帯を開く。

「私にも、綾とかからメールが来ている」

「そっか」

直が携帯でメールを打ち込む。
あまり携帯を使わない直にしては、珍しい光景でもある。

「できた」

直が文面を見せてくる。

書いてある内容は通り一辺倒なことだ。

「見せなくつてもいいって」

「ん、そうだね」

直は僕の言葉に納得する。

「じゃあ、送信」

携帯を持った手を振り回しつつ送信のボタンを押す直。
それを見て、笑いがこみあげてくる。

「春。笑った？」

「笑ってないよ」

「ううん。笑った」

「笑ったかもね」

僕はごまかすためにそっぽを向く。
直はしつこく追求してくる。

「春」

「まあ、落ち着いて」

「だって笑った」

「笑ってないって」

どうも納得がいつていない直。

直の機嫌を損ねないようにあることを聞いてみる。

「直。今日の夕食は何が食べたい？」

「夕食？」

「うん」

「私を作る」

「だめ。今日一日は休みなさい」

僕は間髪いれずに返答をする。

そのせいか少しだけ不満を示す直。

どうやら逆効果になってしまったみたいだ。

「じゃあ、勝手にハンバーグにするよ」

もちろんハンバーグには豆腐をつなぎに使うことが確定している。

「いいね？」

念を押す。

「春の好きにして」

直はそう言うが、大好物であるハンバーグの前に喜びを隠せない。
無表情ながらもかなり喜んでいる。

「それとも、煮物を中心とした和食にしようかな」

「えっ？」

「嘘だよ」

「もうっ」

おもわずからかってしまった僕に、直がため息を漏らす。

1 - 2 3 再び風邪

「あれ、声が、がらがらに、なって聞こえるよ」

腹話術の真似をしてみても、特に何の意味もない。
ただ単に声がおかしいだけだ。

「春、風邪」

「直」

直にジト目を向けてみる。

「ん、ごめん」

「まあ、しょうがないか」

翌朝、僕は直に促されてもなかなか起きれないでいた。
なんかおかしいと感じつつも立ち上がるうとしたけど、まったく
立てない。

そしてその時にようやく気がつく。
体がふらふらしていたのだ。

「今度は僕の番なわけだ」

「ん」

「くしゅん」

そしてくしゃみ。

直は僕のところまで来て、ティッシュを持ってくる。

「チーして」

「チー」

「もう一回」

「チー」

これを何回か繰り返す。

けど、あまり効果はない。

くずかごがティッシュでいっぱいになったただけだ。

「くしゅん。げほげほ」

今度は咳まで出始めた。

「春」

「ん？」

「体温計」

「どうも」

直が体温計を渡してくる。

熱を測ってみると三十八度もあった。

「昨日の直よりは低いけど、朝の体温としては高すぎるほど高い。」

「えっと、すごい微熱？」

「そこでポケを重ねない」

「先に言った直が言うセリフじゃないからさ、それ。後、昨日のはポケだったわけ？」

不満と疑問をぶつけるけど、直はあっさりと受け流す。

「私、学校に連絡する」

「ということは、今日も休みか」

「ん」

「で、直はどうすんの？」

「行くもんか。春の看病と暇つぶしに相手になるぞ」

直は昨日の僕の真似をして言う。

「そっか」

「うん」

「まあ、でも心強いよ。ありがとう」

「どづいたしまして」

こうして直と僕は二日続けて学校を休むこととなる。

「二日連続だね」

「しょうがないよ」

と言いつつも、切り替えて家事に雑務に勤しむ直。

直は完全に回復したらしく、僕の献身的に看病をしてくれる。おかげで、僕の風邪も午後には快方に向かう。

「お昼はおかゆ」

「うん」

「で、夜は春の好きなもの」

「わかった」

宣言通り、昼はおかゆ、夜は僕の好きなぶりの煮付けを作ってくれる。

味はいつもの直と変わらなかったけど、風邪をひいていたせいか嬉しさでいっぱいになった。

「はい。体温計」

「どうも」

そして寝る前、最後に熱を測る。

「三十七度二分だ」

「ほんと？」

直が驚きながらも聞いてくる。。

「うん、ほんと」

「熱、だいぶ下がった」

「そうみたい」

直の風邪の傾向からいっても、「このまま治りそうだ。

「明日は学校いけるといいね」

「そうだね、直」

直は僕の隣に自分の布団を敷く。
心なしかいつもより近い。

「春。また私にうつせばいい。そうすれば早く治る」

「そんなことしたらずっと風邪のぶりかえしじゃないか」

「冗談」

「そんな冗談よくない」

「ん。たしかに」

直がシーツのすそを足で伸ばすいつもの癖をする。

「おやすみ、春」

「おやすみ、直」

電気を消して、就寝に備える。

翌日、僕達は久しぶりに学校へ向かう。

この車の往来の多いイチヨウ並木を通り、門をくぐっていく。教室のドアを開けると小倉くんが真っ先に駆け寄ってくる。

「春、風邪大丈夫なのか？」

「うん」

小倉くんは今にも脱ぎそうな勢いで話しかけてくる。

「春がないあいだ、大変だったんだぞ」

「え？ どうして？」

心当たりがないので聞いてみる。

「隣のクラスの遠藤、それと一年生の都築とかいうかわいい後輩。二人でてんやわんやの大騒ぎをして、オマエは今渦中の人だぜ」

「どっぴいっぴいと？」

僕は話しの顛末を聞いてみる。

小倉くんが言うには、どうも月曜日、昼時に二人が僕を訪ねて来たらしい。

こうして鉢合わせとなった二人は、僕の席でこんなやり取りをしたという。

あの、やっぱり先輩と付き合っているんですか？

つ、付き合っているわけじゃないじゃない。春とはただの幼馴染なんだからね。

「とは言いつつも、遠藤はまんざらでもない感じだったぜ。まあ、こんなことを言えば、ファンクラブににらまれるかもしれないが」

そして小倉くんはさらに言う。

「だいたいさ、俺は不思議に思っているんだよ。どうして春と遠藤は付き合っていないのかって。遠藤はきつと春のことを恋愛的な意味で好きだろ」

「いや、それはないよ」

僕は否定する。

幼馴染の綾に限ってそんなことはあり得ない。

根拠はないけれど、ずっとそう思っている。

「じゃあ、あの後輩はどうだ？」

「絵里ちゃん？」

「そう、その子だよ」

小倉くんが思い出したように言う。

「絵里ちゃんか」

たしかに絵里ちゃんからの好意は感じなくもない。

けど、それは親しい先輩としての好意で、付き合つかどうかの話はまた別である。

「で、どうなのさ」

「想像できないよ」

「そうかい。でも、それが春だからな」

「え？」

僕は首をかしげる。

「ああ、なんでもないぞ。とりあえずドアの前で立ち話しをしているのもあれだし、中入ろうぜ」

小倉くんが促し、教室の中に入る。

自分の席に座ると、小倉くんが休み中にあつた出来事や、趣味の話なんかをしてくれる。

僕はいつも通り聞き役に回り、相槌を打つ。

やがてチャイムが鳴り、小倉くんも席に戻る。

そして、久しぶりの授業に気合を入れようとしたその時だった。

「あ、あの、坂本くん」

隣の席の吉田さんが、僕に声をかけてくる。いつも控え目で大和撫子な彼女が声をかけてくるのは珍しい。だからか、どこかぎこちない感じもある。

「か、風邪治った？」

「あ、うん」

なんだかこっちもぎこちなくなる。

普段、吉田さんと会話をするのが少ないせいだろうか。

「でも、まだ少しのどが痛いかな」

「そ、そっか」

「うん」

「だったらね、坂本くん。のど飴いる？」

吉田さんはわたわたしながらも、鞆からのど飴の袋を取り出す。動作に落ち着きがある吉田さんにしてはあまりない光景。なので、僕は驚く。

「のど飴？」

「う、うん」

「ありがとう。貰っよ」

吉田さんからのど飴を手渡される。

「後ね、坂本くん」

「うん、何？」

「ノート」

「ノート？」

「貸すから」

おずおずと渡されるノートの束。

「休んでたところ写して」

「ありがとう」

ノートは誰かに借りようと思っていたから大助かりだ。けど、一つ疑問に思ったことがあるので聞いてみる。

「あの、どうしてそんなに親切にくれるの？」

「あ」

と言ったきり、固まってしまふ吉田さん。

僕はその様子を見ながらしばらく待っていると、ようやく吉田さんが口を開く。

「と、隣の席だから」

瞬間、吉田さんの顔がなぜか赤く染まっていく。

「それ隣人を愛せよってやつ？」

「あ、愛っ！」

「ごめん大げさすぎたね」

「う、うん」

吉田さんががくがくと首を動かしている。

2 - 2 図書室へ

昼休み。

ノートを全て写し終えた僕は、図書室へと向かう。

理由は図書委員でもある吉田さんに、感謝の意をいち早く伝えるため。

図書室は三年の教室から近く、すぐにでもいける。

「小倉くん。じゃあ、ちょっと図書室に行ってくるよ」

「図書室？ 珍しいな」

「まあね。ちょっと用事があるんだ」

「これが」

小指を差し向けてくる小倉くん。

「違っちゃって」

と、僕はちゃんわり否定する。

「じゃあ、俺、鈴木達のところ行くわ」

「そうしてくれると助かるよ」

「おう」

僕は席を立ち、教室を出る。

図書室へと続く廊下を曲がったところで絵里ちゃんと出くわす。

「あ、先輩」

「絵里ちゃん」

絵里ちゃんは、前会った時とかわらない笑顔を僕に向けてくれる。先日、僕は絵里ちゃんに酷いことをした。愛想を尽かされても仕方がないことを平気で行ったのだ。

「こんなところで会うなんてめずらしいですね」

「そうだね」

絵里ちゃんは何冊かの本を抱えている。

きつと図書室にいくのだろう。

「先輩も図書室ですか？」

「うん、そうだよ」

「私もです。私、調べ物をする時、学校の図書室を良く利用するんですよ。って誰でもそうですね。あははっ」

なんだか空回り気味の絵里ちゃんが、大きな笑い声をあげる。
おかげで僕も、一緒になって笑えた。

「あ、それよりも先輩、風邪は治りましたか」

「風邪？」

「はい」

「もう少しで完治するかな」

「そうですね。ということはまだ完治していないんですね？」

「そうだけど」

僕はやけに張り切る絵里ちゃんを不思議そうに見てうなづく。

「ならばここはあれですね。先輩、私の風邪の治し方講座を聞きま
すか？」

「え？」

「聞くっていつて下さい？」

「じゃあ、聞かないよ」

きらきらと輝く絵里ちゃんの無垢な視線。

それを見て、僕はなんだか意地悪したくなってくる。

つい先ほど、申し訳ないと思ったばかりなのにどうしてこう思う

のか。

僕は自分の心がわからない。

「がーん」

絵里ちゃんはサイドにくくった髪を触りながら打ちひしがれる。それを横目で見て、僕はほくそ笑んだ。

「先輩はあれですね」

「あれ？」

「一回デートしたら、もう私のことなんて用無しみたいな扱いにするんですね。私はモブキャラですか？」

よよよ、と泣き真似をする絵里ちゃん。
そんな時、僕はぽつりとつぶやく。

「デート」

その言葉には美咲さんのせいでいい思い出はなかった。けど、今は絵里ちゃんとの楽しかった記憶が蘇る。

「絵里ちゃん」

真剣な目で絵里ちゃんを見つめる。

「な、なんですか先輩」

絵里ちゃんが僕の勢いに驚いたのか、一歩後ずさる。

「もう一回だけ秘密のデートをしよう。この前のやり直しの意味合
いも込めてさ」

「せ、先輩からそんなこと言ってくれるなんて」

なんだか感極まっている絵里ちゃん。

しかも、小声でなにかぶつぶつ言っている。

「どうしたの？」

「いえ、なんでもないですよ」

「そう、ならいいんだけど」

「気にしないでくださいね、先輩」

「あ、うん」

「それとデートの件については頼りにしていますからね」

ポンと僕の背中を叩く絵里ちゃんがいた。

2 - 3 文学少女

それから僕達はすぐに図書室へ着き、中に入る。
めったに訪れない場所もあってか、僕は辺りを見回す。

ここの図書室はこぢんまりとしたアットホームな雰囲気。蔵書は
そんなに多くないけれど、しっかりと新書は押さえていると聞く。

カウンター席の方を見ると、そこには吉田さんがいる。

僕は絵里ちゃんと別れ、吉田さんのところへ向かう。

「吉田さん」

本を呼んでいる吉田さんに声をかける。

すると吉田さんが、びくっと小動物みたいに驚く。

「ごめん、驚かせちゃって」

「ううん」

首を振る吉田さん。

大和撫子な吉田さんの容姿に合うあまそぎの髪型が、右に左にと
揺れる。

「ノート、ありがとう」

お礼を言いつつも、ノートの束を返す。

「い、いえ。どういたしまして」

「おかげでだいぶ助かったよ」

「そうなの？」

「うん」

「良かったあ」

「本当にありがとう」

僕は心からお礼を述べる。

前、授業中に数学のノートを見せてもらった時と同じように、吉田さんのノートは丁寧でわかりやすかった。

写している時も、要点が頭の中で整理されていく感じた。

「あ、さ」

「ん？」

「お礼、こんなものだけど」

ポケットから缶コーヒーを取り出す。

「あ、ありがとう」

吉田さんがうやうやしく受け取り、その格好がまた仰々しくて笑みがこぼれる。

「そんなかしこまらなくていいよ」

「でも、坂本くんに貰ったものだから」

吉田さんは胸の前で大事そうに缶コーヒーを抱える。

「後、のど飴も効果あった」

「ほんと?」

「うん」

吉田さんから貰ったのど飴は、昔懐かしいハツカの味がした。幼い頃、綾の姉の翠さんによく貰った代物だ。

「あの味、昔よく舐めたんだ」

「私も。それで急に思いだして欲しくなって」

吉田さんもしみじみと言う。

「そっか」

「うん」

そして僕達は、図書室にいるせいかな本の話題となる。

「あの、坂本くんは本を読む？」

「あ、一応」

ただし、美咲さんに強制されて官能小説を読んでいるなんてとても言えない。

口が裂けても絶対にである。

「でも、流行りの推理小説くらいかな」

と、僕は言う。

「推理小説かあ。私はファンタジー。それでね、坂本くん」

吉田さんが嬉々として話しかけてくる。

最初に話しかけた時にあった緊張も取れてきたみたいだ。

見れば文学少女然とした吉田さん。

見た目はとても細くて小柄で、本が好きな感じがにじみ出ている。

「あ、あのね、坂本くん」

「何？」

「わ、私、坂本くんともっと本の話をしたいなと思って」

「僕と？」

「う、うん」

「いいけど、どれから読めばいいかわからないんだ」

「じゃあこれ。貸すから読んでほしいな」

「ほんと?」

「うん」

吉田さんから本を受け取る。

渡されたのは魔法の世界に迷い込むファンタジー小説。

僕一人だったら、おそらく選ばないであろうジャンルだ。

けど、これを機会に試し読みしてみるのもいいのかもしれない。

「これ、読んでみるね」

「ありがとう」

「いや、礼を言われるのはこっちだよ」

「それもそっか」

吉田さんはえへへと笑う。

2 - 4 綾の責務

放課後、直と一緒に昇降口の前まで行くと、綾が待っていた。

綾は下駄箱の所で寄りかかっっていて、僕達を見つけると駆け寄ってくる。

「春、真、待ってた」

「綾」

僕は綾に言う。

「待っているならメールしてくればいいのに。今日も僕達が休みだったらどうするつもりだったの？」

「いいの、春。なんか文句ある？」

「ないよ。べつに」

綾の剣幕に押された僕はそう答える。

「なんとなくそういう手段を使わないで待っていたい気分だったの」

「なんとなく？」

直が疑問に思ったのか聞く。

「うん。なんとなくね」

校門を出て、きれいだったイチヨウ並木の通りを歩く。

基本的に学校の前は桜の木であることが多いけど、ここはイチヨウの木。

しかも、ここの街のイチヨウは特殊で、早く色づき早く枯れてしまうという特色があった。

「このイチヨウの葉もすっかり枯れちゃったね」

綾が残念そうにつぶやく。

「うん」

僕はうなづく。

「もう十一月になるから」

直もぽつりと一言。

「そっか。もう少しで十一月だよ、春、直」

「十一月か」

しみじみとつぶやく僕。

「中学生でいられるのも、後、四か月ちょっとしかないのね」

「たしかに」

僕達はへんな感慨に浸る。

けど、その空気を打破したくて、僕は口を開く。

「でもさ、綾。その前にハロウィンがあるよ。十月の最後の日に」

「ハロウィンか。家では関係ないかな」

「あんな西洋みたいな家なのに」

「うん。ハロウィンって日本では一般的じゃないから。そんなことしている暇あったら、企業同士のパーティになっちゃっよ」

企業同士のパーティ。

その言葉で、綾のお嬢様としての一面を垣間見た気がする。

「じゃあ、その日、東風荘に来る？」

そう言うってから、僕は迂闊だったなと反省する。

綾はお嬢様の責務をこなすために色々忙しい。

なので、たぶん返事は否だ。

案の定、綾の返事は敵しかった。

「誘ってくれて嬉しいけど、たぶんいけないと思う」

「そっか」

「じめん」

「こっちこそ」

綾と僕の空気がさらに湿っぽくなっていく中、今まで黙っていた直が言う。

「綾」

「何？ 直」

「綾の都合がいい時に三人だけでしよう」

「え？」

「ハロウィン」

綾の顔が喜びに変わっていく。

「そつだ。そうすれば良かったんだよ」

僕も声を上げる。

結局、僕達はハロウィンには何をすべきかの相談となる。
建設的な意見は出なかったけど、話をしているだけで楽しい。

やがて、月極駐車場と都立公園の入り口があるいつもの交差点に
差し掛かる。

ここで綾とお別れ。

綾はここからバスに乗って帰る。

「じゃあね、春、直」

綾は手を振って去っていく。

そして次の曲がり角の所ですぐに見えなくなってしまった。

「直、帰ろっか」

「ん」

直の返事を聞いて、僕達は東風荘に向かって歩み出す。

2・5 日常の責務

帰宅した後、直と僕はのんびんだらりとくつろぐ。

久しぶりの学校もあってか、少し疲れがたまっていたみたいだ。それと風邪の影響も少しは残っていたのかもしれない。

なので、何をするわけでもなくぼんやりと時間を費やす。

しかしそうして一時間ほど過ごし、直が夕食作りに取り掛かろうとした時に問題が発生する。

「春、足りない」

「え？」

「冷蔵庫の中身」

冷蔵庫をのぞき込んだ直が、ぽつりとつぶやく。

「あ、そっか」

「うん」

「買い物してないわけだ」

「そう」

そうだった、と嘆息する。

僕達は日常の責務をすっかり忘れていて、土日を含んでここ四日間、買い出しをまったくしていなかったのだ。

ということとは、冷蔵庫の中身も少なくなるのが当たり前。

僕は直に提案する。

「直」

「ん？」

「今からさ、いつものスーパーで買い物をしてくるよ」

「私も行く」

「でも直、僕、自転車使ってみようと思っただけど」

自転車というのは、美咲さんがラッタッタを乗ることになり譲り受けた代物。

坂本家が譲り受けてからまだ使う場面がなく、折角だからこの機会に使ってみようと思っただのだ。

「それでも行く」

「え？」

僕は驚く。

「もしかして二人乗り？」

「二人乗り」

たしかあの自転車は二人乗りができるはず。けど、直は自転車があまり好きではない。

「それでいいの、直？」

「いい」

こうして僕達は、自転車でスーパーに向かうこととなる。家を出て、直を自転車の後ろに乗せる。直はゆっくりと自転車に跨がったが、座り方に安定性がない。

「そんな座り方で大丈夫？」

「大丈夫じゃないみたい」

「だったら横向きで座らないで、僕と同じ向きに座って」

「ん」

直が座り直す。

「春、ぎゅーってしていい」

「ぎゅーって何？」

「ぎゅーはぎゅー」

二回目でなんとなく意味は理解できた。

「いいけどさ、直。運転に支障が出ない程度でお願い」

一応、わかっていると思うけど、僕は忠告する。

「わかった」

直が納得し、いよいよペダルを漕ぎだす。

思えば、自転車に乗ることは本当に久しぶりになる。

「さて、出発だ」

「オー」

けど、颯爽と出発しようとした所で、すぐにその計画は頓挫する。

「上り坂」

「ほんとだ」

「進まない」

直が不満そうに口をとがらす。

要するに、氣勢をそがれた格好だ。

それでも上り坂を通りすぎたところで、もう一度自転車に乗り直す。

そしてそのまましばらく進んでいると、だんだんと気分が高揚し

てきて歌も飛び出してくる。

結局、僕達はデュエットしながらスーパーへと向かった。

2 - 6 二人からの電話

スーパーで買うべきものを買った僕達は、いつもの下り坂を利用して家へと戻る。

一時期タイムバーゲンなんかをやったりして迷走していたスーパーは、普段の安さを売りにする形態にすっかり戻ってくれた。おかげで店の秩序は保たれ、安寧を取り戻したと聞く。

「スーパーの雰囲気も元に戻ったね」

「ん」

「でもそうすると、タイムバーゲンを利用する絵里ちゃんと会うことはなくなるかな」

「そうだね、春」

そんなことを話しながらも、家に着く。

家に着くとすぐ、直がはちまきをしながら料理を始める。

ふんふんと鼻歌を歌っていて機嫌が良さそうだ。

僕はその間、適当のチャンネルを合わせながらニュースを見る。するとその時、ふいに携帯が鳴る。

ディスプレイの表示を見れば竹内さんだった。

「もしもし」

『やっほー春くん。今大丈夫？』

竹内さんにしてすいぶんとテンションが高い。けど、あいかわらず癒される声である。

「はい。大丈夫です」

『で、元気してた？』

「あーちよつと風邪ひいてまして」

『風邪。大丈夫なの？』

「はい。もう治りましたので」

おそらく今日で完治したはずだ。

吉田さんから貰ったハツカの飴が思いのほか効いている。

『そう。それは良かった。で、用件なんだけどね、再来週にあるバレーボールの集まりに絶対来てほしいの。どう？』

バレーボールの集まり。

またの名は『ジモテーズ』という。

このちよつと野暮ったい名前の会は、竹内さん主催のバレーボールチームだ。市役所に申請した後、近所の小学校を貸してもらって活動している。

「一応、大丈夫ですよ」

『ほんとに?』

「はい」

『受験勉強とか大丈夫?』

「うぐっ」

受験勉強という言葉は少しだけ心に響く。
僕は話を逸らそうと、疑問に思ったことを聞いてみる。

「竹内さん」

『はい』

「人数がまた足りなくなりそうなんですか?」

『ううん、そうじゃない』

うふふと上品に笑う竹内さん。

『今回はさ、明美ちゃんが春くんにどうしても来てほしいって言うてるんだ』

明美ちゃんと聞いても誰だかわからない。

「すみません。明美ちゃんって誰ですか?」

『あー、岩崎さんのことだよ』

岩崎さんとは僕より二つ上の高校生で、結構皮肉屋な人だ。そんな彼女が僕に何の用があるのだろう。

『用？ 詳しくは教えてくれなかったからわからないんだけど、どうも春さんに渡したいものがあるらしいんだってさ』

「そうなんですか？」

『そうみたい』

そこでバレーボールの話は終わり、十月の最後の日に東風荘で行われるハロウィンパーティーの話に変わる。

どうやら今年は、竹内さんが来れないみたいで残念だ。

そしてその話も終えたため、竹内さんとの電話を切る。けど、電話を切ったと同時に、また携帯が鳴る。

「もしもし」

『もしもし、春』

今度は綾だ。

「どうしたの？ 綾」

『あー、やっぱりハロウィンの日はだめだったんだけどね、今週の日曜日の夜は暇がありそうなの。それで、またやりたいなあと思っ

て

「あれ？」

『うん。いい？』

こう言われると僕に対抗するすべはない。

綾と僕との間に存在している秘密の遊戯は、綾の絶対の主導権で決まる。

「もちろんだよ。綾の欲するままにすればいい」

『ありがとう』

素直な幼馴染の返事。

『それでね、春』

「何」

『今日の帰り道、春が自転車を譲り受けて貰ったって言ってたでしょ』

「うん」

『だから、街を闊歩するのではなくて、自転車を使って違う風景を見たいなと思って。そうすれば、また違った自由を感じられるような気がするから』

「そっか」

『うん』

沈黙が降りる。

その中で、僕は決心して言う。

「よし、わかった。自転車を持っていくよ。でも、街は遠いんじゃないかな」

『うん。遠いけど自転車で行こう』

綾が自転車という言葉に力を込める。

「それほどの気持ちなんだ、綾」

『そうだよ、春』

綾の力強い声が耳朶に響く。

風邪もすっかり完治し、綾と秘密の遊戯の約束をした日曜日はあつという間にやってきた。

昼過ぎに降った雨も止み、夜の街を自転車で滑走するには程よい天候だ。

「春。明日楽しみだね」

「うん。でも、直と綾と僕の三人でやる小パーティーも忘れないようにしないと」

「ん。わかってる」

い。
今、東風荘では明日に迫ったハロウィンパーティーの準備で忙しい。

美咲さんはこういうパーティーが好きで準備に余念がないのはもちろんではあるが、鳥子さんも意外と乗り気である。

考えてみればハロウィンパーティーに一番似合いそうなのは、黒一色の衣装を着ている鳥子さんだ。

他にも、あまり交流のない号の人達も集まって作業をしている。

舞台は東風荘全体だから、参加せざるを得ないという側面もある。

「じゃあさ、直。僕はそろそろ行くね」

夕飯の片づけを終えて、ジャック・オー・ランタンを作っている直に僕は告げる。

ちなみに、ジャック・オー・ランタンとはお化けカボチャのことだ。

「春、わかった」

「うん」

「それで帰りは？」

直がこつちに顔を向けて聞く。

「二、三時間後くらい」

「ん。気をつけて」

「うん。あ、後、それ上手く出来てるね」

「絵を描くのと似ている」

「そうなんだ」

「そう」

「じゃあ、バイバイ、直」

「バイバイ、春」

最後にそんな言葉を交わし、家を出る。
外はすっかり日が暮れていて、吐く息も白い。
僕は寒さを感じながらも、自転車に乗る。

この前、直と買い物に行った時は、直が抱きついてきて漕ぐのも
ままならなかった。

だから、綾との待ち合わせ場所でもある都立公園までは、存分に
自転車の感触を楽しむことにしよう。

「あ、もういる」

都立公園に着くと、すでに綾が待っていた。

それにしても僕は、綾に待たせるパターンが多い。

たしか前日もそうだった気がする。

「春」

綾は僕を見つけて、控え目に手を振ってくる。

なので、僕も同じように手を振り返す。

「待った？」

「少しだけ」

「ごめん」

「いいよ。少しくらい」

「それはどうも」

「春、お礼言うことじゃないって。それよりも早く行こう」

いつものポストンバックを掲げて綾が言う。

あのポストンバックには変装用の衣服が入っている。

男の子用と女の子用が入っているのだけど、着用する人の性別はそれぞれ違う。

「春」

「ん？」

「自転車はあそこに止めておいたほうがいいんじゃない？」

「あ、うん」

綾の言葉に従い、僕は都立公園入り口前にある駐輪場に自転車を置いておく。

そしていつも利用している広い障害者用のトイレで着替えをする。

綾、僕の順番で着替えをして、互いに見た目を確認し合う。

「春、大丈夫？」

「うん。大丈夫だよ」

「ありがとう。そして春も似合っているよ」

「僕はさ、似合っていてもどうかと思っけど」

「ううん。私にとってはそれでいい」

「そっか」

綾の言葉に苦笑しつつも、僕達は自転車を置いてある駐輪場まで歩く。

もう少しで着きそうになったところで綾が言う。

「春。私、変わるからね」

その言葉を合図に表情が男らしくなっていく。
綾が男子モードに変身する瞬間だ。

「春。さあ、ボクと行くこうじゃないか」

「うん」

「夜の街を自転車でかけていこう」

無邪気すぎるほど無邪気な綾の笑顔。

僕はそれが見ただけでも、綾と秘密の遊戯をしている意味があると思っっている。

十月の下旬となれば夜は冷える。

寒いというほどでもないけど、寒くないというほどでもない。

天気予報でも夜の急な冷え込みに注意しましょうと言っていた。

「綾、寒くない？」

「何言っているんだい、春」

「え？」

「風が心地よいじゃないか」

「そうかな」

僕は疑問に思い、そしてすぐに氷解する。

寒く感じるのは、自分がスカートで足を出しているせいだからだ。

「そっか。春は今、スカートなんだな」

「まあ、そうだね」

「で、そのスカート、風でめくれてるぞ」

もちろんめくれているわけがない。
綾が僕をからかっているだけだ。

「綾、こういう時はなんて返せばいいのかな」

「知らないな」

ところで今、僕達は自転車で二人乗りして街へ向かっている。
いつもみたいに漫然と闊歩するのではなく、目的を持って進んでいる。

ただ、何かを発散するような感覚は変わらない。そしてそれは、
表層にとらわれない自由を探している気分でもあったりする。

「綾、疲れたら変わるうか」

「いいよ」

とは言つが、綾は先ほどからずっと漕ぎっぱなし。
しかも、スピードもかなり出ている。
風の音が聞こえるくらいだ。

「それよりも春」

「ん？」

「もつとぎゅーしな。危ないからや」

綾が後ろの不安定さを指摘してくる。

僕は控え目に手を回していたけど、覚悟をきめてぎゅっと抱きつく。
抱きつけば、勉強会での帰りの感触を思い出してしまっかと思えたが、べつにそんなことはないようだ。

「次、左かい？」

「左だね」

「オツケー」

綾がブレーキの擦過音を響かせながら、交差点を左に曲がる。
こここの道をまっすぐ行くと、僕達が向かっている大きな街に出る。

「これでよし、と」

綾が一息つく。

「なあ、春」

「何？」

「ボク達は今、思う存分に自由を満喫していないか」

綾が嬉しそうに話してくる。

「ボクはさ、なんかこういう瞬間がとても好きだ。このなんでもない一瞬がたまらなく愛しく感じる。なんでか知らないけど、大声で叫び出したくなる気分なんだ」

「そっか」

「春」

綾が感極まったように僕の名前を呼ぶ。
僕は黙って綾のセリフの続きを待つ。

「これかな」

「うん」

「これが青春っていいのか、と思ってさ」

「そうだね」

「でもさ、それにしてもは不格好な青春だな。ボクはボクであることが自由を感じるのに一番大切で、しかも隣には一緒の条件で変装してくれる人がいないといけなかつたりする青春」

「……」

「そんなおかしい青春なんて」

綾が自嘲気味につぶやくが、僕は反論する。

「そうかもしれないけどさ、綾」

「春？」

「でも、けっしてそんなことないんだ」

「？ どういうことだい？」

「だって、青春の在り方なんて人それぞれじゃないか」

僕はそんな月並みな言葉を口にする。

すると、綾は急に自転車を止めてくる。

そしてこっちを見てにこっちと笑う。

「それもそうだな」

「そうだよ」

と、僕は言葉を返す。

街はいつもと変わらずに、煌めくネオンと雑踏であふれている。
それが綾と僕を安心させてくれるとも知らずに、輪郭を整えてく
れるとも知らずに。

「春。自転車はありだな」

「うん。ありだね」

徒歩、自転車の違いにもさほど影響はなく、僕達は街をうろつく。
気ままにルートを決め、ざっくばらんなおしゃべりをしながら進ん
でいく。

「それはそうと、綾」

「なんだい？」

「自転車ずっと漕ぎっぱなしで大丈夫？」

僕は綾に聞いてみる。

「何、大丈夫」

「ほんと?」

「ほんとだよ。それにボクがエスコートするべきだから当たり前さ」

「そっか。じゃあ任せるよ」

「おう、任された」

しかしそんなやり取りの後、僕の懸念がすぐに顕著となって現れるとは思いもしなかった。

「綾。右。衝突するっ!」

僕は大声で叫ぶ。

「あ!」

曲がり角でやってきた自転車を見逃したせいか、綾がハンドルを切り損ねる。

「危ない!」

キキキキイイ、と響くブレーキの擦過音。

僕は遠心力で自転車から投げ出され、地面に頭を軽くぶつける。けど、受身がとれたおかげかそんなにダメージはない。

「は、春!」

綾の叫び声が聞こえる。

けど、その心配はいらない。

体はほとんど無傷だ。
ただ、エクステは取れてしまった。

「春、怪我はない？」

駆け寄ってきた綾が言う。

「大丈夫。それよりも相手はどうなった？」

「すんでのところで衝突は回避したけど」

「けど？」

「お互いに転倒した」

「じゃあ、謝らないと」

綾がはっとしたように気づき、僕達はびっくりそっぴになった相手の所に向かう。

「すみません」

「いちらんそ」

「って、小平さん」

知り合いだとは思わず、迂闊にも名前を呼んでしまう。

「…」

綾も予想外の事態に息を飲んで固まっている。

小平さんは地面に腰を下ろした状態からゆっくりと立ち上がり、そして僕を何度も見て口をパクパクする。

「あ、あんたは坂本？」

「あ、うん」

小平さんの鋭い視線に、僕はうなずくという二度目の失策を犯す。それにしても、小平さんと僕はいつも間が悪い。

こうして綾と秘密の遊戯をしている時に出くわしてしまうなんて、想像以上の運のなさだ。

しかも、僕が女装をしていることがばれてしまっている。

「な、なんて格好しているの？」

「いや、その」

案の定、そこにつっこんでくる小平さん。

ただ、綾の方はどうやらばれていないらしい。

なので、このまま僕に気を逸らしてくれればいい。とにかく綾の秘密だけは守らなくてはいけない、と思考を切り替える。

「見てわかるとおり女装なんだ」

「ふ、ふ、不潔よっ」

小平さんは顔を真っ赤にして文句を言うが、僕は女装している」とに何か言い訳できないかと必死になって考える。けど、何も思い浮かばない。

「こ、小平さんでいいのかな」

と、そこで綾が口を開く。

緊張しているようで、いつもの男子モードにもブレが生じている。

「はい」

なぜか小平さんも緊張した様子だ。

「実はさ、ボクが頼んだんだよ。ボクが女装をするようにさ。理由は明日のハロウィンの余興の練習で、度胸試しをしようということになってね」

綾のセリフに僕は心の中で喝采を贈る。

「そ、そうなんですか？」

「そっだよ」

果たして、これで小平さんはどう反応するのか。

それとも、綾からなんらかの違和感を受け取ってしまったか。

小平さんはしばらくは黙りこくっていたが、やがて決心がついたのか口を開く。

「さ、坂本っ。今日は彼に免じて見逃してあげるからね。ほんとは

そんな格好で街をうろつくなんてだめなんだから。坂本は綾を泣かせるようなことをするんじゃないの。いい？」

「うん、うん」

「じゃあ、私帰るから」

「うん。小平さん、また明日」

「ふんっ」

その返事を聞いて、僕は嘆息する。

小平さんとの関係をどうやって修復すればいいのか。

それで頭を悩ませることになるのが、また確定したからだ。

帰り道、綾は少し落ち込んでいるみたいだった。

そうすると、男の子の格好した綾が女の子のように見える。

なぜだかわからない。

けど、そう感じてしまう。

「春」

自転車の後部座席に座った綾が、悲しげな声を出す。

「今度も上手くいかなかったね」

「いいや。今日は上手くいっていたさ。自転車でうろつくっていうのも画期的な案だったし、それに見合った対価も手に入れられた」

「そうだけど。でも、代償もあった」

「たしかに代償はあった。でも、そんなことはたいした問題じゃないんだ」

僕はそう言うが、綾の様子は変わらない。

「それに私」

「うん」

「親友の真由を騙した。ううん、ずっと騙している」

綾が僕の背中に頬をあずけている。

それだけで、綾の懊悩がこっちまで伝わってくる。

「綾、それはしょうがない」

「しょうがないよ」

「そんなことないさ。だって、僕はそのおかげで救われたんだから」

「そうだけど」

綾は曖昧な返事をする。

なので、僕は自分にも言い聞かせるように言う。

「綾、物事は深く考えすぎないようにすること。後、自分と物事との間に適切な距離を築くことが大切なんだ」

「適切な距離？」

「そうだよ。深く入りすぎないようにするためにはそれが必要だから」

僕は最近よく思っていることを滔々と述べる。

それは全ての事象にはしかるべき距離があって、これを意識して

いないとまれに息苦しさを胸の詰まりを感じてしまうことだ。

夜寝る前に一日を思い返しているのも、そういうことを整理している側面があったりする。

「春」

「何？」

「その適切な距離ってずっと変わらないものなの？」

綾がそんなことを聞いてくる。

「そうだよ。たとえばさ、直と僕が兄妹であること。綾と僕が幼馴染であること。絵里ちゃんと僕が先輩後輩の関係であること。小倉くんと僕が友達であること」

「そうなんだ」

なぜだか声の響きに落ち込みが感じられる。

「綾？」

「なんでもない」

その言葉とは裏腹に綾がぎゅーと抱きついてくる。あまりに勢いで運転に支障が出るくらいだ。

「綾、運転できない」

「ごめん。後、これは深い意味はないから」

「わかってる」

「わかってないくせに」

綾が何かをぼそつとつぶやいたが聞こえない。

聞き返そうかと思ったけど、なんとなく止めておく。

「綾。次、右に曲がるから気をつけて」

「うん」

ここを右に曲がると、後は一直線で都立公園に着く。

「春は自転車の漕ぎ方丁寧だね」

「綾を乗せているからだよ」

「そうなの？」

「いや、やっぱりなんとなくかな」

僕まで直の口癖が移ってしまったみたいだ。

ともあれ、僕はまるで今日の労をねぎらうかのようにゆっくりと自転車を漕いでいく。

もしかしたら、今日の秘密の遊戯が終わるのを惜しんでいるのかもしれない。

「綾。これで秘密の遊戯が終わらせようなんて思ったりしてないよね」

「あ」

綾が凶星をつかれたような声を出す。

表情は窺い知ることにはできないけど、啞然としているに違いない。

「僕は構わないんだ。綾が欲するままにすればいい。それは僕の女装がばれたところで変わらないよ」

「ありがとう」

素直な幼馴染のお礼の言葉が胸に響く。

それを聞いて、僕は活発でわがままな綾のイメージが最近薄れて
いるなと思う。

2 - 1 1 ひとめぼれ

翌日、直と一緒に学校へ行くと、昇降口の前で小平さんが待っていた。

「直、坂本借りるから」

「ん。わかった」

直が返事をした瞬間に、僕はがしつと腕をつかまれる。何の用だと働かない頭で思ったが、昨日のことだとすぐに悟る。

「坂本、屋上に来て」

「え？」

「いいから」

小平さんは僕の手を引き、強引に歩き出す。

廊下もずんずんと進み、階段も一段飛ばしで進んでいく。

そして施錠されていない屋上のドアを開け、富士山が一望できるスポットまでやってくる。

天気は曇り。

周りに人はいない。

「さ、坂本」

腕を組んだ小平さんが、いきなり僕の名前を呼ぶ。

「な、何？」

観念しながら聞き返す。

「あのね、坂本」

「うん」

「あの、聞いてほしいことがあるのよ」

「え？ どういうこと？」

僕はとてつもなく驚く。

なぜなら、小平さんがもじもじしながら顔赤くしていたからだ。

「坂本」

「はい」

とりあえず生返事をするが、その先が続かない。

「あのね」

「うん」

「あの」

小平さんが話を切りずらそうにしている。
しかも、いまだに顔が赤い。

「どうしたの？ 小平さん」

僕は耐えきれなくなって聞いてみる。
けど、小平さんからの返事はない。
そう思っていたら、小平さんのくぐもった声でしゃべっていた。

「しちゃたの」

「え？」

よく聞こえなかったので聞き返す。

「だから私、ひとめぼれしちゃったの」

「は？」

小平さんが何を言っているのか不明だ。
なので、とりあえず状況を整理してみる。

いつも間の悪いところに出くわす小平さんに呼びだされて、僕の前で顔を赤くしている。さらには、一目ぼれしたというわけのわからない告白をされる。

どう考えてみても意味がわからない。

逆にわかってしまう方がおかしい。

「わ、悪い？」

「わ、悪くないけど」

「だったらなんだっていうの？」

「いや、僕達はひとめぼれとかで言い表せる関係じゃないと思って

「は？」

「……」

なんだか小平さんと僕の間には決定的な齟齬があるような気がして、得体の知れない嫌な予感が体中を駆け巡ってくる。

そしてそれは小平さんも同じだったのかもしれない。

おかげで、ほぼ同時に互いの勘違いに気がつく。

「だ、誰がアンタなんかひとめぼれするかっ」

「こ、こっちだっておかしいと思っただ」

お互いに不平不満を言い、事態に收拾がつかなくなっていくけど、そうしているのも馬鹿らしいと思い、一度冷静になる。

「それで小平さん。どういうことなわけ？」

「だから、昨日、坂本と一緒にいた男の子にひとめぼれしたのよ」

「えっ？」

「ひとめぼれ」

僕はびっくりして言葉が出ない。
なにせ思考が追いつかないのだ。

だってその男の子は綾。

それで綾は女の子。

なんだかこんがらがってくる。

「あの人のきれいな瞳が忘れなくて。これは恋だと確信したの」

「恋？」

「そうよ」

小平さんってこんなに乙女だったのか、と僕はいぶかる。

「そんでもって彼、アンタの知り合いでしょ」

「まあ、そうだけど」

そう返事をするしかない。

「だからどうしても紹介してほしいと思って」

「いや、でも」

「そうしないと綾に言いつける。こんな卑怯なことはしたくなかったけど、どうしてもこの恋を諦めたくないから」

腕を組んで言う小平さんに、僕は未だに言葉が出ない。

「綾に言いつけられたくないでしょ」

「いや、いいんだけど」

「はあ？ だって、坂本。さすがに女装はどうかと思う」

「だからさ、小平さん。そんなこと言ったって、僕は今日あるハロウィンパーティーの余興の練習をしていたんだから仕方ないよ。それに綾だってなんとも思わないさ」

僕は昨日の綾の言葉に重ねて言い訳をする。

「でも」

「そうでしょ、小平さん」

「でも、そ、そんなのわかんないじゃない。そんなの、きっと坂本がノー天気過ぎなだけだもん。脱力系がいつでも受けいれられると思ったら大間違いなんだからね」

なんだか理屈になっていないことを涙目になって訴えてくる小平さん。

この時点でどちらの方が旗色が悪いか。
自分でも理解しているみたいだ。

「坂本」

「はい」

「私、アグレッシブだからね。紹介してくれるまで覚悟してなさいよ」

小平さんは、吠えゼリフのような言葉を残して去っていく。それを見て、僕はこの先の前途多難さを憂える。

「はあ」

まったく大変なことになったと僕は思う。話がとんでもない方向に進んでいる。

一つ溜息をつき、僕は曇り空を見上げた。

激動の朝を終えて、昼休み。

パンの購買戦争に駆り出される前の小倉くんは、僕は一言告げる。

「ごめん、今日ちょっと用事があるんだ」

「また幼馴染か？」

すべてお見通しだと言わんばかりの小倉くん。

「ああ、うん」

僕は申し訳なさそうにうなずく。

「だー、気にすんな。俺、鈴木達のところまで食うからさ」

「ごめん」

「いって」

「じゃあ、行くから」

「あー、ゆっくりしてこいよ。夫婦なんだからな」

「だから、そういうのじゃないって」

小倉くんから変な冷やかしを貰いながらも、僕は喧騒に満ちた教室を抜ける。

廊下に出ると、人はまばらだ。

僕は綾が教室の前で待っていないか探す。

「あ、いた」

すぐさま綾を見つけて、駆け寄って行く。

「綾」

「あ、春。それでどうしたの？ メールで大事な話があるって。あれ？ 直は？」

「それは全部後で話すよ。とりあえず屋上に行く」

「ど、どういふこと？」

綾は顔を青くしたり赤くしたりと忙しかったので、僕は簡潔に告げることにする。

「昨日の秘密の遊戯のこと」

「え？」

「問題が発生したんだ」

「そうなんだ」

綾が悲しそうな顔をする。

「とにかく屋上で話し合い」

僕は綾の手を引いて、屋上へ向かう。

上へと繋がる階段を上り、屋上のドアを開ける。

朝は曇りだった空には、太陽が燦々と輝いている。

人はいないことはなかったけど、穴場スポットだけあってそんなに多くない。

僕達は青いベンチの上に腰かけて座る。

トートバックから直が作ってくれた弁当を取り出し、膝の上にそれを広げる。

「綾。今日の朝さ、大変だったんだ」

僕は慎重すぎるほど慎重に切りだす。

「何があったの？」

と、綾が聞く。

「小平さんにここへ連れられて、ひとめぼれしただって言われたんだ
」

「えっ？」

やはりと言つべきか驚いている。

綾のあどけない顔は疑問でいつぱいだ。

「僕の隣にいた男の子にね」

綾は理解が追いついてない。

目をぱちくりしている。

「つまり、綾のことなんだ」

「私？」

「そう」

「それって、真由が私の男の子の姿に一目ぼれしたってこと？」

「厳密に言えばそうなるね」

「……」

綾は絶句している。

そんなことがあってもいいのかという表情だ。

「どつりで今日の真由は様子がおかしかったんだ」

「そうだったの？」

「うん」

綾が深々とうなずく。

「それで問題はここからなんだけど、小平さんは、その男の子が僕の知り合いなんだから会わせてほしいって言い張るんだ」

「え？」

綾はさらに驚く。

ついでに頭を抱えてしまっている。

「そんな。どうすればいいの？」

「僕にはわからないよ」

「私だってわからない」

二人して頭を悩ます。

まったくもってどうすればいいかわからない。

なので、建設的な意見が出ることもなく、時間だけが流れていく。

「とりあえず、ごまかしてやり過ぎすしかないな」

「うん。罪悪感はあるけどそうするしかないよ」

「それに小平さんだって良心があるはずだから、綾以外に僕が女装している姿を言いふらすことはないとは思うんだ。まあ、恋は盲目だっていうからわからないけどさ」

「そこは大丈夫。真由だから」

曲がりなりにも綾の親友。

それくらいは信頼してもいいだろう。

「でもね、春。真由のことだから、春は相当困ったことになるかもしれない」

綾の話では小平さんは恋に相当アグレッシブな人らしい。

まあ、今朝の詰め寄り方を見てもそれはわかる。

尋常じゃないほどの詰め寄り方だった。

「だからね、しばらくは真由につきまとわれると思う」

「僕が小平さんにつきまとわれるって？」

「うん。そうなると思う」

綾が神妙な顔をして言うてくる。

「そっか」

こうして僕は新たな問題に頭を悩ませる。

2 - 13 神のみぞ知る

綾の予感はくしくも的中した。

放課後、直と一緒に家へ帰ろうとしたところで小平さんに捕まったのだ。

「坂本」

小平さんはアヒルのような口をしながら、僕を睨みつけてくる。

「紹介させてもらおうからね」

「そんなこと言ってもさ」

「承諾するまで坂本のそばを離れない。それが私の信念よ」

小平さんの決心は固い。

ゆるぎない決意でみなぎっている。

「真由、春」

「ここで直が、小平さんと僕のやり取りに着目する。」

「どっつしたの？」

「いや、なんでもないんだよ」

僕はそう言うが、小平さんが余計なことを告げる。

「直。私ね、坂本から知り合いを紹介してもらおうとしているの」

「そう」

助かったことに、直はあまり興味がないうだ。
気まぐれに雲の形を見ている。

直には、あの雲が何に見えているのだろうか。

「あ、そういえば、直。坂本がハロウィンパーティーの余興で女装を」

「小平さんっ」

慌てて口を押さえ、後ろから抱きすくめて小平さんの愚行を止めようとする。

公衆の面前で結構大胆なことをしていると思ったが、なりふり構っていない場合じゃない。

けど、必死になって止める僕をあっさりと解除した小平さんは、こっちに強烈なチョップをお見舞いしてきた。

「いてて」

「さ、坂本」

自分の体をかき抱く小平さんを見て、申し訳なさが募る。

「う、ごめん」

「い、今、胸触ったでしょ」

「ふ、不可抗力です」

「どこがっ」

一応言い訳を試みるが、無駄だった。それにしても小平さんとは間が悪い。

こつこつ問題がすぐ起きる。

どうしてかは、神のみぞ知るといったところだ。

「ほんと坂本はっ。前にも私とぶつかって馬乗りはしてくるし。綾はどうしてこんな幼馴染なんかを」

「え？綾？」

「なんでもない」

ガツン、ともう一発チヨップが降ってくる。

「痛いよ。小平さん」

「痛くしたの。それよりも坂本、いつ紹介してくれるわけ？」

「いや、だからそれが無理なんだ」

「どっして」

「相手にも都合があるし」

「私に意地悪しているじゃないんでしょっね」

「そんなことないよ」

僕はなんとか言い聞かせようとするが、小平さんは聞く耳を持たない。

話はループして平行線を辿ったまま。

しかも小平さんは、僕から承諾の言質を取るまで離れてくれないらしい。

これは想像以上に大変である。

「小平さん」

「何よ」

「僕達、これから買い物するんだけど」

「ついて行くわよ」

「その後、東風荘でハロウィンパーティーがあったりするんだけど」

「飛び入り参加する。楽しそうだし」

とは言うが、小平さんは楽しくなさそうな顔をする。

「ほんとにいいの?」

「何で?」

「だって美咲さんもいるよ」

僕は最終カードをちらつかせる。
とっておきのカードだ。

「大丈夫?」

「か、構わないわ」

「え?」

「私が上杉さんを苦手だと思ったら大間違いよ」

そういうわけで、僕達三人は一緒にスーパーへ向かうことになる。
今はとうにイチョウ並木を抜けていて、月極駐車場がある都立公園入り口付近の交差点に差し掛かっている。

ここから都立公園でショートカットして、スーパーへ行く。

「直」

「何?」

「今日はハウレンソウ買っの?」

「ん」

直がさも当然だと言つようにならずく。

「ホウレンソウに何かあるの？」

小平さんが不思議そうに聞く。

「あー、坂本家での鍋の定番なんだよ」

「そうなんだ」

「まあ、今日はいつもと違う鍋なんだけどね」

僕がそう言つと、小平さんはさらに不思議そうな顔をする。

2 - 1 4 ハロウィン(1)

買い物を終えて帰宅するとすぐに、ピンポンと古臭いチャイムが鳴る。

なお、小平さんが家にながって、腰を落ち着ける暇もなうだ。

「はいはい」

こんなにタイミングが良いのは美咲さんだと思ひ、僕は返事をすることもなく出ていく。

ドアを開けると、やっぱり美咲さんがいた。

「ハロハローウィン、春坊」

ハロウィンに掛けたのだろうか。

やけに陽気なあいさつをする美咲さんが、僕達の前に姿を現す。

美咲さんはすでに仮装をしており、エンジェルとデビルが半々に混ざったような判別のつかない格好をしている。

けど、フライングもいいところだ。

「美咲さん」

「なんだい」

「たしか開始は十九時半でしたよね。まだ十七時ですよ」

「あはは」

美咲さんが苦笑する。

「もう待ちきれなくてさ」

「それでも気が早いですって」

まるで明日の遠足を待ちきれなくて眠れない子どものようである。

「で、この格好どうだい？ 春坊」

美咲さんはくるりと一回転して聞いてくる。

なので、僕は美咲さんの格好をもう一度見直す。

やはりエンジェルとデビルが半々に混ざったようなというイメージは変わらないが、よく見ると胸元が結構開いている。

「こういう表現はどうかと思うけど、美咲さんは着ヤセするタイプなんだと確信する。」

さりげなくスタイルの良さが映えているし、目に毒だと言いきってもいいくらい扇情的だ。

「似合ってますよ」

「それだけか」

美咲さんに軽くどつかれる。

「それ以外の言葉が思いつきませんので」

「まあ、それもそうだな。春坊だし」

美咲さんはどうにか納得してくれる。

「んじゃ、春坊達も着替えなよ」

「もう着替えるんですか？」

「いいから」

と言いつつ、靴を脱いだ美咲さんが家にずかずかと上がり込む。

「おじゃましまーすと」

我が家のように遠慮なく上がっていく。
そして部屋に小平さんがいるのを見て言う。

「あれ、キミはたしか真由っち」

「あ、はい」

「遊びに来たのかい」

「えっと、まあそんなようなところですよ」

美咲さんのハロウィンスタイルの格好も相まってか、かなりびく

びくしている小平さん。

前に行ったカラオケが余程トラウマになったのかもしれない。けど、そんな小平さんが勇気を振り絞るかのように質問する。

「あの、ハロウィンって結局何をするんですか？」

「知らないのかい？」

「はい。よく知らなくて」

「なら、説明してあげよう」

美咲さんは自信満々に胸を張りながら言う。

「まずね、ハロウィンを一言で集約すれば祭りなんだよ」

「祭りですか？」

「そりゃそうさ。こんなに楽しめるんだからね」

それから美咲さんは、ハロウィンの日に一般的に行なわれることの説明をする。

それはあの有名なトリック・オア・トリートの意味から始まり、ハロウィンが行われる宗教的な見地まで話は広がっていく。

「　　というわけで、私達は仮装をして近所を練り歩くわけだ」

もちろん、東風荘で開催されるハロウィンパーティーも大方はその流儀にかなっている。

お菓子を貰いに近所を練り歩くのは一緒に、違いはその後がカボ

チャ風味の闇鍋パーティというだけだ。

「だいたいはわかりました」

しかし、小平さんは言う。

「でも、近所の人は協力してくれるんですか？」

「そこはアレだよ。交渉力。私、顔が広いからさ。近所の人みんな友達なんだぜ」

いや、交渉力も何もむりやり承諾させたただけだ。

けど、細かいことを気にしない美咲さんの性格が全面に出ているといえよう。

「はあ、すごいですね」

「まあね。じゃあ、というわけで真由っちも着替えて。仮装は大学の知り合い経由でたくさん借りてきたから問題ないしな」

「えええっ!」

小平さんが派手に驚く。

「何驚いているのさ。そんなの当たり前じゃないか。ハロウィンパーティなんだから」

「う、心の準備ができていないんですけど」

「空手部の女の子が何を言ってるの。一に度胸、二に度胸でしょ」

「でもそれとこれとは度胸の種類が違いますし」

シヨートカットの髪をいじりながら、小平さんが懸命に言い訳をする。

「はい、いいから着替える。あと坂本兄妹も」

こうして美咲さんの圧倒的なバイタリティーになすすべもなく、僕達は着替えをすることとなった。

美咲さんの持ってきた仮装に着替え終え、僕達は互いの格好を見やる。

直はオルレ안의乙女風味な男装。

小平さんはバンシー系をモチーフとした妖精。

この二人の格好を逆にすると、わりとキャラクターに合う気がする。

けど、美咲さんはあえてこうしたようだ。

ちなみに僕は、かなり魔改造がこなされた燕尾服に、ムンクの叫びのような白黒のお面を被せられている。

この中で一番の色物なのは間違いない。

色物すぎてキャラクターが見えてこない。

「坂本」

「何？」

「そんなにじろじろ見るなっ」

「いや、似合っているなと思って」

「何言ってるの。こんな衣装が似合っているわけないじゃない。ショートカットでボーイッシュな私なんか」

やけに本人は謙遜しているが、小平さんは美少女といってもいい部類だ。

たしかに服のタイプはキャラクターと合っていないのかもしれないけど、けっして似合わないということはない。むしろ不思議な魅力として輝いている。

「うー、坂本」

「どうしたの？ 小平さん」

「これでこちら辺を練り歩くの？」

「うん。そっだね」

小平さんは自分の着ている仮装を見直して、顔を赤くする。

「はあ、どうしてこうなったんだろ」

「それは小平さんが参加するっていったから」

「たしかにそうだけど、私は」

小平さんが小声でつぶやく。

「でも、ここまでしたんだから彼のこと教えてよね」

「えっと、それとこれと話が別だって」

僕は気まずそうに言う。

「私、ここまででしたのにな？」

「あのさ、小平さん。これ楽しむもんだからね」

「わかってるわよ」

小平さんがやけくそ気味に叫ぶ。

そして何かを思い出したのだろうつか。

底意地の悪い笑みを浮かべ、僕の耳元に近づく。

「そういえばさ、坂本」

「何？」

「あんだ、ハロウィンパーティーは女装じゃなかったの」

「あ」

僕は虚をつかれる。

たしかにそんな言い訳していた。

なので、ここですっきりと言いつい訳しないと整合性が取れない。

「えっと」

「ん？ どうだったのよ」

小平さんはさらに攻め立ててくる。

「あ、急に変わったんだ」

「ほんとに?」

「ほんとだって」

僕は小平さんの様子を窺いつつも、さらに言い訳を募る。

正味五分くらいいしゃべっていただろうか。

その間、小平さんは真偽を見極めるように聞いていた。

「それで納得してくれた?」

「納得してはしていないけどね。まあ、そんなことはどうでもよくなっただってとこ」

小平さんはふん、と鼻息を荒くして言う。

どうやら話は逸れていくようだ。

「それよりもさ、どうして坂本は彼のこと教えてくれないの? 私、こんなに真剣なのにさ」

と思っただら、話が最初の方にぶり返した。

「いや、それは」

「私、真剣だよ」

小平さんが僕を真摯な瞳で見つめてくる。

それは直のように全てを見透かしてしまいそんな瞳とも違つし、
絵里ちゃんのようにキラキラした瞳とも違う。

けど、たしかな特徴を持った存在感のある瞳だ。

「坂本、私、彼のあどけなくてほっとけない感じが気になって仕方がないの。そう、あのどこかを寂しさを抱えているようなアンニュイな雰囲気だ」

なんだかどうにも言い訳の出来ない状況に追い込まれていく。
どうすればいいのだろうか。

僕にはわからない。

「ねえ、坂本」

「うん」

「お願いだから私に紹介してよ」

小平さんは手を握ってまで嘆願してくる。
そしてその熱意に、僕は段々と押されていく。

「あかさ、小平さん」

「何？」

「じゃあさ、彼に聞いてみるから」

結局、僕は観念してそう告げる。

「え？」

「今のところはそれで勘弁してくれない？」

「あ、うん。わかった」

「どうも」

「ううん、こっちこそありがとう。坂本」

小平さんが満面の笑みで喜びを表す。
不覚にも、妖精姿と相まってかわいいと思ってしまった。

「春、真由、スケッチしたい」

直がいきなりそう言ったので、小平さんと僕は並んで直立の姿勢を取る。

直はハンガーに掛けてあった制服の徽章付近のポケットからメモ帳を取り出し、さらさらデッサンを開始する。

僕は慣れていたので良かったものの、小平さんはじっとするのが困難なようだ。

微妙にかしこまっていて不自然極まりない。
緊張感がにじみ出ている。

「出来た」

「もう出来たの？ 直」

小平さんがびっくりして声を上げる。

それくらい直のスケッチは素早く終わった。
ものの五分もしないうちに完成といったところか。

「見せてよ、直」

小平さんが直に駆け寄っていく。

そして直の書いた絵をのぞきこみ、驚きの声を上げる。

「やっぱり上手いなあ」

「ありがとう」

「どうしたらこんなに上手く書けるの？」

小平さんが聞く。

「対象をしっかりと見つめる」

「うん」

「そして模写する」

「うん」

「……」

「それだけ？」

「ん。それだけ」

どうやらあまり参考になっていないようだ。

これは直の瞳が常人より優れていることに由来しているので、参考にならないのも致し方ない。

「直っち、私のは？」

美咲さんが催促してくる。

「わかった」

直が大げさにモデルのポーズを取る美咲さんをデッサンしていく。それを小平さんがじっと見ている。

「出来た」

「直、早っ!」

こちらも数分して完成。

出来は申し分なく、美咲さんも満足している。

「直っちはほんとに凄いなー。しかもこんなにかわいいし。いやどつちかと言えば、美しいかな。とにかくなんか嬉しいなあ」

美咲さんは自分の頬を直の頬にくっつけてすりすりする。さらにはキスマでしようとしている。

「美咲さん」

お酒の缶を何本か開けたのだから、もう酔っぱらっているのかもしれない。

そして小平さんは、そんな美咲さんの様子を見ておののいている。

「直が嫌がってますよ」

「えー、そんなことないよね、直っち」

「美咲。少しだけ嫌」

直は無表情ながらも端的に告げる。

「そんなあ。じゃあ、いつも嫌がっているの？」

「いつもはキスとかしないからいい」

「あ、そっか」

「ん」

「ということは私、今日は祭りだから調子に乗っちゃってるわけだな」

自分で納得し、うんうんとうなずく美咲さん。

「ま、いいよね」

「よくないですよ。自重してくださいね」

僕も必死になって言う。

まだハロウィンパーティーも始まっていないのに出来あがっている美咲さんは、飲むペースがいつもより早い。

缶を何本も開けている。

「さ、坂本」

小平さんが小声で話しかけてくる。

「何？」

「私、上杉さんのバイタリティーについていけないかも」

不安そうな小平さんの声。

「大丈夫だって、小平さん」

「そうかな」

「カラオケの時間を思えばたいしたことないから」

「あ」

思いだしたに違いない。

軽く身震いをする小平さん。

「でしょ？」

「うん。それもそうだよね」

「まさしく」

互いに苦笑し合う。

それだけ凄かった。

あの時の美咲さんをはとてつもなかったのだ。

「それよりもさ、楽しまないと」

「え？」

「もう少しでパーティが始まるんだから」

「そうだね」

小平さんがうなずく。

予定した時間がやってくるまで、四人で適当に話をして待つ。

内容はざつくばらんとりとめのないことに終始していたけど、ハロウィンパーティに向けての高揚もあってか、やけに話しが弾んだ。

特に美咲さんの大学の友達の話は、中学生の好奇心を刺激するのに十分なほどだった。また美咲さんの話し方も上手くて、必要以上に感心させられた。

やがて時間が過ぎていき、十九時半。
家の古臭いチャイムがようやく鳴る。

「はいはい」

僕は反射的に返事をする。

「よし、春坊行って来い」

「わかりました」

きつと鳥子さんが来たのだろう。

僕は玄関に向かう。

「今、開けますよ」

宣言通り、ドアを開ける。
けど、目の前に誰もいない。

「あれ？ 鳥子さん？」

おかしいなと思い、外に出てみる。
すると、ドアに隠れていた鳥子さんが勢いよく出てきた。

「わっ」

「うわぁ」

僕は驚き、声を上げる。
尻もちもつきそうになった。

「何をするんですか、鳥子さん」

「何をするんですかと問われましても、私自身が何をしているのかは明確にはわかりませんが、とりあえずこんばんは、春くん、とでも申しておきましょうか」

「はぁ、こんばんは」

お決まりの鳥子さん節に、僕は多少うろたえながらもそれに応える。

そして鳥子さんの格好に注目する。

「鳥子さん」

「はい、なんででしょう」

「モチーフは魔法使いですか」

「一概には言えません。ですが、貴方にはそう見えますか？」

「見えますね」

鳥子さんはいつもの黒一色の衣装。

それは変わらないけど、とんがりハットをかぶっている。

これこそが魔法使いに見える要因である。

「それにしても、やけに似合いますね」

僕は思ったままの感想を口にする。

「ありがとうございます、春くん。それはそうと貴方の格好は何をモチーフにされているのでしょうか？」

「僕？」

「はい」

「それは僕にもわからないんだ」

「わからないですか。でも、わからないことも悪いことではありませんよ。わからないことは自分の感情を整理するのに一番大切な心の在り方ですから」

「そうですね」

「はい」

そんなことを言われても、鳥子さんの前にさらしているのがムク
クの叫びみたいなお面ではどうしょうもない。
つまり、格好がつかないというやつである。

「まあ、それよりも中に入ってください」

「そうですね」

鳥子さんが上品に靴を脱いで、中に入っていく。
もちろん中にはみんな集まっている。

「みなさん、こんばんは」

会釈して、美咲さんの隣に座る。

鳥子さんはずばらな美咲さんと違い、座り方も丁寧だ。

「特にそちらのお嬢さんは、私の記憶が確かでありましたら初めま
してですね。私は野々垣鳥子と申します」

小平さんに名刺を渡す鳥子さん。

その動作も完璧だ。

「あ、はい。初めましてです。私は二人の友達で小平真由といいま
す。今日は特別参加させていただきます。よろしく願います」

「いえいえ、こちらこそよろしくお願いしますね」

丁寧な自己紹介を終えたのを合図に、美咲さんがやにわに立ち上がる。

自分の頬をパンパンと叩き、気合を入れている。

そして、僕達の顔を見渡してから大きな声で告げる。

「さて、やっと鳥子も来たことだし、ハロウィンパーティーの始まりだよっ」

「トリック・オア・トリート！」

悪戯か、ご馳走か。

美咲さんの叫び声が、夜の闇に木霊する。

まるで火の用心を叫ぶ人並みの声の大きさに、近所迷惑もいところだ。

これは後で、近所中に菓子折りを持って行かなくてはいけない。

「次はどこですか？ 美咲さん」

すでにたくさんのお菓子を手に入れた僕達は、なおも近所を練り歩く。

美咲さんを先頭にして、ロールプレイングのパーティ歩きのように一列に並んでいる。

並びは、美咲さん、僕、小平さん、真、鳥子さんの順番。

東風荘からスタートして、ずっとこの調子だ。

「次はこっち」

美咲さんが指し示す方角に従って、僕達は歩く。

通りすぎる人々は、一様に僕達の集団を見て驚いている。

けど、もうその視線にもなれた。
今は心地よささえ感じている。

「小平さん、調子はどう？」

僕は後ろにいる小平さんに声をかける。

「調子って何よ？」

「あ、そうだね」

「でも、言いたいことはわかるけど」

「じゃあどう？」

「んと、なんだか新鮮で楽しい。仮装も悪くない」

「そっか」

小平さんの上々な感想も聞けたところで、次の目的の家にたどり着く。

美咲さんがインターホンを押して、仮装戦隊ハロレンジャーと名乗った。

いくらこの家に小さな子どもがいるからって、そのネーミングは嘆かわしい。

もう少しマシな言い方はなかったかなと思う。

「あっ！」

ガチャリ、とドアが開き、就学年齢に達していない小さな子どもが出てきて叫んだ。

その子は僕達の格好を見て、楽しそうに笑う。
なんだか微笑ましい光景だ。

「トリック・オア・トリート！」

美咲さんが楽しそうに声を張り上げる。

「お菓子をくれなかったら、キミに悪戯しちゃうぞ」

小平さんも妖精のくせに不穏な脅し文句を口にする。

その間、僕は手作りの紙の包丁で子どもを脅し、直はジャック・オー・ランタンを掲げて、自分の無表情な顔を照らす。

「ちょっと待ってっ」

彼はどたどたと足音を立てて去っていく。

「ママ、ママ、お菓子」

「はいはい」

楽しそうな声がここまで聞こえる。

どうやら僕達以外にも楽しんでもらえているみたいだ。

「はい、お姉さん。持ってきたよ」

子どもが嬉々として、美咲さんにお菓子を渡す。
それは小さながぼちゃのパイ。
受け取ったお菓子は鳥子さんが預かる。

「ありがとうー」

「きゃー、かわいい」

美咲さんがその子を猫かわいがりしはじめた。
彼は身をよじりながらも嬉しそうにしている。

「さて、それじゃあキミにもお菓子をあげようではないか」

美咲さんが楽しそうに言う。

「えっ、ほんと?」

「ほんとですよ。ぼっちゃん」

そして、最後尾にいた鳥子さんが前に出てくる。

「何も無いところからお菓子を出して差し上げましょう」

「えー、そんなことできるの?」

「ええ、出来ますよ。なぜなら私は魔法使いだからです」

と、鳥子さんがそう言った瞬間である。

どっぴりっぴり手品なのはとんと見当がつかない。

けど、いつのまにか鳥子さんの手の中はお菓子であふれていた。これは、前に見せてもらった林檎の手品の進化バージョンだ。

「わあ、すごいすごい。どうやったの」

「それは内緒ですよ」

「そんなあ、教えて」

「内緒です。秘密は明かしたら秘密で無くなってしまうのですから」

「そっか。それなら教えてもらおうの我慢する」

やけに聞きわけの良い子どもだ。

「いい子ですね」

鳥子さんも子どもの頭をなでる。

「ご褒美にお菓子を一つあげましょう」

「やったあー。魔法使いのお姉ちゃんありがとう」

「いえいえ。それではいきましょうか」

「そうだな」

美咲さんが目配せをする。

「バイバイ。みんなっ」

「バイバイ、ぼっちゃ」

こうして、いたずらを嫌がる大人達は子ども達にお菓子配って
いく。

まあ、僕達が子どもかどうかには議論の余地があるが。
けど、ハロウィンの夜はまだまだ続いていくのだった。

家に戻って一番最初にしたのは、たくさん貰ったお菓子を区分け
することであった。

種類はハロウィンに関するものが多かったけど、それでもいろん
な種類のお菓子が手元にある。

キャンディー、ガム、ビスケット、クッキー、チョコレート、パ
イなどと、例を挙げれば枚挙にいとまがない。

「坂本、それにしてもずいぶん集まったね」

隣で作業をしている小平さんが言う。

「そうだね」

「もしかしてこれ、今日中に全部食べきるの？」

「いや、それは無理だって」

「うん。言ってみて私も無理だと思った」

「そうだよ。それにこれから鍋パーティーをするんだし」

「その鍋パーティーなんだけどなんなの？」

「それはただの鍋パーティーだよ」

「ただの鍋パーティー？」

「そう。ただの鍋パーティーさ」

小平さんと僕は適当なことをしゃべりながらも作業を続けていく。直はいつのまにかお菓子の山のスケッチをしている。

「よし、終わった」

「終わったあ、坂本」

やがてその作業も終わり、好きなお菓子をつまみながら歓談となる。

その間、僕は台所で鍋の準備をこなしていく。

鍋を用意するのはお客さんがいるから僕になる。

直が当番を担当する宣言して以来、しっかりとした料理を作ることはなかったので久しぶりの機会だ。

「春坊、今日はハロウィンパーティーにちなんで闇鍋しようじゃないか」

向こうから美咲さんの声が聞こえてくる。

美咲さんと鳥子さんは、すでにお菓子を肴に乾杯をしている。

「だめです。何の関連性もないじゃないですか。それに僕の目が黒いことはそんなことはさせません」

「えー。この鍋奉行」

「美咲さん、それは意味が違うと思いますけど」

「いいの。私がそういう意味だと思ったらそういう意味」

「どっただけ自分中心なんですか」

「だって私だもん」

美咲さんの戯言を聞きながら、僕は料理をする。

鍋の準備を整えるのには十分とわからない。

なぜなら事前に仕込みをしていたからだ。

「出来ましたよ」

「出来た？」

テーブルに鍋を持っていく。

いつもどおりたくさんのホウレンソウと、オリジナルのカボチャ、それと美咲さんから貰った仕送りの品をふんだんに使った鍋だ。

「熱いから気をつけてくださいね」

「うーす。やっぱり締めは鍋だよ」

チューハイをすでに何本も開けている美咲さんが言う。

「そうですね。私も、みなさんでやるこの鍋という囲みがなぜ活力

の源になっているのか不思議でなりません」

鳥子さんも納得したようにうなずく。

「小平さん。この調子だと遠慮すると無くなっちゃっから気をつけて」

「うん」

小平さんも待ちかまえている。

「では、準備が整いましたのでいただきます」

「「「「いただきます」」」」

唱和して、僕達は箸を手にする。

仮装をしながら食べる鍋はなんだか違和感でいっぱいだ。

けど、特別な日になりそうな気がしている。

今日一日を思い返した時にも、きっとそう感じるだろう。

「そついえば去年もこんな感じでやったよな」

美咲さんが言う。

「そうですね」

僕は答える。

「坂本、ハロウィンパーティーは去年もやったの？」

小平さんが僕に聞く。

「うん、やった。たぶんこれは毎年の恒例なんだ」

「そうだね。これは毎年の恒例だな。真由っち、来年またやりたかったら来てよ」

「えっと、考えておきます」

小平さんは無難な返事をする。

それを聞いた僕は、小平さんに質問を試してみる。

「あ、小平さん」

「何？」

「今日は楽しかった？ 僕がむりやりさそつたようなものだから」

「そんなことないって。私がむりやり来ちゃつたようなものだし」

「少しだけしおらしい小平さん。」

「それに本当に楽しかったし、今でも楽しんでいる」

「そっか」

「でも、上杉さんの宇宙人並みのバイタリティーにはやっぱり困惑しているけど」

「へえ。宇宙人か。それは納得な表現だね」

「そうですね」

顔を見合わせて笑い合う。

僕は小平さんとの誤解が無くなって、少しは親しくなれたような気がした。

ただ、安請け合いしてしまった難題が残っていたけれど。

宴もたけなわ。

好評だった鍋もすっかり無くなり、ハロウィンパーティーから続く一連の流れは終わりを迎えつつあった。

美咲さんはすでに舟を漕ぎはじめているし、直はスケッチを始めている。

直が何を描いているかといえば、区分けしたお菓子だ。

細部にわたって、綿密に描写している。

あいかわらず素晴らしい出来である。

「春くん」

「何ですか？ 鳥子さん」

「貴方に、二つ、三つばかり言っておきたいことがあるんですが、私の話を聞いてくれますか？」

「いいですよ」

僕は鳥子さんの妖艶な微笑みを受けとめる。

「それでは確認を致しますので、どちらか片方の手を貸してください」

「手ですか？」

「はい、そうです」

「わかりました」

僕は自分の手をおずおずと差し出す。
すると鳥子さんは僕の手を取り、熱心に見つめる。

正直、穴が開くくらいの勢いだ。
なので、気恥ずかしさが芽生えてくる。

「あの、どうしたんですか？」

こらえ切れなくなって、疑問を投げかけてみる。

「鳥子さん？」

なおも黙って僕の手を見つめている鳥子さん。
僕はだんだんと心配になってくるが、すごい能力を持っている鳥子さんのことだ。

僕が窺い知れないビジョンが浮かんでいるのかもしれない。

「……………」

鳥子さんが何事かつぶやく。
その声は僕には聞こえない。

けど、もう気にはならない。

とりあえず鳥子さんからの託宣を待つだけ。

「春くん」

やがて五分くらい経過して、鳥子さんが顔を上げる。

「はい、なんでしょう」

緊張した面持ちで僕は尋ねる。

「やはり私の見込み通りです」

「あの、何がでしょうか」

「いいですか。よく聞いてください」

「はい」

姿勢を正して、鳥子さんの言葉を待つ。

「貴方には女難の相が出始めています」

「え？」

「女難です」

鳥子さんはきつぱりと告げる。

「あの、どついついことですか？」

僕はとりあえず聞いてみる。

「女難とはですね、女の子に振り回されて自らの行動に自由がなくなってしまうことですよ」

「はあ」

「それを踏まえて春くん。大切なのは誰にでも優しくすることではありません。誰にでも優しいということは、誰にも優しくないとこのことと同義なのですから」

「そういう捉え方もあるんですか」

「はい、そうです。この言葉は深く胸に留めておいてくださいね。それと自分と物事との間に然るべき距離を築くのは大切ですが、やがて打破するべき時がくるはずですよ。その時を注意深く見守ってください。逃してしまつとさらなる女難が待ち構えていますよ」

鳥子さんは滔々と述べる。

その内容は、僕の心情まで理解してしてくれた。

「あの」

「はい、なんでしょう」

「それは綾と僕の始まらないストーリーにも関係していますか？僕はそれで問題ないと思っっているんですが」

「それは直さんのセリフですね」

「はい」

「そうですね。関係していますよ」

「そうですね」

僕はなんともいえない気持ちになる。

胸の内側がもやもやして、いたたまれない気分だ。

「結局、僕はどうすればいいのでしょうか」

「それは心を解放して、欲するままに行動していけばいいですよ」

そして、この鳥子さんのアドバイスを、僕はどこか外れた感覚で聞く。

これはまるで、綾が告白された後に感じる疎外感に似ている。

あの不可解な感じにそっくりである。

「どうしたのですか？ 春くん」

どうやらぼーっとしていたみたいだ。

鳥子さんに心配されている。

「なんでもありませんよ」

僕はとりわけ表情を変えずに答える。

3 - 1 ムーンサルトプレス

いつもと変わらない朝。

まどろみに浸りつつも、至福を感じるほんの一時。

直が僕よりも早く起きて、僕を起こしてくれる。

これはまるで変わらないルーチンワーク。

けど、僕はそれを好んでいる。

直の優しくも低音な声。

それと揺り起こすようなリズム感のある振動。

これらが、僕を覚醒へと駆り立てていく。

「どりゃあー！」

「あれ？」

なんだか変な声が聞こえてくる。

これは幻聴だろうか。

よくない予感と共に、一瞬にして鳥肌が立つ。

恐る恐る目を開けてみると、宙を舞う美咲さんの姿。

「ムーンサルトプレス！」

「え？」

視界が一瞬にして暗転。

「別名は月面水爆！」

「うげほっ」

自分がこんな声も出せるのかと感心する。
寸分の狂いもなく決まった美技に、僕は悲鳴を上げていた。

「春坊、起きろー」

「み、美咲さん。勘弁してくださいよ」

まだ苦しい。

体全体へのダメージがすごいことになっている。

「それよりもどうして美咲さんがいるんですか」

「私？」

美咲さんがきょとんした顔で聞く。

「はい、そうです」

「それは私専用の超高級ミネラルウォーターが坂本家に置きっぱなしになっているからだね」

「またそのネタですか。いい加減自分の部屋に持ち帰ってください
よ」

「えー、ここで飲むのがいいんじゃない」

そんなこと言われても理解できない。

「ところでさ、春坊」

「何ですか？」

「春坊はいつもこんなに起きるわけ？」

言われて、時計を見る。

べつにさして遅いというわけではない。
いつも直が起こしてくれる時間と同じだ。

「まあ、そうですね。ただ、昨日は小説を読んだからいつもより睡眠時間は少ないんですけど」

「小説？」

「はい」

「そうかやっとな、』との関係』シリーズを読んできたか。春坊にも官能小説の良さがわかってもらえたんだな」

美咲さんが嬉しそうにうんうんとうなずく。
けど、それは大いなる勘違いである。

というか、そもそも中学生に官能小説の良さを教え込むなんて、かなりツッコミどころがありすぎる。ツッコミが追いつかないくらいだ。

なので、僕は思いつきり否定する。

「美咲さん。違いますからね」

「またまた照れちゃって」

「いえいえ、どこに照れる要素なんてありましたか。僕はただ、クラスメイトから借りたファンタジー系の小説を読んでいただけです」
「よ」

「あ、あれね。そういう設定ね。カバーだけをすり替えて読む難易度の高い技を使ったわけか。直つちの見ている前ではれないように読まなきゃいけないしな。まったくスリルなことだ」

「あの、美咲さん？ 人の話聞いてますか？」

「あ、そうそう。今度新しいの大学の生協に入ったから」

「まったく聞いていないですね」

僕は観念して諦める。

「『義弟との関係』ってやつ」

「また女性目線?!」

「ついでに『義兄との関係』、『義兄弟との関係』も買ったぞ。さ

らには二冊同時発売キャラカード付きだ」

「どこまであるんですか、そのシリーズは。しかもキャラカード付きって」

「私はキラキラのレアカード当たったな。ほら」

「見せなくていいですってば」

教育上良くないカードが目の前をチラつき、僕は頭を抱える。それにしても、あれをふところに入れとくのはかなり勇気がある。なにかあった時に心配でならない。

「春」

「あ、直」

そういえば直もいた。

このやり取りも聞いている。

「読んだの？」

全てを見透かしそんな怜悯な瞳で僕に見つめてくる。心なしか、視線がいつもより鋭い。

「読んでないからね」

「ほんと？」

「ほんとにほんとだって」

僕はなぜだかわからないけど、必死になつて告げる。
なんだかかえって言い訳をしているみたいだった。

直が作ってくれた朝食を三人で取り、学校へ行く時間となったので家を出る。

美咲さんはもうひと眠りするらしく、部屋に戻っていく。

直と僕はいつもの坂道を歩きながら、ぼつぼつと会話を交わす。

「朝、寒くなつたね」

「ん」

吐く息は白い。

十一月ともなればすっかり寒くなる。

それを肌で感じる。

やがて学校に着き、教室のドアを開ける。

そして席に座り、隣の吉田さんに話しかける。

「吉田さん」

「は、はいっ」

びくんと背筋を伸ばす吉田さん。

今日もいつもと変わらない大和撫子。

と思ったけど、いつもとちょっとぴり違う。

「もしかして前髪切った？」

「……………」

僕がそう言つと、吉田さんはなぜか赤くなって涙目になる。

「どうしたの？」

「切りすぎちゃって」

「そうかな。そんなことないと思うけど」

「ほんと？」

「うん。似合っているよ」

「……………」

さらに顔が赤くなる吉田さん。

ほんとにどうしたのだろうか。

しかも、なにかぶつぶつ言っている。

「もしかしてっ。これが前髪をつかむチャンス？」

「あの、吉田さん？」

「は、は、は」

「なんか言った？」

「うん。気にしないでね。坂本くん」

「そう」

「うん」

なんだか変な雰囲気になっていく。

最近の綾との間に起こるあの空気だ。

なので、僕は慌てて用件を言う。

「それでさ、本読んだから」

「あ、読んでくれたんだ」

空気が元に戻る。

一気に解決した。

「うん。少しずつ読んだから一週間かかったけどね。吉田さんはずっと読むの速かったりする？」

「そんなことないよ。私もそんなペース」

「そうなんだ」

「うん」

それから吉田さんと僕は、互いに共有できる話題となった本の内容を語り合う。

あの場面が良かったなどと言い合い、結構話が弾んだ。

「で、思ったより面白かった。ありがとう。教えてくれて」

「ううん。感謝されることはないよ。私、もしかして自分の趣味押しつけちゃったかな、って自己嫌悪に陥りかけたところだし」

「いやいや。そこまで考えなくてもいいのに。それにどうやらそんなことなかったみたいだしさ」

「そうみたいだね。良かった」

吉田さんははにかみながら言う。

「ていうかさ、なんだかファンタジーは食わず嫌いだったみたいだよ」

「そうなの？」

「うん。だから、良ければまた次のおススメを紹介してくれない？」

「え？ いいの？」

「もちろん。読書が受験勉強のオアシスとなればいいかな、と思っ
つてね」

「そっか。それなら」

吉田さんはいくつか本の題名を挙げてくれる。
僕でも聞いたことがある有名な本だ。

「わかった。今度読んでみるよ」

「うん。それでね、坂本くん」

「何？ 吉田さん」

「えっと」

吉田さんはもじもじしていて、なかなか話しを切りださない。上目づかいにこっちを見て、何かを言いづらそうにしている。さっきまでスムーズに話し合っていたのが嘘みたいだ。

「どうしたの？」

僕はとりあえず聞いてみる。

「あ、うん。また、今日みたいに本の内容を話し合ったりできるかなって思ってた」

「えっ？」

「あ。な、なんでもない。今言ったこと忘れて」

「どうして？ 話し合ったりしようよ」

「え、いいの？」

吉田さんの表情が驚きに変わる。

「いいに決まっているじゃないか。僕はその方が楽しいと思うんだ。それに僕達は隣の席同士なんだし、話し合う機会はたくさんあるはず。そうでしょ?」

僕はまくし立てるように言う。

「うん。そうだね」

吉田さんは嬉しそうにうなずく。

3 - 3 話の結論

数学の授業中。

校庭に撒かれるスプリングクラーの軌道をこっそり眺めながら、僕は
あることを考える。

それはハロウィンパーティーの時にした小平さんとの約束のこと。
勢いで承諾してしまっただけ、どうすればいいのか。
まだ結論は出ていない。

なのでここ最近、綾とずっとそのことを話し合っている。
もし仮に二人が会うことになれば、綾は小平さんの前で男装しな
ければならない。さらには、綾の精神の安寧のために僕も女装をし
なくてはならない。

そうしたら、不都合が生じるのは目に見えている。
要するに、綾と小平さんが会うのは不可能事項。

つまり、現状としては八方ふさがりだ。
簡単に安請け合いしたことを後悔さえしている。

とりあえずこれからの対策について、また昼休みに綾と相談。
僕は綾にメールを打とうと携帯を広げたところで、受信の合図を
目にする。

誰だろうと確認すると、絵里ちゃんだ。
綾のことは据え置きにして、メールを開く。

『先輩、今週のバレーボールの集まり来れますか？』

内容はジモティーズのこと。

今週の土曜日に集まりがある。

「いけるよ。なんでも岩崎さんが僕に渡したいものあるらしいんだ」

『そうなんですか？ それはなんなんでしょうね。私、気になりま
す』

「僕も気になるよ。というわけで行くから」

『やったあ、です。それで先輩、今度こそ一緒にいきませんか？』

「いいよ。方向違うし」

『先輩、やっぱりつれないですね。私のこと嫌いなんですか？』

「そんなわけではないよ」

『そうですよね。先輩は私のこと好きですから』

「あのお、このやり取り前もしたよね」

『はい。たしかにしましたね。でも、何度してもいいものですよ。
お約束っていいじゃないですか』

「そうかな」

『そうですよ。お約束がないと愛を語らうこともできませんので』
話題がにっちもさっちもいなくなってきた。
なので、僕は適当なところで切り上げる。

そうして絵里ちゃんとのメールのやり取りを終え、その瞬間に授業終了のチャイムが鳴る。

教科書とかを片付けていたところで、僕の席の前に人が立つ。

「春」

「あ、小倉くん」

「今日もあれか？」

近寄ってきたのは小倉くんだ。
彼にしては珍しく、今日は購買を利用しないらしい。

「ごめん。そうなんだ」

「そっか。それにしても最近のオマエと遠藤は仲いいな」

「違うよ。そういっつんじゃないんだ」

「そっか？」

「ん？」

「まあ、なんでもいいけどさ。また飯を一緒に食おうぜ。な」

そう言って僕の肩をぼんと叩き、小倉くんは鈴木くん達のところ
に向かう。

僕はそれを見届けて、教室を出る。

今日は廊下に綾がない。

綾より先に授業が終わったみたいだ。

なので、綾の教室まで行く。

二、三分待つと、綾が出てくる。

「春」

「綾」

「行くう」

「そうだね」

屋上まで繋がる階段を上っていき、ドアノブを回す。

揺れるトートバックの影をなんとなく見ながら、屋上に足を踏み
入れる。

すると、一瞬にして広がる視界。

屋上の良さでもある解放感を存分に味わう。

「座ろ」

「うん」

綾と僕は青いベンチに腰を下ろす。
最近は毎日のようにここに座っている。

「春」

「ん？」

「真由のことなんだけど」

綾が早速本題に入ってきたので僕は驚く。
表情にも出ていたのかもしれない。

「そんなに驚かなくていいじゃない。二十日間くらい、ずっとその話をしてきたんだしさ」

「そうだけど」

「だったら、そんな顔しないの」

「うん」

少しだけ沈黙が降りる。

僕は綾が話しかけてくるのを待つ。

「それで、春」

「何？」

「私、がんばって春の手助けなしで真由に会う」

「え？」

それは僕の女装なしで、綾が男装するという意味だろうか。

「そう。それで真由に会って、キミとはもう会えないって断ることにする。辛いけどそうするしかないから。そうじゃないと真由をずっと騙し続けてるみたいだし」

「そっか」

今までの話の焦点はずっとそこだった。

どうやって綾が小平さんに会うか。または説得するか。

ついに、一定の結論が出たのである。

3 - 4 直の質問

放課後、直と綾の三人で帰る。

女の子二人は僕の前を歩いていて、仲良く会話中。

いつもの光景なのに、僕はそれを微笑ましく見守っている。

これは僕が生み出した問題に、一定の結論が出たおかげもあるの
だろうか。

だからほんの少しだけ気分が良い。

少しだけというのがポイントだ。

「それで綾」

直が綾に話しかけている。

「ん？ どうしたの？ 直」

「最近、お昼ご飯、春と食べてる？」

「あ、うん」

「屋上？」

「そうだけど」

話の内容は、どうも綾と僕のことに変わつたらしい。考えてみれば、最近の僕達の行動は奇異に映るかもしれない。小倉くんも言っていたように、仲睦まじく思われていそうだ。

「だけどね、直」

「何？」

「べ、べつに春と一緒に食べたくて食べてるわけじゃないのよ。そういう事情が出来ているだけなんだから」

それを聞いて、僕はため息をつく。

ため息？

僕はどうしたのか。

何を期待してるんだろう。

綾と僕は幼馴染。

秘密の遊戯という関係性があっても、僕達が幼馴染であることは変わりはない。

それ以下でもそれ以上でもない。

どこまでも交わらない平行線。

然るべきフラットの直線。

そもそもすべての物事にはしかるべき距離があるように、綾と僕との間にも幼馴染というしかるべき距離が存在しているのだ。

そしてそれを意識していないと、まれに息苦しく感じてしまう。
鬱々とした気分とは違うけど、それと多少近い感覚があって困惑する。

一日を思い返す時に感じる、ほんの少しの寂寥感ともどこかに似ている。

「綾」

「……」

「本心？」

直がすべてを見透かしそうな瞳で綾を見つめる。

表情が変わらないのもあってか、やけに迫力がある。

綾が少しだけたじろぐ。

「綾」

「な、何？」

「ストーリーは始まらないの？」

「え？」

少しだけ会話が止まる。

まるで定められているかのように。

「なんでもない」

やがて直が口を開く。

「なんとなく聞いただけ」

「そうなの」

「そう」

直が緩めていた歩を進める。

「あ、待って」

それから直と綾は会話の糸口を探す。

重要な会話を切り出した後は、タイミングがなかなか見つからない。

けど、程なくしてハロウィンパーティーの話に落ち着き、僕も話に加わる。

「へえ、ハロウィンパーティー盛り上がったんだ」

綾が嬉しそうに言う。

「ん。盛り上がった」

「そうだよ、綾。かなり盛り上がったんだ」

「しかも、飛び入り参加で真由が参加するなんておかしい」

綾は、あはは、と笑いを漏らす。

「うん。僕もびっくりした」

そう言いつつも、あることを思い出す。

「そうだ。僕達三人でするハロウィンパーティーはどうなった？」

「あ、そんなこと言ってたっけ」

綾も記憶を引っ張りだそうとする。

「明日」

直がぼつりと言う。

「明日？」

僕が聞く。

「そう、明日。明日の昼休み、天気良かったら屋上でやる」

「ほんと？」

綾が半信半疑で聞く。

「うん」

「ほんとにいいの？」

「いいよ。当たり前だって」

僕も賛同する。

「直。概要は？」

「ん。それで用意するものは」

直の声がちにわに響いてきた。

3 - 5 ハロウィン(1)っ

翌日。

天気は翠さんの予報通り快晴。

なので直と僕は、ハロウィンパーティーのミニグッズとお菓子を
トートバックに入れて持っていく。

二つともあまり場所を取らないのでかさならない。
だから、持つて行くのには支障はない。

「直」

「ん？」

「綾はどんなお菓子を持つてくるかな」

「さあ？　どんなお菓子だろう」

「綾は料理上手いから楽しみだね」

「ん」

昼休みになり、直と僕は屋上へ向かう。

直と二人でここに来るのは、綾の告白の儀式の時以来だ。

ともあれ、最近の僕はここを頻繁に利用しているといってもいい。

「あ、もう綾がいる」

「ほんとだ」

すでに屋上唯一の富士山が見えるスポットで待っている。

そしてそんな綾なのだが、風になびいてたそがれている姿はお嬢様そのもので、普段とは違って見えてしまう。

それは僕の見間違いでもない。

ほんとにそう見えるのだから仕方がないのだ。

「綾」

僕は声をかける。

すると綾が振り向く。

「春、直」

「待った？」

「待ってないよ」

「そう。それは良かった」

僕達は三人はいつもの青いベンチに移動する。

綾が真ん中で、直と僕が両端に座った。

「それじゃあ、綾」

「ん？」

綾が首をかしげる。

「まずはこれをかぶって」

「え？」

綾は困惑しているが、僕はムンクの叫びのような白黒のお面を渡す。

これはハロウィンパーティーの当日に僕が被ったやつと同じもの。

「綾」

「何よ、春」

「ハロウィンごっこなら、まずはこれをかぶらないと」

その言葉と共に、直と僕も同じお面をささっと取り出す。先にかぶって手本を示す。もちろん直も無表情でかぶっている。

「えっと、なんかちょっと違うんじゃない。ハロウィンにまつわるお菓子を交換するだけって聞いたけど」

「それだけじゃあ雰囲気でないから」

「そうかな」

「そつだよ。ほら」

僕が促すと、綾は不服そうにしながらもかぶる。
三人揃ってムンクの叫びのようなお面。
まるでサバトパーティーみたいだ。

けど、これからするのはハロウィンごっこである。
その証拠に直が何やら綾に迫っている。

「トリック・オア・トリート」

「へ？」

「トリック・オア・トリート」

「えっと、直にお菓子をあげればいいの？」

綾が戸惑っている間に、直は痺れを切らしたらしい。

「トリック」

そう叫び、なんと綾のスカートをめくる暴挙に出た。

「きゃっ、直！」

綾は慌ててスカートを押さえる。
けど、すでに時遅し。

白い残像が脳内をちらつく。
ばっちりと焼きついてしまった。

「な、なにすんの。直」

「お菓子をくれないから」

直が間髪いれずに答える。

僕は言葉が出ない。

「だからって、直ひどい」

「でも、いたずらだから仕方がない」

「仕方なくないっ!」

綾は直に憤慨していたが、急に矛先がこっちに飛んでくる。

「春」

「えっと、何？ 綾」

「見た？」

綾が涙目で聞いてくる。

顔も真っ赤だ。

どう答えればいいのかだろうか。

「えっと、それは……」

こうして困惑しながらも、この後は無事にハロウィンごっこが行われた。

綾をなんとかなだめてから、お菓子を交換してミニ仮装をしたりする。

それはハロウィンパーティーとまで呼べる代物でなかったけど、終わりにには綾が満足げな表情を浮かべていたのだからそれでいいのだろう。

つまり、昼休みいっぱいを使って楽しむことができたので、成功したといっても良かった。

3 - 6 ジモテイズ(1)

今日はジモテイズの集まりがある日。
僕は竹内さんに誘いを受けたのと、岩崎さんが渡したいものがあるというので行くことに決めている。

なお、今日は大所帯らしいので直は行く気はない。
とは言っても、直が参加すること自体稀なのでいつもと変わらな
い。

「直」

「ん？」

「じゃあ行ってくるね」

僕は夕飯を作っている直に告げる。
もう、すでに靴を履いている。
立ち上がるうとしてるところだ。

「帰りは何時くらい？」

聞かれて、僕は考える。

「えっと、打ち上げにはよっていかないから帰りは八時くらいかな。」

もちろん夕ご飯は食べるから」

「わかった」

直の返事を聞き、僕はドアを開けて家を飛び出す。すこし歩き、なんとなく東風荘を真正面から見つめる。東風荘はあいかわらずの貧相さを醸し出している。

けど、それが趣になっているという不思議さが垣間見えてしまう。なので僕はその不思議さに思いをめぐらせながら、徒歩三分の道のりを歩く。そしていつもの坂を登りきったところで、僕達が活動している小学校が見えてきた。

「こんばんは」

「こんばんは」

警備員のおじさんにあいさつをして体育館に入る。体育館にはすでに、竹内さん他十名くらいがアップをしている。なかには知らない人もいたりする。

「お、春くんが来たね」

竹内さんが美声を響かせながら、僕の名前を呼ぶ。声が美しい竹内さんからは、癒し成分ばかりを感じる。

「こんばんは」

「はい、こんばんは」

竹内さんは笑顔で迎えてくれる。

「春くん。調子はどう?」

「調子ですか?」

「うん」

「変わりはないですね」

「そっか。まあ、そんなもんか」

竹内さんはノビをしながら言う。

「じゃあ、美咲はあいかわらず春くんに迷惑かけてる?」

「はい。そっちも変わりありません」

「そっか。そっだよな」

うふふと笑う竹内さん。

あっさり美人なおかげか、上品に笑うのがとても似合う。

笑う門には福来たり。

これをそのまま素で行く人なんだろうなと思う。

「とりあえず今日は来てくれてありがとね」

「あ、はい」

「ほら、明美ちゃんと春くんって連絡先交換してなかったでしょ。だからジモティーズの総責任者として、私から連絡させたもらったの。明美ちゃんが春くんに渡したいものがあるっていうから」

「そういえば本題はそこだ。
すっかり忘れていた。」

「で、岩崎さんは僕に何を渡したいんですか？」

「私はわからないよ」

「そうなんですか？」

「そうだよ。私はただの仲介人みたいなもんだからね」

「はあ、そうですか」

「まあ、あつちから切り出すでしょ。ていうか、春くん。早く着替えないと。もうそろそろ始めちゃうよ」

「あ、はい、わかりました。今着替えます」

慌てて返事をして、僕は着替えをする場所へと向かう。

そして急いで着替えて体育館に戻ると、絵里ちゃんがここに着いたところだった。

「あ、先輩」

「絵里ちゃん」

「こんばんはです」

「こんばんは。それよりも絵里ちゃん、早く着替えないと」

「あ、そうですね」

絵里ちゃんは周りの様子を見てうなずく。

みんなはもう準備運動も終えて、二人組でボール回しをしている。

「先輩、急いでいるなら私の着替え手伝ってください」

「何を言ってるんだか」

僕は適当に受け流す。

邪険に扱ったといってもよい。

「先輩」

その証拠に絵里ちゃんが、悲しそうな顔でこっちを見つめてくる。

「私の下着姿を見せるといって一大決心が、なんとも簡単にあしらわれました」

「いや、当たり前だからね」

「それは遠回しに私の体に魅力がないって言ってるんじゃないんですか？」

「そんなことはないけどさ」

とは言つけど、正直言つてそんなことはどうでもいい。

「いいですよーだ。いつか先輩に魅力的なスタイルを見せつけてあげますから。って、ちよつとくどすぎましたね。危うく妹キャラを返上しちゃつところでした」

にこつと笑う絵里ちゃん。

おちゃめに舌まで出している。

「じゃあ私、着替えてきますね。先輩。あ、後、一緒にアップをしましょう」

「うん。わかった」

僕は絵里ちゃんに返事をして、準備運動を開始する。

3・7 ジモティーズ(2)

絵里ちゃんの格好は前回と同じくスポーティだった。ロンTと短パンというお決まりの格好で、あいかわらず魅力的だ。特に短パンが隠れるロンTが素晴らしい。

「どうですか？ 先輩」

絵里ちゃんは誇らしげに格好を見せてくる。

「うん。問題ないと思う」

「他には何かありますか？」

「似合っているよ」

「ありがとうございます」

Vサインをした絵里ちゃんが笑顔を見せる。

「では、アップしましょうか」

「オッケー」

絵里ちゃんと僕は周りを見習ってアップを開始。

二人でストレッチをした後、ボール回しをする。

「絵里ちゃん、やっぱり上手だね」

「そんなことないですよ」

謙遜はしているが、絵里ちゃんの技巧はあいかわらず上手だ。僕ではその実力に到底及ばない。

絵里ちゃんの場合、練習の成果が如実に反映しているのだろう。普通の人との上達の度合いが全然違っている。

「先輩、先輩」

「何？」

「そろそろアップもこの辺にしましょう」

「そうだね」

絵里ちゃんと僕は、頃合いを見て休憩をする。するとその時に、岩崎さんがこっちにやってきた。

「絵里ちゃん。ちょっと彼を借りるから」

「あ、はい」

絵里ちゃんに断わり、岩崎さんは誰もいない場所に僕を連れだす。そして案の定、渡したいものについて話を切り出す。

「私、おたくに渡したいものあるんだけどさ」

「えっと、なんですか？」

僕が尋ねると、岩崎さんはお尻のポケットからチケットみたいなものを取り出す。

「これだよ」

差し出してくるので、僕は遠慮なく受け取る。

見れば、高校の文化祭の優遇券と書かれている。

それも二枚だ。

「おたくが受験したい高校の内側を見ておいた方がいいと思ってね」

一応、遠目から見学したことはある。

けど、敷地に足を踏み入れてはいない。

だから、岩崎さんの言うことは理にかなっている。

「そうですね。それでこれを僕にですか？」

「そうさ。ちょっとした親切心を起こしてね。後、ほんの少しのいたずら心だな」

「いたずら心？」

「そう、いたずら心。今にも女の子に刺されそうなおたくが、あの幼馴染と絵里ちゃんのとっちを選ぶのかと思ってね」

その言葉を聞いて、僕は心の変な部分を刺激される。

「岩崎さん。僕と綾はそんな関係ではありません。ただの幼馴染です。それに絵里ちゃんともそんな関係ではありません。ただの後輩です」

それぞれの関係性を構築するのに然るべき距離がある。それを意識していないといけない。

そうしていないと自分の中にへんな違和感みたいのが生まれる。とらえどころのないどうしようもない感覚みたいなものだ。

「それにしてはただならぬ関係のようだね。特に幼馴染の方は」

岩崎さんが痛いところを指摘する。

やけに勘が鋭い人だ。

「むろん、秘密の遊戯についてを言っているわけではないと思うけど。」

「まあ、とにかくだね。私はおたくがどっちと文化祭デートをするか楽しみにしてるわけだ」

「そんなこと言われても困りますよ」

「いいや、私が困らない。あ、ちなみに男同士でくることは禁止。男同士で来たらそういう関係だつてことにするぞ。後、私に会わなければいいなんてごまかそうとしても無駄だから。当日しっかり連絡を取るからな」

「あ、えっと」

岩崎さんの怒涛の勢いに圧倒された僕は言葉を返すことも出来ない。

結局、渡されたチケットの端をずっと見ているだけ。

反論する余地もなく、誰かを連れていくことが決定してしまった。

なので、これをどうするべきか。

僕は必死になって考える。

このチケットは岩崎さんのいたずら心半分というのものもあるけど、せつかくのご好意で渡してくれたもの。

だからこそ、岩崎さんの言う通り文化祭デートと言う形で使うべきだろう。

とは言っても、当てはなく思案に暮れてしまう。

「ということ、おたくのがんばりに期待しているから」

「期待されても困りますよ」

「またまた。冗談はほどほどにしないといけないな」

岩崎さんがアメリカ人のように手を広げてオーバーアクションをする。

僕はそれを見て、嘆息するのだった。

3 - 8 ジモティーズ (3)

体育館に戻ると、もうすでに全体練習が始まっていた。
なので、岩崎さんと僕は急いで合流する。

そして、それをこなした後は相手方との試合。
今日は竹内さんの知り合いが多いおかげか上手い人が結構いて、
相手チームとは接戦になった。

けど、やはり素人が多いジモティーズが僅差で負けてしまう。

「先輩、負けました」

「まあ、しょうがないよ」

「そんなことないですよ。勝てそうだったのに、私がミスしたせいで負けちゃったんですから」

「絵里ちゃんいいって」

竹内さんが絵里ちゃんを慰める。

「私はみんなが楽しめればそれでいいから」

「でも」

「でもも何もないよ。それとも絵里ちゃんは楽しめなかったの？」

「そんなことないです」

「じゃあ、そんなに悲しまないで。ね」

「はい。わかりました」

竹内さんの優しさに、絵里ちゃんにも笑顔が戻る。

やはり絵里ちゃんは切り替えの早い女の子。

さつきまで落ち込みかけていたのに、今は嬉々として片づけをしている。

「そついえば先輩」

「ん？」

「さつき岩崎さんに呼ばれていたのは何だったんですか？」

「あ、気になる？」

「はい。私、気になります」

絵里ちゃんがボールを片付ける手を止めて聞いてくる。

キラキラと輝く瞳が僕を射抜く。

「それはね、岩崎さんが通っている高校の文化祭の優遇券のことなんだ」

「文化祭の優遇券ですか？」

絵里ちゃんは首をかしげる。

「そう。岩崎さんが僕に二枚くれたんだよ。女の子と一緒に来なさいと制約をつけてまでしてさ」

「え？」

なぜだか放心している絵里ちゃん。

「えっと、どうしたの？」

「二枚？ 女の子と一緒にですか？」

「うん。そうだけど」

僕はうなづく。

絵里ちゃんは何やら思案しているようだったが、やがてかきこま
ったように口を開く。

「あ、あの、先輩っ」

ますますキラキラと輝く瞳。

さらには僕の手をがしっと握ってくる。

「私、秘密のデートの続きを所望します」

「秘密のデート？」

「文化祭デートです」

「あ」

僕はすべてを思い出す。

絵里ちゃんを前にして、もう一度満足がいくデートをする約束をしたことを。

前回の償いも込めて、絶対にしなくてはいけない。

「先輩。もしかして忘れていました？」

「えっと」

しかも、しっかりと見抜かれている。

「それはちょっとひどいと思います」

「僕はそう思うよ」

忘れっぽいにしても度が過ぎる。

鳥頭もいいところだ。

「そういうわけで先輩。承諾してくださいね。あ、それとも綾さんと行きたかったりしますか？ それなら私遠慮しますけど」

不安になったのか、絵里ちゃんがそんなことを聞いてくる。

「絵里ちゃん」

「はい」

「綾とはそういう関係じゃないんだ。それに綾は家の用事が忙しくて一緒に行けないと思うし」

「それなら、私でいいですか？」

「絵里ちゃんがいいなら、こちらこそ喜んでだよ」

「ほんとですか？」

「うん」

「やったあっ！」

絵里ちゃんは飛び上がらんばかりの勢いで跳ね上がる。

周りの人が何事かと見てくるので、僕は恥ずかしくなってくる。

「先輩。楽しみにしてますね」

「あ、うん。僕も楽しみにしているよ」

その言葉に偽りはない。

学校見学も兼ねて、実りある秘密のデートになるのかしれないと僕は思っている。

もうすでに、楽しみになっていたのだから。

「うわぁ、先輩すごいですね。中学校とは雰囲気全然違いますよ」
「ほんとだなあ」

隣で絵里ちゃんがはしゃいでいるのを見て、僕も感慨気につぶやく。

今日は文化祭デートの日。
絵里ちゃんとは朝の十時に学校で待ち合わせして、自転車を十分漕いでこの高校までやって来た。

ちなみに僕達はなんとなく制服を着ている。
それは学校見学を兼ねているからなのかもしれない。

「先輩」

「何？ 絵里ちゃん」

「早く中入りしましょうよ」

「うん、わかったから落ち着いて」

入口の校門からたくさんの人で賑わっている。
年齢層は明らかに学生が多いものの、そうではない人も意外に結

構いる。

僕はそんなバイタリティーあふれる空間の中、前へと進んでいく。

「お化け屋敷やってます」

「メイド喫茶どうですか」

「十一時から劇やります」

客引きも頻繁に行われている。

仮装をしながら看板を持って練り歩く人、チラシを配っている人、いろんなタイプが見受けられて、見ているだけでも面白い。

「それにしても、ほんとに雰囲気がありますね」

「うん」

「すごいですよ。あれもこれも」

絵里ちゃんは止まらない。

ほんとに楽しそうだ。

「私、びっくりしました。これが高校の文化祭かあ」

「そうだね。きっとこれが高校の文化祭なんだよ」

僕は感心しながらも言う。

ちなみに美咲さんに高校の文化祭に行くことを説明したら、大学の学園祭はもっとすごいと言われた。

「これよりもすごいとはどういう規模なのだろうと思う。
僕は今でも十分にすごいと感じている。」

「先輩、また遊園地みたいの下見をしてから楽しみますか？」

「うん。それがいいと思うよ。」

「ですね。」

絵里ちゃんが笑顔でうなづく。

その拍子にサイドにくくってある髪がちょこんと揺れ、僕はなんとなくそれを見つめてしまった。

「先輩？」

「あ、なんでもないよ。」

「そうですか？」

「そう。なんでもないんだ。」

自分に言い聞かせるようにつぶやく。

絵里ちゃんはそれで納得したのか、話を元に戻す。

「でも、下見は途中で寄りたくなっちゃっ誘惑にかられるんですよ。」
「ね。」

「そこを我慢して計画を立てるのがいいんだよ。」

「あ、そうでした」

てへっと舌を出す絵里ちゃん。

おちゃめなしぐさはいつもと変わらない。

「一応、遊園地の時のジェットコースターみたいに指針となるものは決めときましようよ」

「そうだね、できれば文化祭でしか楽しめないものにしようか」

「あ、それいいですね。でも、何がありますか？」

「何があるんだろう」

僕は考える。

けど、考えてもなかなか答えは出てこない。

「そうですねえ」

絵里ちゃんも必死になって考える。

その横顔は真剣な表情だ。

「やっぱり劇だと思います」

「劇か」

たしかに劇は文化祭特有のもの。

絵里ちゃんの言う通りだろう。

「でも、刺激を求めるのならお化け屋敷もいいのかもしれない」

「あ、お化け屋敷もいいね」

僕は相槌を打つ。

「でも、やっぱり迷います」

「まあ、とりあえず全部回ってから決めようか。意外なところに文
化祭らしいのがあるかもしれないからさ」

「そうですね」

絵里ちゃんが笑顔でうなづく。

3 - 10 文化祭(2)

校舎に入って、まずは学校中を巡っていく。

とりあえずは下見をしようとする方針が決まったので、僕達は真剣に吟味する。

文化祭に相応しい催し物がないかを丹念に探し求める。
妥協などすることなく、目を光らせて辺りを見渡す。

「あ、ここの和風喫茶はなんだか新感覚ですね」

「先輩、ここの組の劇はコメディイ風味のイソップ物語らしいです」

「見てください先輩。ここのお化け屋敷は三教室分も使っている超本格派ですよ」

巡っている最中も、絵里ちゃんの楽しそうな声が響く。

実際、僕も楽しかった。

そうしておそらくすべてを巡り終えた僕達は、スタートした場所に舞い戻ってくる。

「さて、どうしようか」

「はー」

結局、いろんな催し物に目移りして、順番が決まらない。遊園地のように明確な目標がないのも要因だった。

「絵里ちゃんはどこか行きたいところある？」

「そうですねえ」

絵里ちゃんは腕を組んで考える。

「私も一番最初はどこに行こうか迷っています。なかなか絞れなくて」

「そっか」

「でも、今回もどこに何があるかは覚えましたよ」

「それはすごいね」

「もっと褒めてください。それとついでに頭もなでてください。秘密のデートですし」

「え？ それはちょっと違うんじゃない？」

「いいんです」

僕は少々納得がいかないながらも、絵里ちゃんの髪をなでる。すると絵里ちゃんは、日向ぼっこしているネコみたいになった。目を細めて気持ちよさそうにしている。

「あの、絵里ちゃん？ これいつまでやるの？」

「はっ？ 気持ち良すぎてすっかり我を忘れていました。なごり惜しいですけど、もう大丈夫です」

「あ、うん」

僕は絵里ちゃんから手を離す。

そしてこっちも少しなごり惜しいな、と思ったその時である。

「へえ、おたくは絵里ちゃんを選んだわけだ」

岩崎さんが僕達の目の前に立っていた。

さらに岩崎さんは、こっちを見ながらにやにや笑っている。

「あの、岩崎さん。今の見ていましたか？」

絵里ちゃんが聞く。

「見たよ。ばつちりとね。それも絵里ちゃんが頭を撫でられて恍惚としていた表情を」

岩崎さんがからかい半分で言うと、絵里ちゃんの顔が真っ赤になる。

たしかに知り合いがいるところであの行為は恥ずかしい。なぜなら、僕も恥ずかしいからだ。

「やっぱりおたくはすけこましましたね」

僕の肩をつんつんと突っついてくる岩崎さん。

しかも、なぜか機嫌がいい。

「この様子だと、幼馴染と絵里ちゃん以外にもおたくに好意を持っている女の子がいるんじゃない？ クラスの女子はもちろんとして、意外にも年上の女性や小さな女の子まで籠絡させていたりして」

「えっと」

僕は岩崎さんの言葉を聞き流すしかない。

ここで反論しようにも、何かと不利な状況だ。

「まあ、私は面白ければいいんだけどな。それよりもこんなところでいちゃついているからにして、どこに行くかは決めていなかったりする？」

「あ、はい」

「そうか。やっぱりそんな雰囲気でしたんだよ。迷っているようなね」

「はあ、そうですね。わかるもんなんですか」

僕はなんとも言えない返事をする。

「まあね」

「すごいですね」

絵里ちゃんが口を開く。

「すごくないね。ちょっと観察すればわかるんだよ。まあ、ともあ

ね、ここは私についてくればいいんじゃない？」

絵里ちゃんと僕は顔を見合す。

お互いに岩崎さんの誘いを受けるべきかを考えているのだ。

「どうしたのさ、二人とも。あ、そつか。もしかして、もっと二人でいちゃいちゃしたいとか考えていたりするわけか？」

「い、いえ。ついていきますとも。岩崎さん」

絵里ちゃんが焦ったように言う。

「そつか。それは良かった。なら、誰も知らない素晴らしい所に連れてってあげよう」

そつ言って、岩崎さんは歩き出す。

岩崎さんが連れてきた場所はなんと屋上だった。
シリンダー錠の取っ手を回し、扉を開け、僕達を招き入れる。

「ここは日常の喧騒に疲れた時の安らぎの場所」

岩崎さんが辺りを見回して言う。

今日は文化祭だけあつてか、屋上には誰もいない。
そういえば、屋上部の文化祭活動も見かけなかった気がする。

「あー、屋上部に文化祭の活動なんてないんだよ。私達はネコのよ
うに気ままだからね。気ままであるからこそ屋上部。そしてこれが
信念でもあるわけだ」

僕の疑問を察したのか、岩崎さんが屋上部の実態を説明してくれ
る。

屋上部とは、まるで絵を描いている時の気ままな直みたいだ。

「直とはホントに相性が良さそうですね」

「そうだな」

岩崎さんは何のためらいもなく言い切る。

「先輩」

ここで絵里ちゃんが口を挟んでくる。

「これは先輩達や私が高校に入学した時に、屋上部を選ぶためのフラグでは？」

「え？ フラグ？」

「はい、フラグだと思います」

フラグと言われても何だかわからない。
なので対応に困る。

「だって私はですね、なんだか知らないけど猛烈に感動していますよ。このきれいな景色を見て屋上部に入ろうって思いますもん」

たしかにきれいな景色だ。

中学の屋上とは一味違う光景が広がっている。

「えっと、先輩はそうじゃないんですか？」

絵里ちゃんが聞く。

けど、僕はわからない。

「どうだろうね。わからないよ」

「そうですか」

「うん」

それを聞いて、絵里ちゃんはいささかがっかりしている。
ともあれ、絵里ちゃんと僕は岩崎さんに紹介された屋上の景色を
堪能。

僕達の間になんともいえない心地よい空気が流れ、すっかり安ら
ぐことができた。

「さて」

パンと手を叩く岩崎さん。

「心を落ち着けたところで、自然と文化祭を楽しむための下準備や道
筋も出来ていると思うぞ。おたく達にはなんだか迷いがあつたみた
いけど、今は無くなっているはずさ。なぜなら、物事とは時間を
置くことによつて自然にできていくものだからな」

「そうなんですか？」

「まあね」

絵里ちゃんと僕は互いに見合す。

たしかに今なら迷うことなく楽しめそうな気がする。

絵里ちゃんもそんなふうに微笑んでいる。

「でも不思議ですね」

僕は岩崎さんに言う。

「何がだい？」

「さっきまではそんな気が全然していなかったんですけど」

「そういうものなんだよ。自然にそうなるわけだ」

「自然にですか？」

「そう。そしてそれは人間関係に当てはまるよ。まさに為るようにはかならない。気がつけば何事も然るべき道筋へと自然に収斂されていく。抗うとか抗えないとかではなく、まるで定められているようにそうなるんだ」

そう言って、岩崎さんは少しかだけ悲しそうな顔をする。
なので絵里ちゃんと僕は、その言葉を黙って聞く。

「て、今の憂鬱げな感じは皮肉屋の私らしくなかったな」

岩崎さんはあまり見せない笑顔で言う。

「あ、えっと」

僕は困惑する。

元気者の絵里ちゃんも同様だ。

「うん。私らしくない。おたくもそう思うだろ」

「えっと、そうですね」

僕がそう返すと、岩崎さんはふふつと笑う。

「なんかおたくの前になると、へんな言葉がぼろぼろ出てくる」

「そうなんですか？」

「そうだよ」

「岩崎さん。それは先輩が頼りになるからですよね」

「いや、そんなことはないけどな」

もちろん僕もそうだと思う。

けど、絵里ちゃんは納得がいかないらしい。

さらになんか言い募っている。

ともあれ、とりあえずいつもの調子に戻った岩崎さんに安堵しつつも、絵里ちゃんの認識も改めた方がいいなあと思うのだった。

まず最初に自然な感じで客引きをしていた劇を見て、その出来に満足した僕達は男女が逆転しているコメディチックな喫茶店に入った。

とはいっても、男装も女装も本格派。
内装までもしっかりとしている。

「いらっしやいませ」

男装の女の子に声をかけられる。
そのまま案内されて、僕達は席に着く。

「先輩」

「何？ 絵里ちゃん」

「机とか椅子を見てください。はっきりとした木目がついてますよ。これはかなりの本物志向ですね」

「ほんとだ」

机や椅子は学校ではなく、ちゃんとしたのを使用している。
それがいっぱしの喫茶店みたいな演出になっているのだ。

「「「「す「いと」」ですな」

「うん。でも、コンセプトがよくわからないけど」

「それはギャップじゃないでしょうか。この内装なのに逆転喫茶ですよ」

「ああ、そっか。そうだね」

僕は納得しながらうなづく。

そしてなおも絵里ちゃんと話し込んでいると、女装の男の人が注文を取りに来る。

彼は女の子でもためらうようなフリフリのメイド服。

正直凄いレベルの色物を来ているのに、あまり違和感がない。

不思議だ。

恥じらうことなく、堂々としているせいだろうか。

「あの、お客様。ご注文をお決まりになりましたか」

「あ、はい」

給仕のしぐさも完璧である。

相当練習を積んだに違いない。

「絵里ちゃんは決まった？」

「あ、えっと、先輩。なんですか？」

絵里ちゃんもこの喫茶店が醸し出す不思議な魅力にやられていたようで、しばらくぼーっとしていたらしい。

「注文だよ」

「あ、すみません。先輩。今、決めます」

絵里ちゃんは慌ててメニューを開き、注文を考える。

考えながらも給仕の彼が気になるようで、何回かちらちら見ていたりする。

けど、僕はかえって絵里ちゃんの視線の方が気になってしまう。

「先輩、決めました」

「うん。それで？」

「私、気まぐれスコーンとアールグレイにします」

「じゃあ、僕はさわやかクッキーとオリジナルブレンドハーブティで」

「かしこまりました。ではごゆっくりどうぞ」

彼は優雅に礼をして去っていく。

絵里ちゃんはそんな彼の後ろ姿を見つめて、キラキラした瞳になる。

「せ、先輩っ。聞いてください」

「なんだかあまりいい予感がしないけど一応聞くよ。そんなに嬉しそうな顔してどうしたの？」

「どうしたのではありませんよ、先輩。私、大発見をしました」

「そんなこと言われても困るな。それに絵里ちゃんの言いたいことがだいたい予想がつくんだ」

「そうなんですか？ 私の考えていることがわかるなんて先輩すごいですね。でも、口に出して伝えます」

にやりと笑う絵里ちゃん。

やっぱり悪い予感は当たっている。

そうに違いない。

「いいよ」

「いいえ、伝えます。先輩」

「いいつて」

「そうはいきません」

「いいのに」

僕は何度も念を押す。

けど、聞く耳を持たない。

「では言いますよ。先輩も女装をしてみていかがですか。絶対に似合いますから」

そして今度は満面の笑みを見せる。

「あーやっぱりか」

直と似ている僕は女顔だ。

不覚にも、今まで似たようなことを言われたことがある。

「むしろ私も男装をして、街などを歩いたりしましょうか」

「いや、それはちょっと。絵里ちゃんの男装姿を想像できないんだけど」

というか、痛いところを突いてくる。

これは、綾と僕がしている秘密の遊戯そのままだ。

「なんて冗談ですよ、先輩」

にこにこ笑いながら絵里ちゃんが言う。

「残念ながら、私は先輩みたいに似合わない気がしますから」

「あ、そうかもね」

僕がそう言うと、絵里ちゃんは頬を膨らます。

「もう、先輩正直すぎですよ」

なんだかご不満のようだ。

「やっぱり私だって男装姿が似合う時は似合うんです」

「そうかな？」

「そうですね」

宣言されて次の言葉を探す。

けど、見つからない。

なので僕は、絵里ちゃんに男装は絶対に似合わないなと思いつながらも、ごまかし笑いをするだけだ。

喫茶店で出された軽食は、文化祭のレベルにしてはかなり素晴らしかった。

どこかの喫茶店で技術指導を受けたみたいにおいしく、絵里ちゃんも僕も十分に満足して逆転喫茶を後にした。

「先輩、次どうしましょうか」

「そうだなあ。絵里ちゃんはどうしたい？」

「私ですか？」

「うん」

「そうですね。ここは先輩に決めてもらいたいです」

「そっか」

「はい」

「じゃあ、人の流れに身を任せてみようか」

「わかりました」

絵里ちゃんが笑顔でうなづく。
目的もなく、どこに行けるかは定かではない。
けど、流れに身を任せてみるのもいいと思う。

「先輩、どうやらみんなこっちに吸い寄せられていきますよ」

「そうみたいだね」

僕は人の多い方に身を任せて歩いていく。

階段を登ったり降りたりして、喧騒の方へ進み続ける。

そうしてしばらく歩いていると、あるスポットに人がかなり集まっていた。

「先輩、ここは」

「お化け屋敷か」

長い行列を作っているのは、廃病院をイメージした作りになっているお化け屋敷。

下見をした時も、なんだか個性的で気にはなっていた。

「そういえば遊園地でのデートの時は、お化け屋敷に行きませんでしたね」

「そうだったっけ？」

「そうですね。先輩は忘れっぽいです」

「まあ、そこは否定できないよ」

僕は苦虫を噛み潰したような顔で言う。
けど、そんな顔をして忘れたぽいという事実は変わらない。

「それで先輩。せっかくだから次はここにしませんか？」

「うん。そうしょっか」

「では、並びましょう」

「そうだね」

僕達は列の最後尾に並ぶ。

お化けのメイクをした係りの人が、看板を持って最後尾に立っていたのですぐにわかった。

「先輩」

「ん？」

「私、今思いついたんですけど、前の遊園地デートで一つだけ失敗したことがあるみたいです」

「えっと、何？」

「それはですね。やっぱりお化け屋敷に行かなかったことでした」

「え？ 入る前から断言していいの？」

僕は疑問に思って聞いてみるが、絵里ちゃんの答えは明快だ。

「もちろんいいんです」

「そっか」

こつちとしては、そこまで主張されたらうなずくほかない。
なんにしても、文化祭を楽しんでいるのはいいことだ。

「私としては、こんなラブライブイベントを見逃すわけにはいきませ
ん」

と思つたら、かなり理由が違った。
それにラブライブイベントとはなにか。

「ラブライブイベントですか？ それは恐怖が蔓延するお化け屋敷の
中でおもいつきり抱きついたりすることですよ。あ、言っちゃいま
した」

なんだか不穏な単語がたくさん聞こえた気がする。

「でもさ、お化け屋敷はそんなに甘い場所じゃないと思うけど。そ
れに僕は、獅子が我が子を千尋の谷に突き落とすように絵里ちゃん
を突き放すから」

そうかしくまって言うが、単に恥ずかしいからしたくないだけだ。
とてもじゃないけど、絵里ちゃんを発言を受け入れることはでき
ない。

「先輩。それはDSです」

絵里ちゃんが文句を口にする。

けど、気にしない。

「でも、ほんとうに私が怖がって抱きついたりしてしまったら、先輩は突き放したりするんですか？」

サイドにくくった髪をいじりながら、絵里ちゃんが不安そうに聞く。

僕はそんな絵里ちゃんを見て、自分の矮小さを実感する。

「いや、そんなことはないと思うけど」

「本当ですか？」

「たぶん」

「たぶん？」

「いや、絶対だよ」

僕がそう言うと、絵里ちゃんは笑顔になる。

「やっぱり頼りになる先輩です」

「そんなことはないよ」

「いいえ、頼りになりますよ、先輩」

機嫌良く腕を組んでくる絵里ちゃん。

けど、絵里ちゃんのその認識は改めた方がいい。

そんなことを僕は思っていたりしている。

時折、聞こえてくる悲鳴と泣き声。

それがお化け屋敷のおどろおどろしい雰囲気、拍車をかけている。待っている最中もさんざん聞こえてくるその声に、だんだんと恐怖が募っていく。

僕達も会話がいつの間になくなっていて、悲鳴や泣き声があがるたびに互いの顔を見合わせているだけになった。

出てきた人は、胆を冷やしたような顔をしていて放心状態。それほどの恐怖だったのだろうか。

想像するだに恐ろしい。むしろその想像が劇的に良くない効果をもたらしているのかもしれない。

「せ、先輩」

「ごくりと唾を飲み込む絵里ちゃん。その様子が手に取るようにわかる。」

「次の次ですね」

「うん」

「怖そうです」

絵里ちゃんは器用に身震いをする。
すると、こっちまで身震いが移ってしまう。

「根拠はないけど大丈夫だよ。興行だし」

ともあれ、ここのお化け屋敷は興行として大成功みたいだ。
噂にもなっているのか、最後尾の列はどんどん伸びていく。

「そうですね。楽しませるためのお化け屋敷ですので、それを考えればへっちゃらですよね」

とはいうが、顔は引き攣っている。

同じアトラクションでも、ジェットコースターに乗る時の余裕みたいなものは微塵も感じられない。

むろん、僕も人のことは言えず、余裕はない。

そしてそんなことを思っているうちに、順番がまた一つ進んだ。

「次みたいだね」

「は、はい」

びくびくした絵里ちゃんの声が聞こえる。

その声を聞くと、やはり非常に怖がっているようだ。

「はい、次の人どうぞ」

係りの人に促されて、僕達は中に足を踏み入れる。
「恐る恐るといった感じだ。」

ちなみにここのお化け屋敷のルールとして、いくつかのお札が渡されている。

亡き患者達の魂を鎮めると弔い師という設定なので、お札を決まった場所におかなくてはならない。

すでに後ろに張り付いてくる絵里ちゃんを従えて、僕は前に歩を進める。

道は狭くて、薄暗い。

明かりもないに等しい。

本当にお化け屋敷の王道といった雰囲気醸し出している。

「せ、先輩」

絵里ちゃんが情けない声を出す。

僕はそれを聞いて、少しばかり余裕が生まれてくる。

「腰が、腰が抜けそうで」

「まだ始まったばかりじゃないか」

けど、僕がそう言って後ろを振り向いた瞬間、ゆうらりといった調子で幽霊に扮した係りの人が現れた。

般若みたいな顔をした幽霊が、無言で絵里ちゃんに近づく。

パーソナルスペースもすでに超えている。

「絵里ちゃん」

「え？」

「後ろ」

僕が意地悪にも指摘すると、絵里ちゃんは振り向いてしまう。

「ぎゃあああああああああああああ！」

そしてすごい悲鳴をあげる。

さらにはお約束なのだろうか。

事前に宣言していた通り、絵里ちゃんが抱きついてきた。

役得もいいところだったけど、そっちの方の余裕はまったくない。

なので僕は、絵里ちゃんを控え目に受け止めておく。

「先輩、先輩、先輩っ」

「落ち着いて。絵里ちゃん」

案外、自分でも落ち着いていられるのが不思議だ。
平時時となんら変わりはない。

「落ち着いてなんていられませんよ。お化けが私の後ろに立っています」

「そっだね」

「って、先輩はどうしてこんな状況でのんびりしているんですか。私の状況を鑑みてもそんなに落ち着いていられないと思うんですよ。あ、幽霊がこっちに來ます！」

涙目の絵里ちゃんが慌てて前に駆けだし、今度は違う幽霊に脅かされる。

「先輩、これで全部お札をあるべき場所に置きましたよね」

「うん、置いたみたいだね」

お化け屋敷も終盤戦。

三分の二は確実にすぎている。

絵里ちゃんもこの雰囲気にはだいぶ慣れたみたいで、もう悲鳴を上げなくなった。

やはり人間の順応能力というのは高い。

何事も慣れが大事だと身を持って体感する。

「先輩。またお化けいましたよ」

と思っただけど、くつついてくるのは変わらない。

僕にとっては、絵里ちゃんが背後霊のようだ。

「重いよ、絵里ちゃん」

「そ、そんなこと言われても困ります」

頑としてしがみつく絵里ちゃん。

その姿からは、最初のラブライブイベント計画などとうに忘れてい

るのだらう。

とりあえず、かわいそうだから突き放すこともできない。

「さあ、もう少しだから前に進もう」

「はい」

聞こえてきたのはすっかり疲れ切った返事。

あの元気娘の絵里ちゃんがこれだから、精神の疲弊がかなり激しいに違いない。

「次はこっちかな？」

「もう先輩に任せます」

「いいの？」

「はい。私はいっぱいはいっぱいですから」

絵里ちゃんがそう言うので、僕は左右に別れている道を直感で選ぶ。

結果、いろんなタイプの幽霊には遭遇したけど、行き止まりに当たることなく順調に進んでいく。

もう出口も近い。

明かりがかすかに漏れていて、外の声が聞こえてくる。

「つらめし……」

と、その時だった。

今までに出会った幽霊の中で一際やる気のない声が聞こえた。

しかも、聞き覚えのある声だ。

僕はその幽霊に一番びっくりして、まじまじと顔を見てしまう。

「岩崎さん」

お化けの格好はしているけど、あまり気合いが入っていないからすぐにわかる。

正直、お化けなのにこれほど自然体でいるのも珍しい。

隣を見れば、絵里ちゃんも同じようにびっくりしている。

「岩崎さんはここのクラスでしたか」

「ああ、そうだよ」

「ジモティーズでも今日会ったときも一切言わないものだから、少しは気になっていたんですよ。催し物は何をするのかと」

暗に非難を込めて言ってみる。

けど、岩崎さんはまったく意に介さない。

あっさりと話を変えた。

「それよりもさ、やっぱりおたくら来たんだな」

「やっぱり来たとはどういうことですか？」

「ああ、深い意味はない。なんとなくそう思ったただけだ」

岩崎さんらしい物言い。

僕は笑いがこみあげてくる。

「それにしても、岩崎さんがこんなのやると思いませんでしたよ」

「勘違いするなって。むりやりやらされたんだ。私はさ、文化祭を受動的に楽しむつもりだった」

「では、なぜ？」

「リーダーの人に、私達のお化け屋敷で心身困憊してしまった客を脱力させてほしって言われてね」

「あ、そういうことですか。それならさもありなんですね」

「おたく、なんで納得してんだよ」

「すこしだけいらつときたらしい。

岩崎さんが声を荒げる。

「すみません。でも」

「でも、なんだい？」

「そういうイメージでしたから」

「ああ、そうかい。そうなんだな」

「やっぱりすこしだけ拗ねてしまった岩崎さんを見て、年上なのになんだかわいくていいなと思ってしまう。」

「おい、なんだよ」

「失礼ながら、かわいいなと思ひまして」

「なんだそれ？」

「ぶー」

今度は絵里ちゃんが拗ねている。

理由がわからない。

なので、少しだけ困惑だ。

「そこで悩む必要はないぞ、少年。黙って抱きしめればいい」

「あの、岩崎さん。意味がわかりませんが」

僕がそう言うと、なんだか呆れられた。

「はあ」

しかも、大仰にため息までつかれる。

よく外国人がやるような両手を広げるポーズ付きだ。

「おたくも大変だね。まだ伝えてないの？」

「あ、えっと、その」

いつのまにか、岩崎さんと絵里ちゃんが何事か話をしている。言葉は聞こえてくるが、意味まで察することはできない。

「そうか。そういふことが」

「あつ」

「絵里ちゃん。そう照れるなって」

「でもっ」

「よし、それなら年上のお姉さんからではなく、ただのお化けからの忠告をしよう。いいかい。伝えたいことは伝えること。そしてそれは早ければ早い方がいい。これこそが世の中では一番大切なんだ。死んでしまってからではもう遅い」

「そうなんですか？」

「そうだよ。まあ、私はもう成仏している。だから、ただの傍観者だけだな」

「どうやら何事かを茶化しているらしい。けど、僕にはわからない。」

「絵里ちゃんの方を見ると、なぜか気合が入っている。」

「岩崎さん、ありがとうございます」

「さあ、なんのことやら」

「私、がんばりますね」

「そして、握りこぶしを込めて言う。」

お化け屋敷を抜けた後、僕達はちょっとした休憩を兼ねて、展示されている作品群を一眼に見て回ることにした。

例えば、文化祭に向けて作られたと思われるポスターやイラスト。これらはどれも出来が素晴らしく、細部までこだわられるレベルの高さに感銘を受けた。

他にも、写真部や漫研部、美術部などの作品も見学した。

特に美術部の自作ピクトグラムコーナーは面白くて、一定のルールとアルゴリズムを感じさせてくれるセンスの良さに何度も脱帽させられた。

展示を存分に鑑賞した後は、ちょうど開演されていた吹奏楽の演奏を堪能した。

絵里ちゃんは聞き入っていたみたいだけど、僕は眠くなってしまふ舟を漕ぎかけてしまった。もちろんそれは内緒だ。

演奏の次は射的や輪投げなどがやっている場所で楽しんだ。
絵里ちゃんは射的が上手で、いくつものを命中させていた。
絵里ちゃんの意外な一面を発見した瞬間だった。

「先輩」

景品を手にした絵里ちゃんが、機嫌良く僕を呼ぶ。

「何？ 絵里ちゃん」

「もう大方回りましたね」

「そうだね」

「次はどうしましょうか。どこかありますかねえ」

「そうだなあ」

もうだいたい目星をつけたところは回った。

正直なところ、そろそろ潮時である。

と、そんなふうを考えこんでいたら、いつのまにか二人組の女の子に囲まれていた。

「こんなところで悩んでいるお二人さん」

「ちょっと一緒に踊っていきませんか？」

とにかくテンションの高い二人組。

しかも、格好は奇抜でバーニーガールだ。

おもわず警戒して、一歩後ろに引いてしまう。

「おっと、私達、怪しいものでありません」

「だけど、ただの人間には興味ありません」

「宇宙人、未来人、超能力者がもしいたら」

「あたしのところに来なさい、ではなくて」

「ただ、単純に踊りたい人間を探してます」

「むしろ、踊りたくない人間も探してます」

あまりのノリについていけない。

なので、僕達は言葉が出ない。

「真菜。だからこんな恥ずかしい誘いは止めよって言ったんだよ」

「桜。そんなこと言ったってさ、ここまで来たら止められないってば」

なんだか打ち合わせの声が聞こえる。

そして、さっきのノリでまた始まった。

「うちは自由に部を濫立する共学校」

「だからマイナーな部でも生き残る」

「私達二人はフォークダンス」

「フォークソングではナッシング」

「ジェンカにオクラホマミキサー」

「フラメンコにマイムマイムなど」

「さあ、私達と一緒に踊っていきませんか？」

唱和しながら、鏡合わせのようにポーズを取る。

プロのミュージカルなどがよくやるあんな感じで、ただの勧誘にしては派手すぎるほど派手だった。

「真菜。こんなことしてるから一人も勧誘できないんだよ」

「桜。今頃気づいたってさ、もう遅すぎるほど遅いってば」

今度はずーんと落ち込む二人組。

絵里ちゃんと僕は、おもわず顔を見合わせる。

それにしてもフォークダンスか。

今まで機会があまりなかったけど、この文化祭の日にやってみるのもありかもしれない。

「絵里ちゃん」

「なんですか？」

「これ、最後に参加してみよっか」

「いいですね。私も同じこと思っていました」

「そうなの？」

「はい。ラブライブイベントのチャンスです」

「ラブライブイベントですか」

なんだか主旨が外れているような気はする。
けど、とりあえず落ち込んでいる二人組に声をかける。

「あの」

しかし、話を聞いてくれない。
あいかかわらず嘆いている。

「真菜。私達は今、ゴミ以下の存在だよ」

「桜。官能小説でも読んで元気だそうってば」

「ここでも官能小説とは。」

おもわずツツコミを入れそうになったのを堪えて、また声をかける。

「すみません」

「えっと、私達ですか？」

「いや、貴方達以外に誰がいますか」

「あ、そうですね」

二人同時にこくこくとうなずく。

「で、なんででしょうか？」

「なんででしょうかではありませんよ。僕達、踊りに参加したいので」

すが

「「え？」」

またもや二人同時に驚く。

二人組に連れてこられた場所は、この学校の中央に位置している中庭だった。

中庭にはすでに人が集まっていて、皆、踊りに興じている。小さなキャンプファイアーを囲んでマイムマイムだ。

「先輩、マイムマイムって」

「うん。たしか水に関係する踊りだった気がする」

けど、そんなことは関係なく、本当に楽しそうに、あるいは適度に適当で気持ちよさそうに踊っていたりする。

そして、それがこっちにまで楽しさが伝わってくる。

非日常の雰囲気を感じることができくらいだ。

「見ての通りきっちりはしていないけど、これはこれはいいもんでしょ」

「さあ、君達も思う存分楽しんじやなさいな」

二人組に促されて、絵里ちゃんと僕は踊り場にまろびでる。近くの人に手を繋がれて、いつのまにか踊る体勢が整っていく。

踊り始めると、案外すんなりと入れたのでびっくりする。記憶の中にあつたマイムマイムとは全然違つたけど、周囲の人を見ながら一通りは踊ることはできた。

「さて、次は一般的なフォークダンスでいきましょうか」

この場を仕切る人の声が聞こえて、軽快な音楽が鳴り響く。それを合図にして、また周囲の人が踊りだす。フォークダンスなんて小学校の時以来なので、僕は見よう見まねで手足を動かす。

「先輩、私の方が上手いですよ」

「あー、それは言わない約束で」

なんなくこなす絵里ちゃんを参考にしながら、僕も踊っていく。

「なんか照れますね」

「右に同じく」

照れてしまうのは、たびたび目が合ったりするからだ。

これこそが絵里ちゃんの提言するラブライブイベントなんだろうか。ただそれよりも、僕にある感情が芽生えてくる。

「絵里ちゃん」

「はい」

「まったく論理も何もないんだけどさ、こういうのってとてもいい

よね

それは率直な感想。

「なぜだか知らないけど、こういうことをしていると自分の中の輪郭が出来上がっていく気がするんだ。形が出来上がっていくというか感情が固まってくっていくか。……ごめん。なんだかよくわかんないこと言っている気がする」

僕は自分でも表現しにくいことを一生懸命伝えようとする。

けど、あまりよく言葉に出来ない。

絵里ちゃんはというと、黙って首を振っている。

「私、そういう先輩の感性が好きです」

「え？」

なぜかその言葉で、急に心臓が高鳴る。

夕日の斜光と相まって、絵里ちゃんがいつも違って見えてしまう。

「いえ」

絵里ちゃんが言い直す。

「そういう先輩が大好きなんです」

「……」

そして、今度こそ本当に言葉が出ない。

対して、絵里ちゃんという言葉はどこまでも真摯に僕を貫いてくる。

なので、急に周囲から切り離されたように感じる。

「先輩、いきなりごめんなさい」

「いや、いいんだ」

結局、僕はそれしか言えない。

「そんなことないです。私、何の準備もなくいきなりすぎましたよね」

絵里ちゃん表情が、少しだけ苦笑に変わる。

「だけど、さっきお化けに説教されましたから。伝えたいことは伝えること。未練を残しちゃいけないって」

「そっか」

今の僕はあまり誠実ではない気がする。

空虚とでも言うのだろうか。

言葉がまるで乗っていない。

「先輩？」

どうやら少しの間、微動だにしないで固まっていたみたいだ。

サイドに括った髪を触りながら、絵里ちゃんが心配そうにのぞき込んでくる。

「大丈夫。びっくりしただけだから」

「そうですね」

そして絵里ちゃんはさらに言う。

「あの、先輩」

「何？」

「そこまで深刻にならないでくださいね。私のことが眼中にないのはわかっていきますから。それに、べつに付き合ってほしいって言っているわけではありません。私、今のままの関係でいいんです。今の妹キャラも大好きですから」

「絵里ちゃん」

「はい、なんですか？ 先輩」

「気を使わせてごめん」

いや、そもそも何に謝っているんだかわからない。
それがもどかしい。

「いいですよ。だって、それが私の大好きな先輩なんです。だから、ずっと好きでいさせてくださいね」

絵里ちゃんが満面の笑みを見せてくる。

オレンジの夕日の中、僕はその絵里ちゃん笑顔が目焼き付いて離れないでいた。

夕日が地平線の彼方に消え、辺りはすっかり暗くなった。

文化祭を満喫した僕達は、自転車に乗って帰路についている。

前の遊園地の時とは違い、無事二人で帰っていることにささやかな幸せを感じてしまう。

「先輩、今日は楽しかったですね」

あの衝撃の告白の後も、絵里ちゃんの状態はまったく変わらない。まるであんなことなどなかったみたいに振舞っている。

そして、それに不自然さを感じない。

「高校の文化祭、最高でした」

「そうだね」

僕は相槌を打つ。

けど、脳裏によぎるのはさきほどの出来事。

思えば、女の子に告白されたのは人生で初めてだ。

しかも、僕はそういう機会には縁がないものだと思っただけだ。絵里ちゃんの好意は感じていたのだが、それは親しい先輩後輩の間柄だと思っていた。

ともあれ、絵里ちゃんは愛想のよくない僕に対して、いつもネコみたいに懐いてくれた。

基本的に直しか信頼しない僕に、土足でずかずかと入りこんで
きた女の子。

それが絵里ちゃんだ。

おかげでここまで親しくなれた。

「先輩」

絵里ちゃんが僕を呼ぶ。

「何？」

「私、次の機会があればですね」

「うん」

「動物園デートがいいです」

絵里ちゃんがキラキラとした瞳でこっちを見る。

「動物園デート？」

「はい」

僕はそれを見て、なんだか意地悪いことを言いたくなってくる。
なぜだかわからない。

けど、そういう気持ちになった。

「あのさ、絵里ちゃん」

「はい」

「僕は動物と相性良くないんだ。だからさ、無理みただよ」

そんなふう在意地悪く告げる。

すると、絵里ちゃんは頬を膨らます。

「もつつ、そこでそんなこと言っんですか」

さらにはチリンチリンとベルを鳴らし抗議をする。

いつもと変わらない。

普段通りのやり取り。

「あ、先輩。うちの学校が見えてきましたね」

「ほんとだ」

ここから絵里ちゃんとは左右の道に別れる。

なので、今日の一日を思い返す時はここまで繋がってくるのだろ
う。

「先輩、今日はありがとうございました」

律儀にも自転車から降りて礼をする絵里ちゃん。

「いえいえ」

「こっちもつられて同じことをする。」

「私、とても楽しかったです」

「僕もだよ」

それは本心からの気持ちだ。
前回と同じくらい楽しかった。

「それでは先輩、さようなら」

「うん、じゃあまた」

こうして僕達は別れていく。

別れた後は、若干の名残惜しさを感じながらも自転車を走らせる。
車の往来の多いイチヨウ並木を通り、ある交差点で信号に引っかかる。

「あ」

ふいに思い出す。

ここは綾がいきなり駆けだしていつて、べえ、と舌を出した場所。
あの時の綾は、まったくもってお嬢様らしくない走り方だった。

「青だ」

回想に浸っていたら、いつのまにか信号が変わっていて驚く。

隣のいた人なんかはすでに横断歩道を渡りきっていて、どうやら僕一人が取り残された感じだ。

音楽までも急ピッチで鳴り始め、信号が点滅していく。

なので僕は、急いで渡ろうとペダルを漕ごうとする。

「？」

が、まさにその時のこと。
僕の肩を控えめに叩く人がいた。

何事かと思い、隣を見るとどこかで見たことのある女の子が立っている。

特徴的なおさげ髪に、すべてのパーツが小さな女の子。
と、女の子が口を開く。

「あの」

「はい」

「もしかして春くん？」

その瞬間、僕は前に夢で見た女の子だと確信する。
そう、確信だ。

それはなぜだかわからない。

そして、いきなり胸の中に去来した不思議な感情にも説明がつかない。

けど、うすらぼんやりとしたイメージから明確に輪郭が整えられていく。

「私の初恋の人。ずっと好きだったし、今も好き」

「え？」

彼女がふんわりと微笑む。

「私、貴方に会いたくて、イチヨウ並木のこの街に帰って来るんだ」
そう言って、僕の頬に軽くキスをする。

作者の技量が足りなく、続きエントドで申し訳ありません。

ですが、とりあえず第二章までを完結にこぎつけました。もちろん第三章は、少し休んでから書きます。

にしても、正直、ここまで長くなると思いませんでしたね。

春と綾は、書けば書くほど距離が遠ざかるという不思議な特質を持っているみたいで。絵里ちゃんの告白と新しい女の子がトリガーになってくれればいいんですが、まだ話の道筋が見えていないのでこのところはわかりません。

というか、プロットを作れって話ですよ。

まあ、それはともかくとして、こんな作者に叱咤激励や感想をくれるととても喜びます。

また、この作品にはたくさん女の子（年上が多い気がするけど）が出ていますが、どの女の子が皆様の好みなのでしょうが。

ファン投票とかではないんですが、それを書いてくれると今後参考になるかもしれません。なので、ぜひ一言、気軽にお願ひします。

1 - 1 元氣と勇氣

「春、春」

それは優しくも低音な直の声。

さらには、揺り起こすような軽い衝動。

何度かあった光景だと思いつつも、意識を覚醒していく。

「じめん」

「ん」

「ぼーっとしていた」

直は無表情で怪訝そうなじぐさ。

世の中のすべてを見透かしてしまいそうな瞳が、僕を熱心に見つめる。

「春」

「何？」

「ここ最近、どうしたの？」

「あー」

僕は言葉を濁す。

たしかに最近では考え事をしてることが多い。

しかも、教室でぼーっとしていたら心配されても仕方がない。

「言えない？」

「いや、そういうわけではないんだ。ただ、心の一番深い部分が曖昧模糊としていて、全然整理がつかないでいてさ。なんていうか、雲や霧をつかむような不思議な感覚でいるんだよ」

「そっか」

直がうなずく。

「とりあえずお昼食べよ」

「あ、うん。そっだね」

今日はどうやらここで食べるらしい。

隣の机を借りて、僕の席にくっつけてくる。

「ちよ」

気を取り直した僕は、お揃いのトートバックからお弁当を取り出す。

以前は交代制だったお弁当作りも、今は直がすべてを担当している。

しかし、そうしてから約一カ月半くらいが経ったけど、直の味気ない料理の腕前は変わらない。

料理はあいかわらず直の鬼門だ。

「直。小倉くんの席も用意しないと」

「ん」

購買戦争に駆り出された小倉くんのために、もう一つ机をくっつけておく。

そして机をくっつけ終えたところで、小倉くんが戻ってきた。

「春、飯を食おうぜー。って、今日は直がいるぞ」

「ん」

「やったぜ。イエーイ」

テンション高くハイタッチを強要してくる小倉くん。けど、僕はそのノリについていけない。

「春、なんだよ。元気ないじゃないか」

「いや、いつも通りだと思っよ」

「そうか？」

小倉くんは首をかしげる。

「やっぱりそんなことないんじゃないか？ そういえば最近、なん

か元気ないみたいだし。そうだ。俺がここで脱いだりしたら元気が出たりして」

「いや、それはないから」

直もつなずいている。

「それにしてもさ、最近の僕は元気がないように見えるんだ」

「ああ、見えるぞ」

そう言った小倉くんは、焼きそばパンの袋を開けてかぶりつく。

「そっか。でもさ、それは元気がないのとは違うんだ」

「そうなのか？　じゃあ勇気が足りないわけか」

「勇気？」

「そう、勇気だな。要するに、現状を変えようという勇気がないから元気がないように見えるんだよ」

「えっと、どういふこと？」

どうにも話がトンチンカンな方に転がっている。

「いや、俺も適当かましたただけだけどな」

「そっなんだ」

僕はため息をつく。

「ていうか、どうせ幼馴染のことなんだから」

小倉くんがしたり顔で言う。

「いや、違うよ」

「何？ それなら浮気か？」

「浮気って」

僕はまたため息をつく。

「いいか、春。してしまっただけからではもう遅い。でも、必ず夫婦で解決しなきゃいけない問題事なんだぞ」

「いや、だから違うって、それに夫婦じゃないから」

僕は懸命に抗議をするも、まったく聞き入れてもらえない。
昼休みの喧騒はまだまだ続いていく。

1 - 2 恋わずらい

最後の授業を終えて、ようやくチャイムが鳴る。

なので僕は、数学の教科書とノートを片付けて帰宅の準備。

正直、今日はなかなか集中出来なかったため、勉強の成果はあまりない。

そんな時に当てられなくて良かったと、ひそかに胸をなで下ろす。

「さ、坂本くん」

隣の席に座っている吉田さんが僕を呼ぶ。

そこに目を向ければ、いつもと変わらない彼女。

あまそぎの髪型の大和撫子である。

「何？ 吉田さん」

「あ、あの」

やけに遠慮がちなのは、吉田さんのデフォルト。

さらにはいつも顔を赤くしているので、恥ずかしがり屋の一面もあるのかなと思う。

「坂本くんに紹介したい本があって」

「ほんと?」

「うん。新しい本」

「そっか」

こういう時には、本を読んで気分転換した方が良いのかもしれない。

なので、吉田さんの提案はとても魅力的に思えた。

「それでどんな本?」

一応、僕は聞いてみる。

「うんとね」

「うん」

「れ、恋愛小説なんだけど」

言いつつも、吉田さんの語尾が段々と小さくなっていく。

恋愛小説を勧めることに違和感を持っているのかもしれない。

「やっぱり男の子は読まないかな」

案の定、そんな心配をしてくる。

けど、それは大きな間違いだ。

「そんなことないよ。きつと読む人もいるって」

「そうかな」

「うん。そう思う」

僕がそう言うと、吉田さんは少しだけ希望に満ちた顔になる。

「それで、坂本くんは読んだりする？」

「恋愛小説？」

「うん、そうだけど」

心配そうにのぞきこんでくる吉田さん。

まだ不安があるのかもしれない。

「そうだなあ。やっぱり、僕一人の判断だとたぶん読まないと思う。でも、吉田さんが勧めてくれるなら読むつもりでいるよ」

「そうなの？」

「うん。それに今の状態にはうってつけの処方箋だと思うし」

「えっ、処方箋？」

「ああ、なんでもないよ」

吉田さんが怪訝そうな顔をしたけど、僕は笑ってごまかす。

ともあれ、ここでは吉田さんが勧めてくれるというのが何よりも大切だ。

なにせ、僕の部屋の隣に住む女子大生は官能小説を強制的に読ませてくる。

なので、それに比べたら、どんだけ素晴らしい読書体験ができるのだろうか。

「吉田さん」

「はいっ」

「とりあえずさ、新しい本を紹介してくれるみたいでありがとう」

「ううん。こっちこそありがと、坂本くん」

「いいや、吉田さんがお礼を言うことなんてないと思っけど」

しかし、吉田さんはゆっくりと首を振る。

「ううん。そんなことないよ。私は、坂本くんと本の感想を言い合ったりできることが嬉しくてたまらないから」

言い終わった後、吉田さんはさらに顔を赤くする。

「それは僕も同じ気持ちだよ」

「ほんとにっ？」

「ううん」

僕はうなずく。

「あ、それよりも坂本くん」

安心したのか、吉田さんが急に話を変えてくる。

「最近、元気がないみたいだけどどうしたの？」

「あー」

どうやら隣人にも見抜かれているみたいだ。

それとも、誰にでもわかるのだろうか。

「も、もしかして恋わずらい？」

「え？」

「あ、なんでもないの。一時期の私の症状と似ていたからそう思っただけで。それに恋わずらいだったら私があればだし」

後半の吉田さんの声は、まるで小さすぎて聞こえない。

僕は聞き返そうとしたが、吉田さんが未だにあたふたしているの
で諦める。

「それにしても恋わずらいか」

これはそうかもしれない。

あるいはそうじゃないのかもしれない。

やっぱり答えなど簡単に出ない。

それによくわからないんだ。

僕の心の真ん中となる部分がはつきりとしていない。
そう、まるで核心というべきものが存在していないみたいだ。
そしてそれは奇妙さと不可解さをまじり合わせたものでもあり、
多少の喪失を感じてしまうものでもあるのだ。

1 - 3 感受性

図書館の静謐な空気は、この前来た時とまったく変わらない。あいかかわらずな独特の空気を醸し出している。

まばらに人がいて、それぞれが自分に合った作業をしているのも同じだ。

状況は違はずなのに、まるでデジャヴのような感覚に陥る。

「坂本くん？」

隣を歩いている吉田さん。
彼女が僕に声をかけてきた。

「えっと、どうしたの？」

さらには心配そうな顔で見つめてくる。
なので、僕は慌てて謝る。

「ごめん。なんでもないんだ。ちょっと考え事をしてただけだよ」

「そうなの？」

「うん」

「そっか」

吉田さんはようやく納得する。

「でも、坂本くん。何か心配事があつたら言つてね。私、少しでも力になりたいから」

「ありがとう」

顔が赤くなる吉田さんに感謝しつつも、僕は図書館を案内されていく。

図書委員でもある吉田さんは、懇切丁寧に図書館の説明をしてくれる。

残り少なくなった中学校生活だけど、これからここを利用する機会があるのかもしれない。

そんなことを思いながら、とりあえず一通り見て回った。

「へえ、本がこんなに体系的に整理整頓されているなんて知らなかったよ」

僕は感心する。

「吉田さんのおかげで一つ知ることができた。ありがとう」

「うっん、とんでもないって」

吉田さんがぶんぶんと首を振った。

それに伴って、あまそぎの髪がふるふると左右に揺れる。

「そ、それよりもね、私が坂本くんに勧めようと思った恋愛小説の本がこの特別コーナーにあるの」

照れ隠しなのか、吉田さんは先に話を進めようとする。
なので僕は、微笑ましく思いながらもその特別コーナーを見てみる。

「あ、もしかしてこれ？」

「うん。それだよ」

その特別コーナーには特集が組まれているいくつかの本が置いてあって、中でも吉田さんが勧める本は一段と目立つようになっていた。

書店でよく見かけるイラストポップなんか描かれているし、お勧めなのがよくわかる。

「これかあ」

とりあえず手に取る。

題名は、くしくも海外の青春小説で有名な不朽の名作と同じだ。関連性は何かあるのだろうか。

「この題名さ、どこかで聞いたことあるんだけど」

「うん。そうだよ。私、坂本くんが絶対にそう言うと思った。でも、なんの関係もないみたいだよ」

「へえ、そうなんだ」

青春と恋愛の不可解なジャンルの違いに多少困惑しつつも、僕は手に取った本を借りることにする。後、この件については、吉田さんが自分の本を貸してくれると言ってくれた。

けど、折角の機会だからと断わって、図書館を利用することにした。

「坂本くん。手続きはわかる？」

「あ、うん。大丈夫」

カウンターの女の子に頼んで、手続きをなんとかこなす。それを無事に終えて、念願の本をようやく借りられた。僕はその本を鞆にしまいつつも、吉田さんに尋ねる。

「吉田さんはさ、この本全部読んだんだっけ」

「うん。読んだよ」

吉田さんが間髪いれずに即答する。

「そっか。でさ、僕が読む前にこんなことを聞くのも野暮だと思うんだけど、読み終わった後に何かを感じることが出来た？」

「もちろん出来たよ。坂本くん」

「そっか。やっぱりそっだよな」

僕はつぶやく。

そして、その言葉が不思議に感じたらしい。

「どうしたの？」

と、吉田さんが聞く。

さらに真摯な瞳でこっちを見つめてくる。

なので僕は、自分が危惧していることを述べてしまう。

「あのお」

「うん」

「恋愛小説を読むにあたって、僕には一つ気がかりなことがあるんだ」

「え？」

吉田さんが首をかしげる。

けど、構わずに僕は続けていく。

「こづいうのってさ、それ相応の感受性を持っていないと何かを感じることもなんか出来ないんじゃないかと思って」

「感受性？」

「そう。感受性」

どうにも自分には足りない分野のような気がしてならない。

「坂本くん」

「えっと、どうしたの？」

やけに真剣な調子で手を握ってきたので、僕は少しだけたじろぐ。

「あのね、坂本くん」

「うん」

「感じる事が出来ないなんて、坂本くんにはそんなことない」

「え？」

「大丈夫。絶対に大丈夫。私の知っている坂本くんなら絶対に大丈夫だから」

何度も念押しされる。

絶対に大丈夫。

何度も、何度も。

確信を持って言われる。

そして、それを聞くと不安な気持ちが増えていく。

「ありがとう。なぜか元気が出た」

「ど、どういたしまして」

お礼を言われた吉田さんは顔を赤くして、いつもの調子に戻ってしまっ。

「後さ、吉田さん」

「何？」

「勇気も湧いてきたよ」

そして元気と勇気は繋がることもあるのだな、と心の片隅で思っていた。

1 - 4 白と黒と灰色

吉田さんと別れ、僕は図書館を探索する。

というのも、恋愛に関するサンプルを小説という形で集めようと思ったからで、それはとてもいい案のような気がした。

なので、お勧めコーナーを重点的に調べて、いくつかの本をピックアップする。

正直、どのタイトルもあらすじも気になるものばかりで、いろいろと目移りしてしまう。

感覚で選びようにも、その直感が働かない。

おかげで、僕は三十分以上も費やしてしまった。

「さて、どうしようか」

立ち往生しながらも考える。

結局、手元には一冊も残らない。

やはり、選びようにも選びきれないのだ。

「あれ、先輩？」

と、そこで絵里ちゃんの声。

僕は声のした方へと振り向く。

「あ、やっぱり先輩です」

ぱたぱたと駆け寄ってくる絵里ちゃん。

サイドにくくった髪が規則的に揺れていて、僕はそれに目がいく。

「先輩、こんなところで突っ立っていて何をしてるんですか？」

絵里ちゃんはキラキラとした瞳で聞いてくる。

いつもと変わらない瞳。

それになぜか安心する。

絵里ちゃんがそのまま見つめてくるので、僕ははぐらかすように答える。

「何をしていますか、って聞かれても明確な答えはないよ」

「そうなんですか？」

「うん、そうなんだ。でも、しいて言うなら本を探していたこと」

「あ、ここは図書館ですから本ですよ。私、聞くこと間違えませんでした。これはてへって感じですよ」

そして絵里ちゃんは、舌を出しててへっとする。

元氣っ娘な彼女らしい姿だ。

「ていうか、僕が本を探している可能性に至らなかったのはどうしてなわけ？ だってさ、ここは図書館じゃないか」

「そうですね。たしかに先輩の言う通りです」

「じゃあ、どういふこと？」

僕は刑事にもなった気分で聞いてみる。

いや、むしろ探偵の気分だ。

「さあ、言いたまえ。どうして図書館で本を探している可能性に至らなかったのか。その理由を教えなさい」

「しょうがないですね。わかりました」

僕の大仰な言葉遣いにもひるまずに、鞆の中から教科書とノートを取り出す。

そして、僕の目前で掲げてみせた。

「理由はこれですよ。探偵さん」

とりあえずごっこ遊びに付き合ってくれたものの、絵里ちゃんは答えは明示してこない。

というか、答えは何だろうか。

僕にはわからない。

閃きさえも出てこない。

「あれ？ わかりませんか？ 先輩？」

なぜか得意げな表情の絵里ちゃん。

「……………」

なんだか悔しい。
自分から仕掛けておいてこの調子だ。
けど、なんだか自分らしいともいえる。

「先輩、もう正解言いますよ。正解は私の中で、図書館〓勉強することだからです」

「あーそっか」

なんだか拍子抜けする。
しかもテストと聞いて、現実を痛感した。

「そういえばさ、もうすぐ期末テストだよね」

「そうですね、先輩。期末テストなんです。だから勉強しに来たんですよ。私の家は、弟と妹がたくさんいて勉強できる環境に適していないですから」

「あ、そうだったね」

そして僕は、遊園地デートをした時にかかってきた絵里ちゃんの電話を思い出す。

あの時は、弟や妹達の声がたくさん聞こえてきて微笑ましかった。

「ところで先輩」

「あ、何？」

「先輩は何の本を借りる予定なんですか？ 私、気になります」

絵里ちゃんはうきうきした表情で聞いてくる。

「僕が借りようとしている本が気になるの？」

「はい、気になります。なんたって私の大好きな人ですから」

「あ、えっと」

「先輩。いつもどおりでいてください」

まぶしすぎるほどの笑顔で言う絵里ちゃん。

けど、僕はそれに応えるすべを知らない。

なので、心の中では戸惑ったままだ。

「あのさ、絵里ちゃん」

「はい」

「実は恋愛小説なんだよ」

「そうですか」

「うん。最近、いろんなことがあって戸惑っていて、少し気分転換でもしようと思って借りるつもりでいたんだ。こんなことを言うのもあれなんだけど、絵里ちゃんに告白されたことも戸惑いに入っているんだ。だから、もっと心の内側の部分でしっかりと考えてみたいと思ったんだよ」

「先輩、私のことは気にしないでくださいといたいです」

「そんなことを言われてもだめだと思う。やっぱり考えていかないと」

「いいえ。そこまでしなくていいんです」

絵里ちゃんが真剣な表情で告げてくる。

「なんていったって、私が勝手に気持ち传达了けですよ。それに先輩、白か黒で極めようとするからこんがらがっていけないんです。テストじゃないんですから。白と黒を混ぜた灰色の部分が大切じゃないですか？」

「灰色？」

「そうです。灰色です」

それは簡潔に言えば、どどういう意味になるのか。あえて曖昧な部分を残してという意味だろうか。僕がそんなふうを考えこんでいると、絵里ちゃんがさらに話しかけてくる。

「でもですね、先輩。私、こうも思ってしまった」

「何を思ったの？」

「私のこと少しでも考えてくれるのなら成功です、とも」

「そうなの？」

「はい、そうです」

絵里ちゃんはずなずく。

「先輩。私、ずるい女の子ですね。だって、そういつことも計算に入れてたことになるんですから」

とはいうが、それは計算ではない。

「そんなことないよ。それにそういつことをするのはいつと思いつんだ」

「どうしてですか？」

「わからないけどそう思いつたよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6299s/>

幼馴染との付き合い方

2011年12月29日00時50分発行